

令和6年度文部科学省「幼児教育の学び強化事業」

幼稚園等における 0～2 歳児を受け入れて行うふさわしい活動と

その展開の在り方に関する研究報告書

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会

はじめに

幼稚園は学校教育法上、満 3 歳以上の幼児の教育を実施する施設ですが、同時に、幼児期の教育に関する各般の問題につき、保護者及び地域住民その他の関係者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行うなど、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努めるところでもあります。そこで言う幼児期の教育とは教育基本法第 11 条の規定により、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。」とある通りなのですが、そこでの幼児期とは乳幼児期全般つまり小学校就学前の時期を指しています。そのように、幼稚園の施設での幼児教育の在り方としては満 3 歳以上の幼児を主に対象としているのですが、子育て支援としては乳幼児期の広い範囲を想定しています。

実際、幼稚園における預かり保育・一時預かり事業は 3 歳未満の幼児へと近年拡大されてきました。それは何より家庭での幼い幼児の預かりのニーズが核家族化・少子化とともに地域の各種の事情により園に求められることも増えてきたからです。その幼稚園での実践上の工夫も進んできています。しかし、実際に幼稚園での 3 歳未満の乳幼児へと預かりなどの保育活動を広げていく際の種々の難しさもあり、これから始めていこうとしたり、拡大していこうとする園として参考資料が乏しい事情がありました。

そこで本報告書では、文部科学省令和 5 年度幼児教育実態調査の研究委託を受けて、満 3 歳未満児を預かる保育活動を行っている幼稚園や認定こども園にアンケートによる調査を実施しました。数千の園についての規模の調査であり、またさらに 37 園への訪問インタビュー調査を重ねて、その実態を明らかにしました。不定期を含めて実施している園は 7 割ほどで、0 歳代・1 歳代の受け入れをしている園もその半数近くに登ります。その実際を見ると、例えば、親子の登園としていたところもあり、特に 2 歳児などは子どもだけの保育も増えていきます。当然、従来幼稚園が主に行ってきた満 3 歳以上の子どもの保育活動のやり方をそのまま降ろすことは出来ないので、現場では様々な子どもの個々のあり方に即した工夫を積み上げています。さらにそこから実施している園が幼い子どもの保育活動の意義をどのように捉えているか、またそこでの難しさ、さらにそれが 3 歳以降の子供の活動とどうつながってくるかの現場の知見も明らかにしました。

本報告を文部科学省や自治体の施策、また幼稚園・認定こども園の実践に役立つ資料として活用していただけることを願っています。

無藤 隆（保育教諭養成課程研究会・理事長）

目次

はじめに	1
I. 本研究について	4
1. 研究の問題及び目的	4
2. 研究の方法	4
II. アンケート調査について	6
1. アンケート調査の目的	6
2. アンケート調査の方法	6
3. アンケート調査結果概要	6
4. 回答者の属性・協力園の属性	6
(1) 回答者の立場	6
(2) 回答者の性別・年齢・保育歴・現在の立場担当歴	8
(3) 保有資格	13
5. 施設長調査結果	16
(1) 園の概要（施設長のみ）	16
(2) 未就園児（就園していない0～2歳児：満3歳未満児も満3歳以上児も 含む）の受け入れ	21
(3) 未就園児の担当者について（施設長記入 n=471）	30
(4) 未就園児の定期的な受け入れ	31
(5) 未就園児の夏季休業中の受け入れ	32
(6) 未就園児への子育て支援（定期的＋不定期な受け入れをしている 860 施設）	33
(7) 環境（定期的＋不定期な受け入れをしている 860 施設）	34
(8) この一年間の教職員の研修（全対象施設, n=1246）	42
6. 担当教員調査結果（n = 884）	44
(1) 担当している子どもたちの年齢	44
(2) 未就園児の普段の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと 思うもの（5個まで）	45
III. インタビュー調査について	57
1. インタビュー調査の目的	57
2. インタビュー調査の方法	57
(1) 施設責任者インタビューの主な内容	57
(2) 保育担当者インタビューの主な内容	59
3. インタビュー調査結果	60

IV. インタビュー調査実施園において収集した資料について	213
1. 収集の目的・方法	213
2. 資料の種類	213
(1) 指導計画等	213
(2) 保護者向け資料	213
3. 内容・特徴	213
(1) 指導計画等	214
(2) 保護者向け資料	215
V. 本研究のまとめ	217
おわりに	218
研究組織	219

Ⅰ．本研究について

1．研究の問題及び目的

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)において、幼稚園等における子育ての支援とは、子育て相談の実施、子育てに関する情報提供、親子登園などの未就園児の保育活動、保護者同士の交流の機会の企画等が挙げられており、すでに多くの幼稚園等で実施されている。また、特に未就園児の保育活動については、「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入に係る留意点について(通知)」が平成19年3月31日に発出されて以降、私立幼稚園を中心に展開してきている。この2歳児の受入に関する現状と課題については、すでに平成31年3月に全国幼児教育研究協会の調査報告があるが、平成30年には0歳児からの一時預かり事業(幼稚園型Ⅱ)の創設もなされており、幼稚園における0歳児からの受入れが広がってきている。また、今後のことも誰でも通園制度の本格実施を見据えると、幼稚園等において0歳児からの受入れはさらに加速することが予想される。

しかし、これまで幼稚園等における0～2歳児の発達にふさわしい援助と留意点については、検討されておらず、したがって保育内容、子育ての支援についても十分把握されていない。幼稚園等のもつ幼児教育の特性を活かした保育内容、子育ての支援を示すことは、焦眉の課題である。

その課題を解決するためには、幼稚園における0歳児以降の発達にふさわしい受入れにおいて、どのような活動がふさわしいと捉えられ、実践されているのか、実態を把握することが必要である。また、その活動は幼稚園等における多様な形態をとる子育ての支援の一部でもある。幼稚園等における子育ての支援とは、保護者が幼稚園等に子育てを委ねて任せることの促進ではなく、保護者が子育ての主体として育つことを支えることと、子供の発達の援助を同時に成り立たせることが重要である。しかしそれは、見通しを持った長期的な関わりを基本とした展開が必要とされる。多くの幼稚園等が試行錯誤しながら実施している多様な子育ての支援は、子供と保護者の状況に応じた選択可能性を実現している。そのことは、保護者自身が子育てを楽しむために自分に合った選択をすることを可能にし、親として育つプロセスを支える特徴があると考えられる。

そこで本研究は、全国の幼稚園等において実施されている、0～2歳の未就園児の保育活動と子育ての支援について、実態を把握するとともに、特色ある受入れの活動や取組について示すことで、今後さらに広がる幼稚園等における0歳～2歳児にふさわしい保育内容や子育ての支援の手がかりとなる資料を作成することを目的とする。

2．研究の方法

本研究は、以下の3つの方法にて実施する。

① 全国の幼稚園等を対象にして子育ての支援の複合的展開に関するアンケート調査

全国の幼稚園、及び認定こども園における、0～2歳の未就園児の活動と子育て支援について、実態を把握する。

② 全国のモデル園における実施内容と展開に関するインタビュー調査

0～2 歳の未就園児の活動と子育て支援について、特色のある実践例について収集し、他園でも取り入れられるようにわかりやすくまとめる。

③ 全国のモデル園における指導計画及び保護者向け資料の収集

インタビュー対象となったモデル園で作成している指導計画や保護者向けの資料の収集し、0～2 歳の未就園児の活動と子育て支援について、検討する際の手がかりとする。

なお、本研究の成果は、全国の幼稚園等における0～2 歳児にふさわしい受入れや子育ての支援の手掛かりとなるよう、わかりやすいリーフレットを作成し、広く公開するものとする。

II. アンケート調査について

1. アンケート調査の目的

全国の幼稚園、及び認定こども園における、0～2 歳の未就園児の活動と子育て支援について、実態を把握するために、「就園していない0～2 歳児」を受け入れて行われてきた保育・子育て支援の特色ある活動や取り組みの工夫について、施設長他と、担当教員を対象に、アンケート調査を実施した。

2. アンケート調査の方法

文部科学省の令和五年度幼児教育実態調査において、満 3 歳未満児を預かる保育活動を実施していると回答した 5,662 園の施設長他と、担当教員を対象に、2024 年 11 月に、ウェブによる調査を実施した。

3. アンケート調査結果概要

回答したアンケート調査用紙（施設長他用・担当教員用）の別に集計を行った（以下、施設長、担当教員と表記）。有効回答数は、施設長 1246 名、担当教員 884 名であった。なお本報告書では「就園していない0～2歳児（満3歳未満児も満3歳以上児も含む）」を「未就園児」と表記する。

4. 回答者の属性・協力園の属性

(1) 回答者の立場

表 1 回答者の立場

	園長／所長 ／施設長	副園長／副所長 ／副施設長	「未就園児」 担当	その他	計
施設長	1006 (80.7%)	152 (12.2%)	－ －	88 (7.1%)	1246 (100.0%)
担当教員	－	－	608 (68.8%)	276 (31.2%)	884 (100.0%)

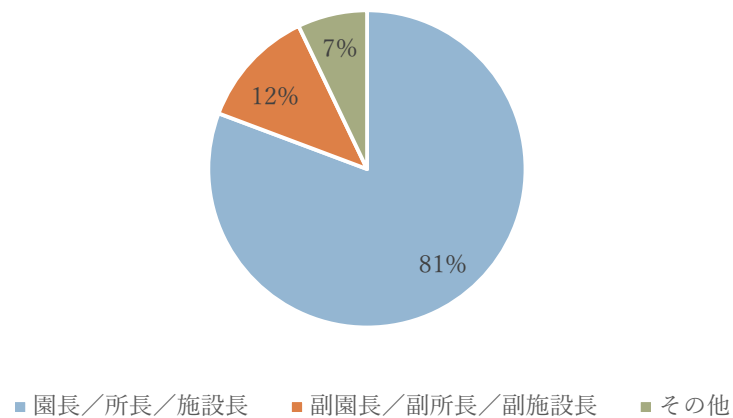


図 1 回答者の立場(施設長記入用 n = 1246)

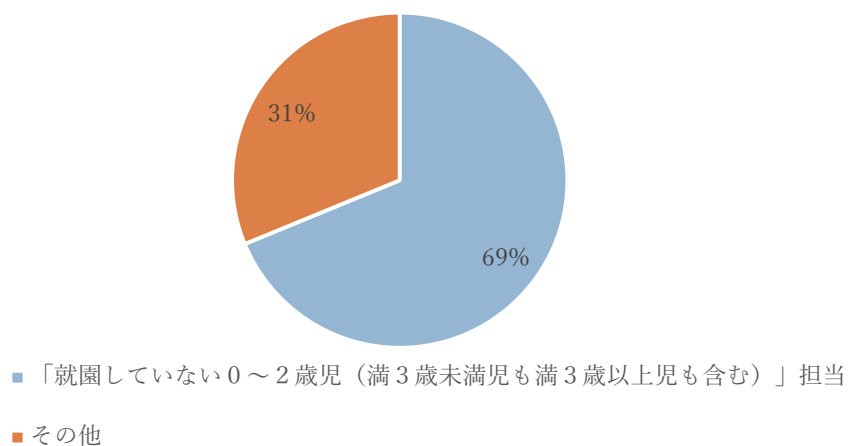


図 2 回答者の立場(担当教員記入用 n = 884)

その他:具体的回答

【施設長】園長(補佐), 教頭, 事務担当(事務長含む), 主幹(保育)教諭, (副)主任, 理事長等

【担当教員】教務主任, 副主任, 未就園児係, クラス担任, フリー, 一時預かり, 園長, 副園長, 教頭, 子育て支援担当, 事務, 主幹(保育)教諭, (副)主任, 就園している0～2歳児担当, 等

(2) 回答者の性別・年齢・保育歴・現在の立場担当歴

表 2 回答者の性別

	男性	女性	回答しない	合計
施設長	399 (32.0%)	836 (67.1%)	11 (0.9%)	1246 (100.0%)
担当教員	17 (1.90%)	860 (97.3%)	7 (0.8%)	884 (100.0%)

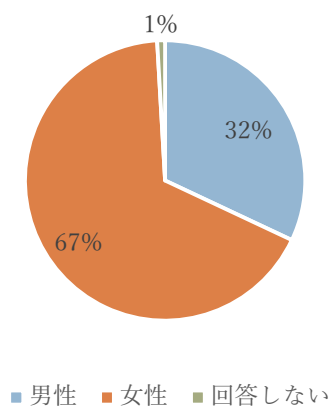


図 3 回答者の性別内訳(施設長記入用 n = 1246)

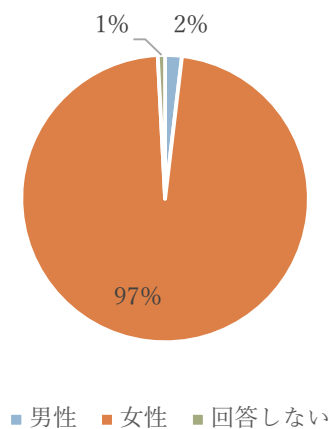


図 4 回答者の性別内訳(担当教員記入用 n = 884)

表 3 回答者の年齢, 保育歴, 現在の立場担当歴

		年齢	保育歴	立場歴
施設長	平均値	56.2	14.9	10.4
	標準偏差	9.7	13.6	10.6
	最小値	24.0	0.0	0.0
	最大値	90.0	65.0	71.0
	中央値	57.0	15.0	7.0
担当教員	平均値	42.8	16.8	5.3
	標準偏差	11.0	9.4	5.9
	最小値	20.0	0.0	0.0
	最大値	76.0	50.0	36.0
	中央値	43.0	16.0	3.0

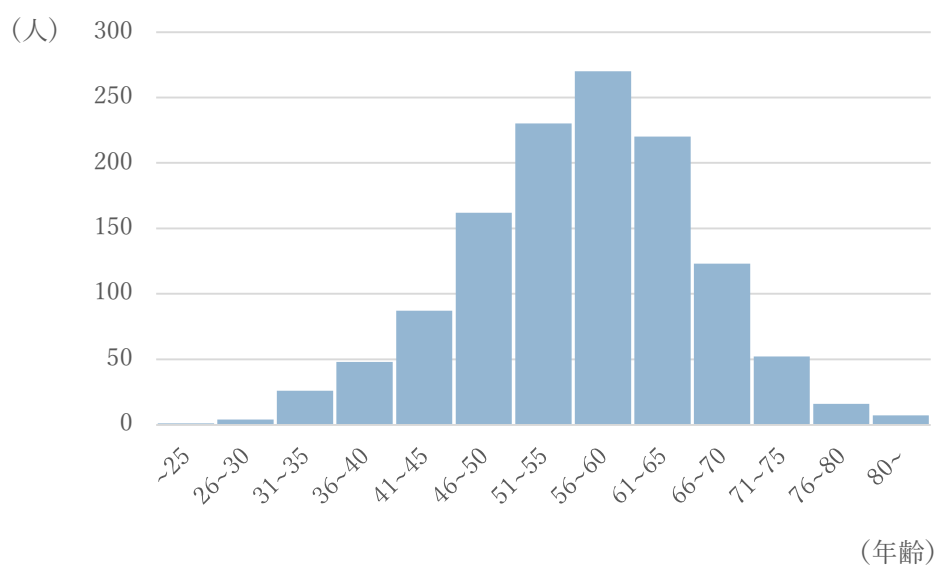


図 5 回答者の年齢(施設長記入用 n = 1246)

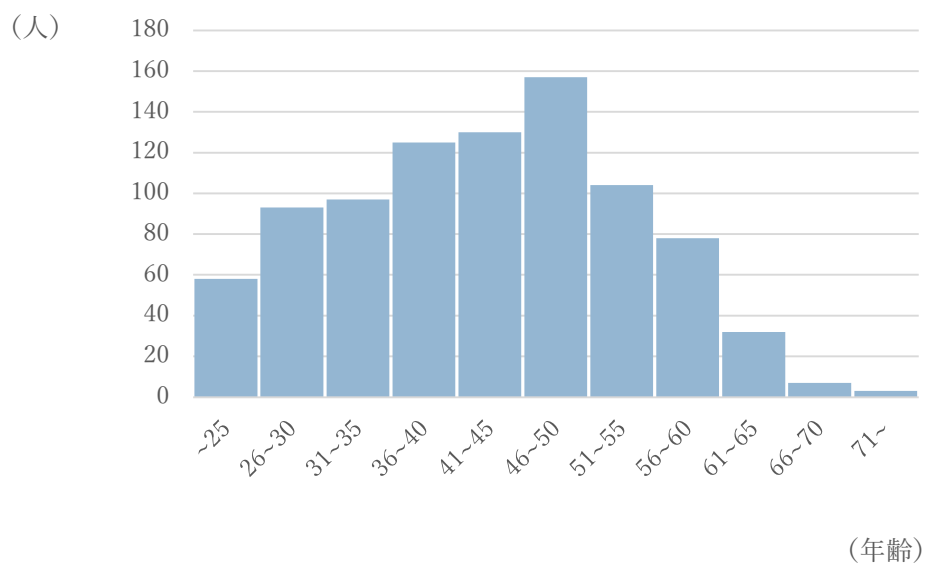


図 6 回答者の年齢(担当教員記入用 n = 884)

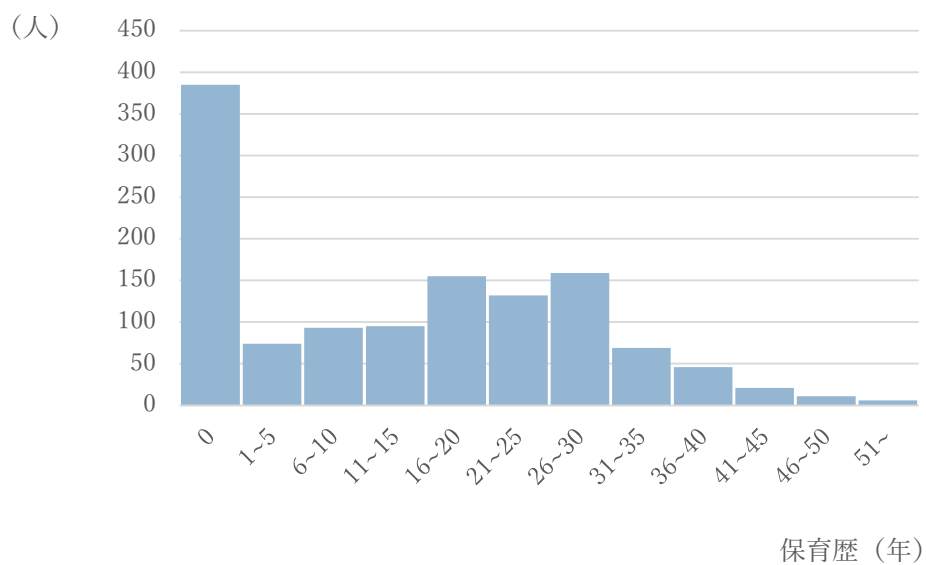


図 7 回答者の保育歴(施設長記入用 n = 1246)

保育歴なしと回答した対象者が全体の 3 割であった。

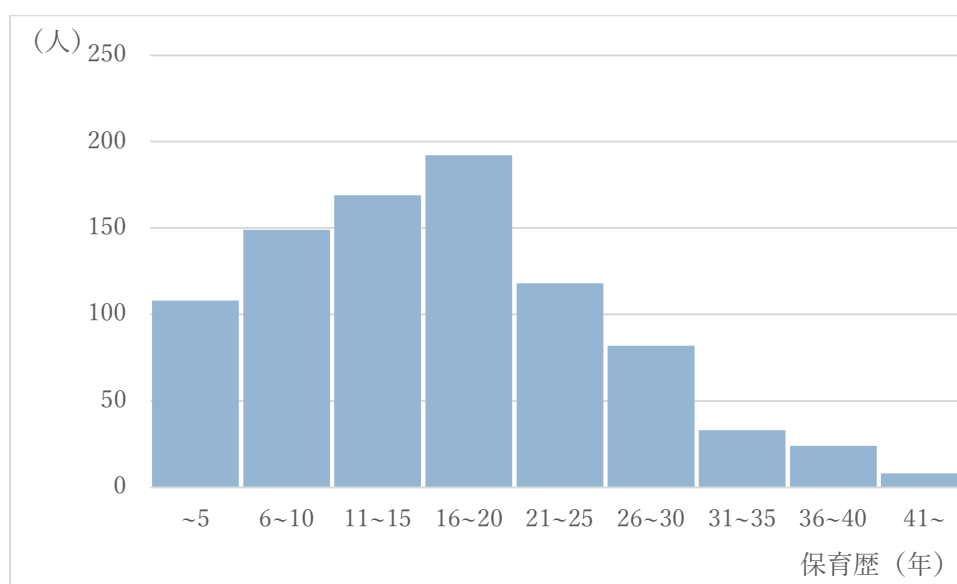


図 8 回答者の保育歴(担当教員記入用 n = 883¹⁾)

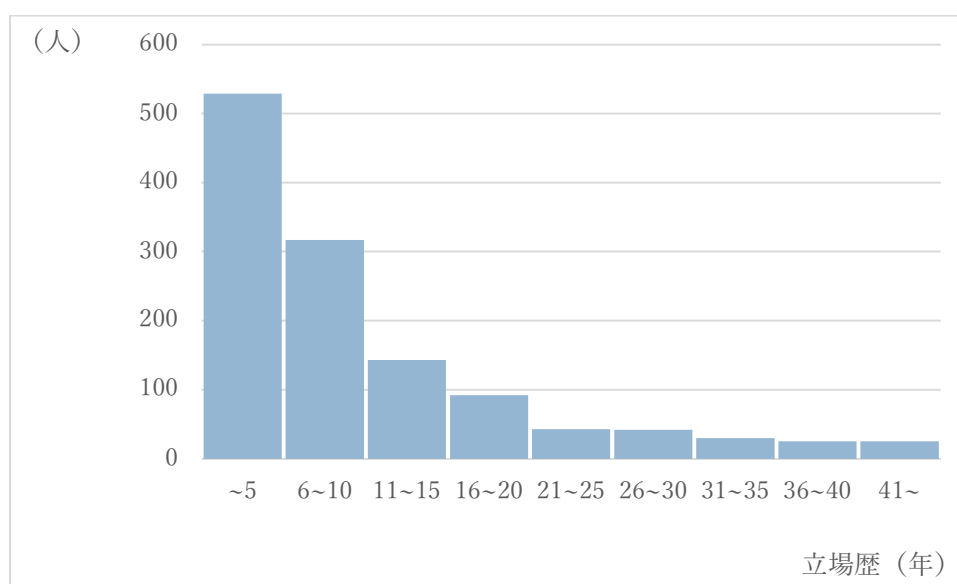


図 9 回答者の当該立場歴(施設長記入用 n = 1246)

6 年以下と回答したものが約半数を占めた。

¹ 未回答=1。

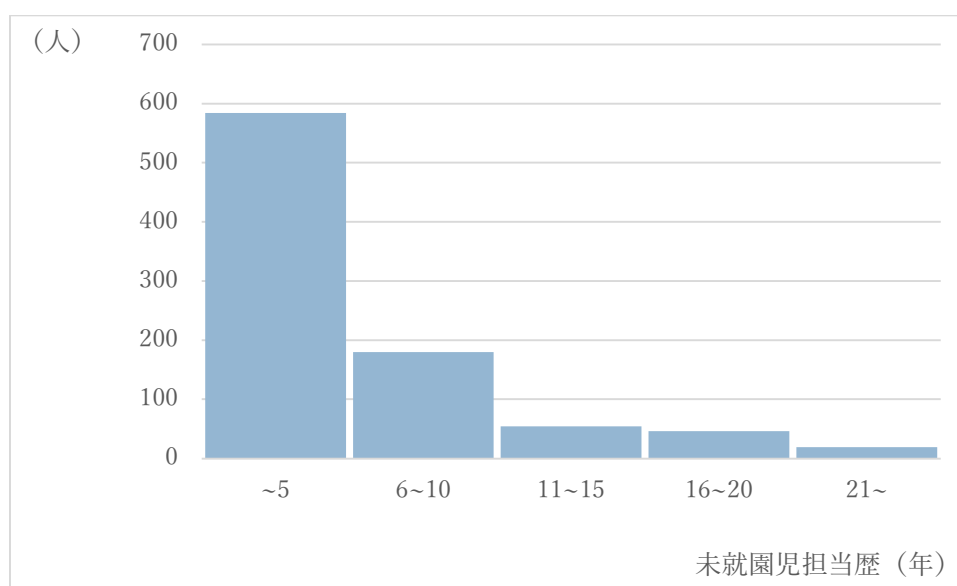


図 10 回答者の保育歴(担当教員記入用 n = 883²)

担当して3年以下と回答したものが半数を占めた。

² 未回答=1。

(3) 保有資格

表 4 回答者の保有資格(重複回答)

	施設長		担当教員	
	保有者数	保有率	保有者数	保有率
幼稚園教諭一種免許	250	20.1%	173	19.6%
幼稚園教諭二種免許	655	52.6%	699	79.1%
幼稚園教諭専修免許	24	1.9%	8	0.9%
保育士	845	67.8%	845	95.6%
小学校教諭一種免許	116	9.3%	36	4.1%
小学校教諭二種免許	85	6.8%	39	4.4%
小学校教諭専修免許	18	1.4%	0	0.0%
その他	251	20.1%	71	8.0%
あてはまるものはない	144	11.6%	2	0.2%

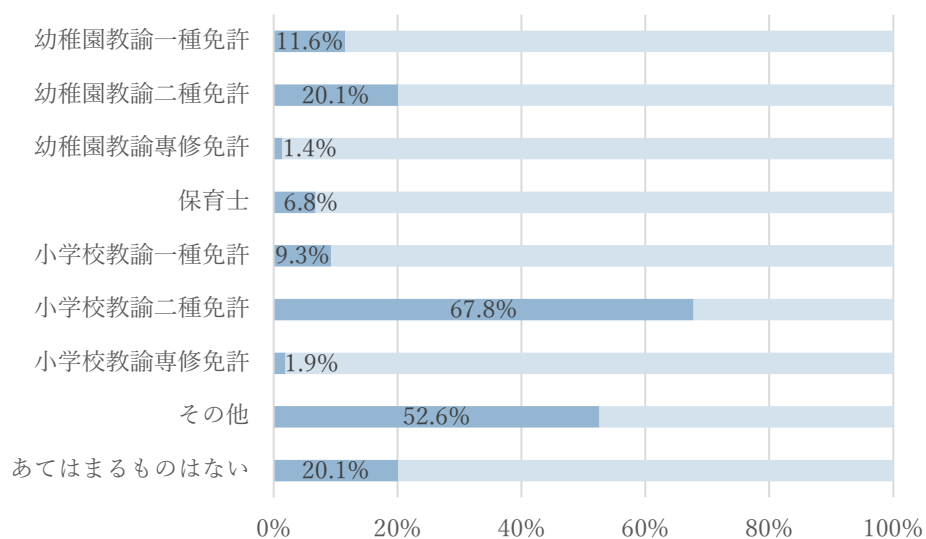


図 11 回答者の保有資格(施設長記入用 n = 1246)

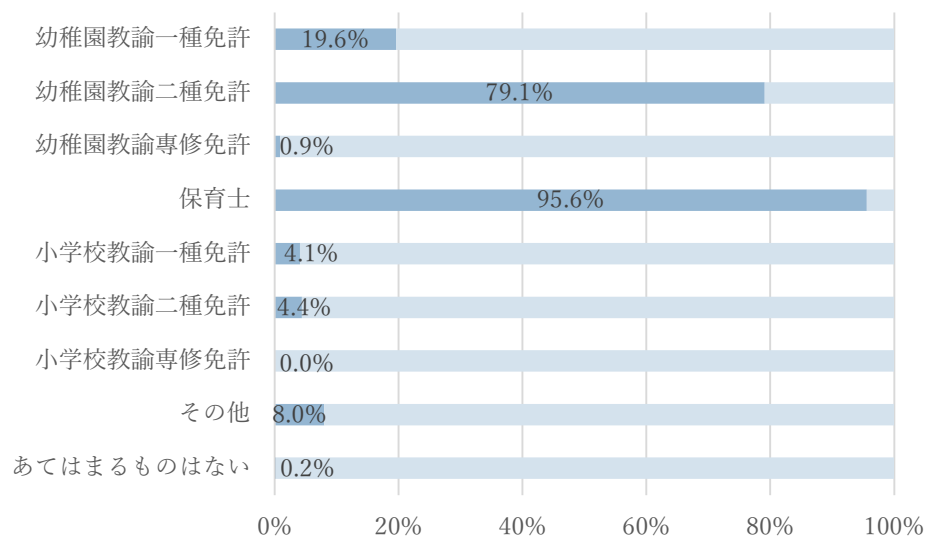


図 12 回答者の保有資格(担当教員記入用 n = 884)

その他:具体的回答

【施設長】中学・高等学校教諭, 特別支援教諭, 養護教諭, 社会福祉士, 精神保健福祉士, 社会福祉主事, 介護福祉士, 心理系資格, 調理師, 看護師等

【担当教員】中学・高等学校教諭, 特別支援教諭, 養護教諭, 社会福祉士, 社会福祉主事, ベビーシッター, 介護福祉士, リトミック, 心理系資格, 看護師等

表 5 回答者の保有資格数

資格数	施設長		担当教員	
	度数		度数	
0	247	(19.8%)	7	(0.8%)
1	161	(12.9%)	39	(4.4%)
2	696	(55.9%)	759	(85.9%)
3	130	(10.4%)	74	(8.4%)
4	10	(0.8%)	4	(0.5%)
5	2	(0.2%)	1	(0.1%)
合計	1246	(100.0%)	884	(100%)

*その他を除く

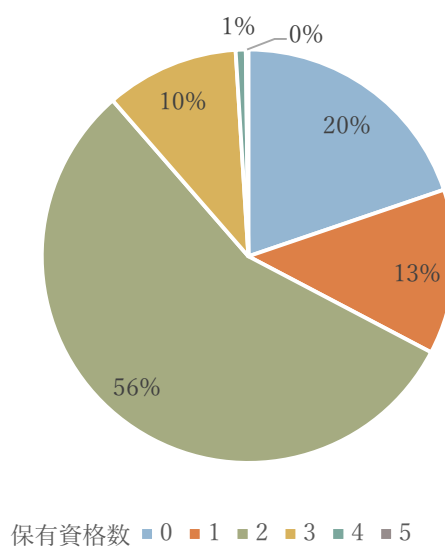


図 13 回答者の保有資格数(施設長記入用 n = 1246) (その他を除く)

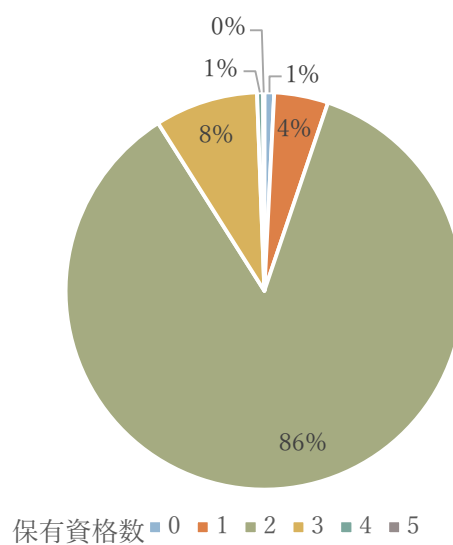


図 14 回答者の保有資格数(担当教員記入用 n = 884) (その他を除く)

2資格保有者が施設長, 担当教員とも最も多く, 組み合わせとしては, 施設長, 担当教員ともに「幼稚園教諭二種免許」+「保育士」で, 順に 535 名 (42.9%), 638 名 (72.2%) であった。

5. 施設長調査結果

(1) 園の概要（施設長のみ）

表 6 園の形態

	回答数	%
私立幼保連携型認定こども園	668	53.6
公立幼保連携型認定こども園	159	12.8
私立幼稚園型認定こども園	151	12.1
私学助成を受ける私立幼稚園	121	9.7
施設型給付を受ける私立幼稚園 （幼稚園型認定こども園を除く）	120	9.6
公立幼稚園	11	0.9
公立幼稚園型認定こども園	5	0.4
その他	11	0.9
全体	1246	100.0

その他：具体的回答

公私連携型（幼保連携型）認定こども園, 幼保連携型認定こども園, 公立幼稚園・保育園分園, 公立幼稚園・保育園併設等

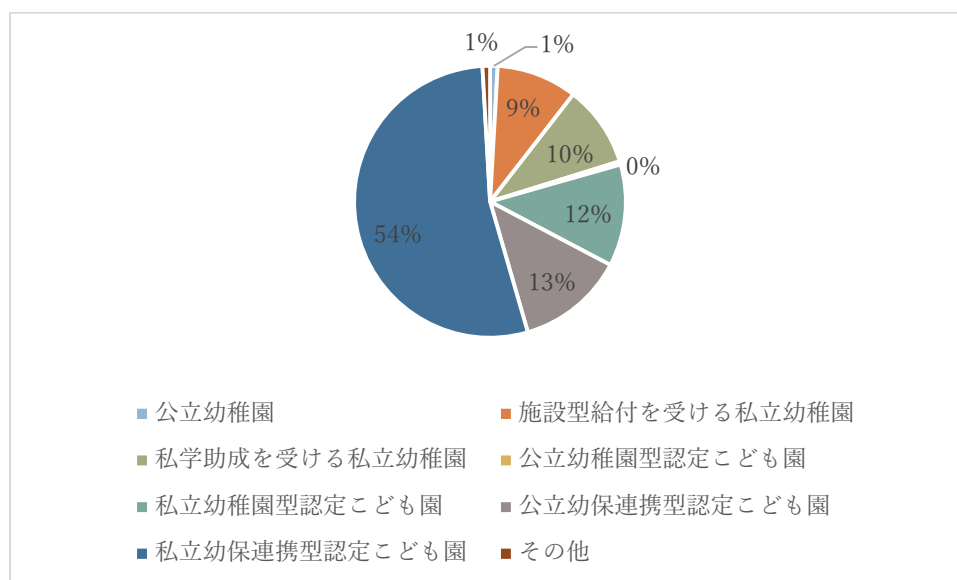


図 15 園の形態（施設長記入用 n = 1246）

回答者の半数は「私立幼保連携型認定こども園」であった。

表 7 園の運営主体

	回答数	%
学校法人	535	42.9
社会福祉法人	492	39.5
市町村(特別区を含む)	165	13.2
学校法人, 公立大学法人, 社会福祉法人, 宗教法人以外の法人	38	3.0
宗教法人	9	0.7
個人	7	0.6
都道府県	0	0.0
公立大学法人	0	0.0
全体	1246	100.0

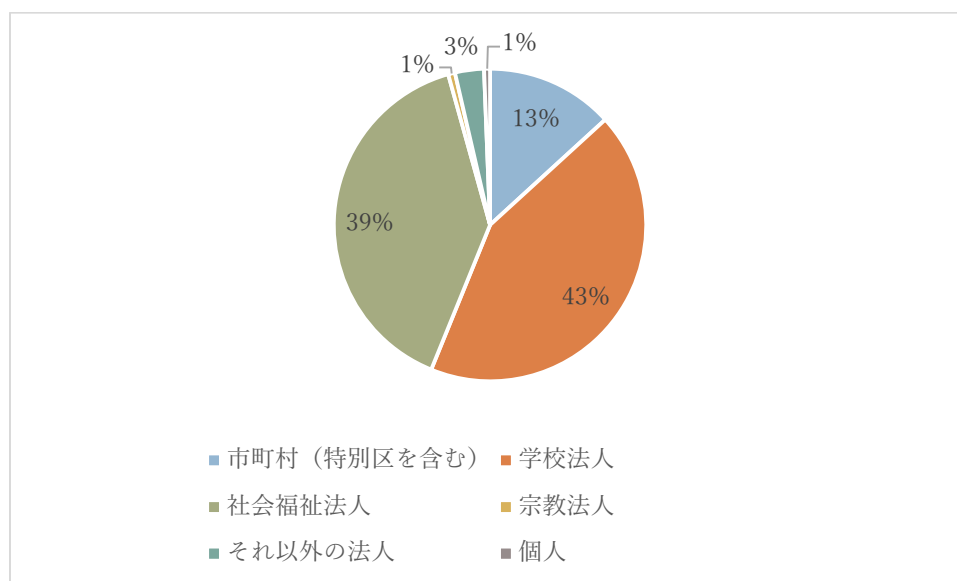


図 16 園の運営主体 (施設長記入用 n = 1246)

回答施設の学校法人と社会福祉法人で全体の約 8 割を占めた。

表 8 園の周辺地域

	回答数 (複数回答)	%
都市郊外の住宅地域	618	49.6
農林漁業地域	295	23.7
都市中心部の住宅地域	244	19.6
その他(具体的に:	87	7.0
都市中心の商業地域	46	3.7
工業地域	38	3.0

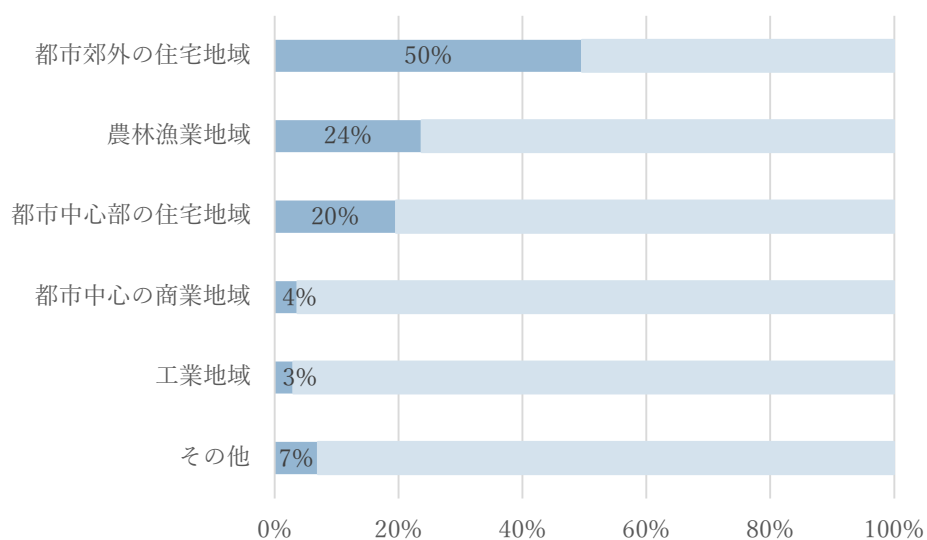


図 17 園の周辺地域(複数回答 施設長記入用 n = 1246)

回答施設の半数近くは住宅地域に設置されていた。

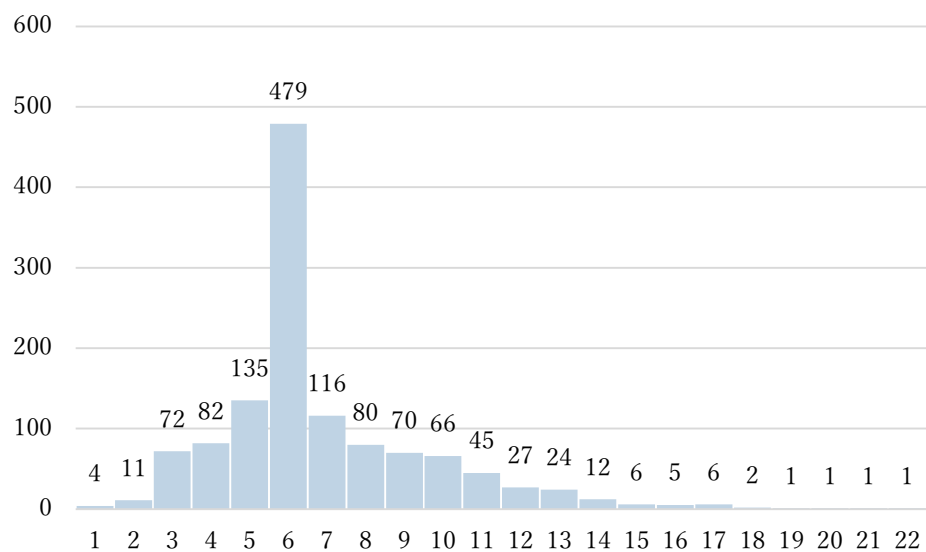


図 18 園内のクラス数

回答施設の 4 割近くで、園内に 6 クラスが設置されていた。

表 9 年齢別クラス内人数

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値	最頻値
0 歳児	7.7	5.4	1	33	6	6
1 歳児	11.9	6.0	1	36	12	12
2 歳児	13.3	6.8	1	41	13	12
3 歳児	16.3	7.3	1	58	16	15, 19
4 歳児	18.0	7.6	1	59	18	20
5 歳児	19.0	7.6	1	60	20	24

注) 全クラス分のデータ。1 クラスあたり 100 名以上としたデータについては欠損値として除外した。

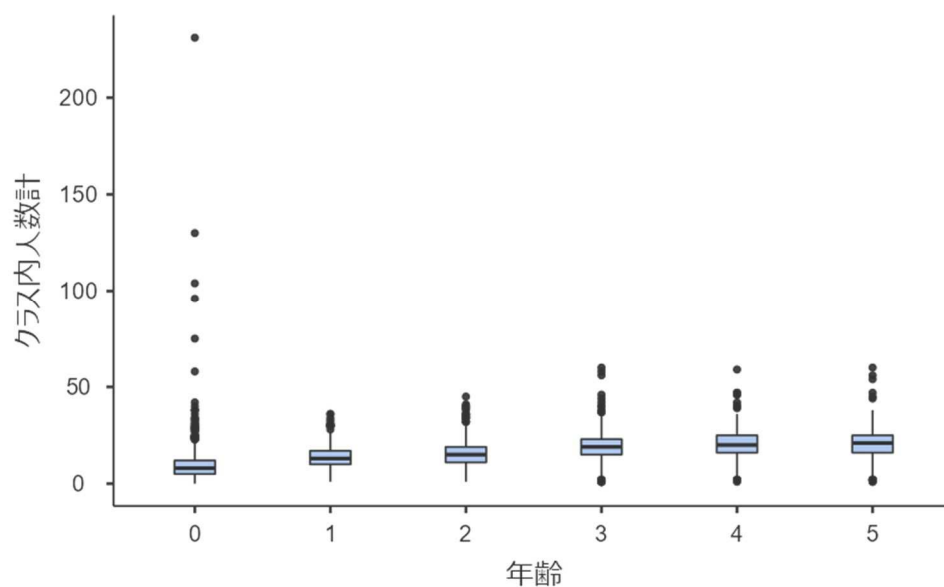


図 19 年齢別クラス内人数(施設長記入用 n = 1246)

注) 1 クラスあたり 100 名以上としたデータについては欠損値として除外,
複数年齢が 1 クラスに入っている場合は, クラス内の最小の年齢をラベル
として使用した。

表 10 クラス内幼児の認定区分

	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
1 号認定	-	-	-	11.5 (16.4)	10.9 (15.4)	11.8 (16.6)
2 号認定	-	-	-	15.8 (10.6)	16.5 (10.9)	17.4 (12.1)
3 号認定	5.2 (4.7)	11.8 (8.4)	13.8 (9.5)	-	-	-

(2) 未就園児（就園していない0～2歳児：満3歳未満児も満3歳以上児も含む）の受け入れ

表 11 未就園児の定期的な受け入れ

	施設長		担当教員	
	度数	%	度数	%
実施している	471	37.8	403	45.6
不定期	389	31.2	234	26.5
していない	386	31.0	154	17.4
その他	-	-	93	10.5
合計	1246	100.0	884	100.0

その他：具体的回答

一時預かり事業, 園庭開放, 子育て支援, 親子サークル等

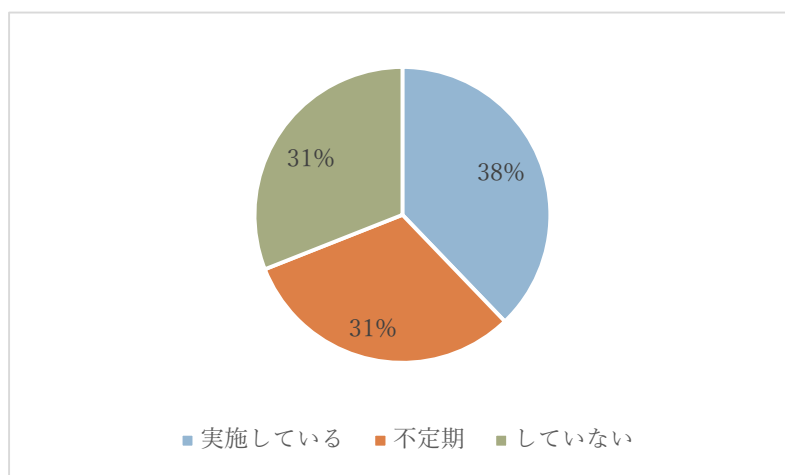


図 20 未就園児の定期的な受け入れ(施設長記入用 n = 1246)

*以降のデータは施設長が実施しているとした 471 園分のみを使用する

表 12 受け入れ要件(年齢)

	度数	%
生後 2 か月以上(産休明け)	58	12.3
生後 6 か月以上	75	15.9
1 歳以上	88	18.7
2 歳以上	183	38.9
その他(具体的に:	67	14.2
合計	471	100.0

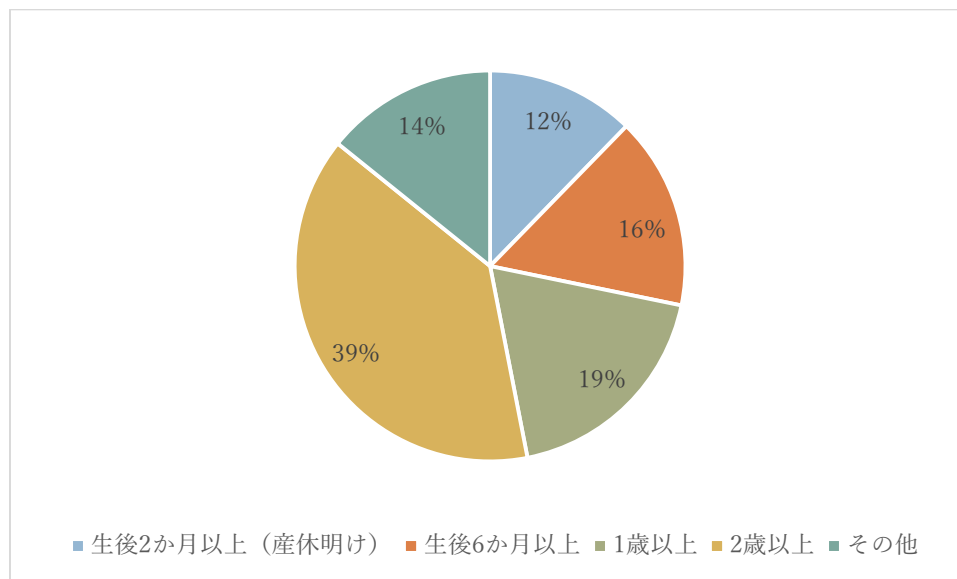


図 21 年齢による受け入れ要件（施設長記入用 n=471）

2歳以上の受け入れが最多で4割弱であった。

その他：具体的回答

1歳6か月以上, 2歳6か月以上, 満3歳以上, 年度中に3歳になる子ども等

表 13 受け入れ要件(年齢以外)

	条件とする園	%
おむつが外れていること	5	1.1
同じ園にきょうだいがいること	4	0.8
その他(具体的に:	92	19.5
特に要件は無い	372	79.0

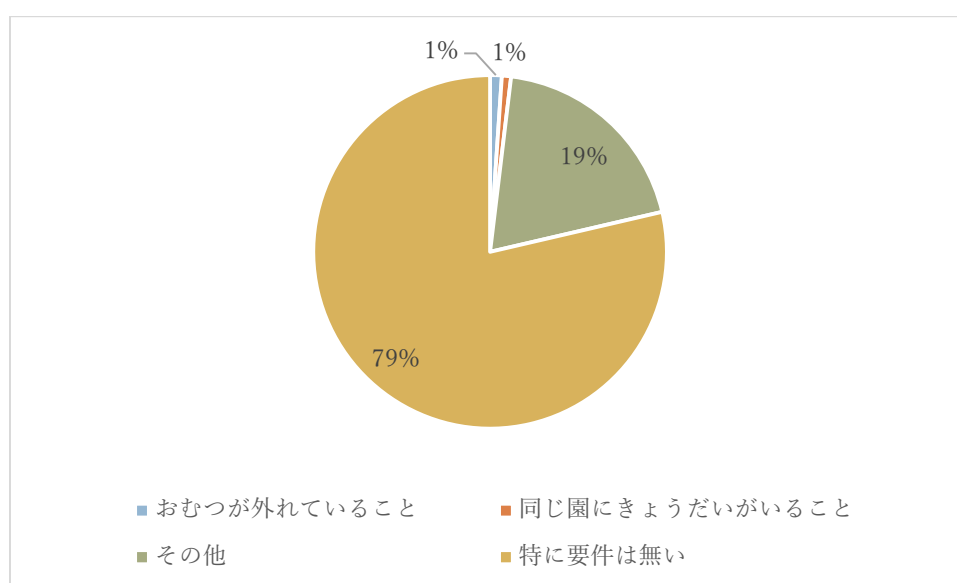


図 22 年齢以外の受け入れ要件(施設長記入用 n=471)

おむつが外れていることや、園にきょうだいがいるといったことは要件となることはほとんどない(それぞれ1%程度)。特に要件がないと回答した施設が8割近くに上るが、調査項目の問題である可能性があり、その他への記述が重要である可能性がある。具体的には、次年度以降に入園すること、3号認定があること、持病のないこと、緊急性がある場合、自力歩行、首すわり、親子登園可能、保護者の就労、離乳食の完了等。

表 14 受け入れ時期

	0 歳児		1 歳児		2 歳児		3 歳児	
	n	%	n	%	n	%	n	%
4 月	56	42.1	95	43.0	232	49.3	216	45.9
5 月	16	12.0	35	15.8	87	18.5	86	18.3
6 月	5	3.8	9	4.1	15	3.2	19	4.0
7 月	6	4.5	8	3.6	6	1.3	5	1.1
8 月	1	0.8	3	1.4	1	0.2	0	0.0
9 月	4	3.0	2	0.9	5	1.1	6	1.3
いつでも	44	33.1	62	28.1	105	22.3	106	22.5
その他	1	0.8	7	3.2	20	4.2	33	7.0
合計	133	100.0	221	100.0	471	100.0	471	100.0

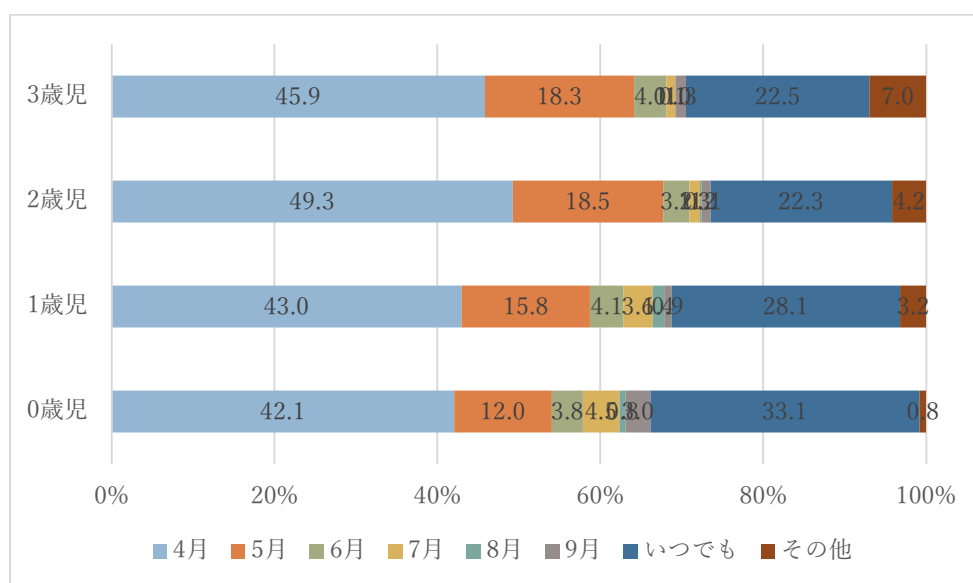


図 23 受け入れ時期 (施設長記入用 n=471)

いずれの年齢も 4 月に受け入れ開始が多く、4 割強であった。その他への具体的記述には、10 月としたもの、誕生日の翌日から、等が見られた。

表 15 年齢別 定期的な受け入れ実施方法（自由記述に基づき分類）

	0 歳児		1 歳児		2 歳児		3 歳児	
一時預かり	8	6.0%	10	4.6%	10	2.2%	10	2.1%
月 10 時間	5	3.8%	7	3.2%	7	1.6%	7	1.5%
午前のみ	6	4.5%	8	3.7%	13	2.9%	12	2.5%
回数限定 （月 5 回以内）	25	18.8%	50	23.0%	105	23.4%	91	19.3%
回数限定 （月 6～11 回）	6	4.5%	12	5.5%	63	14.1%	39	8.3%
回数限定 （月 12～15 回）	26	19.5%	47	21.7%	72	16.1%	61	13.0%
通常保育時間	30	22.6%	55	25.3%	142	31.7%	188	39.9%
いつでも・ 希望に応じて	26	19.5%	28	12.9%	35	7.8%	34	7.2%
その他	1	0.8%	0	0.0%	1	0.2%	30	6.4%
合計	133	100.0%	217	100.0%	448	100.0%	471	100.0%

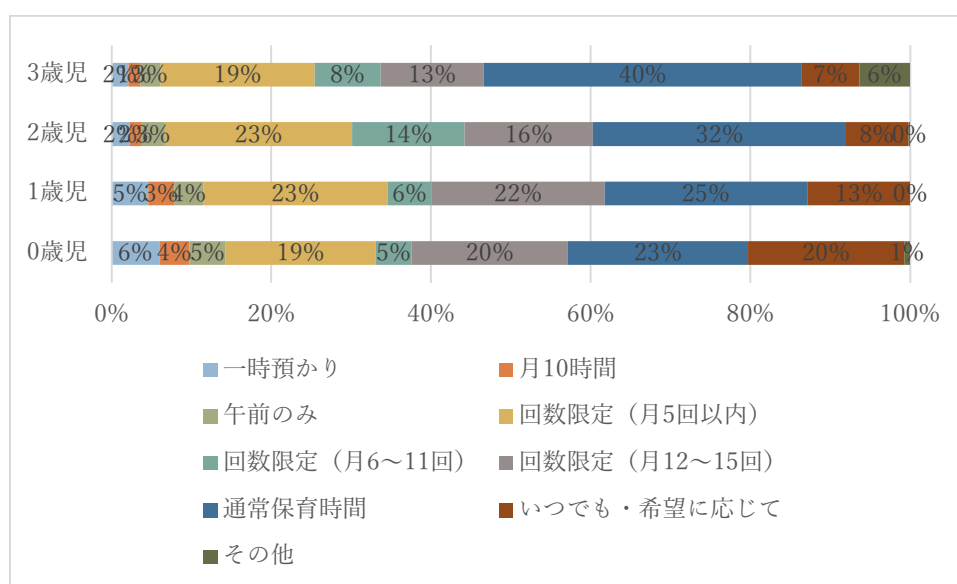


図 24 年齢別 定期的な受け入れ実施方法（自由記述に基づき分類, 施設長記入用 n=471）

通常の保育時間での定期的な受け入れは、子どもの年齢が上がるにつれて増加する傾向（3 歳児で 4 割）。回数を限定して受け入れるというパターンも多く見られた（4 割～5 割程度）。

表 16 未就園児の登園方法

	n	%
保護者による送迎	389	82.6
幼稚園バス利用（子どものみ）	42	8.9
幼稚園バス利用（保護者同伴）	2	0.4
保護者による送迎か園バスかを選べる	97	20.6
その他	12	2.5

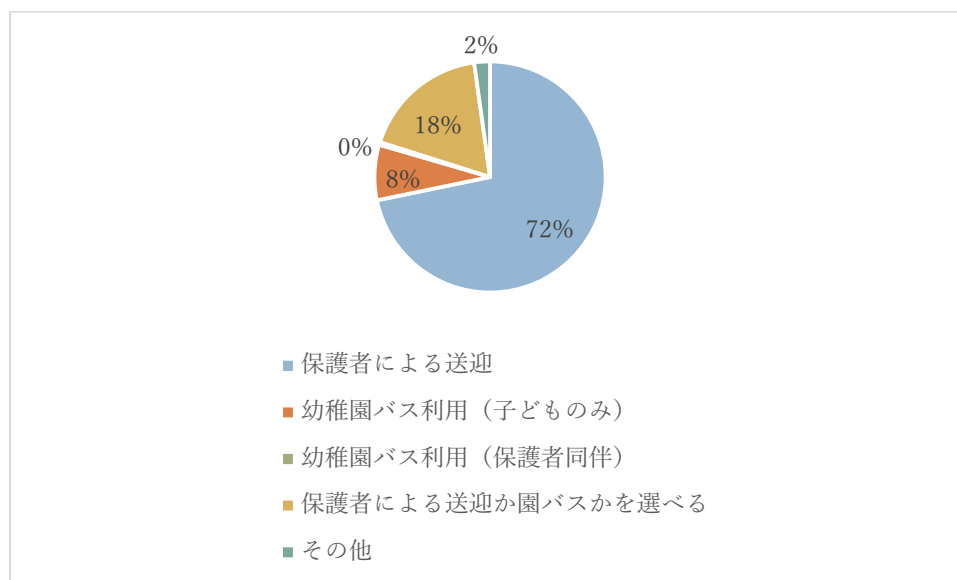


図 25 定期的な受け入れ 未就園児の登園方法（施設長記入用 n=471）

7 割が保護者による送迎であった。

その他：具体的回答

バス利用条件についての回答（年齢、きょうだいの有無等）が見られた。

表 17 保護者の同伴（保育の間,同じスペースにいること）の有無

	0 歳児		1 歳児		2 歳児		3 歳児	
	n	%	n	%	n	%	n	%
ほとんど毎回	27	20.3	51	23.1	63	13.4	50	10.6
たいてい	5	3.8	7	3.2	15	3.2	10	2.1
ときどき	11	8.3	22	10.0	59	12.5	47	10.0
めったにない	30	22.6	45	20.4	138	29.3	127	27.0
一度もない	60	45.1	96	43.4	196	41.6	237	50.3
合計	133	100.0	221	100.0	471	100.0	471	100.0

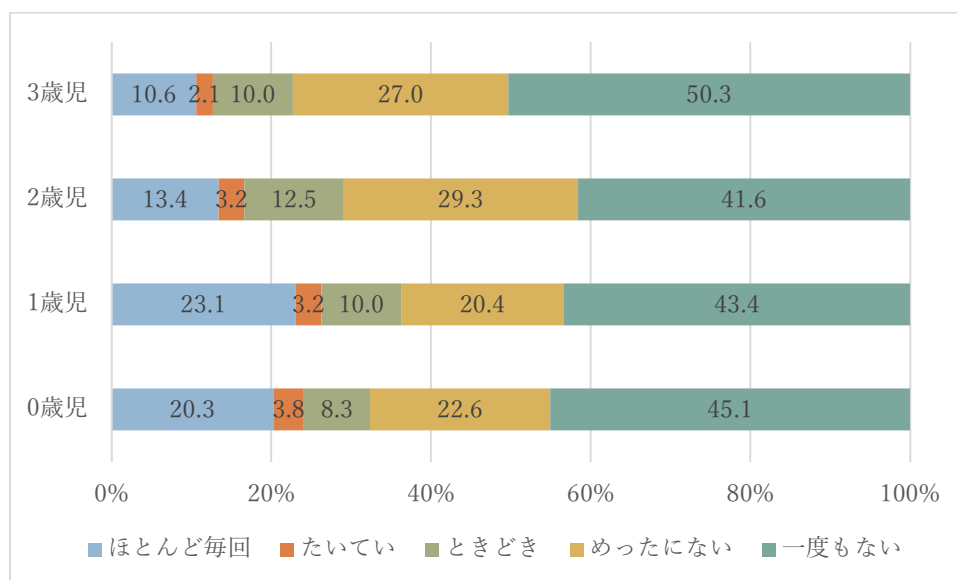


図 26 保護者の同伴（保育の間,同じスペースにいること）の有無（施設長記入用 n=471）

年齢にかかわらず,半数以上は保護者も同伴しないが,一定数,保護者が同伴しているケースもあった(1歳以下で2割強,2歳以上で1割程度)。

表 18 保護者の同伴（保育の間, 同じスペースにいること）の目的（複数回答）

	n	%
ならし保育として	220	46.7
園について知ってもらい, 入園につなげるため	205	43.5
保護者の子育て相談の場として	190	40.3
保護者が自分の子ども以外の子どもの様子を知る機会として	161	34.2
保護者同士の関係性をつくる機会として	156	33.1
地域のつながりを作るため	69	14.6
その他	141	29.9

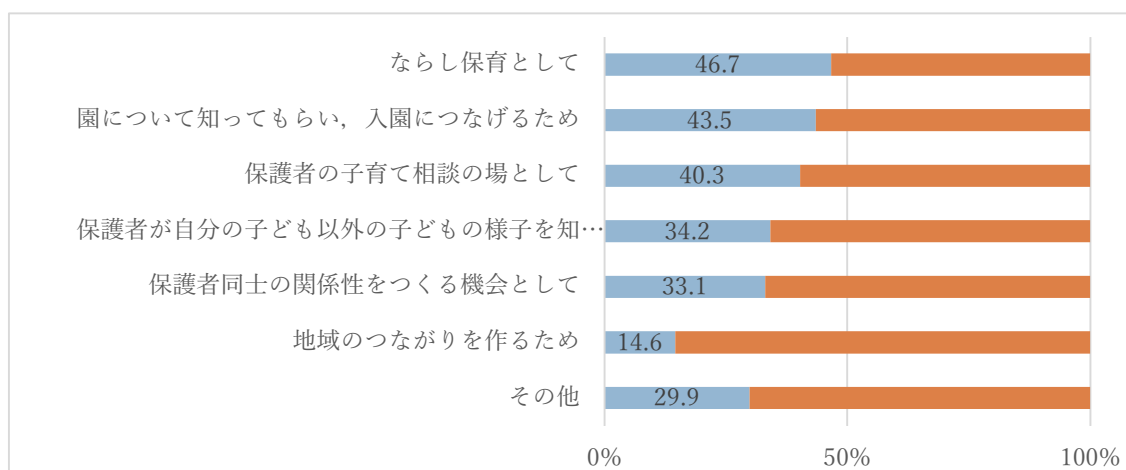


図 27 保護者の同伴（保育の間, 同じスペースにいること）の目的（複数回答）
（施設長記入用 n=471）

その他: 具体的回答

一人での登園が難しい場合のみ, 行事の時のみ等

表 19 園での食事の提供

	N	%
ある（自園調理）	220	46.7
ある（弁当外部搬入）	49	10.4
ある（再加熱式外部搬入）	2	0.4
ある（園での食事の提供と家庭からの弁当持参の併用）	62	13.2
なし（家庭から弁当持参）	45	9.6
ない（食事時間の設定がない）	76	16.1
その他	17	3.6
合計	471	100.0

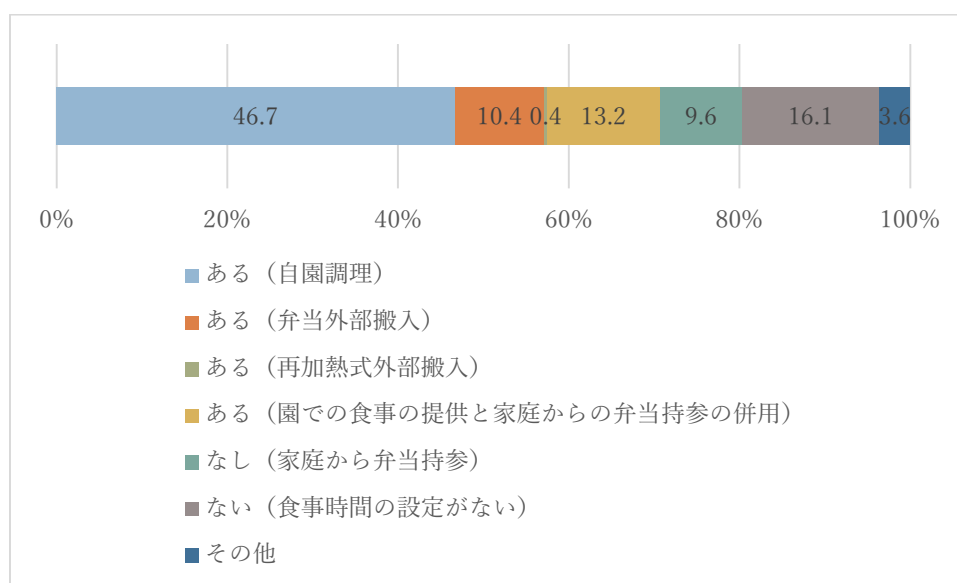


図 28 園での食事の提供（施設長記入用 n=471）

半数近くが給食を提供, これを含めて半数以上が園で何らかの食事提供していた。その他への具体的記載には, 年齢による対応の違いが記載された。

表 20 食事にかかわる園での対応 (n=333)

	n	%
離乳食対応	171	51.4
アレルギー対応	300	90.1

食事を提供している場合, アレルギー対応はその9割が, 離乳食対応はその半数が行っていた。

(3) 未就園児の担当者について（施設長記入 n=471）

表 21 未就園児の担当者

	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児
ほぼ毎回同じ者が担当している	69 51.9%	121 54.8%	313 66.5%	315 66.9%
ほぼ毎回同じ担当者とは固定でない（フリー）の職員が混在している	62 46.6%	92 41.6%	133 28.2%	117 24.8%
ほぼ毎回異なる職員が担当している	2 1.5%	4 1.8%	7 1.5%	6 1.3%
その他	0 0.0%	4 1.8%	18 3.8%	33 7.0%
合計	133 100.0%	221 100.0%	471 100.0%	471 100.0%

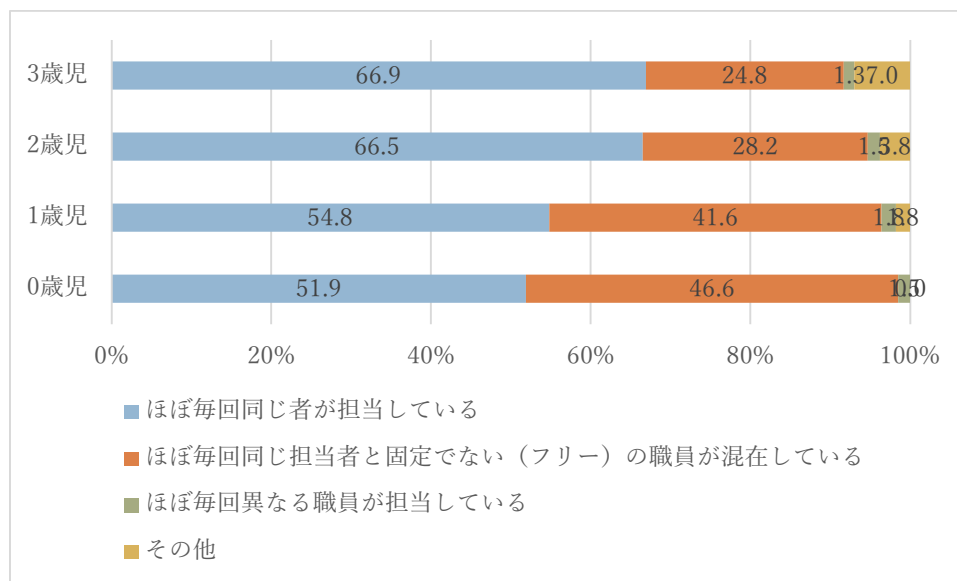


図 29 未就園児の担当者（施設長記入 n=471）

半数以上の施設で担当者固定。年齢が低いとほぼ毎回同じ担当者とは固定でない（フリー）の職員が混在する割合が高い。

(4) 未就園児の定期的な受け入れ

表 22 未就園児の定期的な受け入れ(受入施設数, 保護者同伴の有無, 担当教員数)

	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児
受入施設数	104	164	380	304
受け入れ子ども数				
平均値	3.0	4.2	7.5	7.8
標準偏差	4.1	4.9	8.9	9.3
最小値	1	1	1	1
最大値	25	24	64	69
保護者同伴あり	32	49	70	44
	30.8%	29.9%	18.4%	14.5%
受け入れ子ども人数(計)	307	680	2853	2363
担当教員数(計)	122	216	698	892
教員数÷子ども数 (平均)	0.40	0.27	0.22	0.41
(最小値)	1÷25	1÷19	1÷32	1÷23
(最大値)	1÷1	1÷1	1÷1	1÷1
教員数(範囲)	0-5	0-7	0-7	0-12
担当教員(正規雇用率)	57.7%	55.3%	47.7%	56.5%
保有資格(幼保)	90.2%	89.2%	85.1%	87.5%
保有資格(幼のみ)	1.3%	1.2%	4.5%	4.4%
保有資格(保のみ)	7.2%	5.2%	5.2%	3.5%
保有資格(幼保ともなし)	1.3%	4.4%	5.2%	4.6%

注) 教員数÷子ども数(平均)はクラス内の子どもの人数を担当教員数で割った値の平均

未就園児の受け入れに関して, 受け入れている子どもの人数, 担当教員数の幅が広い。従って教員数と子どもの人数の比も園による差が大きい。正規雇用の担当教員は 50%前後, 幼稚園教諭と保育士資格の両方を有している者 9 割程度であった。2 歳児の受け入れが他の年齢に比べて, 教員:子どもの人数比や, 正規雇用率, 保育教諭の割合が若干低かった。

(5) 未就園児の夏季休業中の受け入れ

表 23 未就園児の夏季休業期間等の定期的な受け入れ

(受入施設数, 保護者同伴の有無, 担当教員数)

	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児
受入施設数	111	146	213	236
受け入れ子ども数				
平均値	1.7	2.2	3.5	3.0
標準偏差	2.5	3.7	5.4	5.1
最小値	1	1	1	1
最大値	14	24	39	43
保護者同伴あり	14	14	20	14
	5.4%	5.4%	7.8%	5.4%
受け入れ子ども人数(計)	185	323	744	714
担当教員数(計)	96	145	270	243
教員数÷子ども数 (平均)	0.44	0.35	0.31	0.32
(最小値)	1÷14	1÷13	1÷20	1÷22
(最大値)	1÷1	1÷1	1÷1	1÷1
教員数(範囲)	0-5	0-11	0-11	0-11
担当教員(正規雇用率)	43.2%	41.9%	46.3%	38.8%
保有資格(幼保)	89.8%	86.7%	88.8%	86.4%
保有資格(幼のみ)	0.8%	1.2%	2.4%	3.6%
保有資格(保のみ)	5.9%	6.6%	3.7%	5.0%
保有資格(幼保ともなし)	3.4%	5.4%	5.1%	5.0%

注) 教員数÷子ども数(平均)はクラス内の子どもの人数を担当教員数で割った値の平均

夏季休業期間中は, 受け入れている子どもの数が少なく, 教員との人数比も通常時よりも大きい。
教員の正規雇用率は4割程度, 保育教諭の率は9割弱であった。

(6) 未就園児への子育て支援（定期的＋不定期的な受け入れをしている 860 施設）

表 24 未就園児の受け入れにつながる子育て支援の内容（複数回答）

	実施施設	%
園庭開放	672	78.1
絵本等の貸出	138	16.0
個別相談	487	56.6
公開講座（講義形式、親子遊びなどのワークショップ）	331	38.5
在園児との交流	433	50.3
行事への参加（運動会の未就園児演題など）	467	54.3
その他	168	19.5

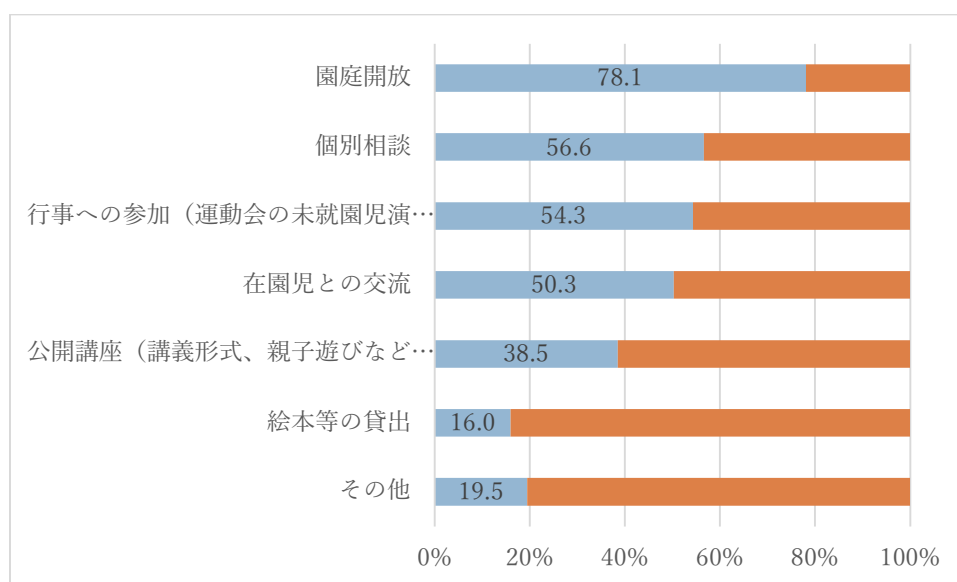


図 30 未就園児の受け入れにつながる子育て支援の内容
（定期的＋不定期的な受け入れをしている 860 施設）

園庭開放が最も多く、8割程度の園で実施されていた。その他には、親子教室、お楽しみ会、一時保育、一時預かり、未就園児クラス、園開放、子育て広場、子育て支援、親子サークル等が含まれた。

(7) 環境（定期的＋不定期的な受け入れをしている 860 施設）

表 25 専用保育室の有無および専用保育室数

保育室	施設数	%
なし	396	46.0
ある	464	54.0
うち 1 室	379	81.7
2 室	62	13.4
3 室	18	3.9
4 室	2	0.4
5 室	2	0.4
8 室	1	0.2

保育室の面積平均値は 59.0 m²（標準偏差=78.6）

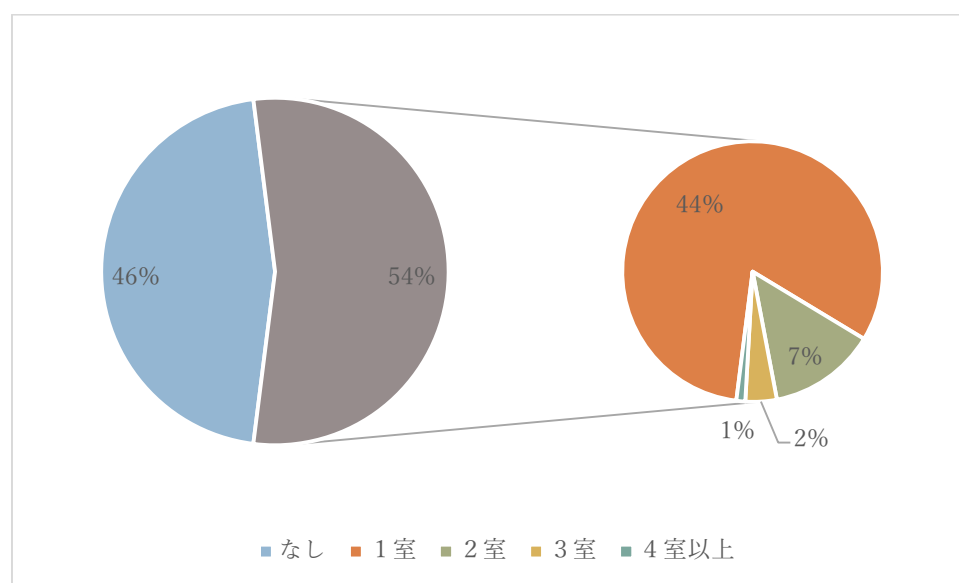


図 31 専用保育室の有無および専用保育室数
（定期的＋不定期的な受け入れをしている 860 施設）

専用の保育室がある施設が半数程度であり、そのうちのほとんどは 1 室を用意していた。

表 26 未就園児への配慮(屋内環境)

	n	%
月齢や発達状況に即した部屋の設定 (パーティションで仕切るなど)をしている	319	37.1
移動を促したり, 転倒時のケガをなくすために, クッションフロアやマットがある	446	51.9
移動や誤飲等の危険がないよう, 保育室内の整理整頓を 心がけている	691	80.3
乳児(0~2歳児)が安全に過ごせるよう危険なものが 置かれていない	679	75.5
安全な午睡用ベッドがある	263	30.6
安全で清潔なおむつ交換台がある	328	38.1
子どもの発達に応じた食事の提供に配慮したテーブル・ 椅子等がある	555	64.5
つかまり立ちができるようなテーブルや家具がある	312	36.3
発達に適したおもちゃがある	744	86.5
沐浴室(沐浴設備)がある	284	33.0
絵や写真等の展示物がある	481	38.6
子どもが自由に使える絵本が10冊以上ある	708	82.3
作画など創作ができる環境がある	476	55.3
マットや滑り台など運動遊びができる遊具や器具がある	557	64.8
音楽をかける機材や楽器などがある	651	75.7
積み木と積み木が使えるコーナーなどがある	576	67.0
ごっこ遊びができるような人形やおまごと道具, ぬいぐるみなどがある	710	82.6
砂遊びや水遊びができるような道具がある	611	71.0
その他	36	4.2

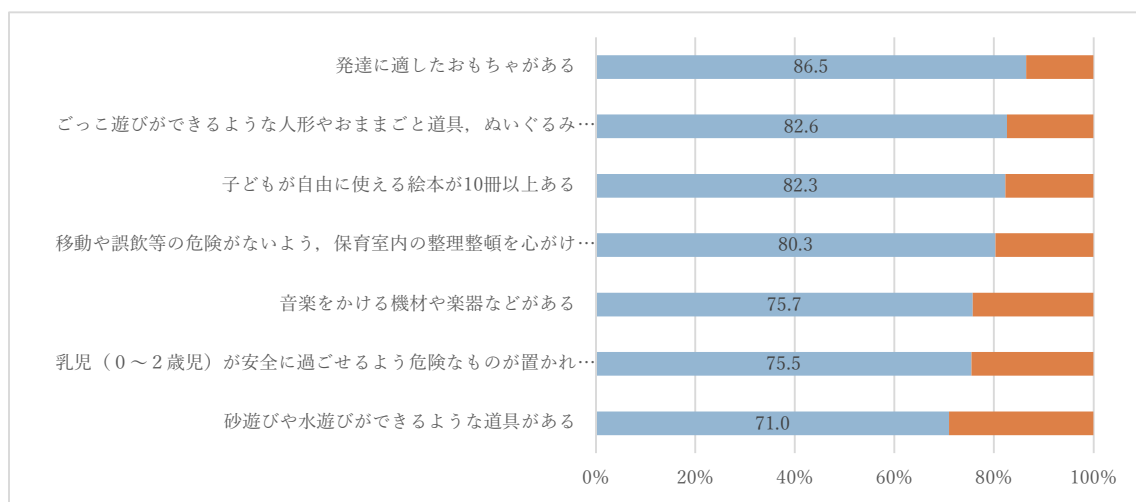


図 32 未就園児への配慮(屋内環境)7割以上の施設にあるもの
(定期的+不定期的な受け入れをしている 860 施設)

項目内容

発達に適したおもちゃがある

ごっこ遊びができるような人形やおままごと道具、ぬいぐるみなどがある

子どもが自由に使える絵本が10冊以上ある

移動や誤飲の危険がないよう、保育室内の整理整頓を心がけている

音楽をかける機材や楽器などがある

乳児(0～2歳児)が安全に過ごせるよう危険なものが置かれていない

砂遊びや水遊びができるような道具がある

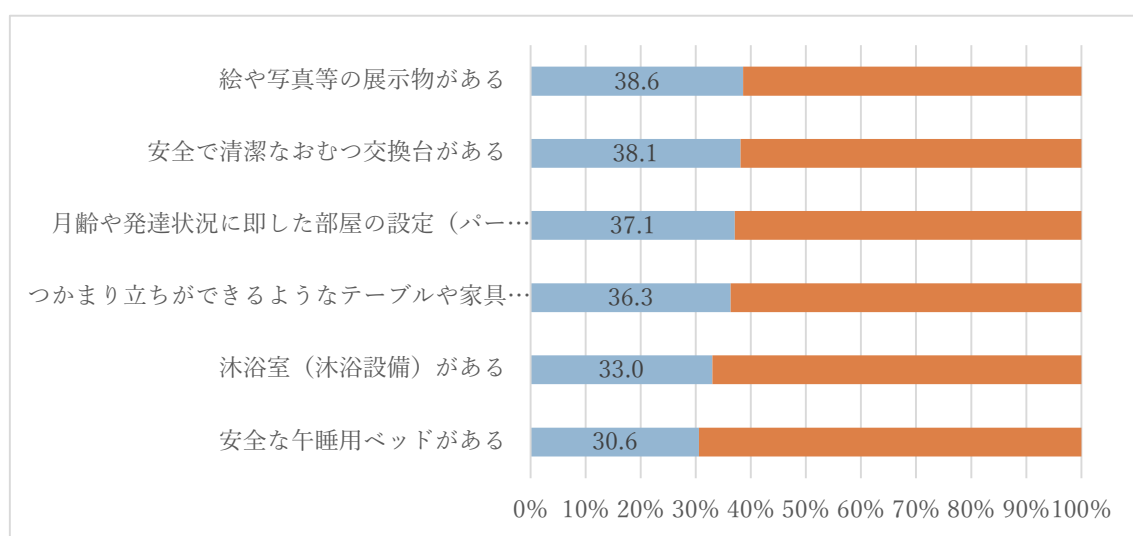


図 33 未就園児への配慮(屋内環境)半数以上の施設にないもの
(定期的+不定期的な受け入れをしている 860 施設)

項目内容

- 絵や写真等の展示物がある
- 安全で清潔なおむつ交換台がある
- 月齢や発達状況に即した部屋の設定（パーティションで仕切るなど）をしている
- つかまり立ちができるようなテーブルや家具がある
- 沐浴室（沐浴設備）がある
- 安全な午睡用ベッドがある

現状の幼稚園にある設備の中で対応可能なものは多くの施設で配慮されているが、乳幼児の生活に必要な設備はまだ十分ではない可能性がある。その他に含まれた記載は、在園時と同じ環境、身体を使って遊ぶ遊具、親子トイレ等であった。

表 27 未就園児と保護者が使用可能な屋内施設

	N	%
保育室（未就園児用）	450	52.3
保育室（0～2歳児）	543	63.1
保育室（3歳児）	335	39.0
保育室（4歳児）	288	33.5
保育室（5歳児）	283	32.9
一時預かり事業専用室	235	27.3
事務室	225	26.2
医務室	233	27.1
多目的トイレ	340	39.5
更衣室	54	6.3
大人用トイレ	413	48.0
児童・生徒用トイレ	534	62.1
調理室	80	9.3
エレベーター	62	7.2
遊戯室	640	74.4
体育館	106	12.3
その他	68	7.9

その他：具体的回答

ホール、図書室（絵本コーナー）、ランチルーム、子育て支援室、授乳室、多目的室等。

表 28 未就園児が使用可能な屋外環境(1)

	園にある		保育者の援助があれば使用可能		子どもだけで使用可能	
	n	%	n	%	n	%
園環境						
園庭	755	87.8	626	72.8	413	48.0
屋上	217	25.2	145	16.9	37	4.3
花壇	646	75.1	409	47.6	191	22.2
植木鉢, プランター	672	78.1	418	48.6	188	21.9
草花	636	74.0	377	43.8	311	36.2
畑・田んぼ等	380	44.2	295	34.3	83	9.7
木・林	361	42.0	230	26.7	123	14.3
土手	96	11.2	81	9.4	46	5.3
築山	316	36.7	246	28.6	157	18.3
池	68	7.9	62	7.2	22	2.6
ビオトープ	74	8.6	69	8.0	35	4.1
小動物(うさぎ, ハムスター, 鳥など)	126	14.7	120	14.0	44	5.1
水槽(魚, カメ, ザリガニなど)	418	48.6	320	37.2	142	16.5
昆虫類	340	39.5	235	27.3	149	17.3
園環境 その他	49	5.7	47	5.0	26	3.0

表 29 未就園児が使用可能な屋外環境(2)

	園にある		保育者の援助があれば使用可能		子どもだけで使用可能	
	n	%	n	%	n	%
固定遊具						
砂場・どろんこ場	741	86.2	561	65.2	474	55.1
水遊び場	422	49.1	400	46.5	121	14.1
プール	407	47.3	343	39.9	58	6.7
ぶらんこ	455	52.9	383	44.5	187	21.7
すべり台	697	81.0	602	70.0	321	37.3
鉄棒	626	72.8	521	60.6	233	27.1
のぼり棒	394	45.8	300	34.9	135	15.7
うんてい	471	54.8	369	42.9	151	17.6
ジャングルジム	379	44.1	308	35.8	150	17.4
シーソー	74	8.6	75	8.7	25	4.2
ベンチ等	496	57.7	331	38.5	338	39.3
プレイハウス	320	37.2	227	26.4	210	24.4
固定遊具 その他	158	18.4	139	11.2	68	7.9
可動式遊具						
幼児用自動車	198	23.0	154	17.9	99	11.5
押し車	386	44.9	285	33.1	232	27.0
三輪車	513	59.7	376	43.7	310	36.0
二輪車	241	28.0	167	19.4	128	14.9
一輪車	96	11.2	65	7.6	38	4.4
タイヤ	192	22.3	136	15.8	107	12.4
プール	399	46.4	319	37.1	55	6.4
可動式遊具 その他	66	7.7	58	6.7	27	3.1

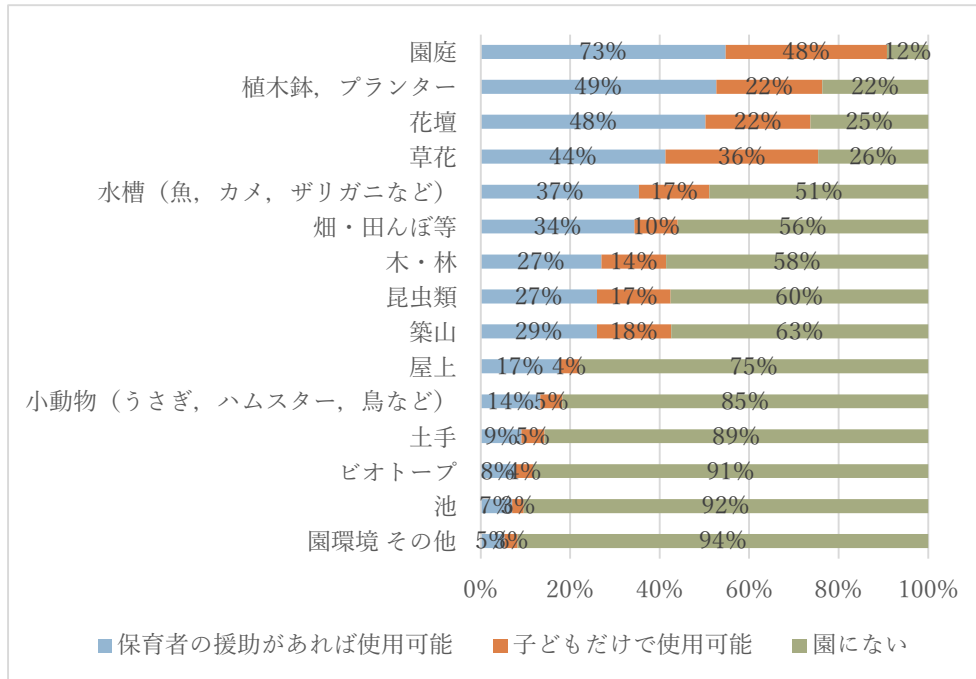


図 34 未就園児が使用可能な園環境 (定期的+不定期的な受け入れをしている 860 施設)
(複数回答のため, 合計しても 100%にならない)

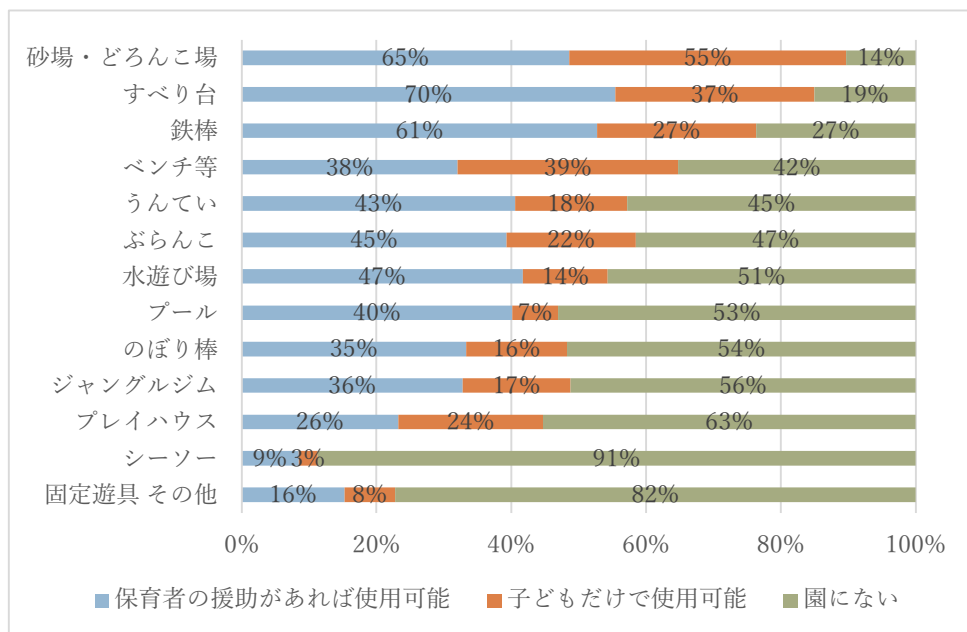


図 35 未就園児が使用可能な固定遊具 (定期的+不定期的な受け入れをしている 860 施設)
(複数回答のため, 合計しても 100%にならない)

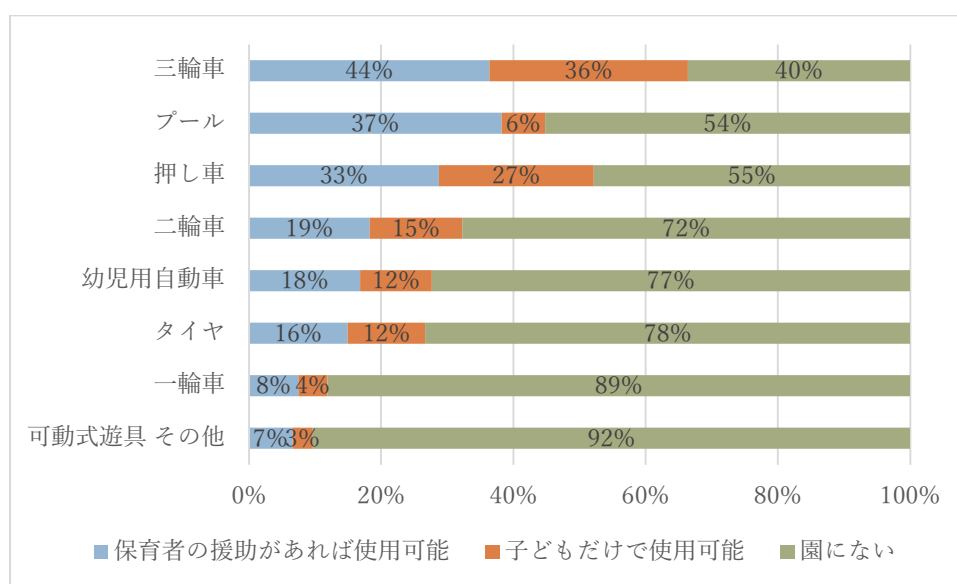


図 36 未就園児が使用可能な可動式遊具（定期的+不定期的な受け入れをしている 860 施設）
（複数回答のため、合計しても 100%にならない）

その他:具体的回答

アスレチック,クライミングウォール,キックスケーター,ホッピング,ツリーハウス,芝生,トンネル等。

8 割以上の施設にあったのは、園庭、砂場・どろんこ場、滑り台であった。園庭や砂場・どろんこ場は子どもだけでの使用を認めている割合が高い。鉄棒や滑り台は、保育者の援助があれば、設置されている園では子どもたちに使用を認めていた。可動式の遊具（乗り物類）やプレイハウス、ベンチ、築山等は園にあれば、子どもだけで使用させているケースが多かった（約半数程度）。

(8) この一年間の教職員の研修（全対象施設, n=1246）

表 30 教職員の研修（未就園児にかかわるもの）

	n	%
乳幼児期の発達や心理	650	52.2
健康衛生や安全管理	464	37.2
運動発達や遊び	457	36.7
家庭との連携?子育て支援	445	35.7
幼保小の連携・接続	423	33.9
主体的な遊びへの援助?環境構成	422	33.9
特別支援教育	420	33.7
食育	385	30.9
表現やリズム(音楽, 美術, ダンス)	307	24.6
災害への備え	284	22.8
言葉や絵本	273	21.9
遊びや学びの観察?記録	216	17.3
人間関係や仲間関係	192	15.4
保育環境の評価	133	10.7
数量図形や自然科学	47	3.8
多文化教育	40	3.2
その他	47	3.8

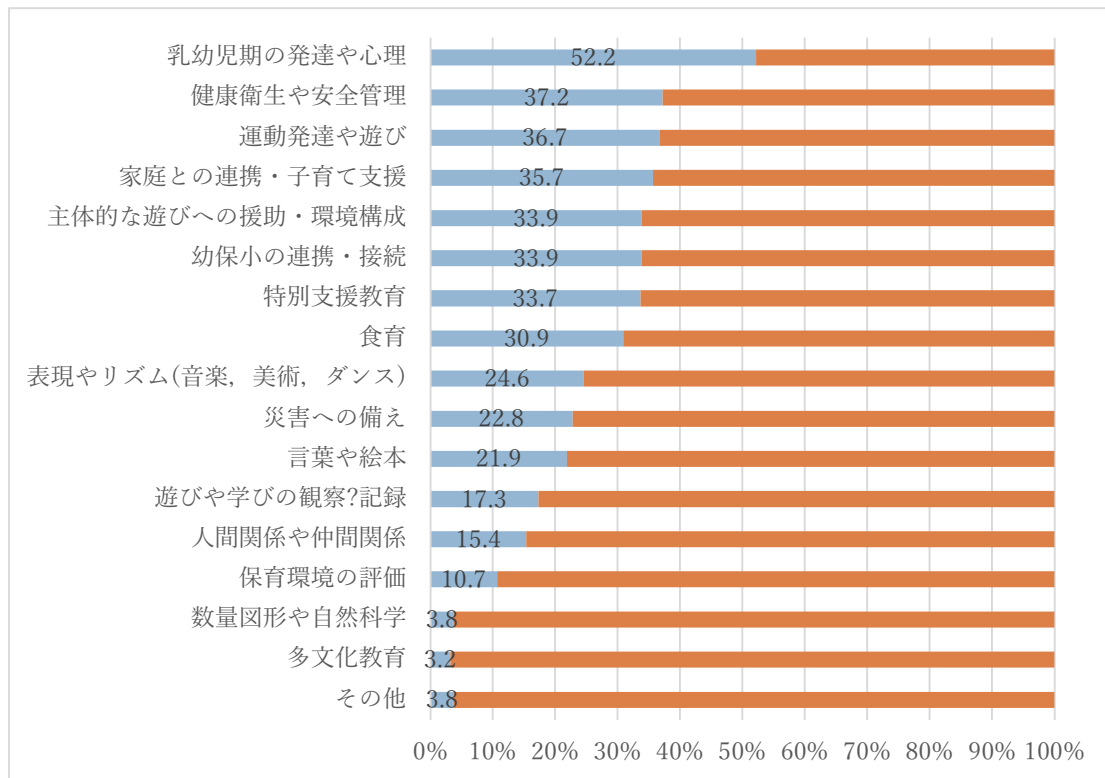


図 37 教職員の研修(未就園児にかかわるもの)(全対象施設, n=1246)

その他:具体的回答

アレルギー, 虐待防止, 救急救命, 子育て家庭の現状等。

6. 担当教員調査結果 (n = 884)

(1) 担当している子どもたちの年齢

表 31 担当児の年齢別回答者数(複数回答有)

	n	%
0歳児	338	38.2
1歳児	397	44.9
2歳児	496	56.1
満3歳児	228	25.8
その他	128	14.5

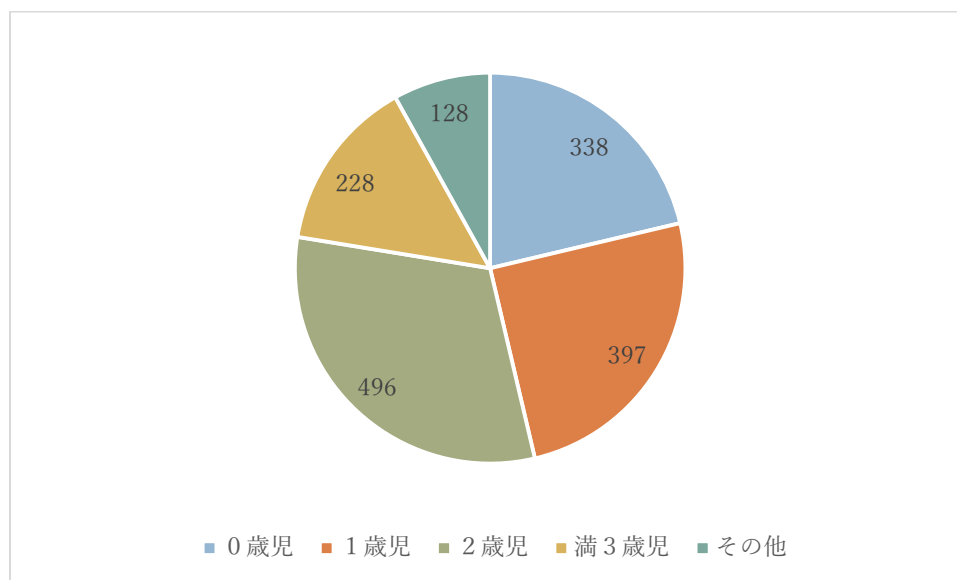


図 38 担当児の年齢別回答者数(複数回答有)

担当児の年齢:重複回答について

複数年齢を担当していない回答者は、403 名(うち、0歳のみ 105 名、1 歳のみ 87 名、2 歳 178 名、3歳のみ 33 名)、複数年齢を担当している回答者は、0, 1歳担当 51 名、0~2歳担当 86 名、0~3 歳担当 96 名、1, 2歳担当 38 名、1~3歳担当 39 名、2, 3歳担当 60 名であった。

(2) 未就園児の普段の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと思うもの（5個まで）

以下の項目について、「特に重要だと思う 5 つ」として選択した人数を、当該年齢児を担当している人数（0歳児 338 人、1歳児 397 人、2歳児 496 人、満3歳児 228 人）で除した割合を用いた。

表 32 安全・衛生

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
室内や戸外で、子どもの安全を守るための見守りを 行っている。	59.8%	55.9%	49.8%	46.5%
子どもが健康で衛生的な行動をとるように促し、必要 に応じて声をかけて援助する。	30.2%	25.9%	22.4%	18.9%
戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体 的に安全である。	37.0%	40.3%	30.4%	32.5%
適切な温度・湿度・換気・採光、音等の環境を保ち、状 況に応じて配慮している。	43.2%	25.9%	14.7%	9.6%
子どもが自ら危ないことに気付き、自分で考えながら 安全に遊べるように、援助したり環境を整えたりしてい る。	8.3%	13.6%	26.6%	30.3%
N	338	397	496	228

表 33 子どもに対する応答性

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもが取り組んでいることで困っている時に、快く手を差し伸べたり、支えたりしている。	20.1%	29.5%	26.2%	19.7%
子どもの要求や感想に対し、すぐに応答したり、検討したりしている。	23.7%	19.9%	12.7%	9.6%
特定の子どもに主に関わる場合も、他の子どもに目を配り、不安を感じさせないように配慮している。	13.6%	12.6%	11.5%	8.8%
子どもが、いつでも好きなときに保育者や他の子どもと話すことができるようにしている。	8.3%	9.8%	9.1%	6.1%
子どもとやり取りしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやり取りにならないように、前向きで積極的な姿勢を保とうと努力している	22.5%	24.2%	28.2%	28.1%
子どもとの身体的な触れ合いを通して子どもの努力を褒めたり慰めたりする	16.0%	14.4%	7.9%	8.3%
子どもが何かいいことをしたときに「よくやったね」「がんばったね」などと言ってほめる	13.9%	21.2%	26.4%	19.7%
N	338	397	496	228

表 34 他者との間の調整に関する援助

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもが自ら生活を整えようとしたり, 他者を思いやる姿が見られたとき, 認めたり喜びの言葉を伝えたりしている。	3.3%	7.6%	18.8%	21.5%
子どもに対して, よい行動の見本(お手本)を見せる	5.6%	6.8%	4.8%	6.6%
子どもが表現する気持ちに共感し, 子どもが自らの感情にうまく対応できるよう援助している。	18.0%	14.9%	13.7%	14.9%
いざこざなどで不安定になり, 他の子どもとの遊びがうまく進まない場合, 子どもが保育者の援助を求めやすいようにしたり, 互いの思いを言葉にすることを手伝ったりして保育者に支えられながらそれぞれの思いが表現できるよう配慮している。	2.4%	12.3%	17.1%	18.4%
N	338	397	496	228

表 35 遊びの援助・環境構成

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもが運動をするように促す	3.8%	1.5%	2.4%	2.2%
子どもが遊びや活動の場やコーナー, 空間の広さや素材や教材等を選ぶこと, 探究を促すための活動ができるようにしている。	9.2%	6.3%	7.7%	7.0%
子どもが見通しをもって活動したり, 協力しながら進めたり, 活動を振り返ったりすることを援助している。	2.1%	1.3%	6.7%	4.4%
それぞれの遊びや活動の場やコーナーが混雑しすぎて支障のないように配慮している。	5.3%	3.8%	2.2%	2.2%
子どもが探したり見つけたりすることを楽しんだり, それをきっかけにして遊びが広がったりするように環境構成を工夫したり, 子どもが発見したことや物を取り上げて周囲に伝えたりする等して, 子どもの好奇心を支えている。	10.4%	14.1%	14.7%	16.7%
日々子ども一人一人の興味に適切に対応し, 自由に活動する遊びを大切にして, 指導計画(日案, 週案等)をたてている。	10.1%	5.3%	2.2%	5.7%
子どもが遊びや活動に取り組む中で諦めそうになった場合, 励ましたり足場かけ*をしたりするなどして, 最後までやり遂げた達成感を味わえるよう援助している。(*注足場かけ:子どもが興味を持った物事や活動等に取り組んで達成するように, 保育者や保護者等の大人が, 手伝ったり支えたりすること。)	0.9%	5.3%	5.4%	11.8%
自由に遊んだり活動したりするとき, 子どもの遊びを見守っており, 子どもの主体的な遊びが行われるよう, 必要な介入にとどめている。	11.8%	14.9%	5.8%	16.7%
N	338	397	496	228

表 36 言語的活動やコミュニケーションの援助

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもの言葉について保育者自身が理解できているかを確認するため、子どもに問いかけたり、子どもの言葉を言い換えたり、繰り返したりしている。	3.6%	2.5%	3.2%	2.6%
子どもが遊んだり活動したりしているときに、その様子を言葉で表現する等して、言葉の使い方のモデルを示したり、子どもの思考のプロセスを分かりやすく示したりしている。	1.5%	1.3%	2.2%	2.2%
一人一人の子どもの言葉の発達を促す足場かけをし、言葉に対する感覚やリズムの楽しさ、豊かな語彙のモデルを示している。	4.1%	5.3%	3.8%	6.1%
今日の遊びの楽しさが共有できるように話し、話したくなった子どもが話せるようにしている。	0.9%	0.3%	3.2%	3.9%
文字や言葉、数を覚えられるように何度も繰り返し伝えたり、図形（丸や三角や四角）が分かるように遊びながら言葉を添えたりしている	0.3%	0.8%	1.0%	2.2%
子どもが、お話や本などからイメージを共有し、一緒に遊ぶことを促したり、その機会を用意したりする。	1.5%	3.3%	2.4%	0.9%
クラス（グループ）で絵本等の読み聞かせを一緒に楽しむ時間を設けている。	6.2%	7.8%	5.6%	7.0%
ふだんから、子どもと遊んだり関わったりするときには、歌を歌ったり言葉遊びをしたりしている。	15.7%	7.1%	4.2%	3.1%
N	338	397	496	228

表 37 子ども同士をつなぐ援助

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもが他者に関わろうとしたり, 集団に入りたくてもなかなか入れずにいる場合, 子ども同士がつながるきっかけを用意する等して, 適切に援助している。	1.8%	2.8%	9.1%	12.7%
子どもが他の子どもと分け合うこと(おもちゃと一緒に使うなど)を促す	1.5%	2.3%	2.0%	1.8%
ほとんど話さない, 話すことができない子どもや, 日本語が母国語でない子どもがいる(と仮定した)場合, 言葉でのやりとり以外のコミュニケーション方法を用いている。	2.7%	1.8%	1.2%	0.4%
子ども同士がやりとりするなかで, 他の子どもの気持ちに気づき, 応答することを支えている。	2.4%	5.5%	10.9%	11.4%
N	338	397	496	228

表 38 探究的活動の援助

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児
	%	%	%	%
子どもが身近なことに気付いたり考えたりするおもしろさを感じられるようにすることを意図したねらいや内容について、指導計画に記載している。	2.1%	2.3%	3.4%	6.6%
子どもに問いかけるなどして、自分たちの活動や遊びの面白さについて言葉にしたり、さらに意欲的になったりするように話している。	2.4%	1.8%	7.1%	10.1%
子どもが関心を持って見たり触ったりしているとき、納得いくまでやり遂げられるようにしている。	13.6%	12.3%	8.1%	1.8%
子どもの知識や興味・関心を広げる経験ができるような場所を訪れたり、地域の様々な訪問者を招いたりする等、本物に出会う機会を計画的に設けている。	0.6%	0.0%	2.0%	5.3%
遊びや生活の中で、子どもが興味を持って、身近な自然や数量・図形、科学に関わる体験ができるように働きかけている。(例:落ち葉や木の実、種を集めるとき、数や形、大きさ、重さ、色等を比べるように促す;おやつするとき、コップをいくつ用意するかを尋ねる)	1.8%	2.8%	3.6%	5.3%
子どもが戸外で見られる様々な自然現象について不思議に思ったり尋ねたりする姿を認め、それを一緒に不思議がったり他の子どもに伝えたりしている。	3.3%	4.0%	8.7%	11.0%
保護者に子どもが関心を持っている活動を紹介する等して、保護者も協力して参加できるように促している。	13.6%	12.3%	7.9%	5.3%
N	338	397	496	228

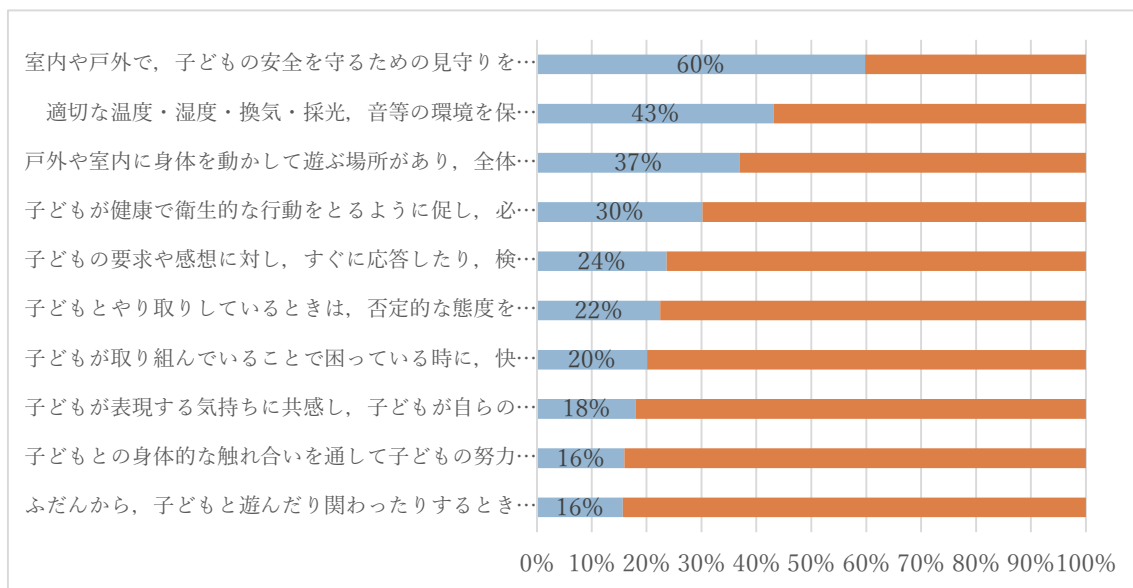


図 39 0 歳児の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと思うもの
(5 つまで、10 位以内) (0 歳担当者 338 名)

項目内容

- ①室内や戸外で、子どもの安全を守るための見守りを行っている
- ②適度な温度・湿度・換気・採光、音等の環境を保ち、状況に応じて配慮している
- ③戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体的に安全である
- ④子どもが健康で衛生的な行動をとるよう促し、必要に応じて声をかけて援助する
- ⑤子どもの要求や感想に対し、すぐに応答したり、検討したりしている
- ⑥子どもとやり取りしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやり取りにならないよう
に、前向きで積極的な姿勢を保とうと努力している
- ⑦子どもが取り組んでいることで困っている時に、快く手を差し伸べたり、支えたりしている
- ⑧子どもが表現する気持ちに共感し、子どもが自らの感情にうまく対応できるよう援助してい
る
- ⑨子どもとの身体的な触れ合いを通して子どもの努力を褒めたり慰めたりする
- ⑩ふだんから、子どもと遊んだり関わったりするときには、歌を歌ったり言葉遊びをしたりしてい
る

0 歳児担当では、10 位のうち 4 位までは「安全・衛生」に関わる項目が選択され、次いで「子どもに対する応答性」が 4 項目、その他に「他者との間の調整に関する援助」と「言語的活動やコミュニケーションの援助」が含まれた。

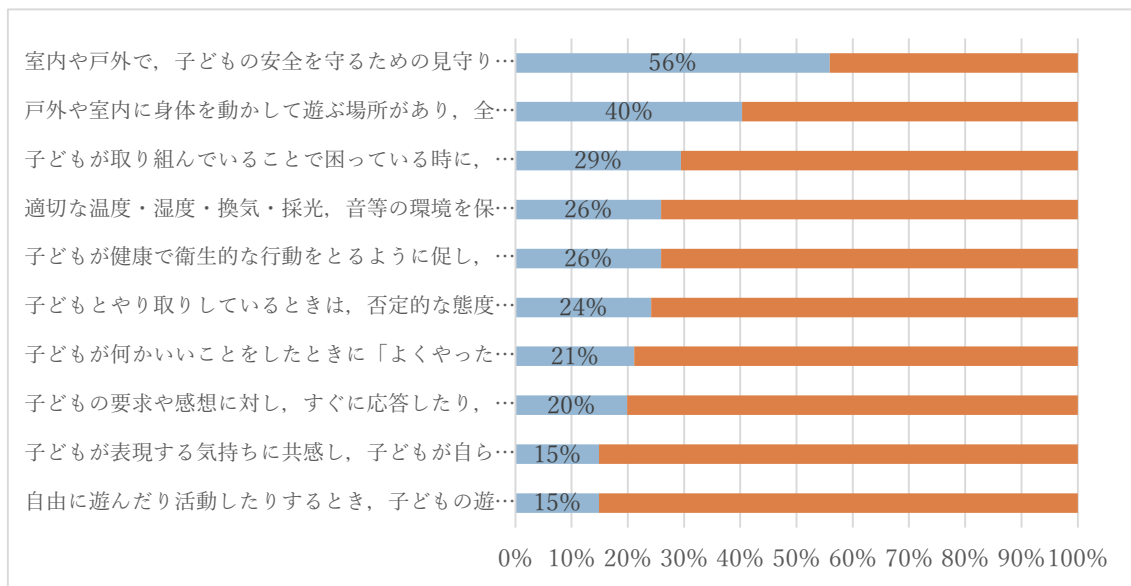


図 40 1 歳児の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと思うもの
(5 つまで、10 位以内)(1 歳担当者 397 名)

項目内容

- ①室内や戸外で、子どもの安全を守るための見守りを行っている
- ②戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体的に安全である
- ③子どもが取り組んでいることで困っている時に、快く手を差し伸べたり、支えたりしている
- ④適度な温度・湿度・換気・採光、音等の環境を保ち、状況に応じて配慮している
- ⑤子どもが健康で衛生的な行動をとるよう促し、必要に応じて声をかけて援助する
- ⑥子どもとやり取りしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやり取りにならないよう
に、前向きで積極的な姿勢を保とうと努力している
- ⑦子どもが何かいいことをしたときに「よくやったね」「がんばったね」などと言ってほめる
- ⑧子どもの要求や感想に対し、すぐに応答したり、検討したりしている
- ⑨子どもが表現する気持ちに共感し、子どもが自らの感情にうまく対応できるよう援助してい
る
- ⑩自由に遊んだり活動したりするとき、子どもの遊びを見守っており、子どもの主体的な遊び
が行われるよう、必要な介入にとどめている

1 歳児担当でも、10 位までに「安全・衛生」に関わる項目 4 つが選択され、次いで「子どもに対する応答性」が 4 項目、その他に「他者との間の調整に関する援助」と「遊びの援助・環境構成」が含まれた。

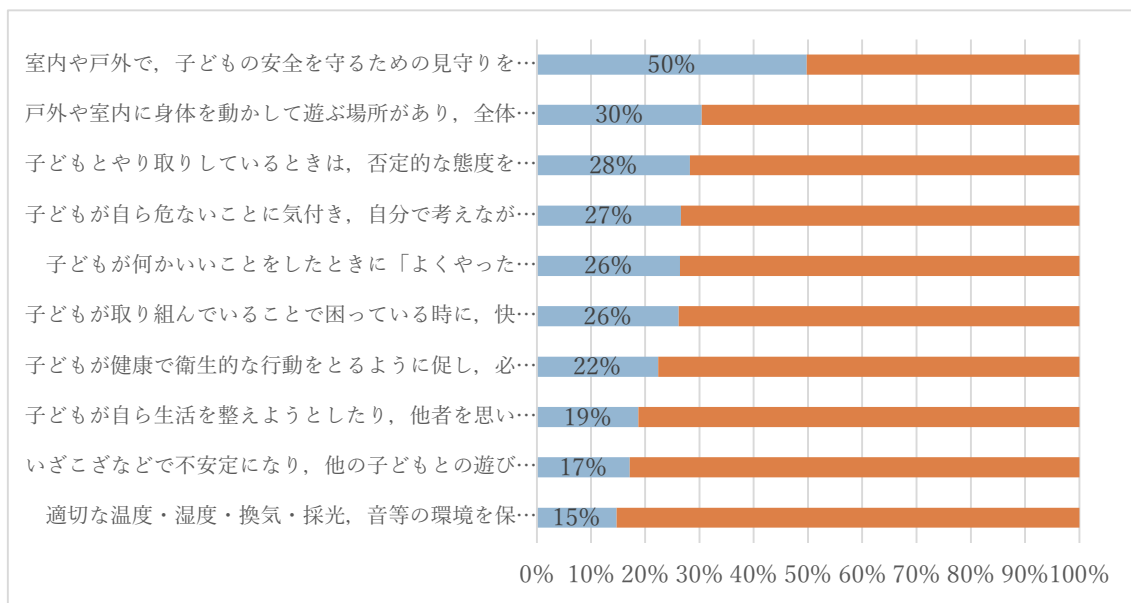


図 4-1 2 歳児の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと思うもの
(5 つまで、10 位以内) (2 歳担当者 496 名)

項目内容

- ① 室内や戸外で、子どもの安全を守るための見守りを行なっている。
- ② 戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体的に安全である。
- ③ 子どもとやり取りしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやり取りにならないように、前向きで積極的な姿勢を保とうと努力している。
- ④ 子どもが自ら危ないことに気付き、自分で考えながら安全に遊べるように、援助したり環境を整えたりしている。
- ⑤ 子どもが何かいいことをしたときに「よくやったね」「がんばったね」などと言ってほめる。
- ⑥ 子どもが取り組んでいることで困っている時に、快く手を差し伸べたり、支えたりしている。
- ⑦ 子どもが健康で衛生的な行動をとるように促し、必要に応じて声をかけて援助する。
- ⑧ 子どもが自ら生活を整えようとしたり、他者を思いやる姿が見られたとき、認めたり喜びの言葉を伝えたりしている。
- ⑨ いざこざなどで不安定になり、他の子どもとの遊びがうまく進まない場合、子どもが保育者の援助を求めやすいようにしたり、互いの思いを言葉にすることを手伝ったりして保育者に支えられながらそれぞれの思いが表現できるよう配慮している。
- ⑩ 適切な温度・湿度・換気・採光、音等の環境を保ち、状況に応じて配慮している。

2 歳児担当では、10 位までに「安全・衛生」に関わる項目 5 つが選択され、0、1 歳児では選択率の低かった「子どもが自ら危ないことに気付き、自分で考えながら安全に遊べるように、援助したり環境を整えたりしている」が 4 番目に多く選択された。「子どもに対する応答性」は引き続き 3 項目選択され、その他は「他者との間の調整に関する援助」が 2 項目含まれた。

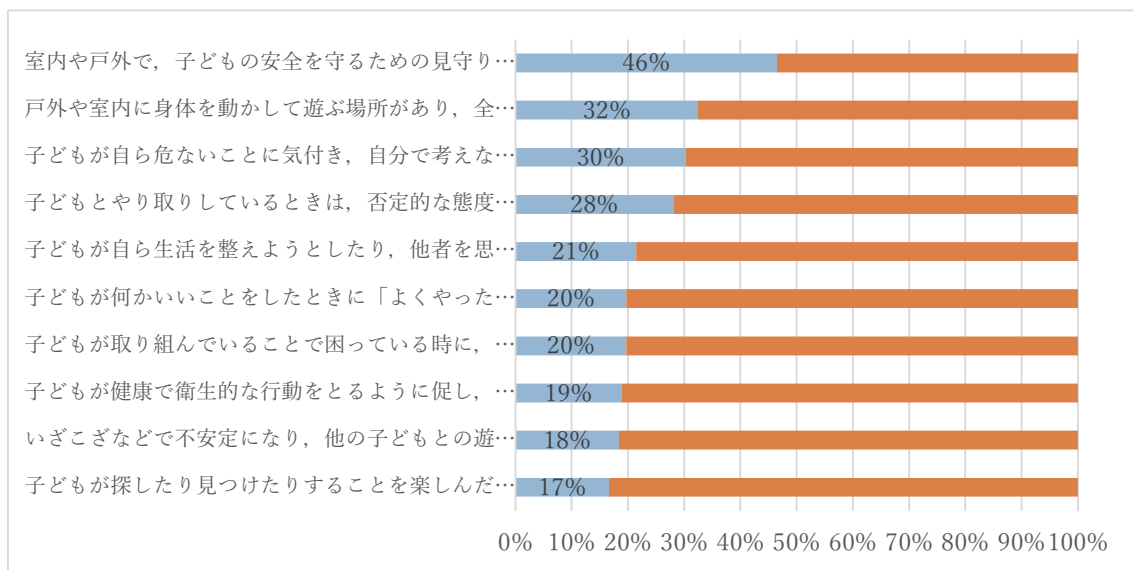


図 42 満3歳児の保育で積極的に行っているもののうち、特に重要だと思うもの
(5 つまで、10 位以内) (満3歳担当者 228 名)

項目内容

- ①室内や戸外で、子どもの安全を守るための見守りを行っている
- ②戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体的に安全である。
- ③子どもが自ら危ないことに気付き、自分で考えながら安全に遊べるように、援助したり環境を整えたりしている。
- ④子どもとやり取りしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやり取りにならないように、前向きで積極的な姿勢を保とうと努力している。
- ⑤子どもが自ら生活を整えようとしたり、他者を思いやる姿が見られたとき、認めたり喜びの言葉を伝えたりしている。
- ⑥子どもが何かいいことをしたときに「よくやったね」「がんばったね」などと言ってほめる。
- ⑦子どもが取り組んでいることで困っている時に、快く手を差し伸べたり、支えたりしている。
- ⑧子どもが健康で衛生的な行動をとるように促し、必要に応じて声をかけて援助する。
- ⑨いざこざなどで不安定になり、他の子どもとの遊びがうまく進まない場合、子どもが保育者の援助を求めやすいようにしたり、互いの思いを言葉にすることを手伝ったりして保育者に支えられながらそれぞれの思いが表現できるよう配慮している。
- ⑩子どもが探したり見つけたりすることを楽しんだり、それをきっかけにして遊びが広がったりするように環境構成を工夫したり、子どもが発見したことや物を取り上げて周囲に伝えたりする等して、子どもの好奇心を支えている。

満3歳児担当でも、10位までに「安全・衛生」に関わる項目4つが選択され、2歳児で重視された「子どもが自ら危ないことに気付き、自分で考えながら安全に遊べるように、援助したり環境を

整えたりしている」が引き続き多く選択された。「子どもに対する応答性」3 項目,「他者との間の調整に関する援助」2 項目は引き続き選択され,新たに「遊びの援助・環境構成」から「子どもが探したり見つけたりすることを楽しんだり,それをきっかけにして遊びが広がったりするように環境構成を工夫したり,子どもが発見したことや物を取り上げて周囲に伝えたりする等して,子どもの好奇心を支えている」が含まれた。

Ⅲ. インタビュー調査について

1. インタビュー調査の目的

幼稚園等がこれまで培ってきた幼児教育の機能を地域にひらき、0～2歳児を受け入れている実態は多様であることから、特徴ある活動や取り組みの工夫を明らかにするため、インタビュー調査を行った。

2. インタビュー調査の方法

対象園は、全国私立幼稚園連合、全国国公立幼稚園・こども園長会より、各地域ブロックごとに0～2歳児（満3歳児クラスを含む）の保育・子育ての支援のモデル園を数園ずつ推薦してもらい、公立10園、私立27園、全37園にインタビューを行った。なお、地域ブロックを、北海道・東北、関東、中部、関西、中国、四国、九州とし、各地域で公立と私立とを対象園とできるように調整し、基本的に各園1名で訪問調査を行った。

インタビュー調査の際には、可能であれば、園の見学、撮影をさせていただいたのち、下記の内容について伺った。また指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料についても、あらかじめ依頼し、可能な範囲で収集した。

(1) 施設責任者インタビューの主な内容

①基本情報の確認

0～2歳児の保育・子育ての支援のクラス数（人数・規模）

実施内容、各クラスの特徴

非登録制／登録制（各回ごとの申込、通年での申し込みなど）

保護者同伴での活動／子ども預かり

保育時間、日数、曜日固定

保護者等への広報の具体的な把握（利用料金、申し込み予約方法、利用者、実施目的）等

②0～2歳児の保育が現在の形になるまでの経緯について、自治体等の制度、地域での役割、経済的基盤、担当者、カリキュラムなどを意識して伺った

今の保育を実施するようになったきっかけ、またその後のプロセス

③遊びと生活で0～2歳児で大切にしていること

幼児にどのような体験の機会が得られるとよいと考えるか

アンケート調査の予定項目で最後に削除となった以下の項目も参考にしながら伺った

- (1) 食事、排泄、衣服の着替えなどの基本的な生活習慣を身に付ける
- (2) 年長児や他の幼児が遊ぶ様子を見たりまねて遊んだりする
- (3) 同い年の子ども、あるいは年齢の近い子どもと遊ぶ
- (4) 地域の高齢者など、様々な人と関わる

- (5) 自然（草花，生き物，砂・土など）と触れ合う
- (6) 走ったり跳んだりして体を思い切り動かして遊ぶ
- (7) 絵本に触れる（読み聞かせ，幼児が絵本を読む等）
- (8) 歌を歌ったり楽器を鳴らしたりして遊ぶ
- (9) 絵をかいたり製作したりして遊ぶ
- (10) 季節の行事など（七夕，お月見，ひな祭りなど）を体験する
- (11) 泣いたりぐずったり，必要な時に，保育者から慰められ，サポートされる
- (12) 保育者と親密で温かい関係を築く
- (13) 友達と分け合うなど，良い行動が褒められたり促されたりする
- (14) 屋内で自由に探索できて安全に遊べる
- (15) メディア（スマホ等）ではない遊びを体験する
- (16) バランスの良い食事をする
- (17) ルールのある遊びを友達や保育者とする
- (18) 公園などに外出する
- (19) 戸外で自由な遊びや探索をする
- (20) 指先を使うような遊びをする（つかめるおもちゃ，手触りの楽しめるおもちゃ，パズル，ブロックなど）
- (21) 遊びや生活の中で数を数えたり大きさや量を比べたりする
- (22) 遊びや生活の中で言葉遊びやわらべうたなどを楽しむ
- (23) ふり，つもり，ごっこ遊びをする
- (24) 積み木やブロック等の構成遊びをする
- (25) 電車，車等のミニチュアで遊ぶ
- (26) 粘土，粉等の素材遊びをする
- (27) ボール等の用具を使う遊びをする
- (28) 様々な文化に触れること（様々なルーツを持つ友達や保育者と触れ合う）

④0～2歳児の保育・子育ての支援の運営へのニーズ（園・保護者・地域の視点から）
運営体制、組織マネジメントの工夫について「グッドプラクティス」から把握したいこと
担当者はどのように確保しているか

3歳児以上の保育・クラスとの関係性について

保育環境の利用方法（3歳以上の保育と共有しているところ等）

⑤0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

0～2歳の保育を受けている子どもたちの様子（3歳以降の保育に移行した後の様子も）

子どもたちにとって楽しい経験（学び）になっている事例：保育の中で手応えがあること

保護者はこの保育を我が子が受けることで変化しているか

保護者の学びも含めて子育て支援として意識して行なっていること

園組織全体でこの保育に取り組んだことによる変化

0～2 歳児の保育で難しさを感じていること、今後の課題・必要なこと

(2) 保育担当者インタビューの主な内容

①保育者視点からの0～2歳児の保育・子育ての支援

インタビューを受けてくださった保育担当者の保育歴（現在の担当になるまでの流れ・資格）

0～2歳の保育における保育内容や環境の工夫

環境設定（室内・園庭）：他の年齢との関係、一緒に使う機会、その場合の工夫

活動の概要（遊び、スケジュール）

工夫のありよう（保育を行う環境が、3 歳未満児専用の環境になっている・いない）

②子ども視点からの0～2歳児の保育・子育ての支援

グッドプラクティスの視点を意識し、子どもたちにとって楽しい経験（学び）になっている事例：保育の中で手応えがあること

対応させながら子どもたちと共に過ごしながら、難しいと感じている点も伺っておく

保育担当者の保育歴にもよりますが、3 歳以上を担当するときとの違いを具体的に

移行期については丁寧に伺う

通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）

この後の3 歳児クラスへの移行における計画、活動

③保護者視点0～2歳児の保育・子育ての支援

保育担当者から見えてくる保護者の姿、保護者の声で印象的だったこと

この保育に通うことで、親にとって新たな子どもの姿を学んだり、保育者の姿を見ることで子どもとの関わりを知ったりすることになっているか（親の学び、育ち）

保護者同士の関わりについて気づくこと

そのほか、保護者を意識して行なっていること

④保育者視点からの0～2歳児の保育のありよう

保育の記録、計画と振り返りをどのように行なっているか

園のなかで、3 歳以上の保育者と記録、計画などを共有する機会はあるか

園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性

園の中で0～2歳児保育に携わる手応えと困難さ

以上のインタビューに関しては、承諾を得て録音を行なった。好事例に取り上げる可能性のあるものについては、文字起こしも行なったが、基本的には、インタビュー担当者が必要な情報をまとめ、事例として以下に報告する。

3. インタビュー調査結果

今回のインタビュー調査から、幼稚園等における0～2歳児の受入れについて多様な状況が見えてきた。その多様性を活かすためには、何らかのかたちでまとめたかたちで報告するよりも、今回インタビューを行なった 37 園全ての概略を紹介することが相応しいと判断し、各園のインタビュー調査の概略を事例として報告することとする。

すべてのインタビュー調査について、ただ並べるのは読みにくいと判断し、その園での活動で受入れている一番低い年齢、さらには、その園での活動の特徴に基づいて簡単に分類を行い、以下のような順番で報告を行うこととする。

0 歳児から(12 園)

こども誰でも通園制度(仮称)の本格実施を見据えた試行的事業(1 園)

こども園で既存のクラスで受入れ(4 園)

一時保育・子どもだけでの受入れ(3 園)

0歳児は要相談(1 園)

親子で(3 園)

1 歳児から(11 園)

こども誰でも通園制度(仮称)の本格実施を見据えた試行的事業(1 園)

親子分離での受入れ(5 園)

親子での活動(5 園)

2 歳児から(14 園)

こども誰でも通園制度(仮称)の本格実施を見据えた試行的事業(2 園)

一時預かり事業(1 園)

親子分離での受入れ(4 園)

親子分離での受入れ:満 3 歳になると幼稚園の満3歳児クラスへ(3 園)

親子での活動(3 園)

こども園のクラスに預かり、子どもだけ受入れ、親子で(1 園)

また、今回のインタビューは、各園において、施設責任者と保育担当者に実施した。施設によっては、インタビューに応じてくださった保育担当者が、その園がすでにこども園として、0～2歳児の保育を日常のものとして受入れており、その0・1・2歳児担当者であることもあるが、幼稚園が0～2歳児を受け入れることをめぐるの貴重な視点が含まれているため、報告に加えている。

【0歳児からの受入れ】

0歳児を実際に受入れている園については次の12園となっている。

こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業

1_九州地方：公立こども園

こども園で既存のクラスで受入れ

2_北陸地方：私立認定こども園

3_北陸地方：公立認定こども園

4_北海道・東北地方：公立幼保連携型認定こども園

5_東海地方：公立認定こども園

一時保育・子どもだけの受入れ

6_近畿地方：公立認定こども園

7_近畿地方：公立認定こども園

8_関東地方：幼稚園型認定こども園

0歳児は要相談（保育者数の関係）

9_中国地方：公立認定こども園

部屋はあるが、不安な時くらいで、多くは、既存クラスで過ごしている

親子で

10_近畿地方：私立幼稚園

11_中部地方：私立幼稚園

12_中国地方：私立幼稚園

1歳7ヶ月からは親子分離

こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業の事例は、従来が公立保育所であったところがこども園となり、0～2歳児の保育を日常としているところで、新たに受入れの体制を整えている例であった。制度上は0歳児から実施しているが、今のところ0歳児利用がみられないとのことで、こちらに掲載をしている。

こども園で既存のクラスで受入れている場合とした事例は、0～2歳児の受入れの専用の部屋がある場合も多いものの、通常のこども園のクラスの人数が少ないことから、共に過ごしている事例が多い様子が見えた。

一時保育で受入れている場合もあった。この場合、利用の日時等を決めている場合も多い。

さらに、幼稚園等での特徴を活かしているといえる親子での登園の機会について、日時を決めて0歳児から行い、その後、子どもだけのクラスを行なっている場合も見られた。

地域の状況によっては、既存のクラスの子どもが少なく、毎日登園する場合ではなくとも、既存のクラスの環境で過ごすことも見られることが特徴である。特に、乳児の受入れには、環境的に、こども園での調乳室などの設備が必要となることから、そのような環境がある必要からも、0歳児からの

受入れ事例はこども園が中心となっていた。

九州地方：公立こども園（定員 87 名）子育て支援センター併設、一時預かり事業

【園長】

1. 基本情報

○「こども誰でも通園制度」のモデル事業

- ・ 対象月齢：生後 6 ヶ月～2 歳まで
- ・ 利用定員：44 名程度、登録制
- ・ 開催日と時間：月・火／木・金、9 時～12 時／14 時～17 時 毎週同じ曜日、同じ時間帯で定期的に利用する。一月 1 回 3 時間以内、10 時間の範囲内で利用

曜日	9：00～12：00	定員	14：00～17：00	定員	合計
月	0 歳児	4 人	0 歳児	4 人	8 人
火	1 歳児	6 人	1 歳児	6 人	12 人
木	1 歳児	6 人	0 歳児	4 人	10 人
金	2 歳児	7 人	1 歳児	6 人	13 人

〔例〕0 歳 A さん：毎週月曜日午前利用 1W2 時間、2W2 時間、3W3 時間、4W3 時間

- ・ 月額料金：利用者の費用負担は無償
- ・ 親子分離：親子で登園し、担当保育士と丁寧な申し送りをする。朝夕の時間に徐々に保護者が困り感を表出できるようになり、育児相談を受け応える時間にもなっている。
- ・ 保育担当者・人数・資格：保育士資格保有者 2 人（1 人は行政との兼務）
- ・ 専用保育室：専用保育室があり、こども園、支援センター、一時預かり等の部屋にも行き来し、子どもたちとも交流する。
- ・ 園庭：専用保育室と同じ階にある屋根付きの広いテラスで遊ぶこともある。
- ・ 昼食・おやつ：なし（保護者との話し合いで持参してもらうことは可能）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

市として試験的に 8 月に開始した事業であり、担当保育士は、行政指導主事と兼務の方が配置保育士 2 人中 1 人配置されている。今年度中は、現場と行政を往還しながら（毎週水曜日は本庁に勤務）、次年度に向けた実績報告づくりをする中で保育・教育計画等のたたき台を作成していく。今年度を踏まえて次年度より作成予定。保護者への広報としては、ホームページへの掲載やチラシを作成して行なっている。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

公立保育所として昭和時代から開所してきた保育所から、公立幼稚園・保育所のこども園化の市の方針の下、認定こども園として、0 歳児～4 歳児の受け入れを行なっている園である。令和 8 年度より本格実施を見据え「こども誰でも通園制度」のモデル事業として今年 8 月より開始した事業である。保育施設等を月一定時間利用できる。モデル事業として国の保育対策総合支援事業補助金 3/4 補助を活用し、補助基準上一人当たり月 10 時間を上限として保育を行

なう。保育者の殆どが、乳児の保育に精通している人的環境がある。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

今回の事業は、月10時間を上限とするという、これまでにない保育の形態であるが、保育所時代から一時保育事業を行ってきた歴史もあり、できる限りこどもたちと短時間で信頼関係を築くことを基本に、①保育士の適正配置、②保育士歴が十分にある保育士が複数いて連携が細やかにとれること、等を大切にしていた。

園長は、心から保育士を信頼して任せていることが、園運営の基本であると常に意識して日々の園生活を創っている。その姿勢が、園全体の人（子ども・保護者も含めて）への信頼感につながる。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

運営体制、組織マネジメントは、行政が中心になりモデル事業として取り組んでいる。

保育現場の具体的実践内容や課題を週刻みで振り返り記録を残す循環を、行政マンであり保育士の一人が兼務という形で配置されている。公立保育士歴何十年という園長や同僚からの気づきを含めながら、制度における課題の抽出も行えている。

保育士の確保を必須にし、特に保護者に安心感を与えることができる0～2歳児保育の経験が豊富な人材を担当に配置している。

市では、待機児童にカウントされていない数の0～2歳児がこれだけ多く存在するのだということを目の当たりにした。現場は、子育て応援DAYや試食会等々、様々な取り組みを行ないニーズに対応した歴史を重ねてきたが、現在、保育士不足という新たな大きな課題に直面している

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

本園は、前掲もしたが、0～2歳児の保育に関しては、入所児童はもちろん、一時預かり保育、子育て支援センターも同時に行ってきた経緯があり、誰でも通園制度の事業という制度上の枠以外では、園全体の職員の親子を受け入れる心得は保育の場に浸透していた。

週1回の1日3時間という限定的な子どもとのかかわりから、どのような保育が可能であり、子どもの育ちの保障ができるのかという視点からの不安があったが、「遊び」の内容に特化した環境構成・創造、援助・配慮等を行なうことに集中できたからか、こどもの落ち着き、保護者の反応等が予想以上に早く、深く、短期間で慣れていった。

それには、一時預かり事業、子育て支援センター事業を園舎2階の同フロアで実施していることも大きかったようである。保護者が、この3事業の違いを質問したり、交流の実態を見たり、そこに経験豊富な保育士等がコメントをしたりという環境が、より安心感を強めたと思われる。

九州地方：公立こども園（定員 87 名）子育て支援センター併設、一時預かり事業

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

幼稚園教諭免許状・保育士資格を保有し、N市の正規職員として採用される。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

乳児保育に特化できること、特に3時間の遊びの環境として、手作り遊具・玩具を数多く設置していた。一人一人の遊びが充実する環境設定を大切にしていることが見て取れた。その遊びの環境の充実からか、この時期のこどもが、短時間保育の中でこれだけ早く園や保育士に慣れ親しんでいくのかと驚く効果があった。その背景には、保護者も熱心にこどものことを尋ねる、困り感を表出できる関係がつくられたことがあった（受入れ、降園の際のやり取りと保育者間の連携の密度）。

(3) 保育の計画と振り返り

日々、保育室の環境を0～2歳児の遊びの充実を念頭に設定し、一人一人の満足が得られる援助・配慮を話し合い対応した。そのような日々の計画・実践・振り返りを積み重ねている段階である。毎週水曜日には、担当保育者の一人が行政職に戻り、1週間の振り返りをしている。今年度の記録を基に次年度以降の保育の計画を年間から組み立てていく予定である。

(4) 園の中での自分の役割：3歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

初めての制度導入のモデル事業段階であり、2人の保育者は、「誰でも通園制度」事業の保育と子どもたちに特化した役割となっている。

(5) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

保育所から移行のこども園であることから、0～2歳児の受入れは、これまでと変わらない日常である。ただ、週に1度の利用でも、こどもの育ち、親御さんとの密度濃いコミュニケーション等、手応えのある充実したものが得られるのだと実感できる取り組みになっている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

保護者と保育士等の信頼関係が密に行われていることからか、こどもが安定することが早く、楽しみにしているという声も聞こえていた。「3時間遊びに行くところ」というメリハリが、こども自身にも園がどのような場所であるというイメージをもちやすかったのだろうと思う。入園しているこどもの同時期よりも発達が早いように感じる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス(親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて)

3 歳児クラスへの移行

しばらく一緒に過ごしてもらったり、保育室の様子を見てもらったり、無理なく徐々に園での時間に慣れていってもらった。週に1度の登園であるが、ほとんど親子分離の難しさを感じなかった。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

保護者も、我が子を主観的に観ることが主だった日々から、専門職の目で観てもらい、その都度コメントやアドバイスをいただけるという機会ができ、子育てに安心感が増えている様子であった。また、同フロアで実施されている、一時預かり事業、子育て支援センターでのこどもや保育の様子、様々な親子と交わるなどの体験と交流は、親育ちへの環境として非常に効果的なものであると感じている。

北陸地方：私立認定こども園（定員 185 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・ 特別なクラスはなく、既存のクラス：[0歳児]1クラス 10名、[1歳児]2クラス 12名、10名、[2歳児]2クラス 20名、19名に入っていく。
- ・ 対象：生後7ヶ月から就学前の子ども（登録制）
- ・ 定員：各クラス最大1名程度の受入れ。保育者の配置状況で受入は2-3名と変動する。
- ・ 開催日・時間：月から金までの1週間、午前4時から1日のどちらかで受入れている（最大週3日）。1ヶ月単位で日程調整。通常の保育内容の中で対応。
- ・ 月額料金：4時間以内_1,000円/回、4時間を超える_2,000円/回
- ・ 親子分離：親子で登園するが、保育室内に保護者は入らない。
- ・ 保育担当者・人数・資格：教頭が受付、担任が保育を持つ。状況によって教頭やフリーの保育士が担当する。保育士資格・幼稚園教諭免許
- ・ 専用保育室：なし。既存のクラスに入っていく。
- ・ 園庭：3-5歳児も使用する園庭。危険な場所には衝立を置くなどの工夫をしながら0-2歳児が遊ぶ。時期に応じて異年齢での関わりも大切にする。
- ・ 昼食あり：上記の受入時間に応じて
- ・ A広場（園開放） 対象：7ヶ月から未就園の乳幼児と保護者
定員：20組程度 開催日・時間：月3,4回、10:00~11:30（無料）
親子同伴：親子の遊び、クラスでの遊び、親子ヨガ（外部講師による）の内容。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

指導資料 … 年間計画、月案（通常クラスは他に個別計画を作成する。一時預かり児のためのカリキュラムは作成していない）。

広報資料 … 園ホームページ/市の広報誌（一時預かり）/市のカレンダー掲載（園開放）

3. 0～2歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

今の受入れを実施するようになったきっかけ、その後のプロセス

- ・ これまでは3歳以上児が対象だったが、入園年齢緩和特区ができたことで当初5～10名の2歳児を受入れる。平成23年度に幼保連携型認定こども園になり、0～2歳児も受入れられるようになった。未満児保育を始めたきっかけは保護者からの要望であった。平成27年度に新制度の認定こども園になる。当初は、未満児の保育に不安を感じる保育者がいたため、事前に複数人の保育士が保育園の保育に参加するなどの研修に出たり、公立で経験のある保育者に来てもらったりし、次第に園独自のやり方を追求していくようになった。0～2歳児は情緒の安定と居場所の確保を大切にして、一歩踏み出せる環境を大切にする今の保育スタイルになった。
- ・ 園開放、一時預かりを始めたのは認定こども園になってから取り組み始めたが、導入当初の利用者は少なかった。コロナ禍も同様であったが、コロナ明けには利用者が増えた。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・ 園では一人一人の子どもを丁寧に見るとともに、利用する親子が安心して居られる・預けられることを大切にしている。特に、園でできることは、その子の興味関心、意欲を見取

りながら、子どもが今何を大切にしたいかに寄り添うように保育者に伝えている。そのために、子どもと共に環境を作っていくことを大切にしている。

- ・生活のリズムができることで自己発揮につながるので、家庭と共に子どもを見ることを大切にしている。例えば、「早寝・早起き・朝ごはん」など保護者と連携している。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・運営は公定価格の中から捻出ができており、園職員で取り組める範囲で行っている。当初は100円の利用料を徴収。気楽な利用をねらいにしてから利用料なし・おやつなしに。
- ・育児相談、ベビーマッサージ教室、離乳食相談など気軽に来られる場を作っている。
- ・低年齢児から園に預けたいというニーズが増えた。農村部地域にあるが、県全体で共働きの多いことも関係していると思われる。隣の市からも預けに来ている。
- ・保育者の数も当初から一時預かりを想定して配置している。3歳児でも時々利用者がいるので、そこも補填していける配置（どこの年齢でも対応できる保育者）を設けている。
- ・担当保育は教頭が主になって担当し、クラス担任が補助する体制になっている。
- ・情報発信は園のHPもあるが、LINE登録者にも発信している。園開放などは保護者同士での情報交換の機会にもなっている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

【保護者】

- ・利用する保護者のリフレッシュになっていると感じている。また、園に預けることで客観的に我が子を見ることができたり、保育者から伝えられて安心したりする様子も見られている。保育者への何気ない相談が有効に機能していると感じている。
- 例）子どもとの関わり方でiPadに頼るのではなく、子どもとの話し方も含めて、保育者の様子から理解してもらおう機会にもなっている。
- ・一時預かりの利用が子ども・保護者の安心感・居場所づくりにつながっている。

【子ども】

- ・園ではサーキットなど広いところで遊ぶ経験を大切にしており、必然的に運動量が増えている。また、同年齢の子どもがその場で遊ぶ姿を見るだけでも刺激になっている。人との関わりを形成していることがわかる。
- ・離れられない子どもも居れば、場慣れしている子どももいるので、その見極めが課題。特に、子どもが週1回の短時間（4時間）など慣れない子どもにどのように対応していけば良いのかは、保育者も悩んでいるところであり難しさでもある。

【保育者・園】

- ・自分のクラスだけではなく、新しい子どもが来た時にどう遊ばば良いのかを問い直すことができる。子ども一人一人を見るという保育者の専門性を問い、相互に学び合うことが進んでいる手応えもあれば、園全体に広げられていないところもあるのが課題。
- ・心配性な保護者には子どもの成長、子どもの良さ、良いところを見つけられるようにしたり、どうやって子どもと遊ばば良いかのヒントを与えられたりできるようにしている。
- ・一時預かりのための研修はしていないが、普段の研修（外部・学年・クラスの振り返り）を活かしてつなげるようにしている。また、在園児は個人記録があるが、一時預かり児の個人記録はなく、保護者に返す手紙には一文書いて伝えるようにしている。

北陸地方：私立認定こども園（定員 185 名）、園庭開放あり

【保育担当者（2 名）】

I. 保育者視点

（1）保育担当者の保育歴

A 保育士 3-5 歳児担任を 20 年ほど経験した後、0-2 歳児主任を経験。昨年から教頭職を務めている。子育て支援担当は 6 年ほど。園開放と一時預かりの窓口

B 保育士 3-5 歳児担任を 20 年ほど経験した後、1 歳児クラスの担任を 2 年経験。今年から 0-2 歳児の主任職を務めている。0-2 歳児の保育と一時預かりを担当。

（2）保育内容や環境の工夫・活動の概要

子どもは月齢に応じたクラスに入る。一時預かりに限らず、遊びや生活の場をコーナー分けした安心できる環境づくりをしている。集団が苦手な子どもは別室に行ったり、人数の少ないクラスに入ったり、園内を回ったりすることで安心できる場を探している。保育室環境においても、発達段階に応じた教材を揃え配置している。

・環境設定（屋内・園庭）異年齢との関係、一緒に使う機会

安心・安全が第一で遊べるような観点を大事にしている。年度当初は学年別で遊び、園生活に慣れてきたら 0-1 歳児、1-2 歳児ごとに遊ぶなどの異年齢交流をしている。園庭で遊ぶ場合は、3-5 歳児も使用する園庭なので、危険な場所には衝立を置くなどの工夫をしている。園開放の子どもがいる場合でも、一緒に遊ぶようにしている。

ホールは共有スペースで、基本的に 11 時前が未満児、11 時以降を以上児が使用するなど生活の流れで区切っている。異年齢で遊ぶ場合は、空間を区切りながら遊びの内容に応じて分けるなどの工夫をしている。ホールの場合の異年齢は未満児のみ。

・活動の概要（遊び、スケジュール）

家庭での生活リズム・個々のリズムに極力合わせて食事や睡眠をしている。2 歳児では 1 学期では個々に応じた対応・関わりをし、2 学期後半からは小集団からクラス全体に向かえるようにしている。カリキュラムはそれぞれの年齢のものを使用している。

・工夫のありよう（保育を行う環境への配慮）

空き部屋が一つあり、なかなか馴染めない子がいる場合、その部屋を安心できる空間にしている。部屋がつながっているため、クラスの雰囲気や外の様子も感じられるような環境にもなっている。共用スペースにテラスがあり、園庭に出なくても外を感じられる空間にもなっている。

（3）保育の計画と振り返り

一時預かり用の記録はない。保護者にはその日の出来事は連絡帳で伝える。保育者間では振り返りや共有は、1 日終わった後に本日の姿と次に向けての展開についての連絡や情報共有をしている。特に未満児保育では子どもの様子に応じてカリキュラムを無理強いせずに担任や担当が連携しながら進めるようにしている。園開放では毎回日案を立てている。月 4 回利用がある時は、行事・ふれあい遊びなどバランスよく入れている。担当者会議での振り返りと次の計画を立てる場も設けている。

（4）園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

3 歳以上の保育者との共有は 3 学期の振り返りの際に実施している。育ちの流れをつ

なげていきたいので、日々の共有はやりたいけれど正直あまりない。自分たちの役割は、未満児と以上児をつなげることにある、そこを意識している。

(5) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

短い時間かつ時々しか来ない子どもをどのように受け入れてあげることがより良いのか、が常に悩みである。在園児の場合は長いスパンの中で子どもの興味を探ることができるが、対象児は短い時間の中で探ることが難しい場合が多い。半日等短時間の場合、安心できるように努めるが、慣れるのに時間がかかる子どももいて、泣いて帰すこともある。子どもの満足度に応えられているか、これで良いのか、は常に問うている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

安心でき視野が広がった時に、心が動く瞬間や「やってみたい、楽しい」瞬間が見られる。家庭ではなく、園という同年齢の社会の中で一歩踏み出した時にその子の世界が広がると感じ、その一つ一つが楽しい経験や学びになっていると考えている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

0-2歳児は1対1の対応を求めていると感じることが多く、安心感を得られるようにスキンシップを大切にしている。3歳児での受入れは量は多くないが、集団に早くになじめる子どもが多い。担当者がいなくても生活が成り立つことが多いので、担任と連携しながら情報共有をしながら対応をしている。保護者から離れる時には、その子の様子を意識して受入れをしている。また、日中の生活は慣れたとしても、食事スタイルや午睡のタイミングはそれぞれ異なるので、食事や午睡になると泣いてしまう子どももいるため、子どもの様子に合わせて保護者と受入れる時間を相談している。子どもにとっても保護者にとっても無理のない時間で預かりをしている。3歳児クラスへの移行では、個から集団に移っていく時期であるので「小さな集団が楽しい」とか、誰かが本を読んでいたら「そこに集まって楽しい」など、集団を見越して生活できるようにしている。未満児間では1,2歳のトイレの移行などトイレトレーニングも始まるが、個々の発達に合わせて進めるように意識している。3歳児保育への移行も3学期から実施。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

保護者の用事で預ける場合は、園に預けることに不安を感じる方もいる。引渡しの際に子どもの様子を伝え、「集団の中でもできるんだ」と驚きの声が聴かれる。継続的に一時預かりを利用している場合は、集団での育ちを感じた保護者の方もいた。園は子どもにとっての刺激の場になっている様子が全体的に見られている。保護者同士が相談し合うなどつながりが生まれる機会にもなっている。

(2) 保護者を意識して行っていること

利用の際に電話など直接申込むことに抵抗がある保護者もいるので、ネットで直接申し込みできるようにしている。日々の中では利用の際に積極的に話をするなどコミュニケーションをとるようにしている。保護者同士の関わりが生まれるように、保育者がつなげることもある。意識してはいないが、保育者の日々の関わりを見て、子どもへの関わりや子どもの気持ちの見取りを保護者が学ぶ機会になっていた。

北陸地方：公立認定こども園（定員 150 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

公立は 4 園のみ。特別なクラスはなく、既存のクラス：[0 歳児] 1 クラス 12 名(担任 4 名)、[1 歳児] 1 クラス 20 名(担任 4 名)、[2 歳児] 1 クラス 17 名(担任 3 名)に入る。

- ・ 対象：就学前までの子ども（定員はないが副園長やクラスの人数に応じて受入れをする）
- ・ 開催日・時間：週 3 日まで通常保育時間での利用。事前登録は不要、申込みは都度受付。
- ・ 月額料金：1 時間 300 円、17 時以降 400 円
- ・ 親子分離：親子で登園するが、保育室内に保護者は入らない。
- ・ 保育担当者・人数・資格：基本的に副園長 1 名が受入れを担当。保育士資格・幼稚園教諭免許
- ・ 専用保育室：なし。既存のクラスに入っていく。
- ・ 園庭：未満児が使用する園庭。人数に応じて密を避けて使用。時期に応じて異年齢（0-2）での関わりも大切にする。
- ・ 昼食あり：上記の受入時間に応じて

A クラブ（未満児園庭開放）

- ・ 対象：妊娠中から未就園児まで
- ・ 開催日・時間：第 1・第 3 木曜日の 9 時半から 11 時（無料）
- ・ 親子登園：親子で遊戯室・園庭で遊ぶ
- ・ 保育担当者・人数・資格：副園長が担当。保育士資格（内容により外部講師）
- ・ 専用保育室：なし。主に遊戯室を使用。園庭は密を避けて使用。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

指導資料 … 年間計画、月案（通常クラスは他に個別計画を作成する。一時預かり児のためのカリキュラムは作成していない）。

広報資料 … 市の広報誌/市のカレンダー掲載/地域情報誌

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

今の受入れを実施するようになったきっかけ、その後のプロセス

- ・ 「B 制度」という妊婦から登録可能な制度で午前中半日だけ無料で園を利用できる C 県独自の制度がある。一時預かりと併用が可能になっている（午前：B 制度、午後：一時預かり）。一時預かりに関して、利用希望者が多数になった場合は、本当に必要な方に優先的に受け入れる。未就園児の対応に関しては、私立園で対応できないところを公立園がカバーすることもある。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ 日々、利用児には安心して過ごせるよう受容的な関わりを意識しながらを丁寧に関わることを大切にしている。次第に笑顔が増えたり、つながりが生まれてくると、安心して遊べるようになるため、家庭と異なる場（園）で安心して過ごせるようになっていくこと意識している。
- ・ 担当保育者との関係が形成された先に個別の人間関係・信頼関係、安心感を作っていくので、子どもの気持ちを受け止めながら、抱っこがいいのか、おんぶがいいのか、近づ

かず離れずの距離がいいのかななどを模索している。食事や午睡などいつもの生活リズムはなるべく壊さないように、ということを考えている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・入園希望者は多いが未満児は定員を満たしており、当園ではお断りをしなければいけない状況。外国籍の子どもや地域外からくる子どももいる。また、時間延長を希望される家庭があり、最長 19 時から 20 時まで引き延ばした。このような対応はこの地域の公立園では本園だけである。共働きで3世帯家族は少なくなってきたり、祖父母のお迎えは少なくなっている。年度当初には未就園児として一時預かりを利用し、年度後半には入園する子ども・家庭も多い地域であることが特徴の一つでもある。
- ・近年、この地域では2歳児の未就園児はほぼいない。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

【保護者】

- ・手のかかる子どもに関しては、一時預かりを利用することに躊躇する保護者がたまにいます。保育の場・保育者だからこそ見えることもあるため、多様な子どものニーズを抱えている保護者への積極的な介入に取り組んでいる。園開放の利用を提案してもらいながら話を聞く機会、例えば、自身の育児での困ったことや不安だったことなども交えて話す機会を設けることで関係作りに努めている。保護者同士の関係もまた大切にしている。子育て経験を有する保護者が他の保護者に声を掛け合ってくれるなど、横のつながりが出てくることはとても望ましく感じている。また、園でもこの関係性が出てくるように保護者に働きかけている。色々なやりとりが横のつながりのなかで生まれることで、話せて安心できるようなきっかけ作りは大切にしている。
- ・すでに入園している家庭が多く、2歳児での新規・継続利用はほとんどないため、2歳児での手応えはあまりない。

【子ども】

- ・初めて園に来るため集団に慣れていない子どもが多い。個別の部屋がないので、担当である副園長らが丁寧に受入れし、園や集団に少しずつ慣れていく中で安心して過ごせるようにしている。個々の特性や特徴などに配慮して一緒に過ごしている。友達と一緒に過ごすだけでなく、笑顔で楽しく過ごせるか、ちゃんと食べられるかなど、園への安心感を大切にしている。その子の状況に応じて、保育室の外に出ると気分転換になるので、天気が良かったら戸外に出ることもある。
- ・一時預かりの保育室がないため、普段の保育で一時預かり利用児が安心できない状況の時には場所に困る時がある。また、一時預かり利用児が不安になることで、連鎖的に在園児も不安になることがあるので、職員間で連携を取るなど工夫が必要だと感じている。

【保育者・園】

- ・現状は物理的空間が十分ではないなかで工夫しながら取り組んでいる。例えば、落ち着ける場所を活用するなど、居場所の保障は職員同士でも引き続き考えていく必要がある。また、職員の配置にも課題がある。担当の副園長はクラス担任の休み時にはクラスに入る必要がある。預かりの専任がいるわけではない。今後は職員や空き部屋の確保が課題であり、令和8年度に施設老朽化に伴う改修が入るため、今後の検討事項。

北陸地方：公立認定こども園（定員 150 名）、園庭開放あり

【担当保育者（1 名）】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

31 年目。副園長は二人おり、それぞれ「未満児担当、以上児担当」に分かれ、未満児担当が「一時預かり、子育て支援」を主で担当している。「一時預かり」は二人の副園長が一緒に担当。「子育て支援」は未満児担当の副園長が主に担当。職員の異動もあるが、基本的には一年間はずえずに取り組んでいる。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

一時預かり児は副園長が受入れをするなど、人的環境は大事なので担当を変えないように工夫している。子どもの安定度に応じて、個別対応かクラスの子どもたちと過ごすかが決まる。過ごす場所は、保育室、集団に不安を感じたら、ホール、遊戯場、園庭に出るなど、個別での関わりを大切にしている。利用児が安定している状態であれば保育者同士が声をかけ合い、一緒に活動するようにしている。物理的環境は、未満児保育室には裏庭があるため、担任間で連携を取りながら動きを決めている。

(3) 環境設定（屋内・園庭）異年齢との関係、一緒に使う機会

以上児園庭は 3・4・5 歳児が全て出ている時は利用しないが、1 学年の場合は出る時もある。ただし、時期は運動会など運動遊びをする時期に思い切り体を動かせるように、またその時の子どもの様子を気かけながら実施するなどの配慮をしている。担当である副園長は色々なクラスの保育に入るので、副園長が各クラスをつなぐこともある。日々の活動や取組みの中での異年齢交流を大切にしており、他の学年の子どもも合流、色々な垣根をこえて実践している。

(4) 活動の概要（遊び、スケジュール）・工夫のありよう（保育を行う環境への配慮）

家庭での生活リズムや個々のリズムに合わせて生活を組んでいる。また、利用児の月齢に合わせておもちゃ、絵本を保育室では用意する。また、遊戯場を利用する場合は滑り台、伝え歩きができるような環境設定を意識している。スケジュールは利用児と同じ年齢の在園児のカリキュラムやスケジュールを利用している。また、園開放では時期に応じて保護者がリフレッシュできるような制作遊びを子どもとしたり、保護者のみのヨガ教室を設けたり、話ができる機会を設けている。

(5) 保育の計画と振り返り

「未満児会」と「以上児会」に分けて振り返りをしている。また、リーダーの全体会もある。研修の時間は短くしたり昼研修をしたり色々な保育者が参加できたりする方法を日々模索している。研修の中で一時預かりのことを議題に挙げることは特にないが、各年齢の保育活動や異年齢の取組みに一時預かり児が入って良いかを確認しあっている。一年の計画を立てる際は前年度の引き継ぎを丁寧にしながら、保護者や子どものニーズ、状況を共有している。ただし、前年度踏襲ではなく、マンネリ化はしないように変えていくべきところを見定めながら担当同士で話し合っている。特に、年度末には移行を意識して保育室やトイレの活用などの取り組みを実施している。

(6) 園の中での自分の役割：3歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

本園では遊戯場の活用が重要になっていて各クラスの調整役が自分の役割の一つになっている。遊戯場の空間活用は各クラスでも大切にしているが、子育て支援も園の大事な機能の一つとして遊戯場の活用をしていることから、理解してもらえるよう伝えつつ、予定の調整をしている。計画の共有は朝の朝礼に行っている。それ以外の全体計画に関しては、未満児と以上児の記録や計画の共有に努めている。

(7) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

公立園は他園で未就園児を受入れられない場合に、利用者を積極的に受入れていることには手応えを感じている。特に、子育てに不安を感じている保護者の安心感や子どもの園という場への安心感にもつながっていることを実感している。ただし、地域の未就園家庭を把握するといった情報の網羅は十分でない。転勤や引越し等が多い地域であるため、情報収集が課題になっている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

何回か利用している子どもは、入園するときに園児や保育者の顔を覚えていることがあるので、安心して園生活をスタートできている。また、園は一時預かりの子どもにとって刺激の場になっている。母子関係も大事だが、園で関わる子ども同士のつながりができるのは楽しい経験にも繋がっている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

言葉での「大丈夫」は伝わらないので、距離を感じないような雰囲気作りを心がけている。子どもの安定・安心を第一に考えてはいるものの、生活の安心、排泄、世話など、一人ひとりに対する丁寧な関わりを意識しながら対応している。3歳児への移行に関しては、2歳児の一時預かり利用者が近年いないため、一時預かりに関する移行はない。移行段階については、保育者同士での引き継ぎを丁寧に取り組んでいる。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

一時預かり保育を利用することで、保護者は子どもの言葉の増加や歩行の違いなど、一人一人の育ちに向かうスピードの違いを感じる機会になっている。また、一時預かりを利用することで保護者の気持ちが楽になるように関わっている。子どもが笑顔だと保護者も園生活に安心してくれる。保護者が安心しながら子どもの成長を感じてもらえたらと願っている。また、園での食事の様子を見てもらったり、離乳食の紹介などをして保護者にも一緒に食べてもらったりもしている。

(2) 保護者を意識して行っていること

一時預かり担当と担任が子どもの情報を引き継ぎしやすいため、保護者への引渡しの際には丁寧に子どもの姿が伝えられている。ただし、保護者同士をつなぐ際には介入が必要か否かを見極める配慮もまた大事だと感じている。一時預かり利用者だけでなく、子育て支援などで来園される保護者にも声をかけて、気持ちを察したり、やり取りや語り合いの機会を大切にしたりしている。

【園長】

Ⅰ. 基本情報

（１）地域のなかでの園の状況

- ・町内は大きく２地区に分かれる。このうちＡ地区内にあった二つの町立保育所が令和２年に統合され、翌年４月から認定こども園に移行。
- ・人口減少が進んでおり、現在、在籍児は定員を満たしていない。子どもの数が少なく、また共働き世帯がほとんどであるため、未就園児の一時預かりは対象児童自体が極めて少ない。

（２）未就園児の一時預かり

- ・対象月齢：おおむね生後２か月より。
- ・定員：特になし。各クラス人数に余裕があるため、随時希望があれば年齢に応じたクラスで受入れ、在籍児と合同で保育を行っている。登録制。
- ・日数・時間：１か月１４日以内。7:30～18:30。
- ・料金：町外在住の場合、１日あたり１,500円。町内在住の場合、３歳以上児は０円（全額免除）、３歳未満児は750円（半額免除）。
- ・親子分離：親子で登園し、預かり開始後は分離。
- ・保育担当者・人数・資格：各クラス担任。後述の園開放はフリーの保育士が担当。それぞれのサポート、保護者対応等には主幹保育教諭が関わっている。いずれも幼稚園教諭免許・保育士資格の両方を所有している。
- ・専用保育室：専用の保育室はあるが、在籍児と同じ保育室を用いることが多い。
- ・園庭：在籍児と同様に利用。
- ・昼食：あり。
- ・今年（2024年）の一時預かり利用は０歳児１名。来月（2025年１月）にもう１名０歳児の利用予定がある。いずれも保護者の育休からの職場復帰準備のため。一時預かり利用の多くが同様の理由で、仕事を再開したらそのまま３号認定となり入園してくるケースが大半。以前は里帰り出産での利用もあったが、町内では医療体制が十分でないため、里帰り出産自体が減ってきている。
- ・地域子育て支援として、毎週木曜日に園開放をしている。町の保健師が、家庭訪問や乳幼児健診などの際に、保護者に声をかけてくれている。利用を希望する保護者がいると、園に保健師から連絡が入る。
- ・園開放に来て親子で一緒に過ごし、実際に園と子どもの様子を見てもらってから一時預かりの利用となることが多い。園開放の際に保護者と話すことで、事前の面談にもなっている。一時預かりの利用にあたっては、事前に申し込みをしてもらっている。１か月前に、次の月の利用希望日を町で規定された用紙に記入し教育委員会に提出という手続き。
- ・実際の利用日、利用時間は家庭によって異なる。定期利用ではなく、必要なときに、月数回程度というケースが多い。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・全体的な計画、教育課程、年間・月間指導計画。このほか週日案がある。
- ・記録は個別に作成しているが、計画については在園児のものと分けていない。
- ・保護者向けの広報資料は特に作成していない。町の子育て支援情報一覧に掲載。

3. 0～2歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・統合以前より、各保育所で0歳児から保育をしていた。一時預かりも統合・移行前から実施していたので、そのまま引き継いだ形。統合・移行にあたり大きく変えたところはない。
- ・園開放については、統合前は実施しておらず、認定こども園になってから開始した。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・保育者と子どもの信頼関係を大事にすることを意識している。「子どもたちの自己肯定感を伸ばすこと」をテーマに、園内で実践研究にとりくんでいる。
- ・安心、安全に遊べるのが前提。手でにぎって楽しめるような手づくりの玩具などを用意している。園内研修で互いに自作の玩具を持ち寄って遊び方やねらい、特徴や配慮・工夫したことを話し合う機会をもつなどして、発達に即した遊びの環境を工夫している。
- ・散歩や体験学習の受入れ等を通じて、子どもたちが地域のなかで中学生や高齢者など様々な世代の人たちと交流できるようにしている。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・体制としては現状特に不足はしていない。
- ・一時預かりの場合もアレルギーへの配慮等は事前に確認するようにしているが、現在は特に何らかの配慮や対応を必要とする子どもはいない。
- ・一時預かりの子どもが3歳児クラスに1号で入園してくることはない。皆、持ち上がりで3歳児クラスになるので、2歳児クラスの年度の後半で移行を意識した援助を行っている。
- ・0～2歳児の計画、記録は個別に作成している。
- ・園内研修は全体で実施しており、各クラスの状況は全職員が把握できている。
- ・一時預かり、園開放以外に町の事業として外部講師による子育て講座を開催（音楽療法や読み聞かせなど）。講師選定など企画は園で担い、保育参観の日にあわせて開催している。
- ・園児数が少ないなかでも、保護者の求めてくることは多岐にわたる。個々の家庭のニーズに応えることの難しさを感じる。また、子どもたちは中学まではほぼ同じ集団で過ごすので、個人情報の扱いや親同士の関係、子ども同士の関係には気を遣う。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・子どもも保育者もお互いによくわかっているのが、のびのびと過ごしている。
- ・地域住民との交流のなかで、子どもたちには人と関わる力が身についていると感じる。
一時預かりの子どもも、タイミングがあれば在園児と同じ経験を一緒にしている。
- ・離乳食についてなど、保護者からの相談にも応じている。
- ・保護者への周知は今まで保健師に委ねる部分が大きかったが、園としての発信も考えたい。

北海道・東北地方：公立幼保連携型認定こども園（定員 80 名）、園庭開放あり

【保育担当者：主幹保育教諭（一時預かりのサポート）】

1. 保育者視点

（1）保育担当者の保育歴

- ・29 年目。地元出身（当時は町村合併前）で新卒として就職し、町内の園で異動しながら継続して勤務してきた。現在の園には統合前から勤務。現職位は 4 年目。
- ・現在職員は全員保育士資格・幼稚園教諭免許を取得している。

（2）保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・一時預かりの利用はほとんど 0 歳児で月齢も低い子どものため、保護者から離されて不安定になることはあまりない。保護者からあらかじめ生活リズムなどを聞き、眠っているときは在園児と別で寝かせるなど、担任のフォローに入り柔軟に対応する。
- ・子どもたちの活動に応じて、在園児と同じ保育室内のスペースを子どもにあわせて区切ったり、少し離れたときには多目的スペースを活用したりしている。別の年齢のクラスに連れていって、そこにいさせてもらうこともある。
- ・一時預かり利用の保護者も、上の子どもが在園児という場合がほとんどであるため、園の様子はよくわかっている。子どもについての情報は月 1 回の職員会議で共有している（13 時半～15 時）。各クラス担任 2 名のうち 1 名が参加。
- ・一時預かりの子どもがいると、在園児も先生のそばに行ったり近くに寄って行ったりと 0 歳児なりに気がついて興味を持っている様子もみられる。1 対 1 ということもあり子ども同士のトラブルはほぼない。
- ・園の統合当初は 3 歳未満児クラス担任で打ち合わせを行っていたが、職員間の連携がスムーズになってきたので、現在は全体での職員会議や連絡ノートで共有している。未満児クラス間での情報共有は未満児の主任（0 歳児担任の一人）が中心になって行っている。
- ・クラスの垣根をこえた保育を念頭に、園庭・屋内の同じ場所で各クラスの子どもたちが一緒に遊ぶ場面は多い。それぞれの発達に即して子どもたちが安全に遊べるよう、遊戯室は活動に応じて時間を分けるなど、保育者同士で声をかけあい、臨機応変に対応している。
- ・一日のおおまかな流れ：登園後、全クラス合同で自由遊び→園児・職員がそろったところに各クラスに分かれ、今日は何をやるかなど話してから自由遊び→昼食・午睡→バス降園の子どもたちは 15：40 出発。

（3）保育の計画と振り返り

- ・各クラスの計画は PC で全てのクラスの担任が見られるようになっており、お互いの様子は日ごろからよく把握できている。統合当初は各園のこれまでのやり方などがあり互いに手探り状態だったが、職員全体ですり合わせをしながら今の形に落ち着いてきた。
- ・日々の振り返りは、週日案を記載する際に担任同士で行っている。月や期の振り返りも指導計画を作成する際に担任同士で行い、大切なことは職員会議でも共有している。
- ・3 月の職員会議や園内研修で 1 年を通じての全体の振り返りを行い、そこで出てきた内容をふまえて次年度の実践研究のテーマを検討している。

（4）園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・子どもが少なく、また園の方針として様々な年齢の子どもが同じ場所で遊ぶことも多いた

め、3歳以上児クラスの担任も低年齢児の子どもの遊ぶ姿を日常的に見ており、職員同士で子どものことで気がついたことを話す機会が多い。

- ・3歳未満児、以上児に関わらず全体で職員間の同僚性が培われてきており、お互いの様子や子どもの姿はよく共有されている。

(5) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

- ・子どもが少ないので、一対一で関わるができるため、あまり困ることはない。
- ・園での子どもの遊びや生活の様子について、お迎えのときに保護者から聞かれたり、園から伝えたりしている。そこで保護者が「こんな遊びがあるんですね」「うちの子はこういうのが好きなんですね」など関心をもって来て、それが「うちでもやってみます」と家庭での遊びにつながることもある。
- ・保護者からの「助かった」という声に手ごたえを感じる。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・絵本の読み聞かせに力を入れている。絵本を通して子どもたちから言葉や表情を豊かに引き出すことを心がけている。
- ・発達に応じて子どもたちの好きな絵本の紹介や絵本に対する子どもたちの反応などは、ドキュメンテーションなどを通じて保護者にも伝えている。
- ・保育者が子どもたちにあわせた本を地域の図書館に通うなどして探している。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・0歳児での利用が多く、2歳までにほとんどの子どもが入所するため、一人ひとりの状態に応じて丁寧に関わることができる。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・日ごろ家では見られないような、園でできていることや子どもの様子を聴くことで、「こんなことができるようになってきているのか」など子どもの個性や発達についての気づきが得られる。
- ・人数が少ないため、一時預かりや園開放で保護者同士が接する機会はほとんどない。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・ドキュメンテーション、園だより、連絡帳などを用いた情報共有。
- ・面談は年2回。希望制だが例年8割くらいの保護者が希望する。

東海地方：公立認定こども園（定員 115 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・対象月齢：0～6 歳児（1・2 歳児の利用が多い）
- ・定員：1 日の利用者 6 名まで（1 か月～3 日前まで予約可）、登録制
- ・開催日・時間：平日 8：30～16：30、土曜 8：30～12：30
- ・料金：一人日額 1,500 円（生活保護世帯（支援給付受給世帯）は無料）
- ・親子分離：子育て支援を主目的とし、保護者のニーズに応じた預かりを行っている。
- ・保育担当者・人数・資格：2 名（会計年度職員、フルタイム）0・1 歳児担当と 2 歳児担当をそれぞれ担当。保育士資格および幼稚園教諭二種免許を所有。
- ・利用日数：1 か月につき 14 日以内（ほとんど毎日くる子どももいる）
- ・専用保育室：あり。ただし基本的には在園児のクラスで過ごしており、専用の部屋は個別対応が必要なときや保護者と話をする際に用いている。
- ・園庭：在園児と同様に使用
- ・昼食：あり
- ・備考：1・2 歳児が多く、育休明けで入園ができなかった方や 3 歳児入園までのつなぎで利用されるケースが多い。以上児は障害のあるお子さんのレスパイト利用があり、その後入園予定とのこと。利用する保護者は多様で支援が必要なケースが多く、そうした家庭をいかに市の支援につなげていくかという場の一つとしても一時預かり事業が位置づいている。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・計画：在園児の各クラスの指導計画に準ずる。
基本的にその年齢のクラスの中で一緒に生活・活動を行っている。
- ・広報資料：『子育てガイドブック』（市によるガイドブック、母子手帳交付時に配布）
定期健診や市の職員によるおむつの配布事業等、機会ごとに周知している。
家庭に応じて、園開放、一時預かり、保健師のどこに誘うとよいかを検討し案内している。
保健師とも連携し、支援が必要だと思われる場合には一時預かり事業につなぐこともある。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・平成 7 年、市の方針で市内の公立保育園 4 園のうち 1 園が一時預かり事業を開始する。
- ・その後、公立保育園 4 園すべてが実施開始。（うち 2 園は民間移譲。民間移譲にあたり 10 年は実施する条件となっていたが、10 年経ち 1 園はとりやめ）
- ・現在、市内では、公立保育園（こども園）2 園、私立保育園 1 園、私立幼稚園 1 園が一時預かりを実施している。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・1 日安心して楽しく園で過ごせること。
- ・子どもの発達保障よりも保護者支援を目的にしている。

- ・よく言うのは「一時預かりのお子さんだから無理しないで」。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当者：市が職員を確保・配置。
- ・以前は常勤で予算要求をしていたが人が集まらなかった。現在は会計年度職員で7時間、その間は子どもにしっかり向き合って保育に注力してもらうということ人で確保している状況であり、保育時間外の業務は極力減らしている。
- ・一時預かり事業をうまく活用し、子どもにとっては在園児と同様の経験の保障を、在園児のクラスにとっては担任＋一時預かり担当保育者で、配置基準プラス1名の人員配置を実現している（在園児のクラスも担任は正規1名＋会計年度職員2名であり、全体的に正規職員は不足）。市の方針により、担当保育者と専用の部屋が配置されているため、必要に応じて一時預かりのお子さんへの個別のかかわりや保育も行えるようになっているが、ほとんどは頻繁に一時預かりを利用して園に来て慣れている子どもが多く、クラスで過ごすことが多いとのこと。参観した際もクラスの中でどの子が一時預かりかわからないほど落ち着いて楽しそうに過ごしていた。
- ・記録：日誌（利用者名や活動内容など簡単な記録）
- ・計画：在園児の計画に準ずる
- ・研修：会計年度職員のため保育時間外の時間は確保しにくい、在園児担当・一時預かり担当で同様の研修を行っている。近年はオンライン研修を利用し、子どもの発達や子育て支援、虐待への対応に関する研修を受講している。
- ・地域における役割、ニーズ：子育て支援としての園の役割を意識されている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・月に数回から14回いろいろなおさんが利用されるが、大好きな先生と一緒に園の生活に入り、その中で片付けや順番、先生のお話を聞くということも経験している。なによりも親以外の大人が安心できる存在だということを知ってもらっていることが一番の手応え。
- ・保護者には子どもと少し離れリフレッシュして迎え入れることのできる機会になっている。
- ・保護者支援の具体例：「家ですごく子どもを怒っちゃう」と言うお母さんに、自我が芽生えて自分が主人公である時期と発達について説明。園での育ちも伝え、「怒るのは悪いことじゃない、でも今日は園でこんないい姿があったから家でほめてあげてね」と伝え、涙を流される。
- ・課題：今年度入園した子どもの親の声「（入園するまで）怖くて外に出られなかった」
親の情報をどこでだれがキャッチして支援につなげるかが市全体の課題。こども誰でも通園制度等いろいろな施策が出てきているが、制度を選ぶ親が子どものための選択をし、親子を市が支援していく形をいかにつくるか、どの支援を充実させるのがよいのかを検討するのが市の課題。

東海地方：公立認定こども園（定員 115 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・私立幼稚園で 3 年勤めた後、市の会計年度職員として一時預かり、担任補助、子育て支援センター等を担当。保育歴は約 20 年。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・在園児の担任の計画に基づいて保育を行っている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・在園児の担任の計画に基づいて保育を行っている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・在園児の担任の計画に基づいて、担任補助の一人としての役割も担っている。
- ・在園児の担任との連携はしっかりとれており、安心感をもって保育できている。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・一時預かり・在園児問わず、親子の分離や生活（排泄・食事）に対する援助には難しさを感じるとのこと。一時預かりのお子さんについては特に、無理のない範囲で行うことを意識している。
- ・手ごたえを感じる時は、園に慣れてきて、一時預かり担当から離れてクラス担任やクラスの子どもと過ごせるようになってきたとき。3 歳児クラスへの移行も見据えて、園そのものが安心できる場所になっていくよう、慣れてくると少しずつ距離を引いて、いろいろな大人や友達の中にいられるようにかかわっている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・在園児と同様の経験ができています。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス、3 歳児クラスへの移行

- ・通い始めについては、不安な気持ちを受け止めつつ、明るく保護者の方を送り出し、その後は子どもの姿に応じて個別にゆったりかかわっている。在園児の部屋とは別に一時預かり専用の部屋があり、落ち着いて過ごせる場がある。
- ・3 歳児クラスへの移行については前述。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・現在は、特に2歳児が3歳児入園を見据えて排泄の自立を家庭でも意識して取り組まれているため、園での様子もていねいに共有している。その際、園での姿は時々利用する慣れない場所での姿であることも含めて話をしている。
- ・送り迎えの時間はバラバラであるため、保護者同士が会うことはほぼない。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・子どもがうれしそうに帰ってきたり、園で歌った歌や遊びを家でも話したりしていることを喜ばれているとのこと。一時預かりのご家庭にも連絡帳があり、そこでもやりとりをしている。

近畿地方：公立認定こども園（定員 140 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

（1）一時保育

- ・市の中心部にある公立の認定こども園。一時保育（一時預かり事業）は公立保育所 5 園、公立こども園 2 園で実施しておりそのうちの一園。
- ・対象月齢：未就園児
- ・定員：毎日 10 人程度が利用、非登録制（毎回申し込み）だが、前月 25 日から予約も可能。
※定員は固定ではなく、申し込んできた 0-2 歳児の年齢によって異なる。0 歳児だと保育者の人数が必要なので。
※毎日子どもを保育所に預けたくないが就労のために週 3 回利用の人、出産のために集中利用の人、病院に行く人など。リフレッシュの人も増えている。
※申し込み理由によって、利用できる回数が変わる。（リフレッシュであれば月 2 回、就労であれば週 3 日以内、出産は産前 6 週に 1 8 日以内、産後 8 週に 2 4 日以内、傷病であれば月 1 2 日以内）
- ・開催日・時間：月曜日から金曜日 8：30-16：30（希望があれば土曜日 8：30-13：00）（幼稚園型一時預かり事業は、月曜日から金曜日の保育時間の延長、希望があれば土曜日もあり）
- ・料金：1 回 1,900 円（給食とおやつを含む）（お昼寝布団は持参）
- ・親子分離：0-2 歳の一時保育は子どものみ預かりで、園庭開放は、保護者同伴の活動。
- ・保育担当者・人数・資格：基本 2 名（保育士資格）だが、利用時の人数によって増える。
- ・専用保育室：あり（部屋の中に手洗い場と 2 歳児クラスと共用のトイレがある。）
- ・園庭：保育室から直接出ることができる。
- ・昼食：あり、おやつあり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・スケジュールは、通園児のスケジュールとほぼ同じだが、一緒に活動しているわけではない。外遊びが一緒になると遊ぶこともある。（午前中は外遊び、給食、午睡、おやつ、お部屋での遊び）
- ・全体的な計画を参考にしているが、利用児の年齢や利用頻度が違うため、あらかじめの計画を立てることが難しい。しかし、利用児の記録をつけているため、それに沿って個別に計画をして活動している。SIDS のチェックを午睡時には行っている。
- ・保護者への広報は、市のホームページを通じて行っている。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・いくつかの幼稚園と保育所が統合・移転し、小学校のプールの跡地に新しい認定こども園になって 5 年目である。緊急預かり→就労→リフレッシュ といった流れで現在の一時保育を行うことになったようである。現在は、未就園児を持つ保護者の就労・疾病・出産・

看護・リフレッシュのために預かる事業。初年度から一時保育を実施している。利用者は4月が少なく、1年を通して利用件数が増えていく。2歳児のうち、3歳の誕生日がくると、他の幼稚園等に入園する人もいる。保育所に入園するつもりではなく、幼稚園に入園するまでの時間を過ごすために来ている人もいる。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・ 家庭では実施が難しい遊びを大切にしている。どろんこや水遊び（プール）、落ち葉の遊びなど。ままごとや電車、積み木のおもちゃなど。
- ・ 生活面では、友だちと一緒に給食を食べる経験など。これによって今まで食べていなかった物を食べることができるようになることもある。朝の活動をしっかりして、給食を食べて、お昼寝をぐっすりして、といった生活リズムが子どもたちについている。
- ・ また、生活リズムやトイレトレーニングなど、保護者の悩みによりそいつつ、子どもが身につけていくことを大切にしている。
- ・ 日常の遊びや生活のなかで落ち着いて過ごすことを大切に、行事などには積極的に参加していない。
- ・ 絵本の貸し出しも行っている。（園庭開放に来る人にも）

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 担当保育士は2人。それ以外にも、利用者の人数や子どもの年齢によって追加の保育士が必要な場合は、市の保育こども園課に登録されている保育士が当日来てくれる。担当保育士が休みの場合も、市登録の保育士が来てくれることもある。
- ・ 担当保育士は、ある程度の保育経験のある人を配置している。会計年度職員の場合も、常勤の保育士である。

6. 0～2歳児の受入れ・保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・ 保護者が子育てで悩んでいることを、子どもたちのかわいらしさや色々な成長の側面を伝えることで、保護者も安心する。保護者からは「こんな小さいころから砂遊びで楽しむことができるのですね」など、子どもの姿を前向きに再認識する声を聴くことができる。また、保護者からの育児の中での不安や質問に答えることもできる。お迎えの時など、保護者同士のかかわりができるのもよいと思う。0～2歳児の一時預かりは、こども園の資源を活用しての保育なので、通常の保育も充実していかなければと思う。保育士としては、一時預かりは、家庭とこども園の間にあるので、家庭での子どもの姿をより深く知ることができる。
- ・ 今後の課題としては、一時保育の情報が、家庭で育児に負担感がある人など、真に必要な人に届いているだろうか、と考える。一方で、現在の人数でも満員であり、これ以上、この園で一時保育の人数が増えることも無理があるようにも思うので、保育士の確保も含めて市全体で検討が必要なこともあろう。

近畿地方：公立認定こども園（定員 140 名）、園庭開放あり

【保育担当者 A・B】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

A:保育士経験 10 年・一時預かり 5 年目

B:保育士経験 15 年・一時預かり 8 か月 これまでは通所の 3 歳以上児も担任

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・生活の流れが子どもの中でつかめるように環境を構成する。
- ・0 歳から 2 歳児まで幅広い年齢の子どもと一緒に生活するので、安全への配慮。
- ・靴を履いて、テラスから出て外遊びをする。
- ・給食も異年齢で食べるので、給食の先生が「2 歳児用」「1 歳児用」「0 歳児のきざみ必要」「アレルギー」と書いてくれている。毎日違う子が来るので注意が必要。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・前日までに、担当者同士で当日登園予定の園児についての基本情報（アレルギーの有無など）を把握し、生活の見通しや遊びの計画を考える。振り返りは活動シートに記入し、記録用紙を保存していく。登園の期間が開くと継続的にできないことも多いので、一人ひとりの子どもの姿やお家の人とのやりとりで保育を考えていく。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・前日までに、担当者同士で当日登園予定の園児についての基本情報を共有

(5) 園の中で 0～2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・少ない登園回数の中でもできることが増えていること。興味がなかったことも楽しみはじめるなどの姿に手ごたえを感じる。
- ・利用頻度に違いがあるし、0・1・2 歳児の異年齢混合保育でもあるので発達が違う子どもたちの保育をすることに困難を感じる。家庭での生活リズムが違ったりすると子どもの朝の機嫌が左右されたりすることもある。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・異年齢で外遊びのときも、保育士が 2 人いるので活動の多いグループと、活動の少なめのグループのように分かれて遊ぶこともできる。
- ・天気の際は外遊びが多い。砂遊びやすべり台、製作、歌・手遊び、季節を感じる遊びなど。
- ・食べる経験。
- ・おうちの人以外の大人との関わり、友達同士の関わり（在園の 2 歳児さんが、時々ダンスの見本をしてくれるなどかわりもある。）

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・はじめは泣いているが、気持ちを切り替えたりして徐々に落ち着いてくる。
- ・少ない回数の中でもできることが増えるなど成長がみられる。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者にとって初めての子どもさんの場合などは特に「これでいいのかな」といった相談もある。
- ・家では食べない食材も、給食でよく食べている。
- ・園で遊んで帰るので夜は寝てくれてありがたいと保護者は言ってくれる。
- ・保護者同士は送迎時に楽しそうに話をして交流しているようである。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・困っていることを相談してくれたらと思う。

近畿地方：公立認定こども園（定員 100 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

（1）一時保育

- ・定員：一日 1 人から 3 人（平均週に 2 人程度） 各回申込（事前に電話や直接来園にて）
- ・対象月齢・料金：3 歳未満児 4 時間以内 2,000 円、4 時間を超える利用 2,500 円
（給食可能）
3 歳以上児 4 時間以内 1,800 円、4 時間を超える利用 2,300 円
（給食可能）
（生活保護世帯及びひとり親の非課税世帯 300 円）

- ・親子分離
- ・保育担当者・人数・資格：1 人か 2 人、保育教諭
- ・専用保育室：あり
- ・園庭：保育者と共に使用する
- ・昼食：4 時間を超える利用の場合は可能

（2）こども誰でも通園制度

- ・対象月齢：0 歳児から 2 歳児
- ・定員：一日 1 人から 3 人
- ・開催時間：午前（9：00－11：00）1・2 歳、
午後（13：00－15：00）0 歳 事前登録制 1 月 10 時間まで利用可能
- ・料金：1 時間あたり 300 円
- ・親子分離
- ・保育担当者・人数・資格：1 人か 2 人、保育士
- ・専用保育室：あり
- ・園庭：保育者と共に使用する
- ・昼食：なし

（3）子育て支援活動

- ・対象月齢：未就園児（と保護者）
- ・定員：5 組、予約制
- ・開催日・時間：年間 5 回 10 時－10 時 40 分
- ・料金：無料
- ・親子活動
- ・保育担当者・人数・資格：1 人か 2 人、保育士
- ・専用保育室：あり ・園庭：保育者と共に使用する
- ・昼食：なし

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・スケジュールは、来園児に合わせて実施。（室内遊びが中心で、2 歳児は午前中は外遊びもすることがある。給食、午睡、おやつ）
- ・利用児の年齢や利用頻度が違うため、あらかじめの計画を立てることが難しい。利用児

の記録をつけているため、それに沿って個別に計画をして活動している。

- ・ 保護者向け広報資料は、市のホームページやチラシ。

3. 0～2歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・ 一つの幼稚園と保育所が統合し、幼稚園だった場所に新しい認定こども園を平成27年に設立。市では一時保育は公立園で2園、こども誰でも通園は3園で実施している。
- ・ こども誰でも通園は来年度はこの園では実施予定はない。（市内の他園で実施予定）

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・ 子どもが安心して過ごすことを最も大切にしている。家での遊びのような普段の遊び。
- ・ 3～5歳児も在園児はいるので、外遊びや散歩の時に少しふれ合ったり行事などに参加したりして、大きい幼児の姿を見ることが出来る。それがよい刺激となって真似をしたりする。
- ・ 一時保育は1回から数回利用で定期的ではない人も多いが、こども誰でも通園は登録して繰り返し来るので、しだいに慣れてくる子どももいる。
- ・ 生活習慣については、毎日登園するわけではないので、それほどしてはいない。トイレの設備自体が通所の保育室のように保育室につながっていないので難しいところもある。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 1人か2人の担当保育者がその時の来園児に合わせて対応している。主任保育者、代替保育者、園長等。保育者の人数が少ないので、ホームページなどで調べて電話をしてくれるといった一時保育の希望があってもお断りすることもある。こども誰でも通園を来年度実施しなかったら、一時保育をもっと引き受けることができるかもしれない。
- ・ 一時保育用の記録用紙にその日の保育や子どもの姿を記録し、保育者同士で共有したり、次の回の計画に生かしたりする。
- ・ 地元の地域の人は主に親子登園の子育て支援活動に参加し、市内の他の地域の人が一時保育やこども誰でも通園を利用していることが多い。
- ・ こども誰でも通園は、午前（1・2歳）と午後（0歳）で年齢を分けないと、一緒に保育することは安全や発達の面からも難しい。

6. 0～2歳児の受入れ・保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・ 保護者は下の子を一時保育やこども誰でも通園に預けることで、上のきょうだいとの時間を作ることが出来る。しかし、2時間しかないので、かえって保護者は子どもが気になってしまう、といったこともあるようである。また子育ての方法や子どもへの言葉かけなどのアドバイスをすることもある。
- ・ お迎えの時など、保護者同士のかかわりができるのもよいと思う。
- ・ 異文化の家庭の子どもや、特別な支援が必要と思われる子どもを預かることもあり、幅広いニーズへの対応が求められている。
- ・ 今後の課題としては、一時保育の情報が、家庭で育児に負担感がある人など、真に必要な人へのアプローチの仕方などもさらに考える必要があると思う。しかし担当できる保育者の人数が少ないため、難しいところである。
- ・ こども誰でも通園は、利用する子どもは家庭での生活を大きく反映しているため（飲み物や使うコップなど）、家庭との連携方法をさらに考えている。

近畿地方：公立認定こども園（定員 100 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

- (1) 保育担当者の保育歴
15 年目。主任（この園では 2 年目）。
- (2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要
 - ・ その子どもの興味関心のあったおもちゃや遊び。0・1 歳はほとんどは室内遊び。
 - ・ 保育室が 2 階であるため、簡単に 1 階に下りることが難しく、安全を第一に考えている。
- (3) 保育の計画と振り返り
 - ・ 前日までに、担当者同士で当日登園予定の園児についての基本情報（アレルギーの有無など）を把握し、生活の見通しや遊びの計画を考える。
 - ・ 振り返りは活動シートに記入し、記録用紙を保存していく。
- (4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無
 - ・ 主任。担当者同士で記録用紙をもとに、登園予定の園児の基本情報を共有。
- (5) 園の中で 0～2 歳児保育に携わる手応えと困難さ
 - ・ 少ない登園回数の中で泣くことも多いが、安心して過ごすことができるようにしている。
 - ・ 一時保育は一对一の保育が多くじっくりかかわることができる。
 - ・ こども誰でも通園の方は、回数が進むうちに成長する姿を確認することもできる。
 - ・ 利用頻度に違いがあるし、保育者の人数が少ないことに困難さを感じる。

2. 子ども視点

- (1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例
 - ・ 2 歳児は製作やままごと、散歩など。人数が少ないので動きやすいこともある。
 - ・ 0・1 歳は音の出るボールなど。
 - ・ 保育室に慣れてきて行動範囲が広がってくる。
 - ・ 家でできないような行事にも参加している。（ハロウィンやクリスマス会など。）
- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3 歳児クラスへの移行
 - ・ はじめは泣いているが、徐々に落ち着いてくる。
 - ・ しかし、登園回数が少ない子どもや期間があく子どもは、登園のたびに泣くこともある。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
 - ・ 預ける時に子どもが泣いているので、保護者は別れにくい。保護者自身も落ち着かない

ようである。

- ・「駐車場で走り出してしまう」など子育ての中の悩みも保育者に話すことがある。保護者は保育者からアドバイスをもらって実践していることもある。
- ・保護者からこども誰でも通園に参加して「ありがとう」「かして」が言えるようになったという子どもの姿を教えてもらった。
- ・こども誰でも通園は、食べる時間がないので、保護者からの食べることについての相談はあまりない。
- ・保護者同士は送迎時に交流しているようである。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・タブレットを手放せないなど子育ての中で困っている様子を見たら、優しく分かりやすくアドバイスするようにしている。

関東地方：幼稚園型認定こども園（定員 120 名）園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) 一時預かり（一般型）

A コース（スポット利用）

- ・対象月齢：0 歳～入園前の乳幼児（0 歳児は要相談）
- ・定員：0・1 歳児 1 名、2 歳児 2 名
- ・開催日・時間：月～金曜日 9：00～16：00（0・1 歳児は 9：00～15：00）
- ・月額料金：0・1 歳児 700 円／時間 2 歳児 2,300 円／日
- ・親子分離：親子で登園して、教室内に保護者が立ち入るが、預かりの時間は不在。
- ・保育担当者・人数・資格：3 名・保育士
- ・専用保育室：子育て支援センター C くらぶ内にて受入れ。
- ・園庭：保育室の隣に小さな専用の園庭があり、外遊びができる。
- ・昼食：あり（おやつあり）
- ・申し込み方法：子育て支援センター C くらぶで利用説明を受け、利用日前日までに予約。

B コース（継続利用）

- ・対象月齢：未就園の 1・2 歳児
- ・定員：
- ・開催日・時間：週 2 日～週 5 日（月～金曜日）の希望日 9：00～14：30
- ・月額料金：2 歳児 1 歳児
- 週 2 日 22,950 円 24,950 円
- 週 3 日 28,400 円 30,400 円
- 週 4 日 33,850 円 35,850 円
- 週 5 日 38,300 円 41,300 円
- （保育料、施設利用料、材料・おやつ代、給食費合計額）
- ・親子分離：親子で登園して、教室内に保護者が立ち入るが、預かりの時間は不在。
- ・保育担当者・人数・資格：3 名・幼稚園教諭・保育士
- ・専用保育室：3 号認定の子どもといっしょの年齢グループに受入れて、同じ保育室を使う。
- ・園庭：保育室の隣に専用の園庭があり外遊びができる。
- ・昼食：あり（おやつあり）
- ・2 歳児は、満 3 歳になると 1 号認定（保育料無償）として入園可能になるため、満 3 歳になった段階で保護者の希望で 1 号認定児として入園している例が多い。

(2) こども誰でも通園制度

- ・対象月齢：1～満 3 歳児の未就園児（市内在住）
- ・定員：1 日 4 名
- ・開催日・時間：月～金曜日 9：00～15：00 5 時間／日を限度とする。
- ・月額料金：300 円／時間
- ・親子分離：親子で登園して、教室内に保護者が立ち入り、保護者も一緒に過ごす。
- ・保育担当者：人数・資格：3 名・幼稚園教諭・保育士
- ・専用保育室：子育て支援センター C くらぶ、子育てサポートセンター D くらぶ内にて受入れ。
- ・園庭：子育て支援センター C くらぶ、子育てサポートセンター D くらぶの園庭を使い、外遊びができる。
- ・昼食：なし（おやつあり）
- ・申し込み方法：子育て支援センター C くらぶで利用説明を受け、利用登録申請書を提出。
市から利用決定通知書を受領し、利用日前日までに予約する。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料：スポット利用は事前申込資料や記録（キッズビュー活用）をもとに計画する。
継続利用は、就園している 3 号認定の 1-2 歳児と同じカリキュラムで保育を実践。
- ・保護者向け広報資料：参加申し込みは子育て支援センター等で配布し、園に持ってきてもらう。活動や子どもの様子は、月間の園だよりで知らせる。

3. 0～2歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・1996年から認可外保育施設として2歳児の受入れをスタートし、現在の選択コース制の原型となった。2002年からは、市内の子育て支援センター事業を受託、2015年に認定こども園への移行に併せて小規模保育事業、一時預かり型、一時預かり幼稚園型、病児保育（体調不良児型）、放課後児童クラブを開始。2023年より企業主導型/一時預かり型、病児保育（体調不良児型）機能有のクラスを開始。2024年7月からは、こども誰でも通園制度（モデル事業）を受託し、現在に至る。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・キリスト教精神を基礎にしたアタッチメントの形成を掲げ、子どもの意志を尊重した「子ども主体の保育」を実践しながら、子どもの心を育てることを大切にしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ニーズ：虐待等家庭の問題、発達障害の増加、保護者の就労支援なども含め、地域で多様化する各家庭のニーズに応じたきめ細やかな子育て支援機能の必要性を感じている。
- ・運営体制：複数の制度を活用することで経費を確保し、できる限りきめ細やかな職員配置ができるように運用している。
- ・組織マネジメント：職員採用は法人全体で行い、人事配置は新年度開始前にそれぞれの部門（3歳以上児、未満児、学童、児発・放デイ）での担当者を決定する。職員数は常勤保育者30名（看護師2名、臨床発達士1名含）、非常勤（子育て支援員*資格含）50名である。その内、未満児部門：27名（常勤10名）、A&Bコース部門：3名（常勤2名）、C&Dくらぶ：3名（常勤3名）。したがって、3歳以上児担当者が0-2歳児の保育を担当することも、もちろんある。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・手応え：園を多機能化することで、地域の保育・幼児教育・子育て支援のセンターとしての役割を果たそうと努めており、少しずつだがニーズに応えられるようになってきたと感じている。保護者については、子育て支援の利用～一時預かり～満3歳児就園と、継続して通わせる選択者が増えてきた。子どもについては、0-2歳児の時期において、1対1に近いかわりを提供してアタッチメントの形成を図っていることが、結果として就園した3歳以上児の落ちつきなどにつながっているように感じている。0-2歳児から育ってきた子どもたちの姿を踏まえ、個々の子どもの興味関心やペースに応じた保育の重要性を感じ、園の3歳以上児保育も変え始めるなど、よい影響が及んでいる。
- ・課題：現在及びこれからの保育施設には、「就園していない0-2歳児の保育・子育て支援」に限らず多様な機能が求められ、一人ひとりの子どもの育ちの保障及び個々の家庭への支援のために保育者、子育て支援員の資質の向上及び職員間の情報の共有が必要である。保育者の専門性としてソーシャルワーカーのような知識や経験がますます重要になってくると考えており、県の子ども家庭ソーシャルワーク専門職研修を受講しながら保育者の専門性の向上に努めているが、研修や打合せの時間がまだまだ十分取れていない点が課題である。

関東地方：幼稚園型認定こども園（定員 120 名）園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・経験年数 35 年。3 歳以上児の担任を務めたのち、2 歳児クラスの設置段階で 2 歳児担当。現在は、以上児・未満児どちらも全体的に見ている。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・A コース（スポット利用）：子どもや家庭の事情に応じて柔軟に対応。水分補給が難しい子どもの場合などは、短時間で無理のない範囲で利用できるように配慮している。
- ・B コース（継続利用）：3 号認定の 1-2 歳児と同じ環境で同じ保育を実践している。「1-2 時間」の慣らし保育を 2 週間ほど行いながら、お散歩も含めて 3 号認定のクラスの子どもたちと一緒に活動する。開始当初は、週 1 回から選択できるように設定していたが、週 1 回の利用の場合は子どもが就園児の活動に加わり一緒に遊びに入るところまで慣れにくい実態があったため、最低週 2 回からの選択に切り替えた経緯がある。
- ・A コース・B コースに限らず、0-2 歳児の環境については、発達の状態や個々の遊びのペースがかなり異なるため、玩具等をできるだけ多くそろえ、子どもが自分のペースで好きな遊びを選んでしっかり遊べるよう工夫している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・記録：日々の記録は、就園児が活用しているキッズビューを同じように使って、午睡の時間等に保育担当者が個別の記録を作成している。
- ・計画：A コースは、個々の子どもの情報や記録をもとに柔軟に計画する。B コースは、3 号認定の就園児と同じ園の計画で受入れを行い、個別の計画も作成する。
- ・振り返り：キッズビュー（記録アプリ：学年ごとに担当者が見られる）の記録をもとに、前月の活動を振り返りながら、計画を考える時間を持つ。また、2 週間に 1 度記録をもとに担当者同士で話し合いをして子どもの様子を共有し、保育の計画を立てる。そのほか、担当・学年ごとのリーダーは 2 週間に 1 度集まって、会議を行う。また全園での全体会議も月 1 回行う。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・園全体で職員が還流するため、3 歳以上児担当者とも安定的に連携を図れる関係性にある。互いに自分が担当した子どものその後の様子や、活動の中で一緒に保育ができそうなところを話し合ったりすることもある。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・手応え：何より子育て支援機能の側面は大きいと感じる。働いていたりこれから働きたいと考えていたりするものの、子育ても両立してやりたいと考える保護者が増えている中、保護者が楽しい子育てをするためのサポートをできるだけ担いたいと考えている。子どもについては、子どもが心からやりたいことを保障するということは、3 歳未満児も 3 歳以上児も変わらないのだということを改めて理解することができ、0-1 歳児の受入れを積み重ねていくことが、結果的に 3 歳以上の子どもの育ちにつながることを、育ってきた子どもたちの姿を通じて実感している。0-2 歳児がいることで、3 歳以上児の担任が 0・1・2

歳からの育ちを理解して自分の学年を担当できるようになるなど、互いに影響しながら園全体で新しい保育が形成されていくと感じている。

- ・課題：子育てに悩む保護者が多く、悩みを言えない、言えなくて困るなどして、メンタルを病むまでに至るような保護者を含め、どのようにサポートしていくかを常に課題に感じている。また、発達の遅れがあるような子どもについては、保育の中で些細な情報だと思われる重要な事項をすくいあげ、保育者間や保護者と共有し、発達支援につなげるなど、丁寧に見ていくことも必要性和難しさを感じる。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・日々、何気ない生活の中で保育者と一緒に笑い、興味関心を保育者と共有していくプロセスそのもの一つ一つすべてが、子どもの学びであると感じる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・通い始め：事前のヒアリングを十分に作る。安心できる環境をつくるためにできるだけ同じ保育者が継続してかわる。慣れるまでは特にたくさんスキンシップを行い、親子分離が難しい子どもは一日中抱っこするところから始まる場合もある。
- ・3歳児クラスへの移行：園に遊びに出かけ年少・年中と遊んだり、年長児が遊びに来たりする機会を設けることで、遊びを通して園が楽しい場所だということを子どもが少しずつ理解できるような工夫を図ることが一番の移行支援だと考えている。満3歳児クラスへ就園する時は、担任が引き継ぎを行ったり、主幹教諭が一時預かりでの様子を見に来たりして、子どもの実態把握や情報の共有を行う。2歳児クラスの担任が年少に持ち上がることもあり、子どもの心の安定を図れるような工夫もしている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者同士で子育ての情報のみならず、子どもと一緒に出掛けられる場所やお店の情報なども話し合ったり共有したりする姿が見られている。
- ・保育者の子どもへのかかわりを見て、「あ、そうすればいいんだ」と学んでいるような姿もある。
- ・子ども同士のトラブルを通じた保護者同士の行き違いもあるが、解決はできないけど話は聞くよ、子どものことはしっかり見ているよというメッセージを送り、安心感を持ってもらえるよう努めている。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・保護者の知らない成長（歩き始め、言葉が出る、新しいものが食べられるようになるなど）を見ている分、その姿を伝え子どもの生活を知ってもらうことが大切だと考えている。

中国地方：公立認定こども園（定員 245 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

A クラス（一時預かり）

- 対象月齢：生後 6 か月から就学前までの乳幼児
- 時間：月曜日から金曜日の 8 時半から 17 時
- 登録：事前登録あり、前日までに電話予約
- 費用：一日 2,000 円（半日 1,000 円）＊給食とおやつの料金は含まれる
- 制限：13 日までの利用（一か月）
- 保育担当者・人数・資格：1 名（保育職の定年退職後の雇用、会計年度職員）・幼稚園教諭免許および保育士資格
- 現在の登録人数：16 名（現在は 3 歳未満児のみ）
- 利用者：現在継続的な利用があるのは 2 名（0 歳児）
一日に利用を受けられる人数は子どもの年齢による、多くても 4 名～5 名。
- 利用理由：里帰り出産、リフレッシュ、兄弟姉妹児、など
- 利用者の傾向：登録者を含め利用者の大半は、在園児の兄弟姉妹児である。保護者は育休中の場合が多く、上の兄弟姉妹は本園に通園しているため、一時保育利用時も兄弟と同時に登園し、一緒に帰宅するケースが多い。現在、継続的に一時保育を利用しているのは 2 名の兄弟児で、園への入園可能な状況になれば正式に入園する予定である。
- 一時保育室の配置：一時保育専用の部屋は、調乳室などを挟んで 0 歳児保育室の隣に配置されており、内部から自由に入出りできるようになっている。子どもが落ち着かない場合にはこの一時保育室を使用するが、基本的には 0 歳児クラスで過ごす。なお、保育担当者が 1 名であるため、利用する子どもの年齢に応じて対応している。これまでの利用例で最も年齢が高いのは 5 歳児で、この幼児は 5 歳児クラスで過ごした。
- 園庭：3 園が合併した園であり、砂場や遊具などが複数ある。園舎に近い場所にある遊具を低年齢児、遠い場所にある遊具を高年齢児が使うという使い分けになっている。また、0、1 歳児クラスと 2 歳児クラスに挟まれた中庭は、低年齢児専用の庭になっている。一時預かりの大半の幼児は、在園児の兄弟姉妹児であるため登園時に親子で使用するという機会は少ないが、降園後に園庭に残って親子で使うことがある。
- 昼食：あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- 全体的な計画に加え、各学年（0 歳児、1 歳児、2 歳児）の年間指導計画および、0 歳児・1 歳児向けのデイリープログラムがある。
- 一時保育に関する具体的な計画はない。利用者の状況が予測困難なため、計画を立てることができない状況である。
- 保護者向けの情報発信は、市のホームページを通じて行っている。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- 国の幼児教育・保育一体化の方針を受け、市では従来の幼稚園と保育園を統合した「こども園」の整備が検討され、平成 22 年から令和 6 年にかけてすべての施設が「認定こども園」として運営される体制に移行した。

- ・本園は1つの幼稚園と2つの保育園の3園の合併により平成31年に設立された。幼稚園は設立当初は小学校併設で年長児のみを対象としていたが、平成9年に2年保育に移行していた。2つの保育園では0～2歳児の保育を実施しており乳児保育の実績があった。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・基本的な生活習慣の確立：時間の使い方を含む日常の生活習慣を大切にしている。共働き家庭が多いため、家庭では夜型の生活になりがちだが、園では規則正しい生活リズムを整えることを目指している。
- ・遊びを通じた成長の援助：自由な探索活動を通して、子どもが自らできることを増やし、発達を促すようにしている。
- ・楽しい食事の提供：調理室併設の園ならではの取り組みとして、子どもたちが楽しく食事ができる環境づくりを重視している。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・共働き家庭が多いため、地域では0～2歳児の保育・子育て支援へのニーズが存在する。市内のすべての施設は認定こども園であり、各園とも0～2歳児の保育を実施している。
- ・一時保育は主に兄弟児の利用が中心で、ランダムな利用はほとんど見られない。実際に一時的な利用を希望する家庭は、NPO法人のサービスを利用している可能性がある。
- ・園児の出欠確認、連絡帳、保育記録はすべてオンラインで行っている。出欠確認は玄関に設置された端末で、保護者がカードを使ってチェックインする仕組みである。欠席連絡もアプリで行われ、保護者と保育者の連絡帳もオンラインで管理されている。各クラスに端末のPCが設置され、他のクラスの状況も確認できるため、兄弟児がいる場合の対応が便利である。ただし、一時保育においてはこれらの端末は利用せず、紙ベースの記録を使用している。
- ・0～2歳児を担当する保育者と3歳以上を担当する保育者との間に差異はなく、職員には保育所出身と幼稚園出身が混在している。外部研修は保育所系と幼稚園系に分かれており、各職員がそれぞれ参加している。職員室では、保育教諭の机が担当学年ごとにまとめられており、同学年のみならず上下学年間での情報共有がしやすい体制が整えられている。
- ・一時保育の保育担当者は、退職後に再雇用された会計年度内の職員であり、園長や主任の経験を持つベテラン職員が担当する。職員は0歳児クラスとともに動くケースが多い。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・通常の0～2歳児の保育・子育て支援は基本的な保育として行われており、特別な手応えや課題は感じていない。園長や主任はもともと保育園で働いていたため、0～2歳児の保育は従来から実施してきた。認定こども園になったことによる大きな変化はない。1号の子どもがいることで幼児クラスの時間の使い方が多少変わり、1号の子どもたちは降園後に保護者とともに園庭で遊ぶことも多い。
- ・幼稚園教諭出身の保育者には、戸惑いなどがあるかもしれない。
- ・一時保育に関しては、兄弟姉妹児の利用は保護者のニーズに合致していると考えられる。一時保育の保育担当者が1名であるため、予約があっても対応できない場合がある。利用する子どもに年齢差がある場合には対応が難しくなると考えられる。

中国地方：公立認定こども園（定員 245 名）、園庭開放あり

【保育担当者：認定こども園 2 歳児クラス担当】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- 保育歴 14 年目（幼稚園 4 年、認定こども園 10 年）。
- これまで 5 歳児クラスを 6 回、4 歳児クラスを 3 回、3 歳児クラスを 4 回担当しており、現在 2 歳児を担当。3 歳未満児クラスの担当は初めてである。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- 大きな部屋を 2 クラスで使用しており、部屋の中央に子どもの棚で仕切りが設けられ、2 クラスとして運用している。保育者は隣のクラスの様子を確認できるが、子どもの目線からは見えないため、落ち着いた環境が保たれている。
- 2 歳児クラスとプレイルームの横には中庭があり、外遊びが可能となっている。
- 3 歳未満児の担当が初めてであるため、乳児クラスのベテラン保育者と組み、デイリープログラムに基づいた保育を実施している。

(3) 保育の計画と振り返り

- 担任保育者間で相談しながら保育計画を行う。振り返りのための時間は設けられていないが、保育者同士の連携はしっかりと行われている。
- 保育記録は、保育室内の端末から各自が記入している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- 計画の共有のための特別な機会は設けられていないが、職員室の配置上、3 歳児クラスの保育者と対面しているため、自然と会話する機会が多い。1 歳児クラスや 3 歳児クラスの状況が随時耳に入り、相談しやすい環境となっている。
- 各保育室に設置された PC 端末からは、他クラスの様子や予定を確認でき、連携の補助となっている。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- 子どもの発達段階に合わせ、環境を少しずつ変化させることで、遊びの様子も変わっていくのが実感される。
- 3 歳以上のクラスでは、クラス全体の成長を中心に、援助が必要な子どもには「みんな」や「友達」を通じた間接的な援助を行うことを心掛けていた。一方、3 歳児未満のクラスでは、一人ひとりに対して直接的な援助を行い、周囲にも細やかに気を配る必要があると感じている。
- 3 歳以上の子どもは言葉による表現ややり取りが重視されるのに対し、3 歳未満児は言葉にならないサインを保育者が読み取ることが肝要であると感じている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- 年度初めから実施しているブロック遊びでは、子どもの前に出すものを変化させることで子どもの遊び方が変わる（最近は板を導入した）。

- 見立て遊びは、10月の運動会後からコーナー遊びへと変化した。
 - 指先の発達を促すために用意していたもので、年度初めは洗濯ばさみを使って遊んでいたが、最近はトングを用いて遊んでいる。
 - 園庭では固定遊具で遊ぶようになり、3歳児に交じって遊ぶ様子が見られる。
- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行
- 3歳児への新入園児の場合は、ならし保育の際に各家庭との連携が必要である。
 - 担当保育者が変わるため、子どもが園内の環境に慣れるように援助する。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
- 保護者同士で関わりを持ちたい人もいれば、そうでない人もおり、全体として保護者間のつながりは薄い
- (2) 保護者を意識して行っていること
- 子どもの様子を伝えることに努めているが、保護者が忙しく、物理的に伝えるのが難しい状況がある。登園は親が行い、お迎えは祖父母が担当する家庭もあるため、祖父母に伝えた子どもの様子が実際に親に伝わっているか確認するのが困難である。さらに、働き方改革の影響もあり、担任保育者が必ずしも登園やお迎えの時間にいるとは限らず、保護者に直接伝える機会が十分に得られていないと感じている。

近畿地方：私立幼稚園（定員 466 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

A クラス

2 歳児クラス（3 クラス、週 5 日・登録要）28 名 9 時～14 時 3 号該当は延長あり
募集は 10 月～ 通園実施（4 月入園・10 月入園） 各クラス保育教諭 2 名

B 教室

母子登園クラス（2 歳児・1 クラス 週 1 回・登録要 年 2 回募集） 定員 15 名 毎週
水曜 10:15～11:45 5,000 円／半年 他に登録料 3,000 円 基本的に親子（状況に応じて親子分離あり） 保育教諭 2 名担当 専用保育室・専用園庭の設定あり 昼食なし
（手作りおやつあり）

C 教室

母子登園クラス（1 歳児・2 クラス 2 週に 1 回・登録要 年 2 回募集）定員 20 名 隔
週月曜 10:00～10:45 4,000 円／年 他に登録料 3,000 円 親子登園 保育教諭 2 名
専用保育室・専用園庭の設定あり 昼食なし（手作りおやつあり）

D 教室

母子登園クラス（0 歳児 月 1 回火曜日 登録不要 その都度ネットから申し込み）定員
なし 10:30～11:30 無料 親子登園 保育教諭 2 名 専用保育室・園庭 昼食・おやつなし

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・ 指導資料 … 全体計画／月案／週案サンプル（当該週の振り返りと次週の目標設定）
- ・ 広報資料 … 園紹介冊子（2 種）／1・2 歳児クラス紹介パンフ／入園募集案内資料

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・ 20 年ほど前、子育てに悩む様々な親子のために、園庭開放を始めた（月 1 回）。
- ・ この取り組みは保護者からの反応が大きく、口コミで広がる。行政からの支援はない。
- ・ 20 年ほど前頃からいろんな要因を背景として「子育てに悩む」保護者がふえてきた。
- ・ この方たちをなんとか支えようと考えたのが、3 歳児未満対応のきっかけ。
- ・ 園庭開放では保護者はバラバラ、子どももトラブルを起こす → 保育者の仲介開始
- ・ もう少し定期的な登園の必要性を感じ、週 2 回の親子クラスを作った（登録制）。
- ・ 10 年ほど前から週 2 日の 2 歳児クラスを始める。市幼稚園連盟で乳児保育の研修。
- ・ 週 2 回の保育では中途半端になるので、週 5 回登園に変更する（10 年近く前から）。
- ・ 行政とのタイアップを優先するのではなく、園独自の活動を優先させたい。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ ゆったりと、子ども達のやりたいことや子どもの気持ちに寄り添いながら、子ども達の気持ちを大切にしたい。
- ・ そのためには、乳児が専用で利用できる豊かな環境を整えることが大切。
- ・ 具体的には、圧迫感のない開放的なスペース・玩具などの確保／子育て経験のあるベテラン保育者の配置／専用の園庭や園舎を確保…
- ・ この園の木造の旧園舎（子育て棟）を乳児保育に配当／2 歳児の世界を作りたい

- ・この取り組みは、「幼稚園」が行う取り組みなので、幼稚園の持ち味を生かしながら、子育てを保護者と一緒に考え、何かを一緒に行う事を大切にしたい。保護者には、園に来ていただき、子ども達を見てほしいと思っている。園と保護者とのコミュニケーションを大切にしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当保育者：幼児クラスの保育者との交流もあるが、ベテラン保育者中心に構成している（全員有資格者）。また、お手伝いしていただくために、卒園児の母に声をかけることもある（現役の子育て経験を生かしていただけるので…）。
- ・2歳児クラス在園児の翌年は、ほぼ3歳児クラスに接続している。幼児との交流は自然に広がってくる。両者を隔てるようなルールや禁止事項などはほぼないので。
- ・記録は、幼児クラスとほぼ同じ様式で行っている。一方で、毎日の記録作成のためにオーバーワークにならないように心がける（そのために記録量が少なくなっても）。
- ・所在市は最近目を向けてくれるようになった。担当職員が来園され、園の実際を知った上で市民対応してくれている。
- ・補助金については、働いている人へは「一時預かり事業」として「幼稚園Ⅱ型」の認定が行われている（市）。それによって利用料の減額（補助金分）を行っている。就労していない人に対しては、最近県が、（在園している）きょうだいのいる世帯に対する補助（少額ではあるが）が開始された。
- ・本園の周辺は三世代同居も多く、幼稚園へのニーズはそれなりに高い（少し離れたところに、若者世帯が多く住む地域があり、そこから登園への通園ニードが出てきている）本園周辺は落ち着いた地域である。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・2歳児同士と一緒に過ごすことは本当に大切な経験だと思う。この時期に在宅であれば、偏った時間になりやすく、親子もギスギスしてくる。登園することでのびのびと暮らしながら、少しずつ社会性を身につけてくる。この経験を経ることで、年少組になった時の子どもの安定感が全く違ってくる。
- ・保護者同士のつながりが強くなる。この絆が幼児クラスになっても続く。園もいろんな仕掛けを考える。例えば、園がインスタグラムのアカウントを立ち上げ、親がフォロアーになる。そこに様々な情報やお知らせを園がアップロードする。園の呼びかけに保護者が応えてくれるようになった（例えば年中行事の案内が、保護者の来園につながる）
- ・従来の保育者は、良くも悪くも「自分のクラス中心」になりやすい。2歳児クラスを始めることで、子育ての流れや実態などを受け止め始め、保育者の視点が変わってきた。
- ・難しい点・課題など：近年、特別支援を要する子やその周辺児が増えてきた。このような場合には、特に保護者の悩みを聞き、受け止めることが重要である。園では、キンダーカウンセリングの心理士に月2回来ていただいているが、十分ではない。
- ・1歳6ヶ月健診を終えられた頃から、入園させたいニーズが出てくるが、健診では「異常なし」と言われた子が、入園したら気になることがある。このような場合の行政（母子保健）との連携が十分ではない。母子保健行政とのタイアップが必要だが、まだ連携がうまくいっていない。

近畿地方：私立幼稚園（定員 466 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A クラス】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 短大卒・保育教諭有資格者。最初の 3 年は保育所勤務（1 歳児）、退職し本園に就職。5 年目（通所→年中→年長→年少→2 歳児）
- ・ 現在は、10 名の 2 歳児クラスを 2 人の保育者で担当

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 保育室の環境設定：新旧の園舎を生かして、2 歳児以下のクラスは、旧園舎を割り当てた。旧園舎の保育室から、2 歳児用園庭はつながっており、室内・戸外を連続した占有空間としている（すぐに外へ出て行くことができる）。
- ・ 主園庭は 2 歳児用園庭から連続している共有スペース。ここで年長の幼児達と交流できる。このスペースで幼児の遊びや運動会の練習などを見る。園舎が分かれていることで、落ち着ける居場所を確保することが出来る。
- ・ 細かいカリキュラムなどは設定せず、子どもの自発的な活動を尊重している。その時々の子どもの状況に応じて設定を試みるが、基本的にはフリープログラム。
- ・ 2 歳児は個人差が大きいので、例えば指先を使う課題を設定しながら、個々の状況に応じて指導・対応している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 記録：日報は一人 1 枚。週報ではその週の内容・特記事項を書き、今週の結果を踏まえて次週のプランを同時に作成。これが継続的な振り返りになる（園長決裁）。月案は学年全体で作成。
- ・ 週 1 回、2 歳児担当の保育者全員が 1 時間程度フリートークする。担任同士の情報交換は毎日放課後に行う。担任同士でシェアすることを徹底している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 園全体としては、朝礼・終礼時に、今日のことを簡単に報告して、園全体でシェアしている。月 1 回園内会議のようなものが、終礼の時間帯に開かれている。幼児クラスの担任は、あまり乳児保育に関心がない。こちらからの発信も不十分。

(5) 園の中で 0～2 歳児の受入れ保育に携わる手応えと困難さ

- ・ 園庭の共有で、幼児クラスから刺激を受けていると感じる。園全体に 2 歳児がいることで、勤務する保育者の気づきも深まる。
- ・ 2 歳児の担任として思うこと：まず安心して過ごしてほしい。一人一人丁寧に関わることが大事。個々の様子の担任間でのシェアが重要。2 歳児は生活習慣獲得を一つ一つ実現しなければならない。制作の取り組みでは、下準備が大変。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 子どもは戸外遊びが好きで、園庭にはいろんな遊具があり、例えばジャングルジムを子

どもの能力に合わせて介助しながらチャレンジさせている。また園庭にはダンゴムシなどがあり、初めて捕まえたり触ったりして遊んである。

- ・このような遊びは子どもにとっては初めてのことで、個々のことが出来たときの子ども自身の「達成感」というのが、この時期の子どもの一番大きな喜びだと思われる。そして保育者は子ども達の「初めての場」に立ち会えることが出来る。2歳児は、子どもと保育者の一対一の関係で、楽しいことが経験される。
 - ・難しいのは、イヤイヤ期への対応。子どもによってもその時の状況によっても対応法が異なるが、正解のない対応なので、とにかく臨機応変にするしかない。
- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行
- ・初めて園へ来る子が多いので、まずゆっくりくつろげることを大切にしている。
 - ・室内では、自由に遊びを得られるように、絵本・制作・粘土・ままごとなどのコーナーを常時準備しておき、それぞれの子どもの活動に寄り添うように関わっている。制作コーナーは季節に応じて、制作内容を変えている。
 - ・2歳児クラスでは、保育者ペースの設定保育ではなく、子どもと保育者が一対一の関係で、子どもの自由な遊びに寄り添って、安心感をまず与える。
 - ・クラス移行のための意図的な計画：1学期は基本的に保育室でゆったりと安心して過ごさせる。慣れた頃に、2歳児園庭から幼児用園庭へ行動を伸ばす。2学期の運動会の幼児クラスのダンスの練習を見学させる。見学によって、2歳児が幼児保育場面のイメージを感じ始める。3学期、移行準備として担任が引率して幼児クラスの保育室に出向き、様子を見たり、遊んでもらったり、一緒に昼食を食べたり、幼児用トイレの使用体験をしたりする。昨年はこのような取り組みを5回ほどした。事前に年少の担任と打ち合わせた。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
- ・初めての幼稚園ということで、最初は保護者の不安が高い。とにかく毎日の園で頑張っている姿を保護者に伝えるよう心がけている。特に登園時に泣いて離れづらかった場合には、その後に立ち直った様子を、必ずその日のうちに伝える。
 - ・自主登園の保護者へは、お迎えに来られた時に必ず話すが、バス登園の場合は保護者となかなか会えないので、必要な時は時宜を逃さず電話や手紙で伝えている。
 - ・登園することで生活習慣が身についてくるが、そこから子どもに育ちに母が気づき、家庭でも生活習慣が身についてくる。親から離れることで、かえって親は我が子の成長に気づくこともあり、それが親の安心感の形成につながっていく。
- (2) 保護者を意識して行っていること
- ・保護者同士のつながりは、6月の保護者懇談の頃から始まる。3～4名のグループで話し合わせる設定を行うことで、保護者同士のコミュニケーションが培われる。
 - ・朝の子どもの様子が不安定な時は、必ずその日のうちに園での立ち直った様子を伝えるように心がけている。親の安心感形成を第一に考えている。

中部地方：私立幼稚園（利用定員 135 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・対象月齢：A 広場（0-3 歳児）、B ルーム（0 歳児）、C ルーム（1-2 歳児）、D ルーム（2-3 歳児）
- ・定員：A 広場（親子 20 組程度）、B ルーム（親子 10 組程度）、C ルーム（親子 20 組程度）、D ルーム（親子 20 組程度）
- ・登録：A 広場（未登録）、B ルーム（未登録）、C ルーム（登録制）、D ルーム（登録制）
- ・開催日・時間：A 広場（年 12 回）、B ルーム（年 3 回）、C ルーム（毎月 3 回、幼稚園の長期休み中は開催しない）、D ルーム（毎月 3 回、幼稚園の長期休み中は開催しない）、いずれも 1 時間程度。
- ・月額料金：A 広場（無料）、B ルーム（無料）、C ルーム（初回の材料費 1,000 円、月額 2,000 円）、D ルーム（初回の材料費 1,000 円、月額 2,000 円）
- ・親子登園：共通して親子で登園、保護者も室内に入り、一緒に活動する。
- ・保育担当者・人数・資格：共通して 2 名・保育士
- ・専用保育室：すべての活動を園内遊戯室で行う。
- ・園庭：活動終了後は園庭開放として園庭で自由に遊んでいい時間があり、ほとんどの親子が園庭での遊びもしてから帰宅する。
- ・昼食：なし（おやつあり）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料：0-2 歳児の活動は、園の保育とは別の子育て支援活動として展開しているが、全体的な計画の中に位置づいている。各年齢の活動毎に日課表を作成し、活動内容を保護者に案内している。
- ・保護者向け広報資料：0-2 歳児の活動にかかわる園だより（活動のドキュメンテーション・子育て支援のためのヒント・翌月の活動予定・お誕生日月の子へのお祝いなど）を活動月毎に作成し、遊戯室に掲示したり保護者に配布したりしている。参加申込書は園の HP よりダウンロードして記載したものを提出する。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・端緒は、20 年ほど前に市内の私立幼稚園協会、市教育委員会（行政）、各園の 3 者で「地域に開かれた幼稚園づくり推進協議会」を設立し、子育て広場等の子育て支援活動を検討したことにある。当時から 3 者が経費を出し合って運営を行い現在に至っている。この子育て広場を運営し、3 歳未満児の育ちの重要性や保護者の子育て支援の重要性を認識したことで、子育て広場以外の園独自の未満児活動も展開されるようになった。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・子どもにとって：家から一歩踏み出し世界が広がることを支える。0-2 歳の間に同年齢の

子ども、保護者以外のいろいろな大人と出会い、触れ合い、受け止められ、安心する経験を提供する。家庭では得られにくい刺激や季節を通じた環境の変化を感じ、楽しむ機会を提供する。

- ・保護者にとって：初めての育児であったり、引っ越し等慣れない環境における子育ての中で、子どもへの手がかかり、不安や悩みを抱えやすかったりする 0-2 歳の時期において、保護者が他者から「大丈夫」と声をかけてもらえる環境づくりの手伝いをするような感覚で展開している。家庭内で子どもとの密な関係に閉じこもりがちな 0-2 歳児の育ちと育児期間において、家庭ではなく、けれども安心していられる場所で、子どもと向き合い、笑い合い、関係性を編みなおす機会を提供することを大切に考えている。いつもと違う場で子どもと向き合い一緒に遊ぶことを通じて、子育ての楽しみや喜びを感じられる時間をつくる手伝いをしたいと考えている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ニーズ：3 歳未満の発達段階に応じた教育的なかかわりを子どもに受けさせたいと望んでおり、活動に対して非常に協力的で熱心な保護者が多い。
- ・運営体制：担当者は園の教職員が行っている。担当保育者は主担当 1 名と副担当 1 名の 2 名体制であり、活動日以外には 3 歳以上児クラスの副担をしたり、預かり保育を担当したりしている。担当保育者が全活動の計画を立て、準備を行い、活動終了後には必ず活動記録（写真と筆記）を記したノートを作成して、振り返りを行っている。2-3 歳児対象の活動では、年に 1 回、年少クラスの子どもたちと遊ぶ機会を設けている。0-2 歳児に特化した活動を行う上で、リトミック、ベビーマッサージなど県の乳児研修を受講したり、保育者の専門外の支援については、活動に保健師や歯科衛生士を招聘したりして、子どもが遊びながら保護者が専門家へ直接相談できる状況を設けている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・手応え：子どもたちが保護者以外の大人と継続的にかかわる機会を設けていることで、家庭以外の世界でも自分が受け止められ安心できる経験ができているようで、自ら他者やものごとへかかわっていかうとする姿勢が育まれていると感じる。保護者も安心して楽しみに通ってくれており、保護者同士でかかわりの輪が形成され情報交換ができる環境を支えられていると感じる。
- ・課題：保護者が来るため保護者同士のトラブルへ目を配り、子育ての難しい時期でもあるため保護者の精神的心理的なケアなども含めて、活動内での声かけや説明などには 3 歳以上児の保育よりも留意する必要がある。月齢によって発達の個人差が大きい時期を対象とすることで、個々の子どもに応じたかかわりの重要性を再認識でき、3 歳以上児保育を考える上でより一人一人の興味関心・ペースに応じた丁寧なかかわりを勉強しようとする、いい影響を及ぼしている側面もあり、いまよりさらに勉強する必要性も課題として感じる。

中部地方：私立幼稚園（利用定員 135 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 保育経験年数 27 年目。保育所における 0・1・2 歳児担当の経験 5 年の後、平成 17 年より、現在の園にて未就園児の活動主担当として 19 年目。園内では並行して 3 歳以上児クラスの副担もしており、今年度は 4 歳児クラスの副担を務める。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 活動概要：自由遊び～あいさつ・季節の歌・手あそび～ダンス～制作～つくったものを使って親子で遊ぶ～おやつ～さようなら～園庭開放（任意）
- ・ ねらい：多様な子育て広場や活動、プレイルームがある中で、幼稚園ならではの特色を活かした 0-2 歳児活動を提供することを最重視している。
- ・ 受入れの工夫：家庭では難しい遊び・手作りのおもちゃを提供する。3 歳以上の育ちを保護者が理解できるように園内の遊びの様子や子どもたちの姿を紹介したり、3 歳以上児の遊びで使った教材や創作物を借りてきて、遊びの中に取り入れたりする（おもちゃの電車づくりをする際、年少さんが保育でつくった線路を借りてきて電車をその線路に走らせてみる/年長さんが拾ってきたどんぐりを見せながら、どんぐりコロコロの手遊びをするなど）。個人差が大きいので、参加しているすべての子どもが遊べるように計画・準備しているが、全体でやる活動には興味をもたず遊びたい子にはその子のペースで好きに遊べるよう、活動の際にも自由に遊べるスペースやおもちゃを残しておく。お昼寝や授乳したい子ども用にベッドや衝立も用意して、子どもがどのような状況にあっても安心して参加できる環境をつくることを心がけている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 計画：すべての活動において、主担当と副担当で事前に話し合っ活動計画を立て、準備をする。
- ・ 振り返り：写真と筆記による活動記録を毎回とり、活動後は記録をもとに主担当と副担当で 30 分～1 時間程度の振り返りを行い、次回以降の活動へ活かしている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 「1-2 歳児活動～2-3 歳児活動～満 3 歳児クラス入園～年少クラス」という流れができてきているため、子どもや保護者と園、とりわけ満 3 歳児クラスをつなぐ役割は大きいと感じている。そのため、満 3 歳児クラス担任とは意識的に密な連携を図っており、毎月 2-3 歳児活動から満 3 歳児クラスへ就園する子どものための会議を設定して、これまでの育ちの状況や 0-2 歳児活動での様子、保護者の傾向などの情報共有をしている。逆に、保護者へは、3 歳以上の育ちの姿や園での生活を具体的にイメージしてもらえよう、できるだけ 3 歳以上特に年少クラスの生活や遊びの様子を 0-2 歳児活動の際に話すことを心がけている。そのため、事前に 3 歳以上児の様子を見に行ったり、遊んでいるものを借りてきたりするなどして、3 歳児以上の担任にも 0-2 歳児活動へ協力してもらっている。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・ 手応え：自分のペースで遊ぶことを楽しむことやそこで育ってくるものが、3 歳以上の育

ちにとっても大切だということを改めて感じる。また、満3歳児クラスに入ってから0-2歳児活動と違う姿を見せ、この年齢の子どもなりに家庭から離れて頑張っている中で、最初は満3歳児クラスに顔を出すと「ミキ先生～」と寄ってきた子どもたちが、満3歳児クラスの担任の先生が大好きになっていく様子を見て、寂しくも自律して育ってくれている手応えを感じる。

- ・困難さ：保育の無償化に伴い、満3歳児就園のニーズが高まり、0-2歳児から園を探す保護者が年々増えてくる中で、園内の設備や園庭の遊具等、現在は3歳以上児を対象とした環境をより低年齢児向け整備していく必要がある。また、0-2歳児活動の中で、発達に課題がありそうなグレーゾーンの子どもの療育と並行して通いたいという子どもが増えており、他方では幼稚園という特性上加配が付けられない状況があって無責任に就園を薦められない場合もあるときに、自身が展開する0-2歳児活動の中で就園できそうかどうか、本当にその子のためになりそうな進路を見極めないとならないことが難しい。対応として、自分一人で考えずに、必ず園長や教頭、3歳以上のほかの先生と一緒に子どもの様子を確認する機会を設けている。

2. 子ども視点

(1)子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・活動に慣れるにつれ、遊びたいおもちゃを目当てに登園してきて、保護者の手を離れるや真っ先に遊戯室へ駆け込んできたり、活動の最中にニコニコしたり声を上げたりしながら遊びへ向かっている姿があり、安心して好きなことをしていい経験（学び）を提供できているかなと思える。

(2)移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・その子のペースで活動に参加できるよう、用意はするが、その子の遊びたい気持ちを優先しながら活動の場にいられるように配慮している。この点は、子どもが一緒に遊ばなくても焦らないでペースに任せていいことを、保護者にもよく伝えて共有しながらやっている。

3. 保護者視点

(1)保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・自分の子ども以外の子どもたちと一緒にいる機会によって、比較することで気づくメリット・デメリットがある。それでも、自分の子どもだけじゃないという意識やいろいろな子どもの姿を共有する中で、親同士につながりが芽生え、悩み相談や情報交換などを活発にしている様子が見えてくると嬉しい。

(2)保護者を意識して行っていること

- ・保護者が子どもと一緒に遊んで笑い合うことができるよう工夫する。0-2歳児は育児も大変であり、子どもの育ちとしても重要な時期であるため、保護者が葛藤したり悩んだりすることを受け止め、共感し、特に悩みがありそうな保護者には、活動後に個別の相談に乗る機会を設けるなど、保護者連携・支援は非常に重視している。

中国地方：私立幼稚園（定員 200 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A クラス

- ・ 対象月齢：生後 2 ヶ月～1 歳 6 ヶ月
- ・ 定員：1 回開催あたり 15 組（親子 30 名）、登録制
- ・ 開催日：月 1 回程度 1 時間～1 時間半
- ・ 費用：無料、初回申込時に登録料 1,000 円
- ・ 保育担当者・人数・資格：幼稚園教諭免許・保育士資格・モンテッソーリ国際資格保有
外部専任講師 1 名、園内職員 1 名程度補助
- ・ 親子登園
- ・ 専用保育室：あり ・ 園庭：登降園時に親子で遊ぶ。
- ・ 昼食：なし

(2) B 教室

- ・ 対象月齢：1 歳 7 ヶ月～幼稚園・保育所就園時まで
- ・ 定員：48 名程度（12 名×4 グループ）、登録制
- ・ 開催日・時間：火・水／木・金、9 時～10 時半／10 時 45 分～12 時 15 分
週 2 回または 1 回（月 8 回または 4 回）
- ・ 月額料金：週 2 回 8,000 円、週 1 回 6,000 円（教材費）、460 円（月刊絵本代）
- ・ 親子分離：親子で登園するが、教室内に保護者は入らず、保護者は隣の別室で待機する。保護者同士のつながりを生む場にもなっている。
- ・ 保育担当者・人数・資格：幼稚園教諭免許・保育士資格・モンテッソーリ教師養成コース資格保有 3 名
- ・ 専用保育室：B 教室実施時は専用だが、午後は預かり保育の教室として使用。
- ・ 園庭：登降園時に親子で遊ぶ。2 歳児サイズのもの（滑り台、三輪車など）は用意。
- ・ 昼食：なし（おやつあり）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・ モンテッソーリ教育に基づいた保育計画
- ・ 個別の指導計画：3 歳以上のモンテッソーリの個別の記録方法（1 人ずつのカルテのように綿密に、どの教具のどのような段階まで進んだかを書き込む）ほどではないが、複雑な手順の教具へ進んだ変化などは書き込んでいる。
- ・ A クラスからの移行や、親子代々入園している家庭も多く、積極的な募集は実施しておらず、見学に来た家庭へ個別に保護者向け広報資料を渡して説明する。

3. 0～2 歳児の受け入れが現在の形になるまでの経緯

- ・ 本園をモンテッソーリ教育に切り替えた際、保護者の理解を得るため出席率の高い 2 歳の親子教室として、当初は週 1 回で 1985 年頃より開始した。
- ・ 現在では A クラスから 8 割程度が B 教室へ移行する。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ 子どもの個人としての確立、精神的に自立していくことを柱にし、他の子どもと比較せ

ず、失敗をとがめず、スモールステップで進めている。

- ・ 2 歳児の発達にあったものとして用意しているが、月齢や家庭環境等を含め個人差が大きいため、自分の発達の段階にあったものを自分で選んですることを大事にしている。
- ・ モンテッソーリ教具による自由選択活動を重視：難しさを感じない、見ただけでやり方が分かるように、子どもにとって使いやすいトレイに乗せたワンセットにして教具を準備している。ワンセットになっているものを自分で運び、遊び終わったら自分で片付けやすいものになっている（さっとトレイに入れて、あとは必要ならゴミを捨てる程度）

5. 0～2歳児の受け入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 担当者の確保：全員本園での勤務経験があり、モンテッソーリの資格を持っている者のみであり、自分の子育てが終わって復帰している。
- ・ 地域に向けた無料の親子体操や園庭開放、モンテッソーリの活動を実施すると、以前は様々な家庭が多く集まっていたが、最近では子どもの数が減ったのか、母親の就労が増えたのか、本園の A クラスや B 教室に通う在園児親子の参加が大半である。
- ・ 子育て支援プログラム全体に対する自治体からの支援はあるが、B 教室に特化した経済的支援はなく、赤字の事業である（理事長）。
- ・ 3歳児クラスへの入園に向けた準備：2ヶ月くらい前から、園内の散歩から始め、様々な活動や部屋の様子を見せる。1ヶ月前にはクラスを決め、自分の担任となる保育者に会いに行く。まずは B 教室担当保育者と一緒に3歳児クラスにおける活動を体験する。慣れてきたら B 教室担当保育者が連れて行くが、3歳児クラスに子どもだけ残って活動して戻ってくるというスモールステップを踏む。
- ・ 入園前に園長が保護者に 1 時間くらいオリエンテーションを実施する。入園式とまでいかないが、全員で集まって迎える日・準備をし、その翌日からは一人で3歳児クラスに入っていく。
- ・ モンテッソーリ教育を導入したことにより、園全体として子どもに対する思いが大きく変わってきた：一斉的に教えるものではなく、子どもが元々持っている生命力を手助けするという感覚。

6. 0～2歳児の受け入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・ B 教室の存在が、いろいろな意味で園全体の基礎作りになっている。
- ・ いろいろな子どもに出会い、子どもに合わせることを保育者が学んでいる。一人ずつに合わせた工夫、教具の準備の仕方など大変さはあり、環境設定の工夫は限りなくある。研修などを通して学び続けることが重要であるが、今では難しさはあまりない。
- ・ 集団に入りにくい子どもが、B 教室ではっきり特徴が出て分かりやすく、早い時期から援助ができる。
- ・ 核家族化して不安感が強い保護者に対する支援として、他の保護者や教員からの助言を受け入れやすく、保護者への安心感につながる役割が大きい。他の子どもと比べていた保護者が長い目で子どもを見られるようになっている。
- ・ B 教室から3歳児へ入園する家庭が多く、入園前から家庭と園との信頼関係が構築されている。PTA 役員への立候補者が多過ぎて辞退してもらう人が出るほどである。
- ・ 継続的な利用を行っている本園の B 教室の保育をそのまま「こども誰でも通園制度（スポット利用可、一過性）」には移行しにくい（理事長）

中国地方：私立幼稚園（定員 200 名）、園庭開放あり

【保育担当者：B 教室】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 幼稚園教諭・保育士資格を保有。本園に 4 年間務めて結婚退職後、育児期間を経て（本園の保護者経験もあり）、B 教室に復帰後現在に至るまで 25 年間担当。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 活動内容：モンテッソーリ教具（すべて子どもサイズ）を使った自由選択活動、本物を用いた子どもの意欲に基づく日常生活の練習、絵本の読み聞かせなど
- ・ 1 日の流れ：登園後身支度（上着をたたむ、絵本袋をたたむ、ロッカーにしまう、出席シールを貼る）、モンテッソーリ教具を用いた自由選択活動（自分で用意して片付ける）、おやつ（自分で用意して片付ける）、おやつを食べ終わった子どもから自由選択活動、小さなお集まり、自分で身支度をして降園
 - 同じスケジュールで安心して過ごすことができ、2 日連続で来ることで積み上がるものがある。
 - 子どもがやりたいという気持ち、できたと思える経験を重視する。
- ・ 子どもが自分で手に取ってできるように、生活／遊び道具すべて、大きさや重さなど 2 歳児の子ども目線で使いやすいように準備している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 保育終了後、昼食を取りながら、担当保育者 3 人で今日会ったことをその日のうちに振り返り、記録を付けながら話をする。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 40 年ほどの長い歴史があるため、B 教室は園の保育の一部となっている。
- ・ 3 歳児クラスへの入園に向けて
 - 入園が近くなってきたら、そのクラスで活動の時間を過ごせるようにする。
 - B 教室における月ごとの懇談時に、様子は園長に記録を書いて渡しており、そのまま担任の先生に渡せばそれまでの経過が分かるようになっている。
 - 紙面だけでは伝わりにくいこと、個別に話すことが必要な場合（家庭環境など）は直接話す。

(5) 園の中で 0～2 歳児の受け入れに携わる手応えと困難さ

- ・ 個人差も大きく大変だが、短期間で成長していく変化（歩くのもしっかりしてくる、1 週間会わなくても言葉が増えている、次第に周りの友達のことにも気にし始めるなど）もあり、やりがいも大きく、発達の土台作りをしていると考えている。子どもが様々な経験をできるようにしたい。
- ・ 言葉の敏感期でもあるため、ゆっくり分かりやすく、子どもにとって言いやすい言葉かけを考えている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ ハサミやシールなど何にしても初めての経験となる子どもが多いが、次第にできるようになっていき、繰り返し行う姿がある。

- ・ ままごとではなく本物、生活の中にあるものについて、子どもサイズの道具や材料を1回分用意して、自分でできる経験を用意している：レモンを搾る、ゴマをする、コーヒー豆をひく、バナナ・さつまいもなどやわらかく危なくないものを切る、花を生ける、掃除など
 - ・ 完璧に元に戻すことはこだわらないが、子ども自身が終わった、できたという気持ちを大事にし、遊びの片付けも自分で行う。
 - ・ おやつの用意と後片付けも自分でする：自分でトレイに乗せ、ランチョンマットを敷き、小さな容器に1回分用意されたお茶を自分で注ぐ、こぼしたら子どもサイズの布巾で拭く、食器を返却するなど
- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行
- ・ 親子分離で原則B教室の部屋に保護者は入らない：靴箱で一旦分離し、保護者は隣接する別室側からB教室の入り口へ行って子どもと会う。ただし、状況に応じて無理に離さず、抱っこして見ていることもあり、安心して離れられるように気長に見守る。
 - ・ すぐ隣の別室で保護者が待機するため、保護者も様子を見に行くことができ、子どもも寂しくなったら保護者に会いに行くこともできる。慣れてくると子どもだけ、保護者同士のみで過ごせるようになる。待機中保護者同士のつながりの場にもなっている。
 - ・ 8割程度がAクラスからB教室へ移行し、月に1回B教室体験があるため親子分離の準備期間となり、子どもも楽しさを覚えていてすんなりと入れることも多い。また、窓から保護者が様子を見ていたら安心して活動に入れる子どももいる。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
- ・ 「こんなに小さいのに、こんなに自分のことができるんですね」「親から離れられると思わなかった」という人が多い。
 - ・ B教室の時間に待機している間、保護者同士でつながりが生まれる意義がある。
 - 人間関係が希薄になり保護者が孤独になりやすい現代において、友達ができて話することで気分が明るくなる、入園までに人間関係ができる、先輩保護者に相談できる。
 - 祖母世代（保護者の親世代）の方が連れてくることもあり、自分の親ではない異世代の人から話を聞く意味もある。
 - 別室で待機が辛いという保護者が増えている。子どものために1ヶ月は頑張っ欲しいことを伝え、最終的には保護者同士のつながりが生まれて慣れていく。
- (2) 保護者を意識して行っていること
- ・ 変化も含めてその日の様子を詳しく伝えて共有して喜ぶ：3名体制のため1名が次の準備をしている間、2名が個別に声をかけることができる。
 - ・ 可能なことは子どもが自分でできるように促すための言葉かけやかかわりを見せる：子どもは自分でできるし、自分でやりたいと思っても、つい手伝ってしまう（靴を脱がせる／履かせてしまう、荷物を持つなど）保護者も多い。降園時は子どもが全部自分で身支度をしてから保護者のところに連れて行くようにし、保育者がどのような言葉かけをし、かかわりをしているのか、保育者の姿を見せるようにしている。どのようにしたらよいか一言伝えたら学んでいる保護者の方が多い。

【1歳児からの受入れ】

1歳児を実際に受入れている園については次の11園となっている。

こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業

13_関東地方：公立幼稚園

→制度としては0歳からだが、実際の受入れは1歳から

親子分離での受入れ

14_東海地方：私立幼稚園

15_近畿地方：私立幼稚園

16_東海地方：私立幼稚園

17_九州地方：私立認定こども園

18_：四国地方：公立認定こども園

満1歳児から：親子で

19_近畿地方：私立幼稚園

20_四国地方：私立認定こども園

21_北海道・東北地方：私立幼稚園

22_北海道・東北地方：私立幼稚園

23_九州地方：私立幼稚園

こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業を見据えて行われていた事例は、制度的には0歳児から実施しているが、継続的な利用は1歳からとのことで、こちらに掲載をしている。幼稚園での実施という意味では、特に0歳児に向けた環境を作ることに工夫している様子がうかがえた、

また、1歳児から親子分離での受入れが見られる一方、親子での参加の場合もかなり見られた。1歳児からの親子分離での受入れをしている園でも、幼稚園での歴史的には、親子登園がスタートで、最近のニーズで子どもだけの保育を始めている様子がうかがえた。また、子どもだけの保育の場合、保育のあり方、環境について工夫している様子が見える。

園によっては、制度的には0歳児からを視野に入れているが、実際には1歳児から、満1歳児からなど、年齢としての1歳になってからの活動に特徴がみられた。

関東地方：公立幼稚園（定員 95 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・実施内容：自治体が受諾した国の試行的事業としての「こども誰でも通園事業」の一環
- ・対象月齢：0歳6ヶ月～満3歳未満の子ども
- ・定員：1日の利用者定員6名（満1歳未満は3名まで）、登録制（登録者43名）
- ・開催日・時間：月・水・金（祝日等除く）9時～12時、1時間単位で利用可能、一人当たり月10時間まで
- ・月額料金：無料
- ・親子分離：親は子どもを預けると帰宅する
- ・保育担当者・人数・資格：保育士有資格者3名（会計年度職員）
- ・専用保育室：事業実施時間帯は専用、普段は預かり保育、子育て支援で使用。
- ・園庭：保育時間内に使用、園児とのふれあいの機会になっている
- ・昼食：なし（おやつなし）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・全体的な計画・教育課程・指導計画：なし
- ・保育の振り返り記録：個々の子どもの様子と全体の一日の様子をA4・1枚に記録し、園長に提出。担当保育者3名で週替わりで記録。
- ・広報資料：チラシ配布や市のHP 掲示を通して広報。チラシは保健所や子育て支援センターで、保健師や保育士から「これは」と思う保護者（育児に困難を抱えている保護者など）に手渡してもらうケースが多い。

3. 0～2歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

2023年冬に、自治体からの依頼により準備を開始。事業開始は2024年7月。当園園児数が減少し、保育室に空きがあるから可能だろう、園児数確保につながるのではという自治体の見込みのもとに進められた。2025年度から別の公立園でも実施される予定。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・集団生活が少しでも体験できること。
- ・室内外で園の環境を体験できること。
- ・園児と自然に交流が生まれ、遊びをみて模倣するという体験。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・保護者のニーズ：市内の広範囲から来園。保護者自身のリフレッシュ目的が多い。年齢が大きい子どもの場合は、集団生活を経験させたいというニーズもある。0才児の場合、保育時間中、泣き続ける時間が大半を占めるケースが多く、それによって来なくなるケース

が多い。育休中だけ預け、満3歳になると別園入園予定という保護者もいる。

- ・担当保育者リクルート：園とは独立した事業として任せられる経験と知識を備え、協調性のある穏やかな方を園長が探した。子育て支援の経験、乳児保育経験、小さい子どもの保育に関心があるなどの点を重視した。
- ・3歳児以上クラスとの関係性：実施部屋が保育室と隣り合わせであること、園内施設や園庭を共有することから、園児が寄ってくるといった自然発生的交流がある。
- ・記録、計画、研修の体制：個々の子どもの様子と全体の一日の様子を記録し、園長に提出。A4用紙1枚で構成されている。3歳以上との共通性は特にない。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・子どもたちの様子・楽しい経験：個人差が大きい。積極的な子どもは年長児の姿を模倣するなどの姿がある。集団がはじめての子たちなので、トラブルはあるものの、家庭では味わえない経験として、例えばもののやりとりをめぐる育ちなどがみられる。他児への意識も出てくる。
- ・保護者の変化：保護者が保育者と顔見知りになり、園とのつながりができると、自宅以外の信頼の場所ができると感じる。
- ・子育て支援として意識して行なっていること：保護者との短いやり取りの中で、育ちや出来事をうまく伝えることが親の育ちにつながると感じている。
- ・園組織全体での変化：未満児がいることで、園全体がなごんだり、子ども同士の交流が生まれたりすることで、それを上手に保育に取り入れる園の保育者の姿があり、臨機応変さを発揮することにつながる。朝の職員会議では、当日の参加人数について情報共有している。
- ・保育で難しい点・課題など：個人差や発達差が大きく、保育者3名でも対応が大変。保育室と園庭も離れており、連携がとりにくい点もある。またその都度、子どものメンバーが異なることも難しい。園内の環境も基本的には3歳以上児用に作られており、事故が起きないように気を遣っている。
- ・今後の課題：園で満3歳児保育を開始し、この事業での0～2歳児保育との接続について考えていくこと。

関東地方：公立幼稚園（定員 95 名）、園庭開放あり

【保育担当者 3 名】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ A さん：私立保育園保育士を経験したあと、育児休業。その後、公立幼稚園でサポート保育者（パート）として勤務。その後、ブランクがありつつも、本事業担当として異動。保育士資格・幼稚園免許。
- ・ B さん：1 年間私立幼稚園に勤務後、公立幼稚園・こども園に正規職員として 20 年間勤務。子ども園では 2 歳を担当。その後、本事業担当として異動。保育士資格・幼稚園二種免許。
- ・ C さん：私立幼稚園に 6 年間勤務後、結婚後退職後、私立保育園のフリー保育士を 10 年、子育て支援担当を 2 年。公立幼稚園でサポート保育者として勤務後、本事業担当として異動。保育士資格・幼稚園免許。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 室内の環境の工夫：カーペットの設置や玩具など、3 歳未満児向けの環境になるように努力している。また、怪我を防ぎ、楽しく遊べる環境作りを心がけている。年齢が違い、力加減がわからないことが多いので目を離さない。毎回、子どものメンバーが異なるが、その日の来園児の特徴に合わせて環境構成を行う。メンバーによって、仕切りを作って分けた環境構成をすることもある。0 才児用玩具が不足しているので、音が鳴るおもちゃなど、スタッフで手作りをしている。口に入れる場合が多いので、消耗品として捉えている。
- ・ 援助の工夫：おむつをしている子もおり、自分でできることも少ないので、見守るというより、丁寧に声をかけたり手助けしたりする。個人差も大きく、行動の予測の難しい（突然、ものを投げるなど）子どももいる。まだ言葉が未熟なので、察して対応する部分が多い。
- ・ 園内・園庭の環境の工夫：園施設はどこでも自由に使える。園児が遊んでいる場所は危険予防のため避けるなど配慮する。遊具も未満児向きではないので、安全に配慮している。園児たちは小さい子どもたちが来ると喜んで寄ってくるが、それまでの遊びから気がそれることもあるので、保育に支障が出ないように気を遣う。
- ・ 活動の概要：個々の子どもに合わせて、思い思いに自由に遊ぶ。来園時間が様々なので、一斉活動は難しい。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 保育の計画：毎回メンバーが異なることもあり、計画を立てるのは難しい。来園メンバーをみて柔軟に対応する。
- ・ 保育の振り返り：保育終了後に担当 3 名で昼食をとりながらその日の子どもの様子の情報交換をする。その内容を参考に保育の振り返り記録を書き、園長に提出している。前回の子ども様子を思い出すために記録している。

- (4) 園の中での自分の役割：3歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有
- ・ 園の保育と本事業は切り分けられているので、3歳以上の年齢の保育者との計画の共有はない。園の保育補助に入ることも基本的にはない。
- (5) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ
- ・ 年齢や子どもの様子に合わせて、手作りのものや環境を用意する。ここで経験した遊びを再度したいと目的をもって再来園してくれることもあり、手応えを感じる。
 - ・ 年齢差のある子ども達が同じ部屋にいる難しさがある。時には互いの遊びの邪魔をすることもある。大きい子にとっては物足りなくなることあり、園庭と室内に別れて保育をすることもある。子どものメンバーが固定しない難しさもあり、メンバーがそろわないと状況がわからないので、臨機応変に対応する。ずっと泣いている子については、無理に来園しなくても良いのにと感じることもある。

2. 子ども視点

- (1) 子どもにとっての楽しい経験になっている事例
- ・ 以前はずっと泣いていた子がにこやかに再来すると、保育の中で楽しい経験をすることができたことや、慣れてくれたことを感じるができる。
- (2) 移行期：通いはじめからのプロセス
- ・ 泣き続ける子どももいるが、保護者には割り切って玄関口で別れてもらう。泣き続ける場合には、連絡をしていいか事前に確認をする。無理のないように、最初は1時間の保育からスタートしてもらうこともある。子どもから嫌な場所と思われるのが一番良くない。慣れて遊び始めるまでは、どのような遊びやおもちゃが好きなのか、あれこれ試行錯誤しながらの保育となる。泣き続ける子への対応は、保育者間で適宜役割交代しながら行う。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、学び・育ち、保育者同士の関わり
- ・ 保護者の姿：最初は暗い表情で、気持ち的に限界を感じていた保護者が、預けていくうちに明るくおしゃべりになるケースがあった。子どもと離れてリフレッシュしたい保護者が多い。預ける理由がなくても良いのかと予約時に尋ねられることもあり、預けることに後ろめたさを感じる保護者がいると感じる。
 - ・ 保護者の学び：お迎えの際に、玄関先で子どもが楽しんだ姿を伝えるようにしている。同じ遊びを自宅でもやってみようという姿につながることもある。トイレトレーニングなどの生活の自立にかかわることも、様子を伝えると喜んで自宅でも試してみることにつながることがある。
 - ・ 保護者同士の関わり：玄関口で子どもの受け渡しをするので、ない。
- (2) 保護者を意識して行っていること
- ・ できるだけ、明るい顔や声で接し、安心できるようにしている。なるべく悪いことは伝えず、子どもの良い面を伝えるようにしている（泣いていたけど、遊べていましたよ、など）。

東海地方：私立幼稚園（定員 340 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・対象月齢：1 歳児・2 歳児（2025 年度より 6 か月児以降の 0 歳児 3 名を拡充予定）
- ・定員：計 14 名（各年齢 7 名ずつで、現在は 12 名が利用）、登録制
- ・開催日・時間：月～金曜日 8:30～16:30（保育標準時間の子どもの利用あり）
- ・月額料金：A 市幼稚園接続型小規模保育事業のため、保育料は市で算出（その他、おむつのサブスクを利用する保護者は別途月額 3,000 円程度会社へ支払っている）
- ・親子分離：親子で登園し、保育室にて受入れを行う親子分離型の預かり保育を行っている。
- ・保育担当者・人数・資格：正規 3 名、パート 3 名（休憩保障のスポット対応を含む）、保育士資格を保有する 4 名体制で通常は運営している。
- ・専用保育室：園舎 2 階の一角に専用保育室あり。
- ・園庭：登降園時に親子で自由に遊ぶことができる。
- ・昼食：あり（おやつあり）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・関連資料：上記の基本情報等が記されているリーフレット・要覧・全体的な計画・年間指導計画・月案・週案・個別指導計画の他、保健計画・食育計画・長時間保育計画がある。
- ・1 日の流れ：概ね 9:00 頃に登園、自由遊び後に 10:00 頃から主活動（各年齢のリーダーが考案）、11:00～11:30 ごろ昼食、その後午睡、14:30 頃午睡明け後におやつ、自由遊び、16:00 ごろ降園（保護者が徒歩等で送り迎えをしている）する。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・本保育室は、A 市の幼稚園接続型小規模保育事業として、平成 29 年度（2017 年度）に開設した。従前は行事を盛り込んだ保育をしていたが、給食の自園調理や園庭改革など多様な園変革の一端として立ち上げた。
- ・園児募集等を目的としたビジネス的な着想ではなく、一番は「当園への通園願望があるが働きたい保護者のニーズ」を受けて開設した。育児休業明けに預けたい保護者の願いを受け、あえて 2 歳児 14 名という形ではなく、1 歳児からの受け入れを展開した。
- ・1・2 歳児混合クラスを設置した背景として、大人になったら同年齢よりも異年齢で過ごす機会の方が増えるため、あえて年齢によるクラス分けをせず、困っていたらお互いに助けるなど異年齢の関わり合いの中で暮らし、発達のグラデーションの中で育ち合うことを重視している（当園では日常的に異年齢交流があるため、同年齢・クラスで分ける必要がないと捉えている）。いずれ 3 歳以上児も異年齢の縦割り保育で編成したいと考えている。
- ・経済的基盤：A 市から 500 万ほど補助金をいただいて開設した（改修費も補助あり）。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・学校に順応する力よりも「社会で逞しく生きていく力」を育むことを幼児教育の基盤とし

て捉え、「人間として育てたい」という願いがある。当園のモットーでもある「やりたいことを、やりたいときに、やりたいように、やりたい人と」という方針に則り、まずは「家庭以外の外の世界が好き」「保護者以外から愛情をもらえる嬉しさ」「毎日園に行きたいと思える」など、心を育むことを大切にしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当者確保・研修：開設当初、20代～60代の保育者を1人ずつ計5名の正規保育者を採用し、保育者間の世代間交流も大切にしている。また、正規の看護師（9:00～15:00勤務）とも連携をとっている。研修も、多い時は年間100時間以上を確保した年もあり、外部講師も自分たちでセレクトして学びたいことを互いに深めている。
- ・3歳以上児のクラスとの関係性：本保育室の通園児が満3歳になり1号認定の子どもになった際は、年少組（3歳児）ではなく、年中組（4歳児）で生活をしている（保育者もマンツーマンで付き添う）。3歳児はまだ個の世界に生きており複数人の集団の世界に慣れていないため、あえて年中組に配属することで、満3歳児が下の子らしく甘えられたり4歳児も満3歳児を助けたりする姿があり、「この場所が優しいんだ」と感じる事ができている。子どもが好きな保育者を選ぶ園風土があるため、接続期に関しては大きな課題はないが、子どもの変化・育ちは常々よく見るようにして丁寧に関わるようにしている。特に、本保育室から満3歳への移行期は、保育者が寄り添いながら注意深く見守り、場が変わる際に子どもが安心できるよう努めている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・手応え：経験豊富な保育者が「大丈夫だよ」と保護者に言葉がけをすることで、保護者が安心できている様子が見られ、それが子どもの安心感につながっている。また、本保育室を開設してからパートも含めて採用人数が増えたため、保育者も数多くの人に囲まれることで多様な目で見られる機会が増えたり色々なアイデアが出るようになったりし、職員間の多様性が良い刺激になっている。職員の個性を掴みながらマネジメントをしている。
- ・課題：開設時に保育経験のある保育者（保育士資格あり）を中途採用で雇い直したが、それぞれの保育経験に基づく保育観を持ち合わせながら当園の教育方針に沿って本保育室を運営する際に、対話によるすり合わせが難しかった。例えば、保育所等での保育経験を有する保育者は「怪我がないように保育すること」を意識しすぎて無意識的に子どもを柙にはめてしまう様子も見られたが、当園の場合はやりたいことを挑戦できるよう支えているため、その方針を理解し慣れるまでは苦悩があったと思われる（例：デイリープログラムに沿って子どもを動かすのではなく、子どもの生理的欲求を尊重しながら子どものニーズを叶えていくなど）。また、開設当初の半年間は、備品・教材等を買ひ揃えたがたくさん買いすぎてしまい保育者のニーズとマッチしなかったなど、難しい時期もあった。次年度以降は、0歳児の受け入れや保育時間の延長が始まるなどの変化があるため、保育者の働き方や心構えなども含め、保育者の不安感を言語化してもらい、対話の時間を多く設けたいと考えている（保育者・看護師とのカンファレンス等）。

東海地方：私立幼稚園（定員 340 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・新卒で3年間私立幼稚園に勤務、その後20年前に公立保育所で臨職・パート等を経験し、2019年から出身園でもある当園の本保育室に勤務し始めた。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・幼稚園の一角で運営しているため、足置き台やおまるなどを活用して、1・2歳児に対応できるよう環境を工夫している。
- ・2階の保育室から職員・園児が分かれて園庭に出ることは難しいため、時間差を工夫しながら職員で園児を見守れるよう努めている。
- ・1・2歳児の自由遊びは一緒に行っている。その反面、活動時や生活の軸となる場面は、発達差や時間の流れに考慮した担当制に基づき、分けて行っている。朝の会・活動なども少しずつ時間をずらすことで、保育者との愛着関係がさらに深まり、保育者も時間をかけてゆっくり対応できる。基本的生活習慣に関することは個別的対応が中心となるため、一斉に活動するのではなく、担当保育者と安心して関係が築けるようにしている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・年間指導計画と月案（1・2歳児合同）、週案（各年齢別）に基づいて保育を実践している。その他、個別指導計画・長時間保育指導計画・食育計画・保健計画も立てている。基本的には週案（週のリーダーが立案）で進めているが、その日の主活動は、当日朝に柔軟に対応しながら決めることが多い。
- ・職員は昼休憩を時間差で取るため、じっくり対話する振り返りの時間がなかなか取れない現状がある。ただ、掃除後などに園児の基本的な情報共有はできており、16:30過ぎの保育後に正規3人で日々の振り返りの時間を設けている。月案会議は月に1回午睡時に実施している。

(4) 園の中での自分の役割：3歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・正規の保育者は、施設長（兼1歳児担当）1名、保育者（2歳担当：インタビュー協力者）、2歳担当1名（新規採用）の3名であり、パート保育者3名（日替わりで流動的）も含め、通常は1日4人体制（10:30-12:30のみ5人体制）で保育をしている。当日の計画は、保育者間で毎日共有している。
- ・月1回の主任カリキュラムの打ち合わせで、3歳以上児とのカリキュラムとのすり合わせを行っている。

(5) 園の中で0～2歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

- ・手応え：園全体が「子ども主体」を念頭において保育をしているため、様々なことを子どもから発信してくることが多く、0～2歳児の育ちが際立っていると感じている。
- ・課題：第一に、人員配置の見直しが挙げられる。以前は、施設長は保育者業務と兼任せず独立していたが、2024年度からは施設長兼保育者（1歳児担当）として携わっている。兼任業務は監査時の多忙などを傍らで観ていて実際は厳しいと感ずるため、人的配置の見直しを要望したいと考えている。第二に、保育環境（ハード面）が挙げられる。

幼稚園の園舎の一角を利用した保育室であることから、保育室の中に手洗い場・トイレがないため、動線等を含めて園児も保育者も大変さを感じている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・当園には自然物がとても多い園庭があるため、砂遊び・どんぐり拾い・葉っぱ集め・虫探しなど、自然物に触れる機会が非常に多い。観察したり興味を持ったりできる機会が多く、子どもにとっての学びにつながっている。
- ・以前は子どもに怪我をさせない意識が強く、乳児園庭がほしいと考えていたが、当園で「怪我から学ぶことを保障する大切さ」を学び、子どもへの信頼に基づく危機意識へと変わってきた。経験する大切さを意識しつつ、その中で最大限の注意を払って守ることを重視している。乳児向けの園庭遊具ではないが、3歳以上児を見ながらやりたい気持ちや向上心をもてるようになり、色々と挑戦できることが1・2歳児の学びになっている。また、3歳以上児も1・2歳児を支えようとする姿も見られ、互恵的な学びにつながっていると感じている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・通い始めの最初の1週間は、慣らし保育（親子分離型：9:00～10:30が1日、9:00～11:00が2日、昼食を含む9:00～12:00が2日）を丁寧に行い、家庭から徐々に移行できるようにしている（2週目以降：9:00～15:30まで午睡・おやつも含む）。
- ・満3歳児・3歳児への移行の際は、本保育室の担当者も一緒に付き添いながら1号の子がいる保育室を共に利用するなど、まずは場に慣れることを重視している。一緒に食事を摂ることや散歩に行くこともある。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・毎年2-3月に個別面談や保護者懇談会を開催している。概ね満足していただいており、知り合いにも紹介したいという声もある。保護者のSNSグループもあり、保育室の通園児の保護者同士で同窓会を企画するなど、保護者間の交流・つながりが見られる。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・毎日保護者とは送迎時等の対話を大切にしている。育児に関する悩みも保護者から相談されることも多いが、園生活の様子を伝えて家庭でゆっくり甘えられるように促すなど、安心感をもって子育てをしていただけるように配慮している。
- ・連絡帳だけでなく、ICTアプリを活用して家庭と細かい情報共有をしている。毎日お子さんの写真を3枚ずつ全保護者へ午睡時に送っており、昼休憩中に閲覧して安心できるよう努めている。また、1日の終わりに、今日の保育の様子をドキュメンテーションとして配信している。
- ・2024年からサブスク（おむつ/口拭き/エプロン）も導入した、利用率はまだ低いものの、保護者から楽になったという声も届いている。

近畿地方：私立幼稚園（定員 320 名）、園庭開放あり

【副園長】

1. 基本情報

A クラス

- ・対象年齢 1 歳～2 歳 ・クラス数：月木コースと火金コースの 2 クラス
- ・定員：5 月入会 各 8 名程度、(9 月入会+若干名) ・登録制 ・親子分離
- ・保育時間：9：30～13：30
- ・利用料金：1 日 1,800 円×日数+諸費 2,000 円（月）週 2 回完全給食（1 食 4,50 円）
入会料 5,000 円、通信事務手続き費 1,000 円
- ・保育担当者：2 名 ・保有資格：幼稚園教諭・保育士資格
- ・専用保育室：あり ・園庭：共有

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・実施目的：同年代の子どもと遊び触れ合える場の提供と保護者の仲間作り
- ・一日の流れ：9：30 登園、身支度、室内遊び、10：15 朝のつどい、10：30 戸外遊び、12：00 お昼ご飯 排泄。着替え、室内遊び、13：00 または 13：30 降園、保護者へのフィードバック
- ・指導計画等：年間を通して、親と離れて遊ぶ中で、生活に必要な習慣を少しずつ身に付け、人やものとのかかわりを知ることのねらいとして、教育課程に位置づけている。月間指導計画を定め、毎回の計画と記録を通して、子ども理解に応じた弾力的かつ柔軟なカリキュラムの編成を行っている。保護者には、毎回降園時に子どもの姿をフィードバックするほか、ドキュメンテーションを通じて、子どもの具体的な姿と共にねらいや育ちを発信している。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

1994 年、月 2 回、絵本の貸し出しと園庭開放を主軸とした「A クラブ」が発足。その後、毎週木曜日、親子で遊ぶことができるコーナーやリズム体操、親子のふれあい遊び、歌、お話の時間など、活動の幅が広がる。子育ての仲間が広がり、育児相談の機会なども設けるようになった。参加費無料で、参加対象年齢も幅広く、毎回自由参加方式で活動。

2000 年、発達的に活動の幅が広がってくる 2 歳児の親子を対象に、同年齢の親子で楽しむ登録制の「B クラブ」が発足。月 2 回、お散歩や水遊び、クッキングなどさまざまな活動を通してつながりを深める。在園の子どもの様子や保育理念を説明していくことで、保育の理解が深まった。現在は、月 2 回、2 クラスそれぞれ 12 組が利用。

2005 年、子どもだけで過ごす A 組が発足。就労に拘らず、子どもにとって豊かな体験の場であり、多様な保護者のニーズに応える場として機能している。満 3 歳児クラスの人数の増加とコロナ禍を受けて、対象を 1 歳 5 ヶ月に引き下げ現在に至る。2015 年には、親子で過ごす C クラブが発足。子どもを真ん中に、多様な保護者の子どもへの思い、ニーズに応えるきめ細かな子育て支援を行っている。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

保育者のかかわりや環境の構成を通じて子どもたちが安心し、そのなかで、遊び、食べ、

寝ることを大切にしている。愛着を十分に感じながら自己発揮して欲しい。また、全ての源としての身体の育ちがある。本能の時代に、身体を十分に動かして遊ぶ経験を大切にしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

（1）担当者の確保

担当は非常勤の先生にお願いしている。自園の元教職員や保護者をリクルート。園をとて理解してくれていることが強みである。子どもとの愛着関係を第一に考え、シフト制をとっていない。先生が変わらなくて済むように、最大8時間で保育を運営している。特に、土曜日は家庭保育への協力をお願いし、先生たちが安定して子どもたちと過ごせるようにしている。これによって、子どもの生活が安定し、子どもも大人も安心できる環境を確保できている。

（2）運営体制と3歳児以上のクラスとの関係性

各クラス2名で運営。満3歳児クラスとの交流は多い。園庭などは、朝礼で打ち合わせで、開いている時間帯を使うようにしている。A組の1歳児は、満3歳児クラスのB組に接続し、A組の2歳児は年少クラスに接続する。

（3）記録、計画等

年度当初に基本指針を全職員に渡し、共有する。保育後に記録と振り返りを行い、月間指導計画に基づいて次の計画を立てる。また、ドキュメンテーションの発信を通して、育ちの共有を行う。特に保護者へのフィードバックを大切にしており、「子どもも親も先生もみんなチームとして育っていく「共育」をコンセプトとして掲げ、子育て支援に力を入れている。

（4）保護者のニーズ

コロナ禍を超えて、様々な働き方を保護者が選ぶようになっていて、子どもと向き合う時間を大切にしようとする保護者も増え、15:00や17:00にお迎えに来ることがとても増えた。家族で協力し合って、子どもにとってよい生活時間を確保しようとしている。子どものことを真ん中において、保護者の多様なニーズに応えられる子育て支援の仕組みづくりをしている。保護者の安心が、子どもの安心につながるので、仕組みづくりと共に、積極的なコミュニケーションをとることで、保護者の安心を導くことを大切にしている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

子どもは自ら育つ力を持っている。やわらかな大人のかかわりと園の環境を通して、一人一人の子どもが自分を大事だと思い、自己発揮できていることに手応えを感じている。以前、日本語がわからないフランス人の子どもがいて、最初に覚えた言葉が「みて」と「もういい」だった。自分を見てほしいという自己肯定感と、おもしろいことを何度でもやりたいという意欲を感じ、保育の手応えを感じた。子どものやりたいことにとことん付き合うこと、大人の時間で区切らない子どもの生活を大切にしていきたい。

課題としては、保護者の子どもの姿を認める幅が広くなりすぎていることがある。家庭で許されることでも、社会的な場面で許されないことも多い。子どものペースを守ることでも大事だが、行き過ぎることはよくない。保護者同士楽しいことでつながりつつ、様々な人とのかかわりでの葛藤を乗り越えていけるよう支えていきたい。

近畿地方：私立幼稚園（定員 320 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A 組】

Ⅰ. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

15 年（幼稚園教諭 2 種免許・保育士）

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

初めての母子分離なので、とにかく子どもにとって安心できる存在になることを大切にしている。また同じお部屋、同じ先生、同じおもちゃなど、基本的に変わらない安心できる環境を準備している。前半は室内遊びを楽しみ、その後体操や歌を歌って朝の集いをし、そこで子どもたちに活動の予定を分かりやすく伝え、お散歩に出る。その後、園庭で遊ぶ。お昼の後は、室内で遊び、12:50 に片付けて絵本を読んで降園。子どもの興味関心に応じて、さまざまな活動が経験できるよう工夫している。

(3) 保育の計画と振り返り

保育後に記録を取り、振り返りを行っている。その記録と期のねらいに応じて、次の活動の計画を立てるようにしている。

教育課程については、編成の途中である。今までは、2 歳児を対象にしていたので、満 3 歳児クラスと共通にしていたが、1 歳 5 ヶ月からになって 1 歳児が増えているので、その姿を入れ込んでいかなければならないと思っている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

園内研修で、学期ごとに振り返りを共有している。そのときに、指導計画と一緒に立てる。あと、年度初めにも指導計画の見直しを行っている。他の学年との関係性として、特に満 3 歳児クラスとは近いこともあるので、連携を取りながら進めている。朝礼では、今日の予定や注意事項など、みんなで共有しなければならないことを確認している。そこで、園庭の使用状況などが分かり、戸外でゆっくり遊ぶ時間を調整したりしている。

(5) 園の中で 0～2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

保護者と園がチーム育児として子育てを楽しみ、それぞれの立場で育っていく「共育（トモイク）」を理念としている。保護者がクラスの子どもたちの成長を我が子のここのように思ってくれる姿をととても嬉しく感じている。

週 2 回登園なので、慣れるまでに時間がかかるが、保護者と離れる時に、保育者に抱っこを求めてくれると、安心や信頼を寄せてくれていると感じる。以前、ほとんど声を聞くことが出来ず、なかなか笑顔を見せてくれない子がいた。けれどお家では、「すごく先生のことを好きだ」と言っていると聞いていた。だんだん慣れてきたある日、「先生は私のことを大好きなんだよ。」とお家で話したと聞いて、とても嬉しかった。私たちが大事にしていることが、その子に伝わっていることがわかって、本当にうれしくて、一番印象的だった。

難しいこととしては、1 歳児と 2 歳児の差が大きいので、製作一つとってもいろいろな姿がある。今回のリースづくりで言えば、ボンドの感触をおもしろいと思う子もいれば、強い拒否を示す子どももいる。そうした姿に対する個別対応を心がけている。

また、2 歳児は言葉が通じるけれど、1 歳児は言葉が通じないところが難しい。例えば、彼らに分かりやすく伝えるために、例えば、机にのったらいけないということを、ちょっとした寸劇にしてこけて見せたりしている。2 歳児が 1 歳児に声をかけてくれることもある。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

お話の時間を楽しみにしている。その時ブームになっている絵本、例えば「犬のおまわりさん」「だるまさんがころんだ」など、全体で読むと、とても楽しそうに集中して聞いている。歌や体操なども好き。

まだまだ身体の使い方が未熟な部分があるため、ケガをしないように充分気をつけている。頭をぶつけたり、こけたりしない様に、常に予測を立てたり、部屋を広くしたりしている。また、言葉で伝えることが難しいため、体調の変化などすぐに気づけるように、普段から注意している。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

母子分離が難しいとき、例えば、ガーゼを持っていたら安心できたり、カバンを持ったままで居ることやお人形を持っていることが安心だったり、その子の安心できるものを大事にして、徐々に慣れていけるようにしている。また、兄や姉がいる場合も多く、ちょっと力を借りて一緒に遊んでもらうこともある。その存在を拠り所にしながら、徐々に慣れていけるようにしている。

移行期について、A組の子どもたちは、満3歳児クラスや2歳児クラスへと移行していくので、円滑な接続が出来るように、給食を一緒に食べたり、遊んだりする時間を子どもの様子をみながら取るようにしている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

保護者同士がとても仲が良く、その関係は5歳児になっても続いている。週に2回合う中で、さまざまな情報交換をしており、子育ての参考にしているようだ。また、「共育」という活動を取入れ、子どもたちと一緒にお昼を食べ、遊ぶ時間を設けている。子どもの様子を見て、2学期に1回、3学期に1回から2回行う。実際に他の子どもとかかわり、いい意味でその子どものことを分かってきて、トラブルなどがあっても許容範囲が広がっている。一人一人の子どもを認めてくれ、子どもの成長と一緒に喜んでくれることがとても嬉しい。

(2) 保護者を意識して行っていること

子どもが自分の言葉でその日あったことを伝えるのは難しいので、お迎えのときにフィードバックすることを大事にしている。学期末にはPP資料などを通じて、子どもの育ちを共有するようにしている。その他にも、どちらかの先生が一人一人の保護者とコミュニケーションをとり、子どもの様子を具体的に伝えるようにしている。最初は緊張していても、だんだんと保育者に安心してくれるようになり、それが子どもたちの安心を導いている。親子で安心してきているタイミングが、なんとなく分かる。

特に、おもしろかったこと、かわいかったこと、成長したことなど具体的なエピソードを伝えることが大事だと思っている。あと、タイミングも重要で、保護者の様子を見て話すようにしており、とにかく、子どもの小さな成長を共に喜び合うことを大切にしている。

東海地方：私立幼稚園（定員 100 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A クラブ（一時預かり）

- ・対象月齢：1 歳 6 ヶ月～未就園児
- ・定員：1 日 10 人、登録制
- ・開催日・時間：月・火・水・木、9:00～14:00
月曜日は原則 1 歳 6 ヶ月～2 歳未満児のみ
- ・料金：入会金 5,000 円、
月会費 週 1 回 6,000 円、週 2 回 11,000 円、週 3 回 15,000 円、週 4 回 18,000 円
- ・親子分離：親子で登園後、親は園を離れ、子どものみ預かっている。
- ・保育担当者・人数・資格：4 人在籍、1 日 2～3 人で保育を行うことが多い。
保育士資格および幼稚園教諭二種免許を所有。
- ・専用保育室：あり ・園庭：在園児と共有して使用
- ・昼食：なし（週に 1 回パン給食利用可。味噌汁、スープ、カレー等の場合もあり）

(2) B クラブ（1・2 歳親子教室）

- ・対象月齢：1 歳児、2 歳児
- ・定員：1・2 歳児それぞれ 10 組、登録制
- ・開催日：年 18 回
- ・料金：入会金 3,000 円
前期会費（4 月～9 月）7,000 円、後期会費（10 月～3 月）8,000 円
- ・親子登園：親子で様々な活動を楽しめる親子教室を実施。
- ・保育担当者・人数・資格：A クラブと兼任。
- ・専用保育室：あり ・園庭：在園児と共有して使用
- ・昼食：なし

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

(1) 指導資料

- ・年間計画表（資料参照）
年 4 回「特別企画」を A クラブ・B クラブ合同で実施。
いもの苗植え、夏祭り、かけっこ・芋ほり、クリスマスパーティーを行っている。
- ・指導計画等はなく、その日利用する子どもの月齢や育ちにに応じて保育を行っている。
- ・毎月、季節の制作を行っている。

(2) 広報資料（それぞれ資料参照）

- ・チラシ（保護者向け広報資料）
- ・A クラブのご案内（保護者向け説明資料）

3. 0～2歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・園児獲得と保護者の子育て支援のニーズに応じ20年前に開始。(幼稚園は創立60年)
- ・Aクラブ開始にあたり、保育園経験のある保育者を雇用。
- ・当初は、職員間で、「小さい子は保育園に任せる」／「子育てを助ける」という2つの意見が対立していた。
- ・当初は在園児の園舎で行っていたが、Aクラブ・Bクラブ専用の園舎を増築。(敷地は同じであるが、園舎としては独立して棟が立っている)
- ・来年度(2025年度)よりこども園化。Aクラブ・Bクラブの園舎内で、1・2歳児合同クラス10人を開始。今年度はその準備を行っている。
- ・こども園を開始する理由は、少子化による園児数減少の中で園を運営していくため。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・幼稚園として長くやってきているが、要領改訂の中で「遊びこむ」ことについてもっと考えなければならないと考えるようになった。その中で保育園に近いAクラブがそれを先んじてやってくれていると感じている。具体的には、子どもに寄り添って、子どもが遊びを通して育っていくのを見守っている。幼稚園部(在園児)の保育者とAクラブの保育者が双方に交流してよさを交換していった。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ(園・保護者・地域)、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・近隣の他の私立幼稚園で未就園児保育を行っているところがあまりなく、地域におけるニーズは高い。そのため、幼稚園からは他の園に入園する家庭も利用するが、キリスト教の考えから子育てを助けようという思いでこの園は始まっているため、お断りはせずに枠がある限りは受入れを行っている。
- ・本園の離職率は低い。保育者のモチベーションが保育に直結すると考えて運営している。
- ・Aクラブには4人の保育者を確保しており、幼稚園部に比べて子どもの人数に対する保育者の人数が多いため、幼稚園部からは理解が得られないこともあったが、日々の交流とともに人事交流をここ1～2年で行うようにしている。
- ・研修については、幼稚園部とAクラブの保育者が一緒に、市の幼児教育センターの研修を受けに行っている。園内研修については分かれて行っている。こども園化すると、研修の時間がこれまで以上に取にくくなるため、工夫が必要であると感じているとのこと。
- ・こども園化に向けて1・2歳児合同クラスを開始するにあたり、市の幼児教育センターの仲介で近くの公立保育園を見学することができ、環境やおもちゃ、長時間保育の生活の流れ、遊び等、非常に参考になった。その後、交流の話も出ている。競合関係のため、公立園を見学することができるとは思っていなかったが、センターのおかげで実現でき、大変よかった。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・ロコミでいらっしゃる方や、上のお子さんは他の園に通っていても下の子はAクラブに入りたいという方もおり、地域からのニーズがあることを感じている。
- ・課題：職員間の交流、来年度からのこども園化に向けた準備

東海地方：私立幼稚園（定員 100 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・幼稚園を 3 年務めた後、転職し保育園、その他の職種を経験。その後、A クラブ立ち上げの際に本園に雇用され、現在まで 15 年務めている。保育歴は約 20 年。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・安全面：月齢の違いによるおもちゃの配慮、誤飲防止のためのおもちゃの見直し
- ・死角が生まれにくい環境づくり

(3) 保育の計画と振り返り

- ・指導計画等はなく、その日利用する子どもの月齢や育ちに応じて保育を行っている。
- ・保育日誌に、来た子どもの氏名、排泄、食事、遊びの記録を行っている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・幼稚園部（3 歳以上）の保育者とは普段は異なる園舎で違う動きをしている。頻繁ではないが、幼稚園部のお店屋さんごっこに遊びに行ったり、A クラブに遊びに来てもらったりと交流する機会をもつようにしている。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・何かをやらせようと思わない。こちらがさせようと押し付けるのではなく、その子ができるようになるのを待つという姿勢でかかわるようにしている。行動の獲得が目的の場所ではないと思っている。
- ・お母さんと離れても大丈夫、集団が安心できる場所になることを大切にしている。
- ・思いをわかってあげられないときは、やはり難しさを感じる。
特に月に 4 回程度の利用者もいるので、子ども理解の難しさはある。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・入会したときには遊びを見つけられない子どもも、家庭で好きな遊びなどを取り入れたり、回数を重ねたりする中で、自分でしたい遊びを見つけたり、周りの友達に目を向けて遊びが広がったりするのを見ると子どもの成長を感じる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3 歳児クラスへの移行

- ・慣らし保育を行っている。初回は 11:30 まで。その後、通い始めの子は 10 分早くお迎えにきてもらうようにしている。（他の子のお迎えを見ると寂しくなるため）

- ・通い始めの時期は特に子どもの思いを聞いて応えるようにしている。
（「門の方を見ていたい」という思いに応えて一緒に外に出て眺める等）
- ・3歳児クラスへの移行にあたっては、保育者間で引き継ぎを丁寧に行っている。
- ・4月、Aクラブの子どもが少ない時には、3歳児クラスに入って一緒に保育を行っている。

3. 保護者視点

（1）保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・就園前に集団生活を経験させたいという思いで預けられる方が多い。
- ・子どものことばが出るのが遅いと悩む保護者の方もいる。Aクラブで友達とかかわることを通してことばが出てきて喜ばれている。
- ・Aクラブに預けることで、「モーニングに久しぶりに行けました」とおっしゃる保護者の方もおり、保護者のリフレッシュの側面もある。

（2）保護者を意識して行っていること

- ・保護者の方のお話を聴くこと
- ・クラスだよりの発行
- ・今年度より、保育参観後、保育者と職員でティータイムをする交流の機会を計画・実施

九州地方：私立認定こども園（定員 240 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A コース

- ・対象月齢：1 歳児～幼稚園・保育所就園時まで
- ・定員：A コース B コース合わせて 25 名、登録制
- ・開催日・時間：月～金、8：30～13:00
- ・月額料金：1 歳児 34,000／月、2 歳児 33,000／月
- ・親子分離
- ・保育担当者：4 人、幼稚園教諭、保育士資格有（1 名 B コースとの兼任）
- ・専用保育室：あり
- ・園庭：受入れ時に使用。3～5 歳児クラスと同様の場で遊ぶ
- ・昼食：あり

(2) B コース

- ・対象月齢：1 歳児～幼稚園・保育所就園時まで
- ・定員：A コース B コース合わせて 25 名、登録制
- ・開催日・時間：月～金、7：45～18:00
- ・月額料金：1 歳児 45,000／月、2 歳児 43,000／月
- ・親子分離：親子で登園
- ・保育担当者：3 人、幼稚園教諭、保育士資格有
- ・専用保育室：あり
- ・園庭：受入れ時に使用。3～5 歳児クラスと同様の場で遊ぶ
- ・昼食：あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・日案、週日案、月案等の指導計画を詳細に立てている。以前より 3 歳クラスへのつながりを意識している。広報資料は入園の広報としては園の HP と市の HP がある。また、入園している保護者向けのものとして「C 通信」がある。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・もともと 3 歳、4 歳、5 歳の子ども達の育ちの前には 0、1、2 歳の子育ちがあるということ、1、2 歳児の育ちの研究機関として作ったのがこの認可外保育施設の「C」という形になった。もともと幼稚園のシステムがそのまま 1、2 歳児においているので、預かり保育と教育時間の保育のコースがある。
- ・現在の形になるまでは、研究機関というよりは 3 歳児への持ち上がりをするための教育、つまり 2 歳児を 3 歳児のように育てていたっていうのがあった。そこから本当に 2 歳児の育ち 1 歳児の育ちでどうなんだということを考え、今のような保育形態になっている。先生達には 1 歳児は 1 歳児の育ちをしっかりと行ってください、2 歳児には 2 歳児の育

ちを担ってください、それ以上のことはしなくていいというようなことを言っている。早期教育はしないという考え。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ まずは遊ぶこと食べること寝ること排せつ。その中で基本的な生活習慣が身につくこと。
- ・ 一日の生活の中でいろいろな経験があればいいなと思っている。ゆっくりする時間や、思いっきり遊ぶ時間や人と関わる時間や自然と関わる時間はとても大切にしている。
- ・ 10 の姿や 3 つの柱等については最終的には考えているが、未就園児のカリキュラムの中では、まずは経験や体験の中で不思議だなあ楽しいなあ面白いなあ気持ちいいなあという感覚を大切に、3 歳以上の教育につなげたい。
- ・ 友達と一緒に遊べるような空間作りを意識している。未就園児クラスではおもちゃの数は多く用意し、喧嘩にならないようにしている。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 全職員が 1 歳から 5 歳までの育ちを知った方がいいと思っているので、部署はどんどん変えている。核となる先生も変える。子ども達の育ちを理解して担任をすることはとてもいいことだと考えている。
- ・ 3 歳児クラスとの接続は、保育の中で徐々に幼稚園の生活には近づけている。また、カリキュラムも全て繋げられるようにしている。保育では、幼児部の先生と 3 歳児の先生が連携を取り合っただけでクラスの中に遊びに行ったりをしている。接続といっても、子ども達がちゃんとできるようにしてくださいとか、4 月になったら椅子にちゃんと座ってお利口さんになろうみたいなことはやめてくださいっていうことを先生達に言っている。
- ・ 全職員がタブレットを持っている。クラウドですべての情報を共有している。研修については全職員が参加するものを年間 4、5 回設けている。
- ・ 園内研修についても、例えば 1、2 歳児でミーティングをしながら自分の保育や子どもたちの課題について話をしながら進める体制を取っている。

6. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・ 未就園児においては、家庭生活とのつながりを意識している。3 歳以上は幼稚園教育要領があるが、未就園児は福祉、養護の考えが近いので、お家の人だったらどうしているだろうということを考えて保育を組み立てることが意識できている。
- ・ 入園説明会等で、園としてこういう子ども達を育てていきたいと説明し、理解して入ってもらっているのだからそこに賛同している保護者が多いと感じている。
- ・ 職員もいろんな部署を経験することで成長がみられる。また、組織が活性化している。
- ・ この年齢の子どもとの愛着をどう育てていくのか。親と同じは難しいが、保育者との関係の中で子どもに寂しさを感じさせないようにするにはどうすればいいのか。子どもの安心があってこそその園である。
- ・ 園内に限らず、よい保育を行っている園にどんどん見に行っていきたい。

九州地方：私立認定こども園（定員 240 名）、園庭開放あり

【保育担当者：B コース】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・今年度で 14 年勤務。これまで 3 歳以上のクラスも複数、複数年担当している。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・家庭的な雰囲気の中で過ごすというのが「C」保育の大切にしているところ。1、2 歳はまだお家で過ごしている子どもも多いが、仕事でやむを得ず預かってほしい場合もあるので、なるべく家と同じ雰囲気で、例えばトミカで遊んだり、ゆっくりちよっとごろんとしながら遊んだり、教育的な遊びよりは、家でやっているような遊びの雰囲気を作るのを大事にしている。
- ・雨が降っていない日は、毎日校外遊びがある。その中で他の年齢のお子さんと園庭を共有している。その中で自然と関わりができるようにしている。上の学年の子ども達が小さい子を世話したり、1、2 歳の子ども達が憧れたりという気持ちと一緒に遊ぶ中で育めることを期待している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・保育の計画は日案に沿って行う。13 時までで帰る子どもと夕方まで預かりをしている子どもがいる。13 時までは皆同じ生活をしていて、それ以降別の生活になる。8 時半から 9 時が登園なので、ここから準備をして、10 時ぐらいからは校外遊びをできるようにしている。11 時ぐらいまで遊び、11 時 15 分ぐらいに外の片付けをして、11 時半過ぎから給食の準備をし、12 時には食べられるようにしている。そこから、13 時帰りの子ども達は帰る準備をする。夕方までお預かりの子は 13 時から 15 時までの 2 時間の間でお昼寝。そして 15 時から 16 時半ぐらいまで遊びをして、17 時ごろにお迎えがある。
- ・振り返りは一緒に組んでいる先生達と会話の中でしっかりと共有をしている。また、月に 2 回全職員を集めたミーティングを行っていて、その中で教育方針を踏まえて現在こういう子ども達の姿があるので、こういう生活を身につけたい等については記録にとったものを共有している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・園での自分の役割は、ここに 14 年勤務しているので自分の担当の子ども達だけではなく、他の学年の子ども達もみながら他の保育者と関わることを意識している。3 歳児以上の保育者とも、クラウドでデータを共有しているので、必要に応じてアクセスしている。

(5) 園の中での 0～2 歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

- ・手応えは、日々の成長が見えるのが一番嬉しいところ。また、関わる時間が長いので、保護者と同じ気持ちで保育に当たれる所ところも嬉しい。難しさは、幼稚園は 14 時で子どもが帰るが、18 時までいる子ども達をずっと見ていく中で、記録や振り返りや保護者対応等の時間を確保するのが難しい。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験(学び)になっている事例

- ・ 五感を使って遊ぶ体験を大事にしてあげたい。例えば気温が高い日には裸足になって泥遊びを楽しむこと等。ちょっと苦手な子とかもいるが、友達がやっているのを見て楽しいな、やってみたいなという気持ちが少しずつ育まれるようにという願いがある。全体的にダイナミックな遊びがとても好きである。
- ・ 1、2歳はまだ生活の一部を幼稚園でやっているの、生活をどう安定させてあげるのが難しい。遊びの中から手先を使った遊びや、五感を使った遊びをどう充実させて経験をたくさん積んで…というところは悩みながら、話し合いながらそこは決めている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス(親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて)、3歳児クラスへの移行

- ・ 保護者の方も初めての園生活に不安を感じているので、保護者の送り出したい気持ちと、我が子と離れるのが寂しいなって気持ちも汲み取る。人的環境の保育者が安心できる環境になり、保護者の気持ちを受け止めることが大切。その中で、子ども達一人一人好きなのがだんだん見えてくるので、絵本を準備したり、おもちゃを準備したりと、幼稚園に自分から行きたいという気持ちになる声かけや環境を作っている。
- ・ 3歳児クラスに入るとどうしても一斉活動も増えてくるが、2歳児の3月までは家庭的な雰囲気がベースにある。したがって、一斉活動まではしないようにはしている。制作活動はいつもしているが、絶対参加しなければならないという教育的な感じにはせず、やりたければ自然とおいでという雰囲気づくりを心掛けている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・ 4月5月は保護者の方も心配していることを感じたが、毎日保護者と話をする中で、保護者もちちに安心して助けてくれているんだなという表情に変わっていくのが分かる。また、保護者から子育ての悩みや家での姿を話してくれたりするようになる。信頼して任せてもらっているんだなと感じる。発表会等があると、終わった後に保護者から連絡ノートですごく子供たちの頑張っている姿が見られて嬉しかったですという声や、先生達がすごく内容を子ども達が好きなものと考えて経験をさせてくださっていることに感謝しますっていう言葉とかを聞くと、子ども達と一緒にやってきてよかったなっていうのは感じる。
- ・ 保護者同士の関わりは、仕事をされている方の方が多いので、朝の送りと帰りの迎える時しか顔を合わせることがない。参観日で会う際に、よく名前が出る子ども保護者と会話をしている姿は見かける。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・ 保護者を意識して行っている事としては、子どもの様子を具体的に伝えるというところ。これは職員全員で共通理解をしている。今日はこういう姿がありましたや、微笑ましい姿がありましたってことはしっかり伝えている。成長がすごい著しい年齢なので、その成長と一緒に喜び合えるような言葉がけを意識している。

四国地方：公立認定こども園（定員 130 名）、園庭開放なし

【園長】

1. 基本情報

(1) 一時預かり

- ・対象月齢：満 1 歳から就学前の児童（ひとり歩きしていない場合、利用施設に相談）
- ・定員：登録制
- ・開催日・時間：月曜～土曜、8：30～17：00
- ・月額料金：1 日（8 時間）1,500 円
- ・親子分離：親子で登園し、子どものみの預かり。
- ・保育担当者・人数・資格：2 名・幼稚園教諭二種免許状、保育士資格
- ・専用保育室：専用保育室を使用している。
- ・園庭：園庭を利用することもある。
- ・昼食あり（おやつあり）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・書面による計画等はなく、子どもの思いに寄り添った遊びを行っている。行政が行っているアプリを確認することで、利用案内や空き状況なども確認できる。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・行政の取り組みとして、各地域に一時保育を開設する方針で進める中で、本園においても一時預かりが行われている。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・慣れない環境での生活となるので、子どもができるだけ安心してすごせるようにしている。年齢的に好きな遊びを用意したり、前回利用した時に気に入っていた遊びを準備しておいたりしている。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・本園のある地域では、1 号認定児も多く、3 歳児の入園前まで家庭で過ごす子どもが少なくない。そのため、園近くの児童館の利用者も多く、児童館で情報を得て、一時預かりを利用する家庭も多い。その児童館職員は、本園に読み聞かせボランティアなどにも来ており、児童館職員と園の間でも、この事業について、情報交換をすることができている。保健センターとも連携がとれるため、一時預かりの情報を、保健センターからも発信できる。こういったことから、地域ぐるみで一時預かりの情報を発信し、一時預かりの存在を把握していない保護者や、利用をためらっている保護者も利用しやすい環境が作られている。
- ・リフレッシュ利用者も比較的多く、専業主婦家庭の支えにもなっている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・本園のある地域では、園の設置状況から、ほぼすべての子どもが本園に入園する。そのため、一時預かり利用児もいずれは、本園に入園する子どもとなる。その子の姿を、入園した後の保育に生かすこともできる。
- ・利用する子どもには、発達気になる子どももあり、継続的な支援が必要と思われることもある。そのため、毎日家庭で養育する保護者の負担の大きさも感じ、一時預かり利用が保護者と子どもが離れることができる貴重な時間となっておるのではないか。これもリフレッシュ利用かもしれないが、いわゆる保護者が遊びに出かけるリフレッシュではなく、養育に困難さのある子どもと離れ、保護者の気持ちを休めるリフレッシュになっている。さらに、保育者も、入園後の子どもの保育につなげることができる。

四国地方：公立認定こども園（定員 130 名）、園庭開放なし

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 2 名の保育者が準備くださっていたので、2 名から伺った。2 名のインタビュー内容を区別することなく、記載する。

保育者 3 年で、預かり保育担当 1 年目。

保育者 20 年で、預かり保育担当 10 年目。

2 名とも会計年度任用職員。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 初めての場所であるので、安心して、安全に遊んで欲しいと思い環境を設定している。
- ・ 好きな遊びが選べるよう、手が届く範囲にいろいろなおもちゃを用意するようにしている。保育室が非常に広いため、ボール遊びなど、体を動かす遊びも可能。
- ・ トイレは保育室の真横にあり、廊下に出ることなく使用でき、子どもたちの導線に配慮している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 書面による計画等はないものの、子ども達が好きな遊びができるように、年齢に配慮した遊びや、子どもの好きな遊びを用意している。
- ・ 「一時預かり（一般型）日誌」をつけ、振り返りをしている。リピーターも多いため、子どもの発達の様子や遊びの姿も継続して把握できる。
- ・ 担当保育者 2 名であり、常時保育の振り返りも可能。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 3 歳以上児と一緒に遊ぶということは少ない。
- ・ 近い将来、入園する子どもたちではあるので、その年齢のクラスに入って一緒に（3 歳未満）遊ぶことはある。その際、一時預かりの担当者も一緒にそのクラスに入る。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・ たまにしか来ない子どもは、好きなことが分かるまでは難しいことがある。母親から離れることが難しい場合もある。
- ・ また来たいと言ってくれる子どもがいることも多く、うれしく思う。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 年齢なりに経験しておいてほしいこと（例えば、衣服の着脱など）が、経験できていない場合もある。少しの関わりで、変わってきていることが、一時預かりでも見られることもある。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・母子分離が難しいのは、一時預かりでは、よく見られること。ずっと抱っこということもあるが、子どものことをしっかりと受け止めることで、安心感が生まれてくる。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・先述した年齢なりに経験しておいて欲しいことが、できていない場合、保護者にも支援する。できていないと伝えるのではなく、「〇〇をやってみたら、上手にできましたよ」と保護者に伝え、家でもやってみますということが多くある。実際に、次の利用で、できていることもあり、些細なことではあるが、保護者の前向きな子育てにつながっている。
- ・一時預かりであるので、保護者同士の関りが生まれるということは少ないが、近くの児童館で知り合いとなっている保護者（きょうだいが在園児）が、一時預かりを利用した保護者や子どもに声をけるという光景はあり、温かい雰囲気になる。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・前向きな言葉かけに努め、園の様子を伝え、安心していただけるようにしている。

近畿地方：私立幼稚園（定員 345 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

A クラス

2 歳児クラス：週 5 回登園。子どものみ預かり。登録制。2018 年から開始。最初は満 3 歳児クラスとしてスタートしたが、入園時期が拡散されるのですぐに 2 歳児クラスに。

8:30～14:30 3 号該当者にはその後の預かりも実施。1 クラス開設。保育教諭は 3 名。

B 教室

在宅 1・2 歳児親子登園支援事業：毎週木曜日開催。登録制。定員は親子 8 組。親子登園。保育時間 10:00～11:30or10:00～12:30。利用料として毎回 500 円（年の当初に別途登録料 2,000 円）。保育教諭 2 名が担当。専用保育室の設定あり。B 教室専用の園庭あり。弁当の持参は可（プログラム終了後、園で昼食を取ることが出来る）。

C 教室

子育て支援事業：年間 7 回程度開催。登録制。定員は定めず。無料。親子登園。在園児の行事等へ絡めることもあるが、基本的には独立して運営。担当者として保育教諭を 1～2 名配置。専用保育室なし。園庭使用は原則なし。昼食・おやつなし。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料 … 日案例・月間計画・年間計画
- ・広報資料 … 募集案内（子育て支援事業・親子登園事業）・募集要項・未就園児支援事業

3. 0～2 歳児の受入れ保育が現在の形になるまでの経緯

- ・2018 年に開設。初めは満 3 歳児で始めたが、中途半端になるので 2 歳児クラスにした
- ・幼児教育の無償化がきっかけ。
- ・幼稚園入園の希望者が増え、その後 4 年保育の割合が増えた。
- ・母子登園クラスは、それ以前から開設していた。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・『幼稚園が安心できる場所』『保育者が安心できる人』となることで、子ども達も安心して登園できる。そして遊び、生活に繋がっていく。
- ・たくさんの経験・体験ができるようにモノとのふれあいや五感を感じる遊びができるように計画している。何度も繰り返し遊ぶことで、遊び方が変化し『やってみたい』『こうしたい』の気持ちが増え、できるだけ叶えられるようにしている。
- ・身の回りのことができるように段階を経て行う。生活のルーティンを決め、日々繰り返し安心して行えるようにする。また、一人ひとりできることも違うのでその子にあった声掛けを心掛けている。
- ・保育者も一緒に楽しむことや子どもが自分でやりたい気持ちを保育者は理解し、待つことを大切にしている。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ベテラン教諭を配置している。また、複数の保育者を配置し、実際は 6:1 よりも多い。実

際に年度途中で利用する人数が増えていくため、丁寧な保育ができる人材を配置している。

- ・園庭は共有しているが、時間をずらしたり、ゾーンをわけたりして利用している
- ・3歳への接続では、担任や保育室の位置（人、場所）が変わるため、遊びの環境など満3クラスで経験したものを取り入れるようにしている。
- ・園庭の遊び環境、行事への参加（七夕祭り、クリスマス会、など）などを共有している。
- ・3歳児クラスが複数のため、クラス編成を行う（均等に2つにわけ）。保育環境としては、保育室以外は共有スペースとなる。トイレ、園庭、遊戯室、廊下等。七夕まつりなど季節の行事については一緒に参加している。
- ・記録や研修については共通であるが、指導計画は別である。
- ・第1子一部補助：県の未入園児2歳児子育て支援（第1子）。第2子以降…県：未入園児2歳児子育て支援（2歳児以降）・所在市補助：市の独自財源により保育料無償化
- ・3号認定を受けている子どものみ、所在市の一時預かり幼稚園Ⅱを利用できる。最初の2年程度利用者はいたが、ここ数年は利用者は0人である。
- ・2歳児プレ保育特に4月からの利用児、預かり保育利用児も増えている。しかし、子どもの様子を心配して満3歳になってから年度途中の入園を希望する保護者もいる。近隣学区が減り、その他遠方（自家用車送迎）の園児が増えている。「自宅近くまできて欲しい」「早い時刻希望」など園バス希望もあるが、時間帯や金額が自分に合わないという保護者も多い。産休育休等で途中入園児も数名いるが、幼児クラス進級時に保育園に転園する子どもも数名いる。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・2歳満3歳児クラスで、保育者との愛着形成が土台となり、ゆったりとした乳児の生活と遊びのなかで、大人に援助されながら生活の仕方を身につけて「できた」気持ちをもつようになり、興味関心を広げて自分の好きを見つけて夢中になって遊んだりする姿がみられる。それが3歳児以降の育ちに繋がっていると感じる。教師も子ども一人ひとりの育ちを観ていく視点や理解にも繋がっている。
- ・家族以外の人に愛着、信頼をおいて関わる経験となる。
- ・親子一緒に経験することにより、幅広い「初めて」の経験を楽しむことができる。
- ・子どもが担任の先生達と愛着形成ができるとともに保護者も信頼できる保育者、幼稚園が安心できところという気持ちをもっている。担任教員に対する安心感、信頼感。子どもの日々の成長と一緒に感じることで、嬉しさや感動を味わい、子育ての楽しさを共有することができる。また同年代の集団生活を送る中で、基本的な生活習慣や人との関わりなど自分の子どもを見る視点や必要な見守りや援助についての気づきがある。
- ・課題としては、「利用人数の確保とクラス分け」、「経験のある保育者の確保」、「複数担任になるため、共通理解をどう図っていくか」、「2歳プレ保育からの利用児も増えてきているので、月齢の低い子どもの保育など再度見直しも必要」など。
- ・園生活を長く過ごす保育は、特に「乳児保育と環境～子どもが主体的に過ごせる・遊べる環境～」を園内で学び実践していくことが必要と考える。
- ・3歳児クラスへの移行 適切な移行をどう捉えるか。

近畿地方：私立幼稚園（定員 345 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A クラス】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 2009 年就職。16 年目。①3 歳②4 歳③5 歳④補助⑤4 歳⑥5 歳⑦3 歳⑧4 歳⑨5 歳⑩2 歳/満 3 歳⑪2 歳/満 3 歳⑫5 歳⑬5 歳⑭3 歳⑮4 歳⑯2 歳/満 3 歳。資格：幼稚園教諭普通免許状（2 種）、保育士。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 個別の発達段階に応じた、無理のない保育内容を考える。安全で快適な空間の中で好きな遊びを見つけられるように準備する。
- ・ いろいろな経験や体験を何度も繰り返してできるようにしている（運動あそび・造形あそび・感触あそび・ごっこあそびなど）。季節のあそびや製作も入れている。
- ・ 安全面や衛生面に気を付けながら、子ども達が遊びたいと思える空間を意識している。玩具の種類や量を考えて出したり、引いたりしている。
- ・ 2 歳児が安全に遊べるように出入口のところにゲートがある。子ども達の様子をみて、ゲートを開けたままにしている。年中組と同じフロアなので自由に行き来ができるようにしているが、先生同士連携を取りながら、子ども達がどこにいるのか、しっかりと把握している。
- ・ 4 月当初は、低年齢児が遊べる場を園庭に用意し、子ども達が安心して遊べる環境を整えた。子ども達の様子を見て幼児達が遊んでいるところへと広げた。共有スペースについては、事前に活動内容、時間を確認しながら一緒に使用。年長児は小さいクラスの子どもがいと自然に接し、関わりが生まれる。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 月末に指導計画を書いている。日案は作成するが、子どもの様子を見て活動内容を変更することもある。振り返りは、その日に話をすることが多い。月に 1 度、次月のことを共有する時間を設けている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 行事は 3 歳以降と全く別で参加はしないが、逆に 3～5 歳の行事に対して、打合せを出ながらどういうことをそれぞれの学年が育てているか、把握している。それをフィードバックとして 2 歳児保育に持ち帰り保育に活かしている。

(5) 園の中で 0～2 歳児の受入に携わる手応えと困難さ

- ・ いやいや期の時、「自分でしたい気持ち」と「できないとき」その子にあった、声を掛けたり援助したりするがその時々への接し方が難しい。
- ・ 目に見えてできることが増えるので、成長していく姿を感じられるのは嬉しい。
- ・ 『やりたい』『やりたくない』がはっきりしているので、『やりたい』『楽しい』と笑顔で何度もしていると、こんなことしてみたいと私自信も楽しくなる。
- ・ 生活面の育ちにおいて、園に任せきりになってしまう保護者に対しての対応や伝え方については困難さを感じることもある。
- ・ 3 歳以上の園児にとって、2 歳児クラスの存在は大きく、いたわりの気持ち、可愛いと感じる気持ち、何かしてあげなくてはならない気持ちを育む。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・この年齢の子供達にとっては初めての経験も多く、「おもしろそう」「やってみたい」がどんどん遊びの意欲につながっている。例えば、サーキット遊びではブロックの道を歩く、跳び箱からジャンプする、トンネルをくぐるなど、遊びを通して体の使い方を知り、できて嬉しいなどの気持ちの面で心の成長が感じられる。一方で、安全を考慮して、保育者の配置が難しい場合はすぐに「やりたい」を叶えてあげられないこともある。
- ・ねらいをもって活動をしているとき、子ども達が『もう！回』『やりたい』と言った瞬間。何度も繰り返し同じ活動を入れているので、遊び方が変わった瞬間。
- ・『怖い』『危ない』がわかっていない子どもがいるので、年長児がしていることができると思い、高いところへ登ったり自分で出来ると思ったりしているところを伝えるのが難しい。2歳児への距離感は、より近くで見守る、関わる必要である。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・生活面での自立の準備。靴の履き方やトイレトレーニング、手を洗うなど一つ一つその子に分かるように段階を踏んで伝えている（無理強いしない）。
- ・親子分離が難しい子供に対しては、園で安心できる保育者になるべく固定して、じっくり関わりながら信頼関係を築くことで不安を取り除いていく。
- ・徐々に保育者から友達への興味も出てきて、保育者、友達の中で安心して園生活に慣れ楽しむことができるように関わる。園が生活の一部になることで、生活のリズムが自然と身についていくため、特に移行を意識しすぎない。
- ・年少クラスが上がる際には、保育室や保育者、環境が大きく変わるため、事前に年少クラスに遊びに行ったり、身の周りの始末など自分でできることに自信が持てたりするように言葉がけや配慮をしていく。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・低年齢児は園での出来事をまだ上手く話せないこともあり、保護者にとっては、ほんの小さなことでも保育者から話をしてもらうことで安心される様子がある。
- ・まだできないと決めつけて何でも手を貸してしまう保護者もいる。子どもが自分でやりたい、やってみるための声かけや援助の仕方を伝える事で、試して下さる保護者もいる。
- ・園の取り組みや子どもの様子を伝える際には、点となる今の子どもの様子だけを伝えるのではなく、成長過程となる年長児までの育ちや大切なことまで含めた視点で見てもらえるようにしている。
- ・低年齢児に起こりやすいケガや、子ども同士のトラブルについて、この時期に必要なことと理解して下さる保護者が多く、相手があることに関してはお互い様と受け止めてもらえている。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・子ども達が自分でできることが増えている中、保護者の方が手伝っていることが多いので、自分でできることを伝えている。悩みや相談、できるようになった事の共有など、保護者の方が話しやすい雰囲気を意識している。

四国地方：私立認定こども園（定員 240 名）、園庭開放あり

【理事長】

1. 基本情報

(1) A 組

- ・対象月齢：未就園児（歩き始めている子ども）
- ・開催日・時間：週 2 回程度、1 時間程度の活動
- ・月額料金：無料（入会時 700 円（1 年間の保険料として））
- ・親子登園：親子で参加
- ・保育担当者・人数・資格：2 名・幼稚園教諭一種免許状、保育士資格
- ・専用保育室：A 組実施時は専用だが、午後など使用していないときは、在園児の預かり保育として使われている。
- ・園庭：園庭で遊ぶこともできる。また、A 組の保育室前には、低年齢児用の遊具などが揃うスペースもある。
- ・昼食：なし

(2) B 組

- ・対象月齢：2 歳児（満 3 歳になると 1 号認定児となる）
- ・定員：24 名
- ・開催日・時間：月曜～金曜、9：00～14：30
- ・月額料金：21000 円（保育料）、満 3 歳から 1 号認定児となり保育料無償
- ・親子分離：保護者の送迎や通園バスを利用して登園。親子分離で過ごす。
- ・保育担当者：2 名（担任、副担任）
- ・専用保育室：専用保育室での保育
- ・園庭：園庭を利用できる。
- ・昼食：あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・A 組は、計画というものはないが、年齢に合わせたおもちゃを用意するようにしている。月に 1 回は、季節に合わせた遊びや、製作、リトミックなど行事的なことを行っている。保護者向けの広報は、掲示や、SNS などを使って行っている。
- ・B 組は、満 3 歳クラス（1 号認定児）と同様のカリキュラムで保育が行われている。親子分離で実施。保護者向けの広報は、掲示や SNS を使って行っている。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・働く母親が増え、保育ニーズが高まっていたことに加え、満 3 歳まで待っていたら入園児が減ることもあり、1 歳児 2 歳児の保育が始まった。ただ、一足飛びに全てを始めたわけではなく、満 3 歳保育、2 歳児、1 歳児と順に進めたことで、カリキュラムを作る上でも壁は少なかった。

- ・ A 組も、県などの予算が子育て支援に活用できることを、うまく取り入れられたことが実施の後押しに。低年齢児の保育経験のある職員を採用することで、これまで経験の少なかった年齢への保育も進めることができた。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ A 組は、親子参加であるため、親子が気軽に参加できるようにしている。保護者をみると、地域の子育て支援センターよりも、敷居が高いように感じてしまうことがないようにするためである。A 組に参加すると入園しないといけない・・・というように考えている人もいるかもしれないが、そのようなことは全くないため、気軽に参加できることを大事にしている。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 働く母親が増え、地域での低年齢児の保育ニーズが高まっていた。
- ・ もともと幼稚園であったところから、認定こども園となった。小さい子どもの保育経験のない職員も多かったが、保育経験のある職員を積極的に採用し、今の形を作った。職員には、以上児保育希望もしくは未満児保育希望かを確認し、得意なことが生かせるようにしている。職員の研修参加も積極的に行っている。

6. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・ A 組を通し、保護者の縦のつながりや横のつながりができていることはよくわかる。
- ・ 職員のことで考えると、1 歳児や未就園児がいることで、育ちの過程が分かるようになったことが、以上児の保育にも生かされるようになった。
- ・ 様々な年齢の子どもが生活する場であるので、遊具やおもちゃなどの安全を確保することは、常に意識している。

四国地方：私立認定こども園（定員 240 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A 組】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 保育歴 5 年で現在の担当の組は 3 年目。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ A 組は、年齢が様々であるので、その配慮をしながら遊んでいる。2 歳児は、次年度の入園を見据えることもあるが、より小さい子もいるので、その子も楽しめるようにしている。月 1 回の行事では、年齢に合わせて楽しめるよう、教材も変えている。例えば、同じテーマの製作であっても、0 歳児親子はシール貼り、2 歳児はクレパスも取り入れるなどしている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ A 組は、保育者 2 名で担当しているが、活動の後の片付けや整理をしながら、雑談等の中で、振り返りをしている。その中で、子どもの年齢や特徴をつかみ、次の回の遊びの計画もしている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ A 組の活動では、満 3 歳児などと一緒に遊ぶこともあり、その年齢の子どもの様子を親子で感じてもらうこともある。A 組担当保育者が、各年齢の保育にこれまでに関わっていたことや、日ごろの保育でも、ヘルプとして保育に関わっているため、各年齢と何らかの形で関わるのがしやすい環境にある。

(5) 園の中で 0～2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・ 保護者同士の横のつながりができていることが良く分かる。
- ・ 保育者や他の保護者とのコミュニケーションが、息抜きになっている部分もある。
- ・ A 組は、利用人数が増えて欲しいという課題がある。SNS で周知しているものの、地域の支援センターに比べ、敷居が高いように感じる保護者がいるかもしれない。こども園で行っている場合、A 組に参加すると入園をしなければならないのかと意識してしまう保護者がいるかもしれない。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ A 組の活動では、広い園庭で安全に遊ぶのは魅力。保育室前に人工芝を敷いた遊びスペースもあるので、遊びやすい。
- ・ A 組では、年長児が園庭で遊んでいても、お互いにうまくかかわっている様子がある。また、家庭とは違う遊びや、友達がいることで、真似をしたり、関わりをもったり、たくさんの刺激があることも魅力を感じる。

- ・ A 組では、当初、誰とも関わらない、挑戦しない子どもが参加の回数を重ねることで、自分から周囲に関わる姿が見られた。周囲の大人、子どもの顔を認識する様子もあった。

(2)移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3 歳児クラスへの移行

- ・ A 組は、親子の活動であるので、分離が難しいということはない。
- ・ B 組では、当初、分離が難しいという場合もある。その場合、寄り添って少しずつという気持ちで関わっている。

3. 保護者視点

(1)保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・ 悩みを抱えていることが表情から明らかな方は少なく、A 組利用の保護者は、比較的教育熱心な方が多い。いつから何をしたらよいのか・・・など質問されることがある。子どものことの会話をしながら、居心地のよい空間にしているようにしている。
- ・ 母親同士のつながりもでき、不安なことなどを解決していることが多く見られる。上のきょうだいのいる保護者も利用されていると、特に、さまざまな話が保護者同士でできている。

(2)保護者を意識して行っていること

- ・ できるだけ寄り添うことを心掛けている。あまり話さない方でも、お子さんのことを話題にしながら、楽しい空間であることを心掛けている。

北海道・東北地方：私立幼稚園（定員：１２０名）、園庭開放あり

【園長】

Ⅰ. 基本情報

(Ⅰ) A 教室 —A 教室で親子で楽しい時間を—

- ・ 対象月齢：１～２歳児 歩行が可能な年齢から
- ・ 定員：各 10 名（２学期から 5 名増員）、週 2 回または週 1 回コース、登録制
- ・ 開催日・時間：週 1, 2 回の親子教室 月・火・木・金曜日のいずれか、9:30~11:30
- ・ 料金：週 1 回 5,000 円、週 2 回 6,500 円（おやつ代含む、教材・保険代その他徴収あり）
- ・ 実施内容：親子（祖父母も可）登園で幼稚園の先生と遊ぶ
 - 音楽遊び、造形遊び、戸外遊び、運動遊びなど年間を通して子どもの成長のためにバランスよい内容を取り入れている。
 - パパ友、ママ友ができ気軽に子育てについて語り合い、ストレスの解消の時間にも
 - 一日の流れ：9:30 登園 親子で好きな遊び 10:00 みんなで集まる主活動→外遊び→おやつ 11:30 終了 その後大部分が残って 12 時過ぎまで園庭で遊ぶ
- ・ 保育担当者・人数・資格：1 名・幼稚園教諭 2 種
- ・ 専用保育室：有り ・ 園庭：有り
- ・ 昼食：無し

(Ⅱ) 親子教室 B・C

- ・ 対象月齢：1 歳 3 ヶ月・おすわりが出来るようになってから（B）、1 歳 4 ヶ月～3 歳（C）
- ・ 定員：25 組
- ・ 開催日・時間：月に 1 度の親子教室、9:30~11:30、非登録予約制、親子で季節にあった内容で遊ぶ
- ・ 会費：1 回 200 円
- ・ 保育担当者 6 名 資格 幼稚園教諭
- ・ 専用保育室：有り 季節により園庭にて実施
- ・ 園庭：有り
- ・ 昼食：無し

2. 保護者向け広報資料

利用者：専業主婦家庭

実施目的：年間を通して子どもの成長のためにバランスよい内容を経験・保護者同士がつながることで気軽に子育てについて語り合う。保護者が自分たちの心を整えて、子どもに向き合ってもらいたい。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・ 園で実施していた課外の体操クラブの未就園児向け親子体操として昭和 55 年から月 1 回で始まる。その後、週 2 回の D 教室を経て平成 8 年から A 教室に移行。
- ・ 遊びと生活で大切にしていることとして、体操など何かに偏ることなく年間の計画の中で親子で多様な経験をしてもらいたい。また、担当者が個々の家庭の関わりを見守りな

がら保護者同士がお互いをモデルとしてすてきな子育てをしたいと思えるような支援をしていく。「A 教室さんは赤ちゃん産まれる率高いですね。」とよく言われるが豊かな子育てを経験した家庭が結果として多子世帯になっていくことを実感している。

4. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

（1）担当者の確保

園にずっと在職していて、園の3歳から5歳までの子どもたちの成長や園の文化分かっている保育者が担当するということを大切にしている。現在の担当で3代目となるが今までずっとそのような形で継続している。担当者自身がしたいことと、園の教育理念が一致し共感しているからこそ、この仕事を続けてもらっていると感じている。

（2）3歳児以上のクラスとの関係性

満3歳になれば幼稚園の満3歳クラスに年間を通して移行することができる。3学期になると保護者と離れて満3歳と関わることもあるが園の中を親も歩きながら、他の子たちが何しているのかを見たり、聞こえたりしてくるのが大切と考えている。共有スペースで活動の様子を見るなどの交流もある。

（3）記録、計画、研修など運営体制

1クラスを1人のベテラン保育者が担当している。子育て経験のあるベテランが自らの子育てと両立させながら担当することで保護者も子育ての悩み等を相談しやすい空気になっている。満3歳クラスの担当者には急がないようにということと（いい意味で）あまり良い子にしないでっていうのはよく伝えています。時間がかかるのが教育なのでそんなに焦ってする必要はないと考えている。最も難しいのが満3歳の指導計画で、計画があるとどうしてもその通りにしてしまおうとするので、緩やかに毎月毎月入ってくる園児にどのように関われば良いか担当者をあまり変えずに迷いながらやっている。

県内に乳幼児研究会というのが立ち上がったので外部の研修には必ず参加させるようにしているが、日々の振り返りも行い、現代の課題も把握できている。

（4）地域における園の役割、保護者ニーズ

市は支援センターもあり積極的にがんばっている。しかし、園独自の子育ての支援に対しての補助は無い。満3歳になると親子での時間を楽しみたいと一部そのままA教室に残る方もあるが、無償になり経済的な負担の無い満3歳児クラスを保護者は希望する傾向にある。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

当初、子どもには「親子で来るところが幼稚園」と認識することが課題であったので、3学期から子どもだけで過ごす機会を設けている。保護者が「子どもに心を寄せることや子どもをみんなで育てる。」ということが結果として保護者が親として育つことや入園後の子どもの安定につながっている。また、子ども育てることが楽しいと感じる親を増やせてことに手応えを感じている。

課題としては少子化に伴い、参加人数が減少（当日は6組）し、安定し落ち着き過ぎているので多様な関係性や感情の起伏を経験するためにもう少し規模が大きい方が良かったと感じている。子どもの数が激減する中でこのような子育て支援の良さをどのように伝え、継承していくかに課題を感じている。

【保育担当者：A教室】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

保育歴6年（幼稚園教諭2種 保育士）。その後保護者として3人の子どもを園に通わせた後、平成8年よりA教室を担当することとなる。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 以前は満3歳児が多かったが現在は1歳半が中心になるなど低年齢化している。保護者にとっても子どもにとっても初めての集団となるので、自分自身の子どもへの言葉かけや接し方などが無理のないものになっているかに留意している。
- ・ 9時半から登園、少し慣れてきた時に既に知らせている活動を行う。そのときの状況に応じて臨機応変に対応している。
- ・ 毎回、必ず園庭に出て四季を感じながら活動を楽しんでもらっている。寒くて雪が降っているとしても外の寒い風に当たることも大切な経験と考えているので、あらかじめ保護者にも伝えて防寒の服装で参加してもらっている。夏は夏で水を使った遊びなどを行っている。
- ・ 室内では手先を使った活動として制作や家でできないことをしている。

2. 子ども視点

- ・ 親子ではさみを使っていたが、低年齢化していることと、家では保護者があまりさせたくない活動として指先を使って裂くとか丸める、ちぎる等の多様な経験は意識して行うようにしている。そのような経験からお箸など手具に移行するようにしている。
- ・ 子どもだけの活動ではなく親子で参加しているので親が子どもの活動にストップをかけないように「やらせてあげましょう」など、意識的に声をかけるようにしている。また、小麦粉粘土を使用する際などに最初から作っておくのではなく、保護者自身がおいをかいたりしながら安心して子どもと一緒に作るようにしている。そのような経験を園ですることによって結果的に家庭でも手作りおもちゃ的なもので遊べるようになる。
- ・ 3歳への移行として以前は満3歳児の学年が多く子どもだけで過ごす時間も設けていたが低年齢化し1歳児が中心となっているので園内で子どもと少し離れた場所で過ごす機会を設けたり、保護者だけで園長の話の聴いたりするなどの機会を設けている。

3. 保護者視点

- ・ 育児書や SNS 等で様々な子育ての情報を豊富に持っている人も多いが一方通行の知識であるので、自分と保護者との会話を通して我が子に対してどのように接するのがよいか気づいてもらうことも大切にしている。また、我が子に対して感情的になる方もあるのでそれらの親としての感情も含めて受止めながら、子どもに対して使ってはならない言葉かどうかを判断してもらうなど子どもの成長にとってどうかを考えてもらうようにしている。また、様々な関わりの手立てを提案したりするように心がけている。

- ・ 保護者の緊張が取れてくると子どもたちの緊張も解け、安心して様々な姿が見られるようになるため、まずは保護者から信頼してもらうために自然体で声をかけたり少しの変化に気づき関心を向けたりするようにしている。父親も参加することがあるが実家の母のように接している。

4. 保育者視点

- ・ 日々の記録や振り返りを次回に活かすようにしている。また、満3歳クラスには年度の途中で入園する子どももいるので保護者の安心感にもつながるように満3歳児クラスの担当者と記録を共有するようにしている。また、入園後も保護者の不安などがあれば受け止めるようにするとともにどのような相談があったかを満3児クラスの担任とも共有するようにしている。
- ・ 家庭と園との橋渡し役として保護者と様々な話をしているが話した内容をそのまま全部担任に伝えるかどうかや線をどこで引くのか担任の負担にならないかなどの判断が難しい場合もある。子どもが中心なのでその子にとってどうしてあげるか事が良いのかの視点で考えるようにしている。
- ・ 保護者同士で個々の子どもたちの成長に気づき伝え合ったりすることや同年代の子ども同士のやりとりや様々な関わり方、言葉かけに気づくなどみんなで子どもの成長を観ることができる貴重な機会となっている。
- ・ 子育てで思い悩んでいることを一人で抱え込むのではなく安心して語り、受け止めてもらったり、励ましてもらったりすることにやりがいを感じている。

北海道・東北地方：私立幼稚園（定員 200 名）、園庭開放あり

【副園長】

1. 基本情報

(1) A コース

- ・対象月齢：2 歳～3 歳（次年度当幼稚園、系列保育園入園希望者）
- ・定員：24 組（12 名×2 クラス）、登録制
- ・開催日・時間：月 3 回（火・金のどちらか）・年間 24 回、9 時 30 分～10 時 45 分
- ・月額料金：3,000 円
- ・親子登園：親子で参加
- ・保育担当者・人数・資格：専任 2 名、両者ともパート、保育教諭有資格者。
- ・専用保育室：保育室・遊戯室・園庭を使用、保育室・遊戯室は A 教室実施時は専用、別地域にある系列園園舎に替えて開催することがある

- ・園庭：保育の場として使用することがある。
- ・昼食：なし

(2) B コース

- ・対象月齢：2 歳～満 3 歳（当幼稚園満 3 歳児クラス入園希望者）
- ・定員：10～15 組程度、登録制
- ・開催日・時間：月 2 回（第 2、4 木）・年間 15 回、9 時 30 分～10 時 45 分。希望会のみ参加も可。
- ・月額料金：2,000 円
- ・親子登園以降の項目は A コースと同じ

(3) C コース

- ・対象月齢：1 歳～2 歳
- ・定員：10～15 組程度、登録制
- ・開催日・時間：月 2 回（第 1、3 木）・年間 15 回、9 時 30 分～10 時 30 分
- ・月額料金：1,000 円
- ・親子登園以降の項目は A コースと同じ

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- (1) 指導資料：年間計画が策定されている。1 日の保育の計画、記録、振り返りは A4 用紙 1 枚で構成されている。
- (2) 広報資料：親子登園案内パンフレットを配布、web 掲載するほか、一斉送信メールシステムを利用して、イベント情報などを配信している。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

1999 年に、現園長が子育て支援の枠組みとして、預かり保育と同時に、園舎から離れた場所に一軒家を建築し、開始。当時は園の保育者が預かり保育担当と兼任していたが、15

年前位から預かり保育希望が増加したため、専属担当を設けた。立ち上げ時から3コースを設定しており、コンセプトは変わらず、母親のリフレッシュと交流、子どもの遊び場の提供、当園の保育の周知を掲げている。0歳児コース開講にトライした時期もあったが、申請者が少ないので取りやめた。また、当園には3歳児クラスから独立した満3歳のためのクラスがある。10年前までは満3歳児は随時3歳児クラスに入園させていただが、保育集団化する前の段階でもあることも鑑み、独立クラスとした。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・発達の中で大事なものは五感なので、感覚を刺激する遊びを大事にしている。
- ・人との信頼関係を育むことを大事にしている。母親以外とも目を合わせてにっこり笑い合うことを経験すること。
- ・生活や遊びを通して、一人一人が満足できるように配慮している。
- ・自然に触れてほしい。外遊びをメインに行う回もある。
- ・Aコース内容中に「幼稚園探検」を組み込み、当園園児と遊んだり、遊びを見たりすることにより、園への安心感や年長児への憧れを持てるようにしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当保育者：母親への対応を考え、子育て経験のある人を担当に当てることが多い。専任のうち1名は事業がない日もパートとして当園に出勤。
- ・地域における園の役割：市の子育て支援のプログラムの一つとしての位置付けになる。
- ・保護者のニーズ：子どもの遊び場提供と親子の交流へのニーズが高い。
- ・子育て支援として意識して行なっていること：遊びや活動の中での育ちや、その意味を伝えるようにしている。折々で担当以外の園職員による専門的講話の時間も設けており、当園の保育者を知る機会を提供している。
- ・運営体制：本事業は子育て支援であり、園における保育とは目的を分けて考えている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・手応え：親子共々楽しみにし、期待感を持って参加する様子に手応えを感じる。保護者アンケートでは、砂遊びや絵の具遊びなど、自宅では実施困難な感覚遊びや、クッキング、小麦粉粘土などが好評。園での経験が家での遊びに反映されると手応えを感じる。
- ・保護者の変化：子どもをめぐる保育者とのやり取りや、園職員による講話により、子どもの見方や、関わり方を学び、遊びの発想が広がる。
- ・課題：親どうしの交流をどう確保するか。SOSを出して良いことをどう伝えるかが課題。そのためにも安心して出かけられる、遊べる場になれば良いと考えている。コロナにより中断した、お茶タイムや終了後の園庭開放の再開も考えている。また、子どもとのかかわりに問題があるのに気づかない、あるいは言語化できない保護者も増加している。こうした変化への対応として、WEB経由で申し込みできる方法も設定している。

【保育担当者：全コース】

Ⅰ. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

短大卒・保育教諭有資格者。卒業後最初の 10 年は当園に勤務し、クラス担任の経験あり。その間も親子登園の主担当を担っていた時期があった。結婚後退職し、子どもが大きくなってからパートとして復職。親子登園クラスの専属となる。毎日 8 時 30 分～13 時 30 分まで登園に勤務し、事業がない日は、当園の保育補助をする。当園出身者。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・親子が園での保育内容を体験すること、家の人以外の他者と触れ合う機会を確保することを重視している。また、子どもたちが自由に遊ぶ、コース冒頭の時間は、子どもの様子をみながら保護者と個人的に話す良い子育て相談の機会となっている。一人一人が充実すること、親子共々楽しみな環境となるよう、じっくりかかわって信頼関係を築き、安心感を感じてもらうことを大事にしている。親子ともにリフレッシュできる場になることも心がけている。
- ・環境設定：普段は、一定の保育室を使用しているが、活動内容によっては、別室や園庭、別地域にある系列園を使用する。保護者に園の様々な施設を見てほしい。5 歳児の育ちの姿を保護者に伝える目的で、運動会後に 5 歳児との交流をしている。
- ・活動の概要：1 日のスケジュールは、自由遊び、片付け、トイレ、一斉のメインの遊び（制作や動きのある遊び）、絵本の読み聞かせ等の落ち着いた活動といった流れになっている。メインの遊びでは、家でも親子でできるふれあい遊び的要素を取り入れるよう心がけている。
- ・工夫：発達に合わせて活動内容を決めている。コースごとに発達に合わせて環境構成を決めている。例えば、C コースだと動きの優しい遊び。同じ滑り台でも年齢により、足で感じる柔らかさを変えたりなどをしている。A コースの子どもだと、形遊び、指先遊びがでできる環境を取り入れている。また、ごっこ遊びのコーナーも用意しておく（どのコースでも）。運動を引き出す環境と、ごっこ遊びなどのイメージ遊びを引き出すものをバランスよく出している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・1 日の計画、記録、振り返りを A4 用紙 1 枚に記録し、副園長に提出。また保育補助者にも共有し、それをもとに役割分担を伝える。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との計画の共有

- ・年間活動計画は他の園職員と共有している。
- ・当園の保育補助に入ることがある。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・それぞれの親子によって背景も不安も異なる。子どもの育ちも異なる。それぞれの思いを受け止めて、寄り添いながら、子どもに向かっている。保護者も子どもとの向き合い方に難しさがあるように見える。子どもと向き合うきっかけや、子どもとの関わり方を学べる

場面を作るようにしている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験になっている事例

- ・初めは緊張していた子どもも、母親と一緒にいることで安心して、徐々に自分らしさを発揮する姿や、親子のふれあい遊びを通して発散する姿が見られるようになる。
- ・絵の具遊びや、砂遊びなど、自宅ではできない遊びへの満足感や楽しさが高い。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス、3歳児クラスへの移行

- ・不安なお子さんには、母親と一緒にいるので安心だということを繰り返し伝え、母親にも、今は焦らずに親子一緒にの時間を楽しみましょうと伝えている。
- ・母親のリフレッシュがメインの回には、少し子どもから離れて活動する（ヨガなど）時間を設定。その時は、子どもが離れられる時は離れて遊ぶことができるような設定もしている。離れ難い子どもは母親に近づくこともでき、無理強いはいしない。子どもが少しでも離れられたということで、母親が子どもの成長を実感する機会にもなる。
- ・本コース受講者について、本園入園面談を受ける際、園に申し送りを伝えるようにしている。
- ・本園に入園が決まった子どもに対しては2月に園児からの歓迎会が催される。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士のかかわり

- ・保護者の姿：親子で楽しく参加しましたとか、子どもとじっくり関わることができたとか、自宅でできない体験ができて良かったという声が聞けるとうれしい。内向的な母親に対しては、話を聞きながら子どもの良いところを伝えたり、母親の頑張りを伝えたりしている。
- ・保護者の学び：自分の子どもの遊び方や、他児との関わりを見ること、生活面での自立の様子を見ることで成長を感じる機会となっている。子どもとの関わり方、家でできる簡単な遊び、子どもの遊びの意味や育ちなども知らせている。
- ・保護者同士の関わり：子どもの遊び場やお店などの情報交換の場になっており、交流で仲良くなっている。人との関わりが苦手な人もいるが、誘われることで交流できている。子どもが同じ幼稚園に入園する予定の保護者どうしの絆ができることがあり、それがスムーズな入園につながることもある。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・母親の笑顔が子どもにとって大事だと考えるので、母親の疲れや困り感をみながら相談できるようにしている。今の時期の子どもの特徴を知らせながら子育てのヒントを示している。一人一人の良さを伝えることで、それに気づいて、褒めることにつながればよいと考えている。
- ・母親の幼稚園選びを意識して、9月に幼稚園探検を実施している。

九州地方：私立幼稚園（定員 380 名）、園庭開放あり

【副園長】

私立幼稚園と認可保育所は同じ建物内で合同保育

*幼稚園では、創設時より2歳児保育を行っている（募集人数60名）

- ・ 対象月齢：１歳児
- ・ 定員：各コース
- ・ 開催日・時間：水曜日もしくは金曜日実施 １０時から１１時。５月から３月にかけて年間２７回（月約３回）
- ・ 月額料金：５,０００円（他、道具代約３,７００円・保険料１,０００円／年間）
- ・ 親子登園
- ・ 保育担当者・人数・資格：４名（非常勤）・保育士・幼稚園教諭２種免許状
- ・ 専用保育室：子育て支援の場と共有
- ・ 園庭：企業主導型保育所と共有
- ・ 昼食：なし

- ・ 対象月齢：2歳児
- ・ 開催日・時間：火曜日もしくは木曜日の実施 10時から11時
5月から7月は親子一緒に10時から11時の参加
9月から3月は子どものみ
9月は10時から11時30分
10月は10時から12時
11月から3月は10時から13時、おにぎり弁当持参
年間43回（月3～5回）
- ・ 月額料金：8,000円（他、道具代約3,700円・保険料1,000円／年間）
- ・ 保育担当者・人数・資格：4名（非常勤）・保育士・幼稚園教諭2種免許状
- ・ 専用保育室：子育て支援の場と共有
・ 園庭：企業主導型保育所と共有
- ・ 昼食：なし（11月以降おにぎり弁当持参）

- ・ 親子無料イベントがあり、予約制。
- ・ ホールと園庭開放、予約は不要

- ・ 幼稚園 2 歳児クラスの保育は、幼稚園の全体的な計画、教育課程の中に位置づけられ、年間行事、1 日の保育の流れも 3 歳児以上と同様に作成されている。
- ・ 未就園児コースの年間スケジュールは遠足、行事をめぐる制作（母の日、父の日、七夕、敬老、クリスマス、ひなまつり）などが計画されており、毎月お誕生日のお友達のお祝いもある。
- ・ 保育内容としては、運動（マット遊び・鉄棒・トランポリン）、リズム遊び（歌・リトミ

ック・楽器)、保育(リズムカルなパターン保育、童謡カルタ、月の絵本、指先を使う活動、季節ごとの制作)、英語(月1回のネイティブ講師によるレッスン)

- ・保護者には、配布される園全体のおたよりには、各先生からのメッセージが掲載され、未就園児コースも掲載されており、園全体の様子がわかるようになっている。

3. 0～2歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・当該園では2歳児保育を49年前の園創設時より行っている。幼稚園を作るときに、保護者の声で、2歳児から、ということがあり始まっているとのこと。
- ・さらに、21年前から保育園も同一敷地内、同じ保育を行いたいとのことで取り組んでいる。保育園の子ども達も9時30分から14時30分は、幼稚園の子どもたちと同じ保育をうけ、前後を保育園で過ごしている。
- ・また、0歳児からの保育として、勤務している保育者の子どもが、ナーサリーに預けられないということをきっかけに、企業主導型保育所(0歳児(生後6ヶ月から2歳児))を設立した。子育て支援の場も兼ねながら、さまざまなニーズの保育者の声に応えられる形を目指している。
- ・市では令和5年4月から保護者の収入に関係なく、またきょうだいの年齢に関係なく、全世帯を対象として「第2子以降の保育料無償化」をスタートしている。この利用も、幼稚園・保育園にかかわらず利用できるように尽力した。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・子どもの脳の発達に大切であること、本物に触れることにこだわること、心を育てる習慣を大切にする、未来を生き抜く感覚をはぐくむ環境を整えることが大切であると考えている。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ(園・保護者・地域)、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・園の創設以来、保護者の声を聞きながら2歳児保育を始めたり、保育園を始めたりしていることに大きな特徴がある。
- ・保護者との関係は、特に保育園も一緒に運営し始めたとき、反発する声もあったが、子どもにとって大切であることを説明しながら、進めてきた。
- ・連携施設である保育園の病児保育室は、完全独立した出入り口、トイレや空気清浄機などを完備した環境で、看護婦が常駐している。この場所も、保護者にとっては大きな子育て支援となっている。
- ・子育て支援として、保育園では、0・1・2歳の保育室と、親子が一緒に過ごすことができる空間とを設計した。親子が一緒に過ごすことができる畳敷の空間は、周りに板張りの空間もあり、机や椅子を大人も子どもも自由に組み合わせて過ごせる工夫があった。また、子育て支援側の空間は、ベビーカーのまま、靴のまま、お手洗いにアプローチできるように工夫して設計した。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・保護者のニーズは多様であり、その多様なニーズに応えていくことを模索しながら保育を行ってきている
- ・今後、地域の中での子育てを考えると、たとえば高齢者も含めた支援のあり方や、自然環境を大切にするを考えていくことも検討し、試み始めている。

九州地方：私立幼稚園（定員 380 名）、園庭開放あり

【保育担当者（幼稚園 2 歳児クラス担当）】

1. 保育者視点

（1） 保育担当者の保育歴

- ・ 幼稚園 2 歳児クラスの担任。保育歴は 6 年目。2 年目まで、3 歳児クラスを担当し、3 年目から 2 歳児クラス。
- ・ 幼稚園教員免許・保育士資格

（2） 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 園では、創設時より 2 歳児保育を行っており、保育内容、環境は、3 歳児以上と大きく変わるところはないと感じている。
- ・ 少し異なるとすれば、トイレトレーニングが入ってくることと、教材に指先を使うものを少し意識して多く揃えていることである。たとえば、画用紙に洗濯バサミをつけて見立てる遊びなどがある。

（3） 保育の計画と振り返り

- ・ 保育の計画は 3 歳児以上と同じように週案として記入し、振り返りもそれを元に行う。

（4） 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 2 歳児が幼稚園の中に位置付けられているため、日々の活動の計画なども園庭の利用など共有しながら保育を行っている。

（5） 園の中で 0～2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・ 歳が上の子どもたちよりも、何かが「はじめてできた」ということと出会うことが多く、それが 2 歳児保育に携わる手応えになっていると感じている。

2. 子ども視点

（1） 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 手先を使う教材を揃えると、子ども達も楽しいと感じているように見受けられる。

（2） 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3 歳児クラスへの移行

- ・ 2 歳児から幼稚園であるため、3 歳児クラスへはごく自然に移行している。また、通い始めについても、保育園や A コース・B コースの経験などもあるためスムーズである。

3. 保護者視点

（1） 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・ 保護者同士は、未就園児コースの親子登園で出会っている場合、その関係が続くこともあるようである。

【2歳児からの受入れ】

2歳児を実際に受入れている園については次の14園となっている。

こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業

24_近畿地方：認定こども園

25_近畿地方：私立幼稚園

一時預かり事業

26_四国地方：私立幼稚園

親子分離での受入れ

27_近畿地方：私立幼稚園

28_北陸地方：私立幼稚園

29_東海地方：私立幼稚園

30_関東地方：公立幼稚園

→親子参加は0歳児から対象のものがある

満3歳で、幼稚園のクラスに。

31_関東地方：私立幼稚園

32_中国地方：私立幼稚園

33_関東地方：私立幼稚園

親子で

34_北海道・東北地方：私立幼稚園

35_北海道・東北地方：私立幼稚園

36_関東地方：私立認定こども園

こども園のクラスにあずかり保育、子どもだけ、親子で

37_近畿地方：私立幼稚園

0歳児、1歳児と同様に、こども誰でも通園制度（仮称）の本格実施を見据えた試行的事業、親子分離での受入れ、親子での参加がみられる。2歳児の受入れで特徴的なことは、幼稚園の満3歳児クラスに入るまでの受入れの様子もみられる。これは保育料無償化との関係もあり、4月にはこのクラスに通い始め、3歳のお誕生日を迎えると、正式に幼稚園のクラスに入るといったかたちも見られた。

また、これまでの0歳児、1歳児で取り上げた園にも歴史的な流れとして伺っていたが、幼稚園に入る前の親子での活動に、長い歴史が見られる園も多いことが見える。幼稚園で、3歳以前の保育は、親子での経験を軸に培われていることも伺えた。

さらに、園の状況によっては、これらの受入れとは別に、すでにこども園の部分で、もしくは、同じ法人で別にある保育所として、0歳から通常の保育を行なっているケースもあり、その法人のあり方で、さまざまなかたちで受け入れている園もあった。

近畿地方：認定こども園（定員 485 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・ こども誰でも通園制度モデル事業：A（火曜日）B（木曜日）C（金曜日）計 3 クラス
- ・ 対象・定員：2 歳児、各 10 名（2 学期から 5 名増員）登録制
- ・ 利用料金：入会金 5,000 円、3 歳の誕生日までは保育料 1・2 学期 3,400 円／月、3 学期 4,600 円／月。3 歳になった翌月から保育料 1・2 学期 6,000 円／月、3 学期 8,000 円／月。保険料年間 600 円
- ・ 開催日・時間：週 1 回 5 月～12 月は、9：30～11：30、5 月は親子参加。6 月から子どものみ。1 月～3 月は 9：30～12：30、長期休暇中は休み。
- ・ 親子分離：親子の期間、子どもだけの期間、子どもだけ弁当を食べて長い時間と 3 つに分けて行っている。これまでは、子どもだけの通園を 2 学期からしていたが、今はモデル事業を受けたこともあり、6 月から子どもだけの通園にしている。
- ・ 保育担当者・人数・資格：3 名、幼稚園教諭免許・保育士資格
- ・ 専用保育室：午後の預かり保育と共用 ・園庭：共用 ・昼食：1 月～3 月弁当持参
- ・ 実施内容：コーナー遊び（ままごと、電車、絵本、パズル、ブロック）・外遊び（植物遊び、砂遊び、水遊び）・制作活動（おもちゃづくり、お絵かき、粘土遊び、素材遊び）・運動遊び・リズム遊び等
- ・ 一日の流れ：9:30 登園支度・好きな遊び 10:40 朝の会→外遊び 11:30 降園

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

興味、関心が広がる 2 歳児を対象に、豊かな体験を通して自己肯定感を育て、保護者が子育てのおもしろさや大変さを共有できる仲間作りの場の提供を行い、保護者にコンセプトブックを配布し、園への理解に努めている。申込期間に QR コードおよび URL から申し込む。定員数を上回る場合は、抽選を行う。専業主婦家庭が利用者である。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

本年度より市からの打診を受けて、これまでの 2 歳児一時預かり事業を「こども誰でも通園制度モデル事業」として位置づけている。市のイメージは一時預かりの色が濃かったが、最初の一定期間は親子で決まったメンバーで過ごすことを大事にしている。親同士良い関係になり、保育者の子どもへの接し方や気持ちの受け止め方、言葉がけなどをモデルとして学んで欲しい。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

子どもたちに、自分の興味関心に沿っていろんな環境でいろんな経験をしてほしい。4 歳や 5 歳のときに遊びを広げることが難しかったり、自信がない子どもの生育歴を追っていくと、2 歳にその根っこがあることがわかった。この時期に見える苦手さが 4・5 歳で顕著に現れてくるので、外遊び、運動遊びを含めて多様な経験ができるように工夫している。

また、子どもが育つ以上に最初に保護者が育つことを大切にしたいと思っている。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

（1）担当者の確保

現在は、子育て中の自園の元保育者が、非常勤で担当している。3 歳から 5 歳までの成長

のイメージがあって、そこから子どもにとって必要な経験が何か考えられる人材が理想。週3回、9:00から16:00で勤務（親子対象のオープンキッズルームと兼任）、長期休暇中は休み。

(2) 運営体制

3クラスを3人の保育者で担当している。それぞれの曜日にそれぞれリーダーを置き、その他の二人の先生のどちらかと組んで、二人で保育に当たる。毎日、ラインで全職員と予定を共有し、園長の予定や見学者、どのクラスがどこを使うかなどが分かるようになっている。2階の芝生広場やホールなど共有するところは、そのラインでお互いに分かる。

(3) 組織マネジメント

子どもが育つ喜びと同じように、保育者が育つ喜びを感じられる保育者集団の育成に力を入れている。実際、保育者として元保護者の力を借りているところも大きく、我が子を通じて園をよく理解してくれている人が多く、若い先生をサポートしてくれている。

園内研修では、子ども理解とそこから見える育ちのねらいを共有し、そのための環境や手立てについて共有することを大事にしている。特に、リーダーの育成には意図的な工夫をしている。学年の話し合い場面を動画にとって、リーダーたちでワークショップをしたり、話し合いに笑いがあったのか、新人が話せたのか、自分自身が会議を楽しめたのかなどチェックポイントも設けている。リーダーが感覚的に伝えるのではなく、子ども理解とねらいと手立てからステップを踏んできちんと伝えられることが大切。若い先生には選択肢を示し、ある程度経験のある先生にはどうしたいかオープンに尋ねるなど、リーダーとしてのスキルを身に付けてほしい。保育者集団も安心して自分の思いを出せること、色々と試してみたいと思えることを風土として大切にしており、未就園児クラスの先生もそこに位置付いている。

(4) 保護者のニーズ

長時間保育のニーズが増えて、全員が入れない状況が続いている。現在2号が80人程度。1号に関しては、3年前から全員が入れるようになった。公団住宅だったところが高層マンションになり、両親でローンを払うという人が増えた。転勤の家族も多く、実家代わりのように、困ったことを相談できる、頼れる園でありたいと思っている。

未就園児クラスの運営について、週3日や4日を考えたこともあったが、週1回を3クラス設けることで、幅広く多くの子育て家庭を支援することができる。コロナ禍も大きかったと思うが、定かでないネット情報に左右され、不安を抱えて子どもから離れられない親もいるし、他の子どもと全く触れ合うチャンスがないまま3歳から入園してくることもある。週1回の難しさもあるが、保護者も非日常体験だからこそぐっと入ることが色々あるのだと思う。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

手応えはとても感じている。保護者同士が決まったメンバーで会うことで、親子登園が終わってもよくコミュニケーションをとっており、一緒に公園に遊びに行ったりしている。共同養育という本来の子育てのスタイルに戻せている感じがある。家庭や親が安定すると、子どもの安定につながるの、とても良かったと思っている。課題としては、今たまたま最適な保育者が来てくれているが、保育の専門性と子育ての経験と保護者同士をつなげることができる専門性のある人を今後意図的に育てていきたい。

近畿地方：認定こども園（定員 415 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

Ⅰ. 保育者視点

（１）保育担当者の保育歴

保育歴 11 年 幼稚園教諭 1 種と保育士資格 本園に 10 年勤務経験あり

（２）保育内容や環境の工夫・活動の概要

家庭的な遊びが出来ることを意識している。手作りおもちゃなど、ご家庭の参考になる。また、子どもの姿に応じて遊びを変える工夫をし、今であれば、子ども同士の関わりができてきているので、お医者さんごっこやままごとなどかかわりが楽しめるようなコーナーを広げたり、増やしたりしている。あと、季節に応じて木の実を使って遊んだり、夏であれば感触遊びをかなり取入れたりするようにして、季節を感じられるような工夫を心がけている。

登園して身支度を済ませたら、30 分から 40 分くらい、子どもが 1 通り納得して遊べるくらいの時間部屋で遊ぶ。その後、それぞれのペースにあわせて声をかけながら片付けとトイレを済ませ、簡単な朝の会を行い、お休みの子や今遊んでいたこと、これからの予定について話す。晴れていたら、主に外で遊ぶ。環境が広くていろんな遊びがあるので、なるべく好きな遊びができるように配慮している。

（３）保育の計画と振り返り

勤務時間が 9:00～13:30 なので、その前後で準備と記録、計画を行う。戸外であれば、幼稚園の子どもが使っていない場所を使うようにしたり、ガラガラドンの絵本が好きだからごっこ遊びを楽しんだり、運動遊びを計画したり、その時の条件や子どもの姿から計画を立てるようにしている。預かり保育の部屋と兼用で使っているので、毎回、朝来たら、自分たちの必要な環境を出すようにしている。

子どもが帰ったら、振り返りと話し合い、次の製作の準備、記録などを行っている。その内容や困ったこと、伝えたいことは出勤していない担当の先生ともラインで共有する。子どもの様子は、写真と共に保護者に配信する。その記録を、保育者の振り返りと子ども理解に生かすようにしている。

（４）園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

本クラスを担当している先生がみんなベテランなので、とてもやりやすい。誰かが主でなければ回らないということがなく、任せられる。担当の 3 人は全員非常勤だが、元園の保育者や保護者でもあるので、保育のイメージの共有がしやすい。1 から 10 まで言わなくても、したいことや子どもの姿を受けて次にしたいことなどが、話し合いながら自然にまとまっていく。親子未就園児対象のクラスと兼務しており、その準備と保育の準備に時間がかかることが今の課題になっている。

その日、共有しなければならない情報は、ラインで行い、直接園の先生、学年の先生、主任とコンタクトを取って聞いたりする。保育園の先生が声をかけてくれたり、幼稚園の先生がお店屋さん誘ってくれたり、お母さんのコーラスの催しに誘ってもらったりする。

（５）園の中で 0～2 歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

幼児よりも個々の子どものペースの違いが大きいので難しいが、そのペースに合わせることを大事にしている。生活面の自立がまだできていないので、着脱や排せつなど、意識して自分でやろうと思えるように手助けをしたり、保護者に声をかけさせてもらったりしている。

一人一人の子どもの成長がとても大きくて手応えを感じる。友だちとの関わりが全然なかったのに、こちらの声かけや仲立ちを通して次第に自分たちで出来るようになっていっているのを見ると、成長を実感する。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

家ではできないような経験、友達とのかかわりをはじめ、例えば砂場遊びでドロドロになって思いっきり遊ぶことなど、子どもにとって楽しい経験になっている。その他、寒天遊び、絵具、氷、水遊びなど、園でしかできない遊びを楽しめるようにしている。製作なども、無理にやらせるわけではないが、環境として準備して、その子どもに合ったやり方で一つは持って帰ることができるように援助している。また、保護者には、作らなかった場合でも、その子の今の興味関心や取り組んでいることについて写真を通して具体的にお伝えするようにしている。

生活習慣の自立について、個別にそれぞれ課題をもって取り組んでいる。特に、自分でしようという意欲を育てることと、時間がかかっても自分ですることを大事にしている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

母子分離については、無理やり離すのではなく、可能であればお母さんと一緒にいてもらうこともある。ただ、他の子がそれで不安定になってしまうこともあるので、子どもが落ち着いたらバイバイをしてもらったり、様子を見て声をかけたりしている。6月くらいまでは、3人体制でやらせてもらったりするが、今年は泣きがひどい子が多くて、1学期中3人体制で行った。そこらへんは、フレキシブルに運営できる。

移行については、次に一緒にの学年になる保育園の2歳児クラスの先生が、よく声をかけてくれて一緒に遊ぶ機会を取っており、関係づくりを意識している。保育園さんとは、もう少しかわりを増やしたい。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

保護者同士仲が良く、お茶に行ったり、ハロウィンパーティーを楽しんだりしている。元気がなさそうだったお母さんがとても明るくなったり、お母さん同士、相談もされたりしているようだ。初めに母子登園して、顔見知りになって、親同士のかかわりが生まれてよかった。

子どもの様子をお伝えするときに、基本的な生活習慣での工夫を事例として入れたり、遊びがてらやってみてくださいねと、親子の活動のときなどに、具体例と共に提案したりしている。すると、「うちでもやってみました」とか、「やってみたらうまくできました」という声を聴くことができた。基本的な生活習慣の自立について保護者に意識してもらうことで、靴の着脱が早くなったり、水筒の開け閉めができるようになっていたり、手応えがある。

(2) 保護者を意識して行っていること

療育面で心配がある場合、デリケートな問題ではあるが、子どもの姿を共有し、困りごとを聞いたりするなかで、相談を一度してみてもどうかと提案するようにしている。また、育児で困っていそうなことをお聞きして、関わり方など育児相談に乗るようにしている。そこでレスポンスがあると嬉しい。まじめなお母さんが多いので、よく聞いてくださる。

近畿地方：私立幼稚園（定員 300 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・対象月齢：2 歳児（令和 3 年 4/2～令和 4 年 4/1 生まれの子ども）～幼稚園 3 歳就園まで
- ・定員：定員 48 名、登録制
- ・開催日・時間：月・火・木・金 4-9 月/9 時～12 時、10 月-3 月/9 時～13 時 15 分
週 1 回
- ・月額料金：保育料、月額 6,000 円 給食費、1～3 月 合計 4000 円
＊こども誰でも通園制度施行的事業：入会金 3,000 円 雑費 1,430 円
- ・親子分離：4 月は親子で登園しクラス内に保護者も入る。5 月からは親子で登園はするが、
クラス内に保護者は入らず子どものみになる。
- ・保育担当者・人数・資格：専任保育者 1 名/非常勤保育者 2 名 幼稚園教諭二種免許・保育士資格
- ・専用保育室：専用保育室で実施
- ・園庭：時間を決めてクラス単位で遊ぶ
- ・昼食：10 月以降お弁当持参 1 月以降自園給食

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・1 日の保育の流れ：登園⇒身辺整理⇒自由遊び（室内）⇒みんなで活動⇒自由遊び（戸外）
⇒（お弁当・給食：実施ありの場合）⇒降園準備⇒降園
- ・予約方法：園内の ICT 担当者と業者で予約システムを作り実施 2 月説明会
- ・実施目的：①子どもが幼稚園の園庭や保育室などの環境や、保育者とのかかわりから、様々な刺激を受けてしっかりと遊びこみ、豊かな経験をする。②様々な友達とともに一定時間を過ごす体験をする。③家庭と園が子育てや子どもの育ちを継続的に共有し、喜び合える場とする。④保護者の子育て・育児を支え、保護者自身の生活にゆとりがある状況を作ることにより寄与する。⑤本事業を通して保護者が子育てや幼児教育・保育の知識や情報を得ることができる。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・過去より、地域の未就園の子どもがいる家庭を対象とした「未就園教室」（2 歳児）を実施。
- ・その後、この未就園教室は、「保育所の空き定員等を活用した未就園児の定期的な預かりモデル事業」（2 歳児）とともに実施。そののち、新未就園事業（2 歳児）に統合し一本化。
- ・一本化された事業は、「こども誰でも通園制度試行的事業」（2 歳児）として現在に至る。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・関係性の構築：「家庭以外の人でも信じるに値する、受け止めてもらえた、自分と同じことに興味関心を持つ他児がいることを知る」といった経験を大切にする。
- ・遊びを大切に：「好きな遊びを通して人と繋がっていく」経験を大切にする。言われた通りに言われたものを作る、作品制作重視の保育ではない。「遊びが大切で、中でも外でも遊び込む」経験を大切にする。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ **3歳児以上の保育・クラスとの関係性**：2歳児を経験した大半の子どもが3歳児クラスへと移行する。3歳以上の子どもは2歳児クラスにこういう子どもが来ているんだなということを認識している。発達をトータルで見っていく視点が必要である。記録を共有したり引継をしたりするが、保護者が段差を感じていると思うため、2歳から3歳へどのように繋いでいくか、子どもが3歳児クラスになって見たような人がいるのかな、見たような環境があるのかな、玩具はこうして遊んだらいいのだなというようなことがわかるような連携のあり方を考えていく必要がある。ホール、園庭等幼稚園施設を共用して使用している。
- ・ **記録・計画・研修等の体制**：園内研修に参加している。こども誰でも通園制度に特化した研修は現状なかなかないため、乳児保育の研修に行くよう声をかけたり小規模保育事業（本園に併設）と交流するような園内研をしたりしている。教育課程は作っていないが、保育の計画は立てている。年に数回の面談を行い、個々の子どもの記録として残している。また、保育においても記録を取り、子どもの理解に務めている。
- ・ **地域における園の役割・地域における保護者のニーズ**：保護者には、幼稚園に繋がる経験をさせてほしいというニーズがすごく多い。1号家庭がこの地域では多いのかなと思う。集団の経験をさせてほしいことと専門家と繋がりたいというニーズがある。カウンセラーも配置しているが、敷居が高く、「ちょうど相談がしやすい距離感」である保育者との関係性を求めている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・ **子どもの安定と保護者の変化から感じる手応え**：子どもは最初泣くこともあるが1学期が過ぎてくると安定してくる。保護者の意識はかなり変わってくる。家で食べられなかったものが食べられるようになるといった食に興味が出たり、園で習ったんだと誇らしく家で言ったりなどの子どもの姿を通して、保護者が園での生活に興味を持ってくると先生と対話してみようという思いが強くなってくる。
- ・ **課題**：①2歳児クラス側の考えや思いを園全体で共有する場を持つこと。ただ、リーダー同士は月1回集まって2歳児クラスの保育者も入って話し合い、全体のリーダーに報告する会は毎月1回設けている。園内にはチャットツールがあるので皆が揃わなくても確認をすることはできている。②週1回しか来ないので遊びの継続が難しいこと。③個に応じた指導であっても補助がいる加配がいるという子どもがいた場合、公的な補助がある制度ではないので、どの程度できるのかなということ。④繋がりができる、生活のリズムに慣れるといった子どもが主体的に動ける状況を作るようにすること。預かっているだけではいけない。

近畿地方：私立幼稚園（定員 300 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

Ⅰ. 保育者視点

（１） 保育担当者の保育歴

- ・本園で 31 年目の経験がある。幼稚園二種免許状と保育士資格がある。

（２） 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・遊びを中心においた一日の保育内容・活動：遊びに入れたい子もいるため遊びをたっぷり行う中で落ち着いて遊び込めるようにしている。遊びが終わると、その後クラスで集まって、ダンス、体操、絵本、手遊び、歌をみんなで行う。それが終わったら外でたっぷり体を動かして遊ぶ。遊んだ後、現在はお弁当を食べて帰るという流れになっている。お弁当は 11 時 45 分に食べ始める。9 時から 11 時 30 分までは遊び中心である。遊び込める時間があるので 1 時間遊んでもまだ遊びたいと言って遊び足りないくらいである。最初は「帰りたい」「ママに会えないの？」という気持ちが強かったが、最近はもっと遊びたいと言うようになり、2 歳児クラスで過ごす流れがわかり見通しが持てるようになったことで安心でき、園が楽しい場所になってきている。
- ・安心して遊べる環境の工夫：環境は、1 週間に 1 回の登園であるため変えないようにしている。ここにはこれがあるという安心感、自分がここで遊んだら落ち着くという場所を変えずに、子ども達の興味に応じてそこに置くものを変えていく。子ども達が飽きないような変化をつけている。週ごと記録に子どもの姿を書き、その子の遊びがどう変化しているかを見ていく中で、3 か月くらい記録を取ると子どもの遊びの傾向がわかってくる。それを基に環境を構成している。
- ・集団で食べるお弁当や給食のよさ：食に興味関心を持ちにくい子どもが多く、保護者との面談でもその課題や悩みをお話しされる方が多い印象だった。しかし、集団で食べると友達の力は大きく、最初は手で食べる姿もあったが、次第に友達が食べるのを意識してか、手で食べずに、箸やフォークを使うようになった。保護者からは「口に運んでいたのが自分で食べるようになった」と自分で食べようとする姿も聞かれるようになった。

（３） 保育の計画と振り返り

- ・詳細な記録と計画：記録はスプレッドシートにまとめ、最初 3 か月くらいは詳細に取り、6 月の面談以降は 1 か月ぐらゐをまとめて取っている。週案はねらい、子どもの活動、保育者の配慮と援助を書いている。個人面談記録も取っている。面談は 15 分くらいしかないため、面談 1 週間前に Google でアンケートを取り、親が聞きたいことを把握している。

（４） 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・子ども理解のための情報共有：次に担任になる保育者には発達面や当該の子どもとの興味関心や良さなどを含め引継ぎを行うなど子ども理解のために情報を共有している。園の園内研修には参加している。

（５） 園の中で 0～2 歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

- ・2 歳児の特性を踏まえた手応え：2 歳児の子どもは力をもっている。友達とも繋がっている。吸収がすごい時期で、園で刺激があってどんどん楽しいことを発見したり探求したり可能性が広がっていく。園で子どもが経験することにはワクワクがいっぱいある。
- ・2 歳児の特性を踏まえた困難さ：イヤイヤ期の 2 歳児は本当に大変だと思う。これに関し

て書物なども読んだが書かれていることだけではわからないことがたくさんあった。この時期を保護者だけで受け止めている辛さなどがあるのだろうと感じた。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・**子どもの持っているやさしさが2歳なりに発揮される経験**：子どもが泣いているときに先生が接する姿を子どもは見ている、自分がやってみようとするようになってきた。泣いている友達を見てまごどコーナードご飯を作り友達に食べさせる行動など、子ども自身が考えて友達に何かしてあげたいという気持ちを持ち、自分なりの方法で真似ではなく表現できるようになってきている。このことを保護者に話すと、家庭では見られない子どもの姿からその子ども自身の持っている良さに気づき、一緒に育ちを共有できる喜びもある。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・**親子の分離の難しさへの対応**：園へ来る＝保護者と離れる時間であることを踏まえ、泣いているときに「大丈夫だよ泣いてもいいよ。お母さんが好きだから泣いているんだよね。」と受け止めると自分のことをわかってくれる保育者ということだんだん落ち着いてくる。保育者が「その気持ちわかるよ」と寄り添って子ども達の気持ちを受け止める。
- ・**3歳児クラスへのスムーズな移行**：最初は、子どもは安定せず保育者の周りにいて在園児が来てもいこうとしないが、気持ちが落ち着いてくるとちょっとしたかわりを受け入れるようになり、受け入れた子が楽しく遊ぶようになる様子を周りの子どもは見ている。お兄ちゃんとかお姉ちゃんとかは怖くないんだなということを知っていくと、自分から行ってみようとする姿も増えてきている。2学期になって、年少児との交流時間を作り遊んでいる。4月から自分が入る環境を知って安心できる場所だと理解ができるようにしている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・**保護者の抱えている大変さと共感的態度**：トイレトレーニングでは2歳児の実情を知ることと、これまで3歳児で携わったトイレトレーニングの在り方を振り返り、自分に足りなかった部分を学ぶことができた。面談で保護者は、やってみようと家でも頑張るが、子どものイヤイヤ期で、したくないの1点張りで進まないという。園でも、環境を作り、一人一人の実態に応じてやっているが、なかなか難しい。面談で「こういったことで取り組んだらどうでしょうか」とその子どもに応じた方法を提案し一緒に考えると保護者は取り組んでくださり、次の登園日にはできるようになっている子どもが増え、今は半数ぐらいができるようになってきている。保護者は子どもと離れ自分自身の時間を過ごすことで気持ちに余裕も生まれ、子どもの登園日が保護者によい時間になっている。
- ・**意図的に作る保護者同士の関わり**：発信してくれる保護者がいて声を掛け合うようになっている。2歳児クラス対象に「お友達作りませんか」という会を開いた。その場が保護者同士の距離を近づけて話をする機会になっている。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・**個人面談の実施**：6・7月と2・3月の年2回面談を行っている。最初の面談は保護者を知る子どもを知る。次は入園に向けて、入園に対する不安を聞いたり、1年の成長を共有したりしている。面談で保護者が気持ちを伝えてくれることがありがたい。

四国地方：私立幼稚園（定員 140 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A クラス

- ・対象月齢：2 歳児～クラス全員 3 歳児になるまで
- ・定員：定員 20 名程度（1 クラス） 非登録制
- ・開催日・時間：月～金 8:30～14:00 短縮保育 8:30～11:00
- ・月額料金：一時預かり保育料 30,000 円（満 3 歳となる誕生日前日まで）給食費 毎日 4,600 円
- ・親子分離：親子で登園するが、教室内に保護者は入らない。
- ・保育担当者・人数・資格：専任の保育者 2 名。7 年目（担任）、20 年目以上（主任）幼稚園教諭二種免許状・保育士資格を有する。
- ・専用保育室：専用保育室で実施
- ・園庭：学年を中心に、異年齢ともかかわる。
- ・昼食：お弁当・給食あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料：園の全体的計画の中に 2 歳児の教育課程も位置づけられている。これに即して月間指導計画・週日指導計画も整えられている。
- ・1 日の保育の流れ：8:30 登園⇒9:00 園庭での遊び⇒10:30 片付け・着替え 課題活動（歌、絵、運動など）11:30 給食・お弁当⇒12:00 好きな遊び ごっこ・製作等⇒13:00 片付け・掃除⇒13:20 集まり⇒14:00 降園
- ・実施目的：子どもの保育を担うことを通して、保護者が親としてのアイデンティティをよりよく形成していく手助けをし、保護者同士が力を合わせ、園の子どもを慈しみ、よきモデル（憧れの対象）になろうとする文化を創生し、維持することを目的とする。専業主婦家庭にも質の高い保育を開く。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・本園では、2004 年満 3 歳児と 2 歳児の混合クラスを作り、2 歳児の受入れを始めた。それは、「満 3 歳児の誕生日の翌日から随時入園してよい」という国の規制緩和を受けてのものであった。2010 年本園は認定こども園となった。子育て支援事業として 2 歳児 1 時預かり事業と未就園児対象の子育て支援「めばえ」を実施している。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・2 歳児の発達の実際に即した遊びと環境：2 歳児は感覚統合ができる子どもに育てる。多様に体を動かす喜びを得ることが大事。平衡感覚、固有覚、触覚の働きがうまくいかない子どもが増えている。本園所有の山では不安定なところを体軸を保って動かなければいけないので、体幹がしっかりするすべての基盤である体づくりが大事。自分の興味関心で動く、意欲と共に動きが生まれることが大事。困っていることが言えるように絵カードを導入し、見てわかる、困ったときは見て確かめられる、見通しをもって今何をやればいいのか、目で見てわかる環境を整える。仕事の所作、美しさ（箒の掃き方、落ち葉の払い方、野菜作りなど）を保育者がモデルとして見せる中で実際にやってみる生活体験を大切にしている。

鬼ごっこのようなお互いが応答的に結ばれて笑えるような心が揺れ動いて楽しい遊びを意識して行う。現代の子どもは友達関係が少ないので単純なやり取りの楽しさを十分に感じられるようにしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・**3歳児以上の保育・クラスとの関係性**：年度途中で3歳になっても現クラスに在籍し、4月に一斉に進級する。3歳児クラスは半分進級児、半分新入児である。進級児は何もわからない新入児のモデルになってくれている。園庭は園全体で共有しているため異年齢交流は多い。2歳児担任保育者の誰かが持ち上がりになり3歳児クラスを担当して拠り所となる人間関係には配慮している。
- ・**記録・計画・研修等の体制**：2歳児は2歳児の記録として残している。園の全体的計画に基づき週日案・個人案・保護者に配布する月間指導計画（資料あり）を作成している。毎日ミーティングを開いて園庭の使い方とかいろいろと共有は必ずしている。研修は多い。園内研修が主で年に12回園全体で行っている。2歳児の保育者だけで研修に行ったり、2週間に1回学年会をやるのでそこで教材研究とかをしたり適宜行っている。全体では園内研修は講師を呼ぶことが多い。今年は子ども理解をテーマにお互いの子どもに対する関わりを話し合っている。
- ・**地域における園の役割・地域における保護者のニーズ役割**：自治会の会場として園を地域に開放している。また、理事長と園長が地域の会の役員として参加している。**ニーズ**：子育ての仲間が欲しい。親としてのアイデンティティをもつことが一番大事で誇りを持てるようになるために仲間がいることが一番である。園では参観日を年間30回ほど行い、その中で保護者同士の交流を進めている。子育てが難しいから園に預けたいと考えている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・**手応え**：**2歳児の発達特性と遊びの大切さ**：遊びは、自分で選んで結果を自分で受け取る自分に常に向き合う活動である。そういう強さを小さい頃から育てている。苦手なことに少しずつ向き合っていける時間がもてている。2歳児は冒険ができる。環境を広げていい時期になっている。また、2歳児は感覚をもって物事を見て、刺激を全部入れ込む。感覚的なところを基盤に言語の世界へと移行していく過程であり、ヒトになる出発点のような年齢である。
- ・**保護者の肯定的な変化**：汚れること、生き物と触れ合うことというキャパシティは確実に広がっている。保護者の横のつながりが園を守っていくのでそれは専業主婦家庭が支えてくれている。一時預かり事業は保護者と一緒にやっていくという意味においても大事な学年と考えられる。
- ・**課題**：人材確保が大変である。また、発達が時代的にも変化している。年齢の低い子どもを対象としている場合、2歳児の子ども達が見る世界にどれだけ保育者が下りていけるか、保育者側のスキルの問題として洗練しつづけないといけない問題である。2歳児を担当できる保育者は他の学年の保育も担当できる、そのようなスキルを身に付けていかなければならない。

四国地方：私立幼稚園（定員 140 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A クラス】

Ⅰ. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

A クラス担任：産休・育休を挟んで 5 年目になる。A クラス主任：本園 22 年目になる。

2 歳児から 5 歳児まで担任してきた。各々幼稚園二種免許状と保育士資格がある。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

・人との関わり・自然への親しみ・言葉を大切にしたい一日の保育内容・活動：園生活を安心して送れるようにスキンシップを大切にしている。いろんな気持ちを受け止めながら保育をしている。生活の仕方の流れがわかって自分でやってみる気持ちになるように援助している。身の回りのことをやってみようとし、園の環境に関心をもちいろいろな人と関わりながら遊びを楽しめるようにしている。"園所有の山"を通して自然に親しみをもって関わる、人の関わりを楽しむ、言葉を使ってやり取りを楽しむことに重点をおいている。

・子どもの動線を考慮した環境の工夫：手洗い場の横にすぐトイレがあり、お昼寝や着替えはすぐにできるようにと子どもの動線を考えた環境を整えている。体を使ってしっかりと遊べるように巧技台やトランポリンやマットを準備し、子ども達の様子を見ながら遊具を足すなどしている。子どもの興味（文字・ごっこ・積み木・乗り物プラレール）を捉えた遊び環境を用意している。遊びがまとまらないことにならないよう、飽きがこないように 3 か所ぐらいを拠点にして行き来ができる遊びの中で、保育者同士で話し合い相談し合いながら調整をしている。園全体を他の学年と一緒に自由に使い刺激を受けているほか、じっくりと遊べるようにまた学年間の交流が促進されるようになっている。

(3) 保育の計画と振り返り

・保育マップを活用した記録と計画：週日案を書いて振り返りを行っている。クラス主任と担任が、相談したり一緒に考えたりして行っている。保育マップを書いていることで子ども達がどこで何をしていたか、そこでどういう遊びをしているかということが整理でき、環境を変化させていくことができる。エピソード記録を書いているが、それを書くことで前回からの変化を捉え子ども達の学びが増えていることがわかる。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

・保育を円滑に進めるための情報共有：保育後に全学年が集まりミーティングを行い、今日の出来事の報告や明日の予定を伝えるなど共有している。"園所有の山"での保育(週 1 回)は縦割りになっているので話し合っ計画を立てていく。2 歳児担任の経験をした保育者が多いので、相談することもできる関係である。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

・2 歳児の特性を踏まえた手応え：当初みんなで集まることが難しかったが、最近になって集まり出して先生の話聞く姿勢が出来、遊びの中で友達の名前を呼ぶことが増えてきた。子どもの成長、伸びを感じることができる。意欲が増して何でも挑戦しようやってみようとする姿が見られる。遊びの中では場所やモノとの関わりや友達との関わりが少しずつ深くなってきている。そうした姿を見ることで成長を感じ、嬉しく思う。

・2 歳児の特性を踏まえた困難さ：生活面では家庭との連携の難しさを感じる。トイレトレーニングでも「夏休みに頑張ってみます」と保護者は言うが、園頼りになっている側面も

あるように思う。着替えなど身の回りのことが出来なかったり、トイレもなかなかおむつが外れにくかったりするため、生活習慣の確立に手間と時間がかかる。ルールのことなど社会を知らない子ども達にどう伝えていくか、伝え方に難しさを感じている。子どもの自立を促すためには保育者の配置が子ども6人に対して1人という配置では難しい。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験(学び)になっている事例

- ・**トラブルの経験**：初めての集団生活の場、親以外の社会の場での経験の仲で、社会性を学ぶことが大きい。友達との関わりが難しくすべては自分のものと考えて手が出たり噛みに行ったりすることがあった。保育者が瞬間瞬間で「こういう時は貸してって言うんだよ」と声をかけていた。1学期はトラブルが多かったが、保育者がこのように丁寧に関わっていくことで、最近は言葉で「貸して」って言えるようになってきた。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス(親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて)、3歳児クラスへの移行

- ・**安心感の醸成と親子の分離の難しさへの対応**：子ども達が安心して園に通えるように、個に応じた関わりを作っていく。朝から帰るまで泣きどうしの子どももいた。子どもにとって安心できる保育者を固定して「〇〇先生だったら大丈夫なんだよ」ということが伝わるようにしている。内面に不安を抱えている子どもには、気づいて視線を送ったり、声をかけて遊びに誘ったりしている。
- ・**3歳児クラスへのスムーズな移行**：3学期の末には徐々に3歳児クラスに上がることを意識させるために、3歳児クラスを見学する。3歳児クラスの子どもとは、運動会で一緒に走り、モデルとなってもらう機会を取っている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・**園での成長の肯定的な受止めと共感的態度**：印象的な姿として子育てに自信のない保護者だったら言われたくない雰囲気の方がいる。そうした親にも安心して何でも相談、話をしてもらえるように園側も話しやすい雰囲気を醸し出すようにしている。2歳児はトラブルが多いが、保護者はそれを問題と考えるのではなく成長として捉えている。自分の子どものことだけでなく相手の保護者も、「〇〇君成長していますよね」とフランクに話される。運動会の後など「子どもが成長していることを実感しています」と声をかけてくださる。家庭とは違った子どもの姿、友達との関わりを知ったりとか子どもへの接し方とか方法とか知りたいことを一緒に考えたりすることが、保育者と話す中でできていっている。
- ・**密な保護者同士の関わり**：保護者同士は関係が密である。何かあってもLINEが回ってみんなが知っていた。本園での歴の長い親が中心となって新しい親を巻き込んで輪が広がっている。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・**共に子どもを育てていくという姿勢**：子どもの成長と一緒に喜ぶ姿勢、気軽に話しやすい雰囲気、子どもの姿を共有しての雑談。子どもが支えるために家庭でできる支援をお願いする。困りごとの相談があったときに一緒に考えて問題の糸口を見つけていく。クラス全体では、参観日に日々の子ども達の生活の様子を伝える。個に対する対応とクラス全体に対する対応に気を付けている。

近畿地方：私立幼稚園（定員 618 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A 組（週 1 回）・B 組（週 2 回）

- ・ 対象月齢：就園前の在宅児（2 歳児）
- ・ 定員：18 名 登録制
- ・ 開催日・時間：A 組【年間 30 回/ 火曜日/水曜日 5,6,7,9,3 月（8 月除く）10:00～12:00（給食なし・おやつあり）10,11,12,1,2 月 9:30～13:00（給食あり）】
- ・ B 組【年間 60 回/ 木曜日/金曜日の連続実施 5,6,7,9 前半,3 月（8 月除く）10:00～12:00（給食なし）9 月後半,10,11,12,1,2 月 9:30～13:00（給食あり）】
- ・ 月額料金：A・B 組共通 プレ幼稚園入園受入準備費：10,000 円 年間諸費用保育料：10,000 円 毎月の納入金：A 組月額 7,000 円 B 組月額 14,000 円
- ・ 親子分離：当初は親子で登園しクラス内に保護者も入る。5 月下旬からは親子で登園はするが、クラス内に保護者がずっといることはなく子どものみになる。
- ・ 保育担当者・人数・資格：子育て経験のある専任保育者 3 名の体制。育休明け 2 名、子育て終わりの保育者が 1 名。幼稚園免許状・保育士資格がある。
専用保育室：専用保育室で実施
- ・ 園庭：時間を決めてクラス単位で遊ぶ

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料（資料あり）

- ・ 1 日の保育の流れ：登園⇒身辺整理⇒部屋遊び⇒排泄/おやつ⇒保育教諭が意図的に経験させる活動⇒外遊び⇒（給食：実施ありの場合あり）⇒降園準備⇒降園
- ・ 予約方法：体験遊びあり・面接あり・11 月受付開始 本園 HP 内「プレ幼稚園申込フォーム」から申込
- ・ 実施目的：①子どもが楽しみながら、いろいろな遊び・運動・製作等を経験し、無理なく集団生活を楽しむ。②家庭の経験不足を補いトイレトレーニングや食事をはじめとした基本的生活習慣が身についていくような関わりをもつ。③未就園児の家庭の子ども同士の交流ができない、保護者同士が友達になれないといった孤立した実態を考えて、園では社会的な繋がりを育てていく。

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・ 2005 年 5 月から 2 歳児受入れ「プレ幼稚園」を実施。①3 歳入園まで待てないという保護者の要望（行き場がない、友達付き合いが難しい、トイレトレーニング、靴の履き替えができないなど）に応えたこと。②地域の中で園が大きな役割をもつようになってきたこと。（従来、園は家庭教育の補完といわれたが家庭教育が難しくなってきたためモデルを示し支える）といった理由による。県の私立幼稚園乳幼児子育て応援事業（在宅児子育て応援事業）を利用して実施。補助金がある。13～18 人対象の場合、1 日あたり 16,000 円など人数によって金額が異なる。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ 子どもの身辺自立：身辺自立ができるように、そのことを大切にしている。

- ・**愛着と挑戦**：担任保育者と子どもとの信頼関係のもとで、愛着も含めて、甘えながらも思い切り自分の体を使って遊ぶなど様々な遊び体験を行う。いろいろな経験の中で成功体験だとか楽しんだとか友達との繋がりを共有していき豊かな生活、まさに愛着と挑戦の繰り返しを行う。園内の施設も自由に使える。保育内容は先生たちに委ねているが、バスを使って遠足に行くといったように行動範囲を広く遊びを展開している。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・**3歳児以上の保育・クラスとの関係性**：2歳児クラスの子どもが全員3歳児クラスへと上がる。3学期はプレ幼稚園と3号認定のクラスでの合同の保育を行う。3歳児クラスへ期待をもって人数規模を多くしてその中で楽しむ。3歳児は2歳児の子どもを気かけ、2歳児は早いうちから年上の子どもと関わるため安心して3歳児クラスに移行する。3歳から入園してくる子どものモデルともなっている。園の施設はすべて共用であることに加えて、3階に1・2歳児（3号認定）専用の部屋と園庭があり、そこも使用することがある。すべて共通で広い北グラウンドもある。
- ・**組織だった記録・計画・研修等の体制**：2歳児クラスのカリキュラムがある。記録は保護者から聞いた内容を加味して担任保育者で（子ども一人ずつ）取っている。研修は園の職員全員受ける内容もある（外部講師を呼んで、子ども理解・マネジメントなどについて）。休園にして、他園に出かけて合同で研修をすることもある。
- ・**地域における園の役割・地域における保護者のニーズ**：園を選ぶ際、保護者は利便性を優先する傾向がある。園見学も激減し、家から便利な園を選択する。1号認定で入園して2号認定に移行する子どもが多い。2号認定で長く預かってほしいという保護者のニーズが高く、働きたい希望をもっている。プレ幼稚園は、4・5年前からは考えられないほど少ない。少子化による園児減に対応し、幼稚園が提供できる新たな価値（家族の幸せ、子どもの幸せと喜び、子育ての楽しさ、親子の深い絆）をどのように創り出せるか考えている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・**保護者・園組織のよい変化**：保護者は、笑顔で帰り、母親同士も繋がりが生まれて孤独感が和らぐ。家族ぐるみの交流が深まっている。園組織全体は、3・4・5歳のクラスは学校的な要素もあるが、2歳が入ることで、子どもが温かく安心できる居場所になっている。
- ・**2歳児受入れに取り組む意義**：入園の準備という面もあるが、自我を出しながら様々な興味関心を広げていく2歳ならではの時期を保障し、先生の温かい目で愛着関係を築く。保護者とともに愛されているという心地よい居場所のところで子どもがのびのびと成長していくのも大きな役割。これぐらいの規模で保護者も含めて一緒にやる意義は大きい。
- ・**受入れの難しさ**：低年齢であるため個性の範囲が広い。3歳入園児に気になる子どもが来た場合、その前段階でプレに来ませんかと誘う。保護者と一緒に子どもを見ていく。
- ・**こども誰でも通園制度を見越した課題**：今後こども誰でも通園制度を、どうするか、どういう形で受け入れていけるかが課題である。プレ幼稚園をコアとして残しつつ、得られたノウハウやスキルを活かしていくことができるか、また、補助金などがカットされたらやっていけるのか？親子が継続的に集い、子育てや家庭教育について学びながら子どものよさに気づける場を作ることが大切である。2歳児受入れのあるべき姿について明らかにしてほしい。

近畿地方：私立幼稚園（定員 618 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A・B 組】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・子育て経験のある専任保育者 3 名の体制。うち 1 名は産休・育休を経験し昨年は 1 歳児クラス（3 号認定クラス）の担当。幼稚園免許状・保育士資格がある。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ **保育内容や活動の工夫**：人数が多くて外遊びが不安な場合、3 階のテラスで遊ぶ。週に 1 回 2 回の受入れで毎日登園している子どもと違い園に慣れていない。そのため安全面にも気を付けている。
- ・ **環境の工夫と留意点**：玩具をたくさん変えすぎると落ち着かない。毎週来たらこの絵本がある玩具があるというところで落ち着いて遊べるように考えている。室内の真ん中に空間、周りに遊びのコーナーが用意されているが、子どもにとって遊びやすい環境になっており大きくは変えない。家庭がメインで育てている子ども達なので家にある玩具や幼稚園ならではの玩具（保育者が手作りで作った玩具）も置いている。1 学期は水遊び、感触遊び（粘土・スライムなど）が多かった。2 学期以降はのりを使って制作物を作る、秋の自然物で遊ぼうということでお芋掘りをするなど季節に合わせての遊びを行っている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ **詳細な記録と計画**：毎週のプログラムは日案に書いている。保育後の振り返りは 3 名の担任で行っている。どうだったか、難しかったか等振り返り、反省の欄に記録している。個別記録もあるが、担当の子どもは決めていない。皆で協議して記述する。連続性を持たせた保育内容にはなりにくい、今年度から週 2 日のクラスができたことで、木曜日・金曜日の連続性が確保できるようになった。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 3 歳以上の保育に繋げていきたいという思いをもっている。カリキュラムも体系的に出来上がっていて、2 歳児受入れが園の中に位置づいている。

(5) 園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・ **2 歳児の特性を踏まえた手応え**：嬉しい成長、これができるようになった、言葉が出てきた。など子どもの変化が見えやすい。
- ・ **2 歳児の特性と生活面を踏まえた困難さ**：生活面（生活習慣）は家庭での習慣が大きく、家庭に協力してもらわないと限られた時間でのトイレトレーニングや食事の場面は難しい。園でやっていることを共有することを大事にしている。朝、保護者が「家でこうでした」と言ってくれることがあり情報共有しながら進めてはいるが難しく感じている。ただ、保護者とは、朝登園時は、保育室に入ってきて荷物を整理するところまで見ていただくため、合間合間で話ができる。嫌とか自己主張も園でしてくれるようになってきた。1 学期は泣いていなくて、今になって嫌と言って泣く子もいる。一人一人に応じたいが、集団生活でもあるので保育を進めるうえで難しさを感じている。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ **遊びや生活面での子どもの成長と言葉によるコミュニケーションの課題**：生活面で月齢の

差、個人差が2歳児は大きい。週1回2回の保育なので、どこまで子どもが伸びるかというところも気にしながら保育を進めている。手の洗い方を一日のうちの何回か経験すると来週覚えていたりするところは保育日数が少なくても伸びているところである。遊びは、1学期は親子分離だけで大泣きして凄く大変だったが、玩具も同じものを用意するなど安心できるようになってくると、最近は友達の名前も覚えて成長を感じている。2歳児はそれぞれがやりたいことをやって遊んでいる。言葉の面、友達や保育者とのコミュニケーションが言葉を通じてというところは難しい。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・親子登園の取り入れと親子の分離の難しさへの対応：初回は親子登園にして、いつも使っている保育室で玩具を使って親子で遊ぶ。体育館に行って、園にこういう場所があるということを知る。保護者とコミュニケーションを取ることで、子どもの好きな物などを聞きながら幼稚園で少しでも安心できるようにする。クラス全員が泣いているときは、フォローの保育者に入ってもらい、担任以外でもいいので少人数で過ごす時間を作って、少しでも安心できるようにする。家からお気に入りのタオルなどを持ってきてもらう。
- ・3歳児クラスへの移行：園長インタビューの中にあり。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者の気づきと意識のよい変化：感触遊びなど、家で体験できないような遊びができるのでよかったという声をいただいている。他の親子の関わりを見て、靴を履くことについて、うちは手伝ってばかりだったが手伝わずに待つことが大事なのだと発見があったと言う。担任にトイレトレーニングとか遅い寝る時間とか生活面の相談も多い。担任が「〇〇君これできてましたよ」というと保護者が今日も褒められたと泣いて喜ぶ。これは難しかったと伝えると「叱ってください」と言い、意識の変化を感じる。
- ・保護者同士の関わり：保護者同士の仲もよくなり会話があり繋がりができてきている。育児の悩みとかを保護者同士で話している姿も見られる。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・参観日・茶話会の実施：毎日登降園時に、保護者同士が顔を合わせる。参観日の後に茶話会を行う。2グループに分けて実施し、そこで保護者同士、仲がよくなっている。

C教室 子育て支援サロン 【保育担当者：C教室】

- ・プレ幼稚園に繋がる園の取り組みとしての子育て支援：「子育て支援サロン」は、0歳児、1歳児の未就園児を対象に、10時半から12時までの時間、親子が園に遊びに来る子育て支援サロンである。園の一角に専用の保育室があり、環境も整備され、経験豊かな保育者が対応している。安心して園に慣れてプレ幼稚園や3歳児クラスに移行することができている。また、地域に向けて園庭開放を大々的に行っており、園庭開放からプレ幼稚園への流れも大切にしている。園のよさをどのようにわかっていただくか考えている。園に来ていただくことでわかっていただくことはある。

北陸地方：私立幼稚園（定員 225 名）、園庭開放なし

【副園長】

1. 基本情報

(1) A クラス

- ・対象月齢 2 歳～3 歳の誕生月の無認定児、誕生月翌月から 1 号認定児…幼稚園部 2 歳児
- ・定員：13 名、登録制（4 月と 9 月に募集）
- ・開催日・時間：月～金 週 5 日、9 時～14 時（預かり保育なし）
- ・料金：30, 000 円+給食費
- ・親子分離
- ・保育担当者・人数・資格：1 クラス保育教諭 2 名（正規）、保育士+幼稚園教諭
- ・専用保育室あり
- ・園庭：保育活動に応じて使用 ・昼食：あり

(2) B クラス（3 号認定）

- ・対象月齢：4 月進級時に 2 歳、こども園部 2 歳児
- ・定員：12 名、登録制
- ・開催日・時間：月～金 週 5 日、7 時半～18 時半
- ・料金：課税額に応じて市から通知された決定額
- ・親子分離
- ・保育担当者・人数・資格：1 クラス保育教諭 3 名（正規 2、パート 1）、保育士+幼稚園教諭
- ・専用保育室あり
- ・園庭：保育活動に応じて使用 ・昼食：あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料：全体教育計画/写真で見る教育課程/月案、週案（幼稚園とこども園共通 2 歳児およびこども園 0・1 歳児）
- ・広報資料：園紹介パンフレット（カラー印刷）、園説明冊子、入園要項、入園願書（入園募集案内時の資料一式）

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・20 数年前から親子サークルをし、月 3 回の子育て支援をしていた当時、2 歳の子育ての困り感が強かった保護者のニーズがあり 1・2 歳児の預かりを始めた。当時は 3 歳児クラスと一緒に受入れて 4 年保育、5 年保育をしていた。当時の教育は一斉保育、1 歳児を 3 歳児のレベルに持ってこなければということをしていて、何のための受入れなのかと疑問に。なにより子どもが幸せそうではないということに気づき、まず 2 歳児を取り出して受入れするようになり 2 歳児の遊びが保証された。やってみると 2 歳児の生活習慣の習得、生活の中で楽しく身につく、多くのことを吸収するのを目の当たりにして、14 年前、私が教頭になってから別空間で 2 歳児を募集し始めた。
- ・その後、こども園に向かっていくことを見据えて、24 人きっかりに数を減らしていき、こども園になったときに、こども園 3 号認定 12 人、幼稚園部 12 人定員とした。しかし教

室の大きさは24まで受け入れられる広さだったこともあり、18人まで応じて、3人担任体制で。4月で12名、9月で6名、全18名で現在落ち着いている。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・子どものペースを大事にし、一人ひとりの思いを読み取ろうとしている。
- ・15年ほど前にこども主体の保育に大きく変えた。当然、0・1・2歳もそうなると思っていたのに、全然ならなかった。当時噛みつきも多く、おそらく、0・1・2歳が遊びこむ存在だと思っていたのだと思う。1年目に困って、井桁容子先生に研修を頼んで、公開保育をした。そこで、できてないところをどんどん指摘されて、泣きながらみんな受け非常に勉強になり、保育者の都合で保育していたことに気づかされた。それで保育が変わったら、子どもがすごく変わり、落ち着いて遊ぶようになり、噛みつきもなくなった。子どもの動きに合わせて環境を変え、子どもが遊びこめるようになっていった。1と2を継がないといけなくなり、一斉のご飯もやめ、子どものペースに変えていった。
- ・2歳児で長時間預かる子と、家庭で満たされている子の差が大きい。そうした子どもの状態に応じて、援助の仕方が異なってくる、そこを職員全体でそれを共有していこうということを研修や共有で大事にしている。3歳の接続がスムーズにいくように2歳児の受入れを大事にしている。また、年度末の申し送りを10の姿に則り実施するようにしている。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・幼稚園部2歳児担当保育者は現在2名体制。1名はベテランで、もう一名は新人を配置。
- ・幼稚園型認定こども園なので、補助が少ない分、市に聞いてもらっているのは、幼稚園時代からの体制を確保するために、3/31と4/1はお休みとすること、毎月1回は午前保育で午後は全職員の園内研修とするしくみそのまま幼稚園の頃から継続。こども園の保護者にも協力日として子どもを迎えに来てもらうようお願いをしている。
- ・研修日を確保し、正規職員全員で、月末に園内研修。その月の子どもの姿を振り返り、翌月の計画を子どもの姿から立てていくビフォーアフター表を作っている（2歳児月案参照）。
- ・2歳児は幼稚園もこども園も一緒にこの作業をして同じ計画を共有している。子どもへのそれぞれに必要な援助を行い、3歳児へのスムーズな接続を目指している。
- ・働く母親が増えたが、子どもを自分の手で丁寧育て3歳から幼稚園に入れたいと思っている保護者もまだまだいるため、その人たちに向けていつでも通える子育て支援室を作り、在宅で子育てしてけるような居場所を作っていきたい。この地域は特に通勤族が多くそうしたニーズが高いので、幼稚園として残っていく必要があると考えている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・こども主体の保育に変えてきたことで、うちを選んで就職したいとやってくる養成校の学生も増えたり、面白がってくれる保護者が集まってくれたりしている気がする。そうした人が園の方針を理解して、一緒に子ども育てていくということにとっても協力的であるよい流れが出ている。
- ・課題としては、生活が本当にこども主体になっているのか。1歳から3歳までそれがつながっているのか。
- ・幼稚園は時間的な余裕があり日常的職員の連携、相談、研修が多くとれるが、こども園部との差が生じており、保育の質担保のためにそこにさらに取り組んでいかないとはいえない。

北陸地方：私立幼稚園（定員 225 名）、園庭開放なし

【保育担当者：A クラス】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・大学卒→カナダの保育園に 1 年半→臨時で公立保育園補助→現幼稚園就職
- ・2 年間幼稚園部 2 歳児→出向：こども園化に向け協力園へ 0・1 歳児補助→現園に戻り 0・1 歳児担当→出産育児を終えて復帰→幼稚園部 2 歳児 2 年目に

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・その時どきの子どもの発達にふさわしいものを遊びの中で取り入れたい。
- ・子どもの人数が多いので、パズルコーナー、電車遊びコーナーなど区切りをつけて、好きなところでエリアごとに遊びこめるよう、どの子にとっても楽しい遊びが見つけられるように環境を作っている。
- ・外遊びは四季を感じる園庭なので、子どもたちがのびのび遊べることを意識。今日は落ち葉を集めてザクザク踏んだり、においをかいだり。また集団性が身についてきている今は園庭でしっぽ取りをして体を動かす楽しさを味わえるように。
- ・こども園の 2 歳児クラスとは進級に向けて半分ずつ「いれかえっこ」ということをしてメンバーの交流、様子は見ている。
- ・自由遊びがメインなので、他学年から誘われてお客さんになって招待されたりすることがある、園全体が安全な場所ということ子どもに伝える機会になっている。
- ・生活（トイレトレーニング、身辺自立等）は子ども一人ひとりに合わせた援助を心掛けている、自分でできるようになる声掛け。
- ・まずは子どもの思いを受け入れること。悲しい時でも、何々したかったね、と受容することを一番大事にしている。悲しいこともあるけど、楽しいこととして気分変えようと遊びや外に連れ出したり、ふっと変わるときにアイコンタクトをとれるかな、信頼関係ができたりしてるかなと意識している。園にいる間は楽しい気持ちで居られるような配慮をしている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・新人と今は組んでいるので、私の方が子どもの代弁をして新人ペアには伝えている。また降園後の時間を担任同士で毎日持って、子どもの共通理解が持てるようにしている。
- ・月 1 回の研修では子どもの姿から翌月の月案を 2 歳担当みんなで実施している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・最終目標は、3 歳児の姿は同じにという目標があるので、こども園と幼稚園部で共有することが大事と思っている。
- ・子どもたちにとって 3 歳の新しいクラスも安心できる場所だよと教えておいてあげたい。だからあらかじめ 3 歳児クラスに行ってどんな遊びがあるか見せてあげたり、自分から困ったら意見が言える子に育てられるようにしたりしている。困難に出くわしている時には、どうしたのと聞き、子どもから出る言葉を待つなど、他児に助けてあげるように援助を促すなどの横のつながりを作れるように意識。

(5) 園の中で0～2歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・保護者にゆとりがあるので、子どももゆったりしている。全員が満たされているので、そうした子どもたちがゆったり自分のしたい遊びに黙々と遊べているので、とてもいいクラスだなと思っている。困難はあまり感じていない。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・子どもたちが先生や友達の存在に気付いた瞬間。初めはママと泣いていても、幼稚園に来たら、こんな楽しいことがあると気づく、例えば、歌を歌う、手遊びをするなど。4月に歌った歌を今でも歌っている、きっとそれは子どもにとって友達と一緒に歌った、先生が自分の希望に伝えてくれた体験が心ときめく瞬間になっているのだと思う。自分を受け入れてくれる空間があると感じているのを感じる。それがあるので、思いも発揮できるようになっていると思う。
- ・以上児の発表会の取組を見ることで、自分たちの憧れをもつことになり同じような再現遊びをしている、そうした経験ができるのは幼稚園ならではのと思う。子どもたちからこうしてほしいという希望が出るものを手助けしている。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・今の時期は、子どもたちの集団性がでてきている。そのように成長してきているので、子どもが友達の気持ちにも気づくように、友達同士のつながりができるように、言葉を伝えていっている。
- ・0・1歳児に比べると2歳は自分の気持ちを言葉で返せる時期にもなってきているので、子どもの言葉を待ってみるといのかかわりが増えている。
- ・3歳児に向けて計画はあるが、個々の育ちの差があるので、その子その子の自分でできることを一つでも増やせるように配慮し丁寧に3歳児担当者に引継ぎしていく。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・心に余裕のある保護者が多いと思う。子どもに大事に丁寧に関わる人が多い。在宅保護者がほとんど。
- ・初めて幼稚園に預けたころは保護者も不安、だんだんと保護者も慣れてきて笑顔で送りだしてくれるようになる、そのように保護者が安心すると子どもの安心につながると思える。
- ・お迎えの時の保護者同士の交流、親睦会（学期に1回）への参加も高い。つながりたいのだなということを感じる。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・ポートフォリオの発信は、良い面もあるが比較して自分の子どもができていないかを不安に思う保護者もいる。その点では、配慮した発信をしている。保護者の不安が増えないような配慮。
- ・写真がフェイスブックにないと不安になる保護者もいるので、できるだけすべての子どもの姿が発信できるような配慮をしている。子どもへの目が向いていることが多いからこその配慮。

東海地方：私立幼稚園（定員 209 名）、園庭開放なし

【園長】

1. 基本情報

- ・対象月齢：2 歳児～幼稚園就園時まで
- ・定員：20 名、登録制
- ・開催日・時間：5 月～3 月まで火・木のみ開講（10 月以降は次年度入園予定児に限定）、9:30～11:30 の 2 時間（2 学期以降は月 1 回弁当持参で 12:30 まで延長）、週 1 回または 2 回
- ・月額料金：週 1 回で月 5,000 円（週 2 回は月 7,000 円）、半期申込み（入会金 2,000 円）
- ・親子分離：親子で登園するが、保護者は教室内には入らず、保護者は 1 階テラスの受入れ場所待機している（保護者同士のつながりを生む場にもなっている）
- ・保育担当者・人数・資格：幼稚園教諭免許・保育士資格を保有する A 担当者と非保有の B 担当者での原則 2 名体制で受入れ（パート）
- ・専用保育室：園内の 2 階に配置
- ・園庭：登降園時に親子で遊ぶことは推奨していない
- ・昼食：1 学期はなし、2 学期以降はあり、おやつは通年あり

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・関連資料：上記の基本情報等が記されているリーフレット・要覧・2 歳児預かり保育の指導計画・おたよりカード（1 か月ごとの子どもの育ちに関する見とりを担当がコメントして渡すお便り帳のようなカード：自園作成）を拝受
- ・1 日の流れ：9:20-30 までに登園・自由遊び、9:50 片付け、10:10～園庭等で遊ぶ（3 歳以上児とのささやかな交流あり（体操見学））、10:30～おやつ、その後は室内遊びを楽しむ、11:20 に降園準備、11:30 に降園（保護者が徒歩等で送り迎えをしている）
- ・申込方法：登録用紙に記入後面談（面談は担当者ではなく 3 歳以上児の教諭等が行う）

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・経緯：過去に満 3 歳児保育を導入・実施したが、入園につながるものが難しく 1 年で断念した。その後、理事長と退職教諭との間で 2 歳児のプレ保育を構想し、2008 年より週 2 回の限定的な 2 歳児の親子分離型の預かり保育を始めた。本年度で 16 年目になる。
- ・補助金・自治体等の制度：県からの補助はないが、市から子育て支援の人件費として 10 年ほど前から 2 名につき最大年 40 万円ほど人件費補助をいただいている。開設当初は上述の受益者負担による費用で賄っていたが、現在は短時間スタッフの人件費のほとんどを補助金で対応できている。
- ・スタッフ：幼稚園教諭の経験がある教員と、当園の元保護者の 2 名体制で担当している。いずれも園長・理事長・退職教諭等の縁故法により採用（パート）に至っている。
- ・カリキュラム：2 歳児としてのカリキュラムは月案ベースで作成し、5 領域の柱など育てたい観点は 3 歳児以降の教育課程と整合性を図っている。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・とにかく「幼稚園が楽しい」「幼稚園が好き」と登録・通園している子どもや保護者が感じてもらえること、安心感を持って生活できることを重視している（インタビューガイド「⑫保育者と親密で温かい関係を作る」が最も親和性が高い）。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当者の採用・研修：採用プロセスは上述の通り。特段研修等に行っていない（午前中のみの勤務のため職員会議等の参加は求めている）が、歓送迎会・忘年会などへの参加はある。あまり園長から研鑽を求めるよりも、担当者への信頼に基づく自主性を尊重し、やりたいことを自由にやれるのびやかな環境を整えることを重視している。
- ・3歳以上児の保育との関係性：以前は1階の園庭に面した教室で実施していたが、屋外設置のトイレへの移動時に園庭へ遊びに出てしまう子の姿もあった。現在は2階の一角にある教室で行っており、3歳以上児との緊密な関わりは積極的に設けていない。ただ、園庭で遊ぶ際に交流があったり、火・木のコアタイムに3歳以上児が行う園庭での体操に後方参加したりするなど、交流程度ではあるが3歳以上児との関わり合いもある。
- ・地域の実情：近隣には保育所・幼稚園が数多くあるが、2歳児の親子分離型の預かり型保育を展開している園がどれくらいあるかは把握できていない。
- ・保護者ニーズ：最近では週1-2日当園に通い、残りの3日は他の園や子育て広場に通っている保護者もいる。週1では物足りないのかもしれない。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・手応え：2歳児の預かり保育を開始して以降、3歳児入園4月期の子ども様子の様子が落ち着き、4月の移行期にスムーズに馴染んでいく様子が散見される。また、新入園児も2歳児預かり保育に通っていた子どもと同じクラスで過ごすため、新入園児も落ち着く様相が見られ、波及効果も大きい。全体的に泣く子が減り、安心感をもって4月を迎えている様子が見受けられる。保護者にとっても不安解消につながっている。
- ・課題：昨今、当園でも在園児が減りつつあるため（現在90名弱）、色々と保護者ニーズを模索しながら思案しているが、園長としては、週1-2回の回数をこれ以上さらに増やしたいとは考えていない。3歳までのこの時期は、可能であれば親子での時間を大切にしてほしいという教育的な願いもあり、当園の歴代の園長が大切にしていた理念でもある。現在の完全親子分離型の預かり保育を限定的（曜日指定午前中のみ）で行うだけでも、保護者はパート等で働きに出たり、自分の時間が持てたりできるよさがあると考えている。全ての時間において「子育ての支援」を行うよりも、曜日や時間をある程度限定した「親子完全分離型の子育ての支援」を展開することによって、親子の語らいの時間やふれあいの時間を保障したいと考える。
- ・今後の展望：園児数の減少など悩みは尽きないが、可能であれば、現在のスタイルを維持して、持続可能な形で続けていきたいと考えている。

東海地方：私立幼稚園（定員 209 名）、園庭開放なし

【保育担当者】

Ⅰ. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ A 担当者：市内の私立幼稚園に 6 年勤めた後、出産・子育てで一度離れたが、7 年前（2018 年）に園から声をかけてもらい、当園で 2 歳児預かり型の子育ての支援を担当している（日によっては夕刻の預かり保育も担当することがある）。また、幼稚園教諭免許・保育士資格を保有しており、中・高で発達障害対応支援員を 3 年経験していた。
- ・ B 担当者：当園の元保護者であり、3 人の子どもを当園へ通園させていた経験がある。当時から 2 歳児プレ保育に子どもを通わせる中で、母親として救われた経験もあり、2018 年より 3 歳の補助教諭としてパートで勤めている。幼稚園教諭免許・保育士資格は非保有だが中高の教員免許は取得しており、教育現場のことはある程度理解している。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 保育環境：トイレへの動線や近接性も確保された 2 階の一角に教室が配置されており、3 歳以上児とはある程度隔離された空間で、互いを気にせず落ち着いた雰囲気ですぐに受入れができるよさがある。ただ、晴天時は、10:20 頃全園児が園庭で行う体操を後方で参加・見学する活動などを通してささやかな交流はある。普段の活動としては、自由遊びの他、簡単な製作遊びや歌遊び・読み聞かせなどを日々工夫して取り入れている。また、費用徴収の関係も踏まえ、おやつを食べて帰ることは必ず意識している。
- ・ 1 学期は、もう 1 名パートを加えた 3 名体制で運営しており、基礎固めの時期として位置付けている。特に、保育者との「関係作り」を重視しており、個々に密に関わることで、徐々に園や保育者に興味をもったり自ら相手の話を聴けるようになったりする姿がある。何よりも「子どもを慌てさせない」「急かさないうこと」を意識している。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 年間指導計画と月案で展開している（理事長確認あり）。月案は、3 歳以上児の月案の切り軸（5 領域等）を模して各枠に今月の重点内容を記載しており、振り返りは月に 1 回行っている。その他、1 人 A4 で 1 枚程度、各月の様子を手書きで記した個別記録をとっている。その内容は「おたよりカード」に記して保護者にも配布している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 2 名の担当者間で、計画や本日の流れを確認し合いながら連携・共有している。
- ・ 3 歳以上児とのカリキュラムの連続性については、（当園の研究会等では）具体的に検討していないが、4 月は 2 歳児受入れがないため 3 歳クラスの補助に入ることが多く、元通級児の成長を感じたり見届けたりできるよさがある。その際に、新入園児の様子を把握したり比較したりしながら活動内容を精査するなど、3 歳児クラスとの接続を踏まえて「先取りにならないこと」を最も意識している。また、3 歳児担任が、元通級児の昨年度の様子について問い合わせてくることもあるため、その時はこまめに情報を提供している。

(5) 園の中で0～2歳児受入れに携わる手応えと困難さ

- ・手応え：最も感じるのは「成長」である。3歳以上児に比べて、できるようになることが多く、育ちを感じる場面に立ち会う喜びを感じることが多い。2歳児保育は非常に面白く、魅力を感じる。
- ・課題：3歳以上児と比べて言葉を介したコミュニケーションが難しいため、言葉がけには日々試練と反省の連続である。また、トイレや手洗いの付き添いなどで保育者が1名付くと、残りの保育者でその他の子どもを見ることに限界を感じる場面もあるため、人的配置にもう少し余裕があるとより安心した生活を提供できるかと思う。その他、2歳児保育に関する学びを積極的に深めたいため、研修などが充実することを切に願う。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・学び：この時期は生活リズムの確立が主軸となる。帽子を被る・ジャンパーを着るなど、友達や保育者と「やってみよう！」と思って取り組む姿や、できた喜びを共に味わうことができていていると感じる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・通い始めの1学期は全体的に落ち着かず介助する場面も多いが、徐々に友達や保育者に関心を寄せながら馴染んでいく様子が見られ、その姿を保護者に伝えることで安心してもらっている。3歳児クラス移行時は、先取りしすぎない配慮をしている。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者の姿・学び：元保護者（B担当者）の立場からの見解としては、週1回2-3時間でも子どもが通園することで、「成長して帰ってきた喜び」を感じることが多かった。保育者の助言にも救われた記憶があり、2-3時間で銀行やスーパーに行ける、カフェでお茶ができるなど、「子育てから離れて自分に戻れる時間」があることで、子どもにもより一層優しくなれ、成長して帰ってきた喜びを味わえた記憶がある。母子分離型の子育ての支援は数少ないため、保護者のニーズは高いと思われる。
- ・保護者同士の関わり：お迎え時間の少し前に集って話し合う姿が散見される（園庭等で遊んで帰ることはない）。現在積極的な交流は見受けられないが、過去には、12:30お迎えの際に11:30-12:30に母親同士でランチをしてから迎えに来ることもあった。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・子どもの姿を通した家庭の様子から：2歳でも様々なことができる子どもが多く、過去の3歳児と現在の2歳児が類似しているように受け止めている。おそらく家庭で手をかけてもらっている経験が多いことが窺えるが、反面「自分でやろうとする」ということも乏しい現状があるため、できるだけ「慌てさせずに待つ」「見守る」ことを意識している。自分でできた喜びを感じられるように努め、保護者にも「少し声をかけるのを我慢してみてくださいね」など、その子の成長につながる家庭内での働きかけを助言することで、保護者の意識にも変化が見られる。

関東地方：公立幼稚園（定員 60 名）、園庭開放あり、子育て支援広場

【園長】

1. 基本情報

関東地方の公立幼稚園であり、現在は年中児と年長児の 2 クラスの園である（次年度より 3 年保育が開始される）。令和 6 年 7 月より自治体の事業を導入し、預かり保育として A を本園で取り組んでいる。なお、かねてからの取り組みである子育て支援 B 広場があり、親子で利用する取り組みも並行して実施している。B 広場では 0 歳児から受け入れている。

- ・ 対象年齢：未就園の 2 歳児、3 歳児（いわゆる 2 歳児クラス児と 3 歳児クラス児）
- ・ 定員：現在の登録数 18 名；登録制（年間単位での申込み）、1 日 12 名定員
- ・ 開催日・時間：火曜日／水曜日 9 時～11 時半 週 2 回または 1 回の登録
- ・ 月額料金：週 1 回 2,750 円／週 2 回 5,500 円（※食事など・昼食の提供はない）
- ・ 親子分離：親子で登園し、子どものみ園で過ごす。降園時間になると迎えに来る。
- ・ 保育担当者・人数・資格：非常勤職員（1 日 3 名）を区の教育委員会が採用している。そのうち保育士有資格者 2 名。
- ・ 専用保育室：専用の保育室がある
- ・ 園庭：広々とした園庭があり、子どもたちは盛んに外遊びにも取り組んでいる。
- ・ 利用家庭：レスパイト目的の場合もあると思われるが、入園前に集団生活を経験させたいという目的が多い。
- ・ 園庭開放：水曜日以外は、毎日園庭開放（登録なし）を実施。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）

7 月開始の事業であるため、年間計画については今年度はまだ作成していない。登園日が毎日ではなく、個人によっても違うので予想ができなかった。今年度を振り返り次年度より作成する。個人記録は作成している。

- ・ 室内遊び：子どもたちが好む遊び（ごっこ・電車・絵本・運動遊びコーナーなど）、季節や伝統行事などに応じた製作物、絵本の読み聞かせ、手遊び、ダンスなど
- ・ 園庭での遊び：砂場遊び、鬼ごっこ、シャボン玉など

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・ 自治体から提案があり、園長会で決定し、本園で実施することになった。
- ・ 準備期間中に、保護者への説明資料を自治体と共同で作成をした。また、園では、予算に応じて遊具を選択、環境の構成、個人記録用紙の準備、個人情報の資料の作成などを行った。親子面談は、自治体の職員と共に行った。
- ・ B 広場は園の取り組みとして長く取り組んでおり、その活動が本園が行う「地域への子育て支援」の基盤となっている。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

子どもたちが安心して自分を出せるように、一人一人が自分の好きな遊びを十分に楽しめる環境の構成に努めている。発達を促す遊具や多様性を意識した人形など遊具の選択も熟慮した。

子ども同士の関わりも大切にしている。毎日登園していないが少しずつ友達の顔を覚えるようになり、お気に入りの友達の登園を待ち、声を掛ける姿もある。小さいながらの仲間意識の

芽生えを大切に、一緒に過ごすうれしさを感じられるようにする。園内や園庭で遊んでいる際に在園児の遊びが気になるときがある。在園児の遊びをそばで見ているかと思うと、いつの間にか参加している。在園児も小さい子たちが交わってくると自分たちの動きを調整する姿がある。在園児との互恵性も重視していきたい。

園での様子が保護者に伝わるようにするために、製作したものを通して取り組む姿を伝えたり、事前に保護者に写真の許可をとり、時折ホームページで発信したりしている。園での遊びと家庭での親子のやりとり（会話など）が繋がるよう意識している。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

(1) 子育て支援運営へのニーズ

子育て支援は「福祉」の分野というイメージがあるが、「教育」の視点でも支援を強調していきたい。これまでも園の取り組みとしてB広場を0歳児からの親子の子育ての支援として行っている。来園の際には、園の環境を見ていただき、幼児期にふさわしい遊び、適切な保育環境を知り、地域の子どもたちも体験する機会としている。

本来の在園児の保育も大切にしていく上で、新しい取り組みとしての未就園児の預かり保育を管理することは覚悟が必要である。持続可能な形となっていくために、人的配置はゆとりをもって行う必要がある。また、園が教育を管理していくが、勤務する保育者自身が専門性や子育ての経験を発揮し、主体的にのびのびと楽しく勤務できることが大切であると考えている。

(2) 運営体制

現在は、担当保育者の雇用時間の関係で（12時半まで）、担当保育者と専任職員が話し合う時間をとることができていない。園の中で子ども同士の関わりもあり、今後も保育環境を共有していきたいので連携する時間をもつ必要性を感じている。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

(1) 手応え

今、働く保護者が増加しているが、子どもが小さいうちはなるべく我が子と一緒に過ごしたいという考えの保護者もいる。在園の保護者においても、午前中数時間だけ働き、園庭開放では子どもや他の保護者との時間を大切にしている方もいる。様々な考えが尊重されるようにしたい。また、仕事をしていなくても園をサポートしてくださったり、ボランティアをしたり、地域のこどもたちを支えてくださっている方もいる。様々な価値観を大切に、支え合うことの喜びや、保護者同士のつながりができるコミュニティの場となるように努めており、そうした園の方針が浸透している。保護者（父・母など）が笑顔でいることが子どもの幸せに繋がる。本取り組みの保護者においても、お迎えの時間などに他の保護者と話す姿が増え、表情にゆとりがでてきている。

(2) 課題

本取り組みは、正式な園への入園ではないものの、初めて園に我が子を預ける保護者がほとんどで、中には不安や緊張が続いている保護者もいる。単に「預かる」ではなく、「入園」という覚悟で保護者への対応をしていく必要がある。

0～2歳児の保育については、共に過ごす幼稚園教員にとって、排泄（オムツ）や生活習慣、発達や遊びの理解や環境の構成などにおいて学ぶ必要がある。今後、保育園との合同研修などで学びを深めていきたい。

関東地方：私立幼稚園（定員 300 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) A クラス

- ・ 対象月齢：2 歳児クラス
- ・ 今年度在籍数 44 名（募集 48 名）。4 月は全員が A クラスとして登園、満 3 歳児の誕生日を迎えると、3 歳児クラスの隣に位置する 2 歳児クラス「B 組」として正式な幼稚園児として過ごす。満 3 歳児クラスになってからが無償化の対象。
- ・ 開催日・時間：火曜日から金曜日までの週 4 日。9:30～11:30
- ・ 教育費：11,000 円（8 月も含む、防犯対策費、冷暖房費、教材費込）
- ・ 親子分離
- ・ 保育担当者・人数・資格：園児 6 名につき、教職員 1 名、幼稚園教員免許・保育士資格
- ・ 専用保育室：あり
- ・ 園庭：一部分が対象クラスの子ども達を中心に使用するスペース
- ・ 昼食：預かり保育利用時のみ弁当持参、給食注文可
- ・ 預かり保育：8:30～16:30（保育時間は除く・保育のある日のみ）
- ・ 預かり保育代：1 時間 500 円

(2) 園庭開放

- ・ 朝 8:00～14:00
- ・ 地域の子どもも自由に遊ぶことができるように解放している。

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・ 全体的な計画は、幼稚園に合わせて、年間行事予定で把握されている。
- ・ 教育課程、指導計画は厳密なものは作成せず、1 ヶ月の振り返りをしながら、翌月の予定を作成するようにしている。
- ・ 保護者向け広報資料は、ホームページで行われ、卒園生等の口コミも含めて、募集定員は常に埋まっているとのこと。
- ・ 入園に際しては A クラス対象の「入会のしおり」とともに、3 歳児以上と同じ幼稚園での過ごし方を説明した資料「もうすぐようちえん」の冊子も配布されている。
- ・ 入園してからの出欠連絡等にはアプリを利用しており、そのアプリを利用して、写真なども用いながら活動の様子を保護者に伝えている。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・ 2003 年に、園の敷地内で少人数の 0 歳児（学齢）の実験的保育を始め、2004 年には、園の敷地とは離れた駅前で、1 歳児、2 歳児の幼児教室を始めた。
- ・ 2017 年、園の敷地内で、2 歳児「B クラス」の保育を開始、同時に駅前の幼児教室の場は、小規模保育園とすることになった。この 2 歳児保育は、午前保育の「A クラス」から保育を始め、2 歳の誕生日を迎えた翌月初めに、満 3 歳児として正式な幼稚園児とし

て「Bクラス」になるという現在のかたちのものであった。

- ・ 来年度からは、地方自治体、および、国の「誰でも通園制度」の検討を受けて、現在の「Aクラス」に加えて、満1歳児の親子登園コースと満2歳児からの親子分離コースを発足するとのこと。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・ Aクラスに入園してきたときは、まずは、園でゆっくり過ごすことを大切にしている。幼稚園とは別棟となっている部屋の環境も、保育園に近く、それぞれの遊びができるように工夫している。園庭に出て、年上の子どもたちと触れあう時間も、子ども同士楽しみにしている。
- ・ 満3歳の誕生日を迎えると、「Bクラス」になる。そのこと自体、子どもたちも、とても楽しみにしている。部屋も、3歳児クラスの隣に位置しているところに移り、1日の活動の流れも幼稚園に合わせたものになる。プールあそび、英語あそびなどの時間も、子どもたちのペースに合わせて、一緒に行っている。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 地域的には、幼稚園で教育を受けさせたいと思っている家庭のニーズがある。保育園よりも幼稚園に通わせたいというニーズもあり、2歳児クラスでも「預かり保育」の利用者も多い。
- ・ 保育者は、保育士資格を持つ者も多く、また、駅前の保育園での保育経験も活かして2歳児クラスに携わっている。
- ・ 毎月、ドキュメンテーションを配布し、保護者が保育を理解すること、子どもを理解することに役立てている。昨年クラスだよりを、写真を入れたドキュメンテーションにすることで、伝わるが増えたように感じている。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・ 4月に通い始めた時は、保護者はお友達と遊べるかを心配している様子が見受けられる。
- ・ ただし、Aクラスで、それぞれのペースが守られ、慣れてきて、お誕生日を迎える頃に、幼稚園の生活に移行することで、その心配が低減されていることを感じている。
- ・ 幼稚園に通う中で、家庭では遊べない大人数での経験、友達との関わりが生まれてくるのが自然に見られ、その様子を保護者に伝えることで、心配は解消されていく。
- ・ 保育者も、2歳児はもっとばらばらに遊んでいると感じていたが、実は、一緒に遊ぶことを楽しむ姿があることを学びながらの実践となっている。
- ・ Aクラスに通わせたい保護者のニーズとして、働いていれば全額補助となるが、働いていなくても補助が出ると嬉しいという声が聞かれる。

関東地方：私立幼稚園（定員 300 名）、園庭開放あり

【保育担当者：主幹教諭】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 25 年の保育歴。駅前の保育園の担当も経て、A クラス・B クラスの創設にもかかわり、現在主幹教諭として携わっている。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 保育園での保育に携わったことにより、3 歳未満の子ども達と過ごすときの生活の工夫について学んだ。
- ・ 現在の A クラスの保育室を作る際は、お手洗い、子ども達の過ごす場について、3 歳未満の子ども達にとって生活・遊びがしやすい場となることを心がけて設計をした。
- ・ 別棟になっているので、その前の園庭で、2 歳児達が遊ぶこともあるが、満 3 歳児たちも遊ぶ遊具のある方まで、園庭を横切り出かけて行って遊ぶことも多い。小さい子ども達にとっては散歩のような経験になり、また、大きい子ども達にとっても出会うことで楽しい時間になっているように感じている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ A クラスでの保育計画は、幼稚園よりゆるやかで、子ども達の様子を振り返り、興味関心の方向を保育者が共有しながら、「明日は、来週は、来月は、これを楽しもうか」というように計画を積み重ねている。満 3 歳児以上が楽しんでいる行事も考慮に入れている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 満 3 歳児は完全に幼稚園の中で、ひとつの学年として位置づいている。そのため、幼稚園の全体的計画の中に位置づいて、活動（プール、英語など）も行われている。主幹教諭として、A クラスもその活動に入っていく段階としてゆるやかなつながりを持つように心がけている。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・ はじめて取り組んだときは、言葉でのやりとりの難しさなどから困難を感じているところもあったが、取り組みを重ねていく中で、ゆったり過ごししながら、集団で過ごす楽しさが感じられてくるようになった。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 月齢の近い子ども達と共に過ごす中で得た安心できる環境を基盤に、年上の子ども達と接する機会を通して、年上の子ども達の様子を見たりすることで、子ども達が「やってみたい」「自分もできる」と感じ、遊びを広げていくきっかけになっている。

- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行
- ・ 満3歳児になると、幼稚園の満3歳児クラスに移行することを、通っているうちに子ども達も楽しみにするようになっていく。その意味で、この時期をゆったりと過ごし始められることの意義を感じている。
 - ・ また、Aクラスという別棟で幼稚園での生活を始めることで、親子ともに安心して幼稚園に通い始めることが可能になっているように感じている。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
- ・ 保護者のニーズとして、やはり幼稚園での教育を求めていることを感じている。幼稚園での学びを期待して、園に通わせたいということだと思う。
 - ・ 保護者は、ドキュメンテーションなどを通して、子ども達の育つ姿を実感しているように思う。
 - ・ 保護者同士の関わりとして、LINEがかなり使われるようになったことを感じている。それにより連携がスムーズで、さまざまな動きがあることもあれば、私は関わらない、とそこからスッと離れてしまう保護者もいることもある。保護者同士が、卒園後も関わりを続けている例もあり、さまざまな姿があることを感じている。
- (2) 保護者を意識して行っていること
- ・ 入園の際にお渡しする、Aクラス入会のしおり、もうすぐ幼稚園、といった園の生活を説明する資料、毎月のクラス通信は、保護者に幼稚園の生活を理解してもらうためにアプリを用いて写真で保育の様子を伝えている。

中国地方：私立幼稚園（定員 216 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

A クラス

- ・ 対象月齢：満 2 歳～満 3 歳
- ・ 満 2 歳の 4 月から入会。満 3 歳の誕生日を迎える前月に、自治体から 1 号認定を受け、幼稚園への入園手続きを行う。誕生日の翌月 1 日から、入園となり、翌年度は年少クラスに進級する。入園後は、幼稚園授業料無償化の対象となる。
- ・ 定員：36 名(クラス定員は 18 名、今年度は 2 クラス)、登録制（入会）
- ・ 開催日・時間：月、火、木、金曜日 9：10～13：20、水曜日 9：10～11：20
- ・ 月額料金：保育料 26,000 円/施設設備費 4,000 円/教育充実費 3,000 円/給食費 5,500 円/冷暖房費 1,000 円/絵本代 400 円/スクールバス 5、700 円（希望者のみ）
- ・ 親子分離
- ・ 保育担当者・人数・資格：クラスに 3 人と補助 1 人・幼稚園教諭免許と保育士資格
- ・ 専用保育室：あり
- ・ 園庭：専用の園庭がある、上の学年の園庭には 10 月以降に徐々に使用する
- ・ 昼食：あり（園内の給食室で準備）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・ 年間指導計画（令和 5 年度）
- ・ 保護者向けクラスだより（学期に一回）、学年だより
- ・ 保護者向けの広報資料（入会案内 2025、入会募集要項）広報は 9 月 1 日から配布、10 月から願書受け付け開始（市では私立幼稚園の協定で広報の開始日が決まっている）。園の玄関に資料を設置。園のホームページからも入会、入学案内を出す。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・ 背景：時代のニーズや、県外（大阪など）における子ども園の事例、新聞等の情報を参考に、県では未実施であったが、私立という特性を活かして導入すべきとの判断から始動した。
- ・ 運用の経過：平成 31 年度（令和元年）より開始し、現在で 6 年目となる。当初は人数が集まりにくく、1 年目は 13 名で 1 クラス編成であった。理想としては、6 人に 1 人の保育教諭配置（約 18 名）であるが、実際は 3 名での保育が難しく、フリーの保育者の配置も必要となった。現在は 2 クラス体制で、定員 36 名にて運用している。なお、年齢が 1 学年下がる場合は大きな課題とはならなかったが、さらに下の学年となると運営上の難易度が上がる可能性があると感じている。
- ・ 制度・財源の仕組み：自治体の制度としてではなく、当園の判断に基づいて県へ提案・推進してもらう形を取っている。かつては県からの補助金を受給していたが、現在は市による施設型給付制度の下で運営している。
- ・ 預かり保育の運用：2 歳児クラス（定員 36 名）のうち、月極め利用は 8 名、単発利用は 14～15 名である。利用理由としては、月極めは保護者の就労、単発はリフレッシュ

目的で利用されるケースが多い。令和 6 年度から早朝保育の実施を開始した。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- 生活習慣の確立：生活習慣の基礎を形成する大切な時期であるため、時間をかけた丁寧な関わりが必要だと考えている。
- 給食提供の工夫：園内に給食室を設け、栄養面の充実はもちろん、子どもが好きなものを楽しく食べられる環境づくりを重視している。家庭では食欲が細くなる子どもも、園での給食を通じてしっかりと食べることができ、保護者からも高い評価を得ている。
- 他者との交流・模倣学習：少子化の影響で、家庭内で同年代や異年齢の交流が十分に得られにくい中、幼稚園で他者の行動を見て学び、模倣する機会を提供することが重要と考えている。
- 自然環境との触れ合い：園内には実のなる木を植えるなど、自然環境の充実に努め、みみずやだんごむしなどの虫との触れ合いを通じて、自然への親しみを育む取り組みを行っている。これらは家庭に持ち帰られることもあり、家庭と園の双方で子どもの成長に寄与していると思う。

5. 0～2 歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- 地域との連携：地域の催しへの積極的な参加を実施している。たとえば、就学前保育教育部会として年 3 回、公民館での寄り合いを開催し、また、園児たちも地域主催のサマーコンサートに毎年参加するなど、近隣の幼稚園、保育園、小学校、中学校との交流を通じ、地域に根ざした活動を展開している。子ども時代に地域で温かく迎えられた経験が、後の地域の絆の育成につながると考えている。
- 園内連携の強化：毎日の全体終礼を通じて、各学年の保育者が自学年に限らず、他学年の取り組みや情報を共有している。これにより、保育者各自が常に多様な情報を把握し、柔軟かつ質の高い対応が可能となる。現状では、2 歳児の担当であっても将来的な担当は不確定であるため、この情報の共有は非常に重要であると考えている。
- 職員配置と育成：全学年にわたる経験を重視し、特に 2 歳児担当については、小さい子どもに馴染みやすい雰囲気や母性的な安心感が保育者に求められると考えている。そのような雰囲気が初めから備わっていなくても、保育者には積極的に自分の雰囲気づくりに努める姿勢を求めている。

6. 0～2 歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- 保護者・家庭環境の変化への対応：共働き世帯の増加や核家族化の進展により、家庭内での遊びの幅が限定される中、幼稚園で過ごす 2 歳児は、自由で楽しい環境や同年代の仲間、さらには上級学年との縦の関係を通じて社会性を養える点で大きなメリットがあると実感している。
- 保護者同伴の初期対応：2 歳児クラスでは、4 月の開始当初、保護者が同伴するケースが見受けられるが、母子分離が困難な子どもはごくわずかであり、連休明けには概ね子どもだけの保育体制に移行している。
- 保育の質の向上：保育者の質は非常に重要であり、単なる子どもの見守りに留まらず、保護者が安心感を得られる質の高い保育体制の確立が今後の課題である。

中国地方：私立幼稚園（定員 216 名）、園庭開放あり

【保育担当者：A クラス】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- 幼稚園教諭・保育士資格を保有し、本園に 27 年勤務。
- これまで 2 歳、3 歳、4 歳、5 歳、預かり保育など全学年を偏りなく担当し、2 歳児クラスは今回で 2 回目となる。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- 2 歳児は体の発達が進む一方、動きの調整が未熟なため、安全面を最優先に配慮している。
- 家庭には少ないだろう手作りの遊具を用意している。シンプルで遊びやすい遊具を提供し、家庭での経験に近いものをベースに、子どもの経験を引き出しながら発展的な活動へとつなげている。
- テープで矢印や輪を床に示し、子どもが場所や方向を理解しやすいようにしている。子どもの様子を見ながら、時期によって示し方を変えている。

(3) 保育の計画と振り返り

- 保育計画は、月案、週案、日案それぞれを担当者が作成し、段階的に検討・実施している。
- 毎日の終礼では、各自の保育内容を報告し、当番制で発言の機会を設けることで、互いに学びあい、振り返りを行っている。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- 各学年間との関係は良好で、保育計画も共有されており、常に相互に学び合う環境が整っている。
- 終礼時の振り返りや、戸締り当番として各クラスを巡回することにより、他クラスの環境や活動の実態を把握し、保育の質向上に活かしている。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- 2 歳児保育開始当初は未知の領域であり、どのような遊びを提供すべきか、また遊具の安全性についても試行錯誤が続いた。
- 3 歳以上向けの遊具では不十分なため、2 歳児専用の遊具が必要であると認識している。加えて、お昼寝やトイレ対応など、保育者の人数を増やし、環境整備と専門知識の向上が求められると思う。
- 子どもそれぞれの家庭での経験に大きな差があるため、集団での学びを促すには、一人ひとりにきめ細かい対応が必要だと思う。そのうえで、園で他者と過ごすことで、周囲に合わせたり、園での決まりごとに気づいたりして、社会性が身についていっているように思う。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- 4 月当初は、家庭での遊び経験が不足している子どもが多く、物を出したり集めたりするシンプルな遊びから始めて、遊ぶ楽しさを伝えている。

- 新聞紙を用いた制作遊び（10月のインタビュー当日）は、6月頃から新聞紙を破る、丸める、投げる、宝探しといった体験を経て、最終的に丸めた新聞紙を使った壁面制作へとつながっている。
- (2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行
- 新しい環境や人に対する不安を和らげるため、家庭で馴染みのあるブロックやアニメキャラクターなど、身近なものを取り入れている。これにより、子どもが安心して活動に参加できるよう工夫している。
 - 2歳児も3歳児も、母子分離の際には一時的に泣くが、遊具や遊びで気をそらすことで、2歳児は比較的早く泣きが収まる。一方、3歳児は「お母さんがいない」現実を理解しているため、3歳児入園の子どもの方が泣きは長引く傾向がある。
 - 年度初めは2歳児の学年で同一の壁面や遊びを設定しているが、少しずつ各クラスで個性を出し、異なる環境や遊びを体験できるようにし、3歳児へとつながるように工夫している。
 - 10月前半までは3歳児との交流はなく、2歳児の専用園庭で遊ぶ。10月後半からは、園庭に散歩に行くことで、園庭にある遊具を見せたり、3歳児が遊ぶ様子を見せたりする。11月には3歳児以上の子どもたちが園庭に出ていないときに、遊具で遊ぶことを通して場になれるようにする。1月、2月には上の学年との交流を持ち、他のクラスへ行って遊ぶことを経験するというように、段階を経て3歳児クラスへ移行できるように工夫している。

3. 保護者視点

- (1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり
- ある保護者は、子どもの発達に不安を感じ2歳児からの入園に迷いがあったが、実際に園で過ごす中で子どもの言葉の発達や、親以外の大人との信頼関係が育まれたと感じ、「早めに入園させてよかった」との評価を得ている。
- (2) 保護者を意識して行っていること
- 2歳児特有の対応というよりも、子どもの発達段階や個々の特徴を丁寧に保護者に伝えることを重視している。直接声をかけるほか、クラスだよりなどの手段を用いて情報提供し、保護者の理解と安心を支援している。
 - 子どもによって消耗の頻度が異なるおもちゃの補充は、カードで知らせるなどの工夫をして保護者が分かりやすいようにしている。

関東地方：私立幼稚園（定員 166 名）、園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

（1）A クラス

- ・対象月齢：学齢 2 歳児と満 3 歳児。満 3 歳の誕生日翌月から、当園へ入園する子どもが対象。学齢 2 歳児クラス入会または満 3 歳児クラス入園→年少クラス進級と進んでいく。
- ・定員：54 名（3 クラス）、登録制。月齢をできるだけ均等に割り振りクラスを編成。男女別に定員を設けることはしていない。
- ・開催日・時間：週 5 日コース（1 クラス）と週 2 日コース（2 クラス）を設置。保育時間はどちらも 4 時間。年少児が落ち着く 5 月から開始
- ・利用料金：週 5 コーは 30,000 円（月額、給食費込み）、通園バス利用料 4,500 円（月額）。週 2 コースは 1,700 円+給食費 300 円（1 日）、通園バス利用料 2,000 円（月額）。※通園バス利用の場合、学齢 2 歳児については専用のシートベルト席利用
- ・親子分離：親子分離あり。分離までのステップについては、丁寧に時間をかけて一つずつステップを踏んでいく（保育者インタビュー報告書参照）。
- ・保育担当者・人数・資格：専任教員 8 名とパート職員 1 名(子ども 6 人に保育者 1 名配置)、幼稚園教諭免許・保育士資格
- ・専用保育室：あり
- ・園庭：年少児とともに使用できる園庭あり（5.（2）参照）
- ・昼食：給食あり
- ・その他：当園は、健常児と自閉症児が共に育ちあい、学びあう「混合保育（インクルーシブ保育）」を行っている。そのことを理解の上、入会（学齢 2 歳児）、入園（満 3 歳児）していただく。発達が気になる未満児については、親子分離がなく、親子で通園する「B 教室」を案内（先着親子 10 組、11 月～3 月に計 10 回で一括申し込み、各回 1 時間半。）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

（1）全体的な計画

- ・2～5 歳までを 4 年保育と捉えている。
- ・年間計画や週案、日案については、あくまでも目安として作成しており、子どもの様子を見て柔軟に変更している。

（2）保護者向け広報資料

- ・健常児クラス 学齢 2 歳/満 3 歳児保育のご案内～5 月から 3 月生まれの方～
- ・健常児クラス 満 3 歳児保育のご案内～4 月生まれの方～
- ・支援が必要なお子様と保護者の方のための「B 教室」のご案内
- ・保育の様子や子どもの育ちを在園児保護者に当園が利用しているアプリ機能を用いて配信

3. 0～2 歳児の受入れが現在の形になるまでの経緯

- ・2022 年度に 1 クラス、週 5 日、通園バスありでスタートしたが、当初は学齢 2 歳児の安全の確保が難しく満 3 歳からのバス利用に変更。他園の見学を行うなどし、園内で学齢 2

歳児、満3歳児に必要な保育環境や配慮について、園内で意見を出し合った。保護者アンケートを実施し、改善をしながら、1年ごとにクラスを増やしていき、3年目である2024年には3クラスで実施。3年目には「B教室」を開設。

4. 遊びと生活で0～2歳児において大切にしていること

- ・年少クラスへの準備のために学齢2歳児・満3歳児クラスがあるのではない。2歳児にふさわしい遊びと生活を存分に経験して欲しい。そのためには安心できる環境の提供が何よりも大事で、その中で自分でやってみたいという思いが認められ満たされることが大切。幼稚園の準備をする時間ではない（子どもは年上の園児の真似をしたがるものだが今の楽しさこそが重要）。保護者にもその点を園長から丁寧に話すことを入会、入園時に行っている。
- ・2歳児は自己主張が高まり（terrible2, horrible3）、保護者の子育ても大変な時期。保育時間中、保護者はリフレッシュし、子どもが帰宅後は子どもの甘えを満たしてあげて欲しい。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

（1）ニーズ

- ・専業主婦の方がまだ辛うじているエリアだが、働く母親が急速に増えている。時代の変化に合わせて幼稚園が未満児保育を行っていくことは、園運営上も必要な時代であると考えられる。
- ・保護者が働き方を変え、保育園から当園学齢2歳児・満3歳児クラスへの転園事例もあり。
- ・良識があり、成熟した年齢の保護者が多い。一部、早期教育に熱心な層もいる地域。

（2）運営体制・組織マネジメントの工夫

- ・当園とC幼稚園は、同じ学校法人が運営している（両園は徒歩圏にある）。登園を学齢2歳児・満3歳児ならびに、年少クラスが専用に使える園舎とし、園庭もこれらの学年専用としている。C幼稚園を年中・年長専用とし、園庭も年中・年長にふさわしいものにするほか、男性教員を多く配置するなどし、ダイナミックな遊びを体験できるようにしている。
- ・未満児保育担当者は、固定ではなく、年度ごとに担当を入れ替えている。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

（1）手応え

- ・手応えは非常にある。保護者と連携しながら、自立期の大切さを理解しあえるようなコミュニティでありたい。2歳児は子育てにおいて大変な時期なので、日中の4時間、園は子どもを預かることで保護者を助けるけれども、ご家庭でも子どもにしっかりと向き合っていただき、この時期の大変さと面白さ、大切さを両方で共有していきたい。

（2）課題

- ・運営資金が課題。都道府県の補助制度を利用して、未満児保育を実施しているが、これだけで当園で行っている内容の保育を行うのは大変厳しい。

関東地方：私立幼稚園（定員 166 名）、園庭開放あり

【保育担当者】

1. 保育者視点

（1）保育担当者の保育歴（インタビュー協力者）

- ・幼稚園教諭歴約 20 年、未就園児クラス担任 2 年目

（2）保育内容や環境の工夫・活動の概要

①環境の工夫

- ・2 歳児と年少のみが専用で使える園庭／2 歳児に合わせた高さの椅子とテーブルを購入／靴箱はクラスの子どもの分をまとめて持ち運びできるタイプのものを用意／ロッカーは 2 歳児に使いやすいよう仕様変更／落ち着く雰囲気づくりのために、天井から布を垂らす／おむつ替えスペースの設置／マットや棚でコーナー分け／保育室に手洗い場を設置／既成の玩具に加え、2 歳児に適した手作りおもちゃや素材を用意／園バスには簡易シートベルトの設置など 2 歳児が安全に乗車できるよう工夫／他学年と帽子を色分け

②活動の概要

- ・安心できる環境の中で子どもがそれぞれにやりたいように遊ぶ、ということを重視。

（3）保育の計画と振り返り ※振り返りについては後述（1.（4）参照）

- ・年案、週案、日案などの計画を立ててはいるが、その時々の子どもの様子を見ながら、子どもがやりたいことを存分にできるようにということを一番に考え、柔軟に対応している。
- ・年少クラスへの準備という意図で保育を計画していない。あくまでも、2 歳児としての時間が充実するように、ということを主眼に置いている。

（4）園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・「4 年保育」という考え方のもと未満児保育を行っているため、未満児保育は一つの学年として園内でしっかり位置付けている。年少より 1 学年下の子どもたちが園生活の中に 1 年を通していることを想定し、行事などのあり方も全職員で検討し工夫している。
- ・年少担任に子どもの情報を引き継ぐ（未満児クラスの子どもは年少クラスに入るため）。
- ・振り返りや会議は他学年とは別に行うが、子どもについての情報は園内全学年で共有。
- ・保育計画については、若い先生がベテランの先生のものを見て学ぶ機会がある。

（5）園の中で 0～2 歳児受入れに携わる手応えと困難さ

①手応え

- ・2 歳児なりに友達の様子を気にし、クラスを意識している様子が見られる。未満児なりの協働の姿を目の当たりにし、未満児の集団保育の手応えを感じる（2.（1）参照）。

②難しさ

- ・言葉のコミュニケーションに制約があることによる他学年にはない難しさがある。後から、「こういうことだったんだ」とわかることが度々ある。
- ・発達の個人差があるのが難しい。言葉が良く出る子どもの遊びに勢いで流れて行きがちで、思いが言葉にならなかった子は、それでよかったのかな、と思うことがある。

2. 子ども視点

（1）子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・それぞれのやりたいことを存分にできるようにと毎日工夫していたら、夏頃から、子ども

たちが友達を求めていく様子が見られるようになり、「子どもたちが求めるなら」と友達同士を繋げるような関わりをしていくようになった。先生を拠り所にしながらではあるが、未満児なりの「何だか楽しい」という気持ちを友達と共有する体験ができてきているようだ。

- ・子どもたちの提案をひろって、保育者のほうでそれが実現できるよう、こっそりたくさん準備をしておく、子どもたちは自分がやった気になり、本当に楽しそうに遊んでいる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・親子分離のプロセスを丁寧に行う。親子で一緒に登園して一緒に過ごす→親子で一緒に登園し、子どもだけ園で1時間過ごす。保護者に園まで迎えに来てもらう→同様に登園降園し、子どもだけで園で2時間過ごす（このように徐々に園で子どもが過ごす時間を延ばしていく）→同様に登園降園するが、給食を親子で一緒に食べる→送迎のみ保護者は行い、子どもは4時間園で過ごす。このようなプロセスを5月から1か月かけて踏んでいき、4時間保育にまでもっていく。園バス利用者は、はじめのうちは保護者にも一緒にバスにも乗ってもらう。分離時泣く子どもはいるが、保育者がスキンシップを多めにするなどで対応している。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

①保護者の姿

- ・母親は専業主婦がほとんどだが、在宅勤務の方が利用していることもある。
- ・子どもが保護者とだけ過ごしていることに不安を感じていたため、同年代の子どもと遊ばせる機会があってよかったと感じている（特にコロナ禍で多く聞かれた感想）。
- ・子どもと離れる時間ができたことで、保護者に余裕が生まれ、降園後、ゆとりをもって子どもに接することができるようになった。

②保護者の学び・育ち

- ・気持ちが複雑になり対応が難しくなった子どもに対して、「これも成長なんだ」と気づけるようになった。一緒に過ごしている時間だけだと、こうは思えなかったとの感想多数。
- ・子どものできることや興味を持つことがわかった。

③保護者同士の関わり

- ・給食を一緒に食べる、保育参観、保護者会（学期に1回）を実施しているので、これらの時に保護者同士が関わる機会がある。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・保育ドキュメンテーション形式で、クラスの様子を園で使用しているアプリ内機能を用いて配信している（月4回）。子どもの育ちや学び、教師の願いが伝わるように作成している。
- ・初めての集団生活となるため、保護者と連携をとりながら一つひとつの生活を丁寧に行っている。子どもから話すと保護者が誤解を招くかもしれないことについては（例：子ども同士のいざこざ）、「おうちでこんなこと話すかもしれないけれど、こういうことなんです」と連絡（電話や手紙）するようにしている。保育中の嬉しい出来事や、本人が自宅で話さない限り保護者は知り得ないことは、保護者に連絡するようにしている（例：「トイレでおしっこできました!」「〇〇を食べられました!」）

北海道・東北地方：私立幼稚園（定員 120 名）園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

- ・対象年齢：0～2 歳の親子での取り組み A を行っている（3 歳未満児の預かり保育は行っていない）。
- ・定員：各回親子 10 組程度 登録制
- ・開催日・時間：ほぼ毎月 1 回実施 10 時～11 時 30 分（活動は 10 時 30 分～11 時 30 分） 幼稚園との合同の特別なイベントがある月もある。
- ・活動内容：お描き、芋ほりなどの他、別施設にある広大な森での自然遊びなど
- ・料金：100 円初回登録日のみ（名札代としている）
- ・親子登園
- ・専用保育室：なし。幼稚園の預かり保育で使用している保育室を活用している。活動の時は、対象児に適した玩具を用意している。毎回 10 組程度が参加している。
- ・園庭：活動の一つとして利用する。園庭開放により自由に親子で遊ぶ時間もある。別の場所に広大な森のある施設もあり、そこでも A の活動として企画がある。
- ・保育担当者・人数・資格：教頭 1 名・園長代理 1 名が中心となって運営している。担当者は他にパート職員 3 名（保育士資格所有者）。併せて週 1 回キンダーカウンセラー（公認心理師）1 名
- ・昼食：なし

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

（1）指導資料

- ・指導計画は教頭・園長代理により対象児に適した活動やイベントなどの立案をしている。
- ・園全体の指導計画をもとに、親子活動を計画している。

（2）保護者向け広報資料

- ・保護者向けには、HP を活用して活動日程ならびに活動内容を公表している。
- ・リーフレットを作成しており、通園している保護者への周知や地域の児童館などに資料を置いている。

3. 0～2 歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・親子での取り組みの A は 20 年ほど取り組んでいる。現代の子育て家庭は公園で遊ぶこともないため、園の豊かな環境で遊ぶ場を提供したかった。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・対象の子どもたちにとっては、その時期に適した経験ができることや保護者自身もそこから学べる可能性があるのではないかと考えている。
- ・遊びの場を専門家である保育者が作ることが大切。子どもに適した環境を保育者が作り、子どもたちがその環境に関わるためには保育者とのやりとりの中で経験が培われるもの

だと思う。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

(1) ニーズ

- ・ 広く遊びの提供の場とともに、（現在、他園では受け入れが減っている）配慮の必要な子どもを含めて誰でも受け入れる体制を整えている。Aから入園につながるケースもあり、悩みを抱える保護者の受け皿にもなっている。

(2) 運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ 現在、A の子どもたちが直接在園児と関わる機会はないが、園のイベントなどを通して親子で在園児と関わることはある。
- ・ 広く遊びの提供の場とともに、（現在、他園では受け入れが減っている）配慮の必要な子どもを含めて誰でも受け入れる体制を整えている。Aから入園につながるケースもあり、悩みを抱える保護者の受け皿にもなっている。
- ・ 園長代理や主幹教諭を中心に、対象児と保護者に適したプログラムを考え、取り組んでいる。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

(1) 手応え

- ・ 利用者は母親と子どもが多いが、時折父親の参加も見られ、園を知ってもらう機会になっている。
- ・ 多くのご家庭が A を経て、入園につながっている。幼稚園の良さを知っていただいた上で入園する機会となっている。
- ・ 子どもや多くの家庭が集う園環境に関わることで、他の子どもの様子を見たり、他の家庭の子育ての姿に触れられたりすることで、保護者自身にも良い影響を与えていると考えている。

(2) 課題

- ・ 入園当初が最もリスクが大きい。低年齢児の場合も定期的に通うことが大切であり、子どもも保護者も不慣れな場所であり、子どもの把握が十分にできない状況で受け入れるには、課題が多い。丁寧にかかわるなどの配慮が必要。
- ・ 保護者自身が意義をより理解してほしい。子育ての責任は保護者にあることを踏まえ、預けるという点だけでなく園の保育から学ぶ気持ちでいてほしい。
- ・ 担当者が固定できるような体制が整えられれば、より適切な取り組みに繋がると思う。

【保育担当者】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 保育歴 19 年の教頭（幼稚園 16 年保育所 3 年）と園長代理が中心となって A を運営している。担当者は普段はフリーとして保育に携わっている。
- ・ 他、非常勤保育者が週に 1 回来ており、A が開催されている時にはともに親子に関わっている。園には卒園児の保護者が先生として関わってくださる人もいて、保護者に対して子育てや園の先輩としてお話くださることもある。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ 年間通して 12 回程度。活動時には名札をつけてもらい、荷物を置いて遊びに参加するという一連の流れを子どもと共に取り組んでもらっている。
- ・ 時期や季節に合わせて親子が多様な経験ができるようなプログラムを考え、提供している。前期・後期として、あらかじめ計画された内容を提示しており、保護者は参加したい活動を選び、参加している。園全体のイベントにも参加いただいている。
例) 毎回、内容は変えており、1 時間半の中で親子で造形活動をしたり、ダンスをしたりすることもある。
- ・ 通常は預かり保育で使っている部屋で A の活動を行っており、活動の際には子どもの年齢に応じた玩具や絵本などを用意しているが、子どもの様子に応じて再構成するなどしている。
例) 男の子に対して車を用意していたら、ままごとが好きだったり、個人差があること。
- ・ 子どもと関わる時に絵カードを見せるなど視覚的な工夫をしたり、できるだけゆっくり話したりするように心がけている。

(3) 保育の計画と振り返り

- ・ 計画は時程として予め作成している。
- ・ 振り返りや記録については、個別の記録を残している。基本情報や保護者からの聞き取ったことを都度、付け足していくような形で残している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 通常保育の際には、フリーの立場として園の保育に携わっている。園児と親子が関わるような機会はイベント以外にはないが、A を利用していた子どもが入園すること多いので、その際には担任に伝えることもある。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 何度も来ている子どもたちは、名前を呼ぶと嬉しそうにしてくれている。お目当ての玩具ですぐに遊び出す子どもの姿もあり、楽しみに来てくれていることを実感している。

- ・家ではなかなかできない取り組み（例：動物に触れる、紙粘土を使うなど特別な素材）があったり、お友達がいることでお友達の様子を見て、新しい動きが見られたりする。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス

- ・慣れていく過程には、「いつもここで会う人」としての人的環境も大切だし、馴染みのある場所としても両方あると思う。
- ・3歳になって幼稚園に入園する頃には、A の活動で親しんだ場所なので、すんなり環境に慣れている様子がある。

3. 保護者視点

(1) 担当保育者

- ・保護者は幼稚園の生活がわからない方が多く、トイレトレーニングや年齢に応じた遊びなど、参加する中でわかっていく様子がある。相談目的で参加する人もいれば、徐々に話をしてくれる人など色々である。
- ・保護者同士もはじめは距離があるが、通う中でだんだん打ち解けていく様子もある。
- ・どうしても他の子どもと比べてしまう保護者もいて、心配が新たに生まれるということもあるので、ここは言葉を添えている。
- ・思いを聞きますよという開いた姿勢で関わっている。

(2) キンダーカウンセラーの先生

- ・相談をする上でハードルを低くすることは心がけている。特別に相談する機会があってもなくても、保護者自身の相談する能力を高めておく。気軽に、こういう存在があるんだということを知っておいてもらうだけでも大切だと思う。
- ・ニーズがあった時に相談のための場所を用意する場合もあれば、さりげなくその場の雰囲気でお話することもある。

北海道・東北地方：私立幼稚園（定員 240 名）園庭開放あり

【園長】

1. 基本情報

(1) Aクラス

- ・対象月齢：2 歳児を対象とした親子教室を実施している（0～2 歳児保育の実施はなし）。
- ・定員：各回親子 25 組、登録制
- ・開催日・時間：ほぼ毎月実施。ひと月あたり 2～3 回設定し、同月内では、同じプログラムで実施している。活動時間は 10 時半～11 時半。12 月以降は次年度 4 月から入園する子どもとその親を対象として行う。
- ・料金：200 円／1 回
- ・親子登園：親子で通園し、親子での活動を主としており、親子分離での活動時間はない。
- ・保育担当者・人数・資格：主幹教諭 1 名、総務 1 名、パート職員 1 名の計 3 名で運営している（3 名とも保育士資格も所持）。
- ・専用保育室：なし。ホール（小学校の体育館ほどの広さ）を保育の場として活用。
- ・園庭：運動会時に使用する。
- ・昼食：なし

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

(1) 指導資料

- ・主幹教諭と総務が指導計画を立案している。
- ・自由遊び→片付け→朝の会→親子体操→各回の活動（季節の製作等）→手遊びや絵本の読み聞かせ→帰りの会 という流れで実施。

(2) 保護者向け広報資料

- ・パンフレットは作成しておらず、園のホームページ内で活動について説明している。
- ・参加希望者は、事前にメールにて申し込む。
- ・参加者には、参加時に、次回の活動について詳細に記したお便りを配布している。

3. 0～2 歳児の受け入れが現在の形になるまでの経緯

- ・15 年前から 2 歳児とその親を対象とした A クラスを実施。最初は先着優先で募集していたが、園外まで親が並ぶ列ができたことから抽選制に変更。現在は希望者は参加できる状態。
- ・取り組み開始当初はパート職員が実施していたが、近年は主幹教諭 1 名、総務 1 名、パート職員 1 名の計 3 名で運営している。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・家庭以外にも楽しい場所、居心地がよい場所があることを親にも子にも知ってもらうこと。

5. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

（1）ニーズ

- ・園のニーズ：本園について知ってもらいたい。
- ・保護者：幼稚園を知りたい、入園先を選びたいという保護者のニーズが大きい。親子通園利用保護者へのアンケートでは、他児とのふれあいや体を動かす機会を持てることへの評価が大変高い。
- ・地域：比較的収入が高い人が多く住んでいる。転勤族が多い。小学校受験文化はなく、早期教育への要望も強くなく、幼児教育の本質を理解くださっている人が多い地域。

（2）運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・主幹教諭 1 名、総務 1 名、パート職員 1 名の計 3 名で運営している（3 名とも保育士資格も所持）。
- ・都道府県の補助制度を活用して実施している。

6. 0～2 歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

（1）手応え

- ・子どもたちは活動を楽しんでおり、本園年少クラスへ入園時の移行がスムーズである。
- ・親子通園の中で、在園児との関わりの時間を設けているが、こうした交流は未就園児とその親のみならず在園児にも良い影響がある（保育者インタビュー報告書 1.（5）参照）。
- ・保護者アンケートでは、親子通園に対し、高い評価を得ている。

（2）課題

- ・保護者のニーズ等から、現在はミニ幼稚園のような活動内容となっているが、2 歳児という年齢を考えると、より楽しさを重視するような過ごし方も大切なのではないかと園長としては考えることもある。そのあたりを今後担当教員と話し合ったり、保護者のニーズも改めて捉えたりしながら検討していきたい。
- ・現在のところ、園児定員がほぼ充足されている状態であるため、現在の親子通園スタイルでの活動が現実的である。しかし、将来、園児数に大きく変更が生じ、空き保育室が発生するような状況になれば、親子通園という形のみならず 2 歳児の保育についても検討していきたい。

北海道・東北地方：私立幼稚園（定員 240 名）、園庭開放あり

【保育担当者：Aクラス】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・保育歴 15 年、昨年度から主幹教諭。2023 年度から A クラス担当（他学年受け持ちなし）

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

① 保育内容や環境の工夫

- ・2 歳児が楽しめる遊具、おもちゃを用意（でこぼこブロックランド等 A クラス用に購入）。
- ・園内のホールを保育の場とし、そこに 2 歳児にふさわしい遊びができるさまざまなコーナーを設置。その中には運動ができるコーナーも設置。
- ・製作を行う際は床の上で簡単にできる内容のものとし（机を出すと時間がかかるため）、短時間で取り組め、達成感が得られるよう、保育者側で丁寧に準備を行っている。

② 活動の概要

- ・自由遊び→片づけ→朝の会→親子体操（ここまでは、毎回同じ）→設定活動（季節の製作等。ここが毎回変わる）→手遊びや読み聞かせ、帰りの会 という本園年少児と同じ流れで実施する他、年 1 回園庭で運動会を実施している。
- ・在園児との交流を行う実施回がある（時期や内容によって、どの学年と交流するか検討している。交流時には該当クラスの担任と補助の保育者も A クラスに参加する。）

(3) 保育の計画と振り返り

- ・未就園児クラスを担当する教員 2 名（主幹教諭、総務）で計画を立案している。毎回、実施後は活動記録を作成の上、園長、教頭、未就園クラス担当で振り返りを行っている。在園児との交流があるときには、該当クラスの担任も振り返りに参加している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・3 歳児の担任に、未就園児クラスの記録を共有している。
- ・在園児との交流会があるときには、保育の計画を相談、共有している。
- ・年少以上クラスの担任が休みの場合には担任業務を行うため、そのクラスに入る。

(5) 園の中で 0～2 歳児の受入れに携わる手応えと困難さ

① 手応え

- ・自由遊びの時間に、それぞれお気に入りのコーナーで遊びこんでいる様子を見ると、子どもにとって良い時間を提供できていることに手応えを感じる。自由時間を長めに取りの方がよいのではないかとのが振り返りで出ている。
- ・在園児との交流時に、他学年が 2 歳児が遊ぶところへやってきて、製作活動時には、それを援助する様子がある。上の学年の子どもは自然に援助し、それを自然に 2 歳児も受け入れている。傍で見ている保護者も嬉しそうである。年長の在園児が、クラスでは見せなかった姿を見せることがあり、年長の担任もその子どもの新たな一面を発見して嬉しくなる。このようにその場にいる皆が充実しているのを感じる。
- ・入園前に親子でいる姿を把握することができる。

② 困難さ

- ・親子通園なので、親が見ている中での保育というプレッシャーがある。製作の説明等は、

基本的には子どもに向けて行うのだが、時々親への説明も交えることがどうしても必要となり、その使い分け（話し分け）が難しい。

- ・現状では年に数回の関わりであるため、子どもを十分に理解することが難しい。もう少し継続的にみていければ、入園前に子どもの個性がよくわかり、入園後により活かせる。

2.子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・自由遊びの時間に遊びこんでいる。
- ・親子で行う製作で、すぐに飽きてしまっていた子がいたのだが、年長の在園児がその子どもの横で一緒に作ることで、活動に興味が出てきたようで、楽しく最後まで取り組んでいた。
- ・思い切り体を動かすことができる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）3歳児クラスへの移行

- ・分離の時間はないが、親と一緒にでもはじめは園の入り口で大泣きする子もいる。泣きが激しいようなら、別日に参加してもらっても構わないと伝える等の配慮を行っている。
- ・設定活動への参加が難しい時には、その子どもが興味を持ちそうな遊びを提案したり、好きな遊びをしていて構わないと伝えたりしている。
- ・それぞれの過ごし方を優先して負担にならないように配慮している。
- ・年少入園児に登園しづりが見られる時期には、朝、Aクラス担当者が手伝う／1学期の間は昼食の時間に補助に入る等している（食事に時間がかかる子どもが多いため）。

3.保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者同士がやりとりするというより、保護者は自分の子どもと向き合って時間を過ごしている。子どものことで聞きたいことや心配なことがある方は、保育者にたくさん質問してくる（トイレトレーニングのこと、発達面での心配、入園の仕組みや制度に関する相談等）。質問は自由遊びの時間や、会が始まる前、終了後になされる。
- ・入園を考えているが、事前に子どもを見て欲しいという理由で利用する方もいる。
- ・体を動かす機会に感謝する声が多い（園内ホールは小学校体育館くらいの広さがある）。
- ・幼稚園で子どもがどのように過ごすのかをイメージできるようになるようだ。
- ・さまざまに心配し、Aクラスにて保育者に相談していた保護者も、子どもが入園すると、「意外と大丈夫だった」という感想を持つ方が多い。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・本園について知って欲しい、という願いで行っている。「みんなで一緒のことをできなくても大丈夫。くれぐれも無理をしないように」ということを強調している。

関東地方：私立認定こども園（定員 335 人）、園庭開放あり

【副園長】

1. 基本情報

(1) A 広場

- ・ 対象月齢：0・1・2 歳児とその保護者。
- ・ 定員：各回 15～20 組、登録制
- ・ 開催日：月 4～5 回程度開催、その都度アプリで申し込み。
- ・ 利用料金：登録料、こども一人につき 500 円（保険料、バッチ代、連絡アプリ ID 発行手数料）、利用料は通常開放日は 300 円、イベント DAY は 450 円もしくは 600 円で活動内容によって異なる。
- ・ 親子登園：親子で参加
- ・ 保育担当者・人数・資格：2 人、幼稚園教諭・保育所資格有り
- ・ 専用保育室：あり
- ・ 園庭：専用の園庭なし
- ・ 昼食：なし

(2) B 教室

- ・ 対象月齢：2 歳児とその保護者。
- ・ 定員 48 名、1 グループ 12 組程度、最大 4 グループ。
- ・ 開催日：年間 18 回程度。10 時から 11 時 30 分。その後、12 時まで園庭で自由に遊ぶことができる。（開催は、曜日ごとにクラス分け。令和 6 年度は火・水・木・金の 4 クラス）。
- ・ 費用：入会金：15,000 円、教材費（18 回分）：5,000 円、参加費（18 回分）：40,000 円（保険代含む）、合計 60,000 円（年間）
- ・ 保育担当者・人数・資格：2 人、幼稚園教諭・保育所資格有り
- ・ 専用保育室：あり
- ・ 園庭：専用の園庭なし
- ・ 昼食：なし

(3) 園庭開放 C 広場

- ・ 水曜日 13:30～15:00（毎週）・土曜日 10:00～11:30（1 学期のみ 月 1 回程度）。
- ・ A 広場、B 教室に入っている以外の地域の人も利用可能

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・ B 教室については、年間 18 回の予定はそれぞれ中心に活動することが計画されている。具体的な活動内容は、好きな遊びをしたり、親子でのふれあい遊び、保育者が紹介したりする遊びのほかに、年間に計画されているみんなでの活動がある。
- ・ A 広場については、好きな遊びや保育者による手遊び、絵本の読み聞かせ、子育て経験のある保育者による育児相談の通常開放日と、製作あそびや絵の具・水あそびなど、イベント DAY を織り交ぜた内容となっている。
- ・ 保護者には、HP で広報をしており、また、募集案内は紙媒体でも作られ、見学説明会の機会も作られている。また、その際、幼稚園の教育・保育がどのようなものであるか

を説明する機会ともしている。

3. 0～2歳児の保育が現在の形になるまでの経緯

- ・ 幼稚園就学前の親子での活動については、幼児教育を考える研究所の研究活動の一環として、さまざまな先生方と幼稚園を実践の場として取り組み始めた歴史があるとのこと。記録は定かではないが 30 年以上前から取り組んでいるとのこと、幼稚園での 3 歳児未満にとって、どのような活動がふさわしいかを考え、この研究の取り組みが終わってからも、B 教室の取り組みは、幼稚園の保育として続けてきている。
- ・ 平成 30 年にこども園を開設してからは、0・1・2 歳児の保育についてより丁寧に考え、幼稚園で大切にしている「今この瞬間を、わくわく生き活きとびっきに輝いて生きてほしい」という子どもたちへの思いをそれぞれの年齢さながらの生活に十分にひたり切ることを環境構成から大切にしている。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・ こども達一人ひとりとの信頼関係を築くこと
- ・ 自然との触れ合いを大切にし、五感で感じる経験
- ・ 遊びを大切にした保育、遊びは学びであること
- ・ 造形的な表現を大切にする、心が動いた瞬間を大切にする。
- ・ 特に、こども園では、家庭的雰囲気の中で、保育者との信頼感の土台を育むこと。乳児の好奇心、冒険心、意欲を高め、積極的にまわりの世界と関わる乳児が本来内包している意欲と自信、知性を育むこと。家庭との連携を密にすること。

5. 0～2歳児の保育・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・ こども園を始めたことで、より小さいこども達との日々の保育から学ぶことの手応え。特に幼稚園で大切にしていた遊びを、小さいこども達と共にすることの工夫を数年かけて行なってきた。
- ・ B 教室については、親子で活動することで、子どもが遊びの中で楽しむことを、保護者にも新たに発見してもらう機会になっている。そのことを意識して、B 教室でも、活動の様子を写真で振り返ることができるような工夫を始めている。
- ・ B 教室での活動の後、親子で園庭で遊ぶ時間を設定している。この園庭で過ごしている時間があることによって、3 歳児で幼稚園に入園したとき、園の環境に親しみやすく、スムーズに生活がはじまる場合が多いように感じている。（もちろん、入園後、家族との分離が難しい場合は、個別に対応を行なっている）
- ・ 幼稚園、こども園、B 教室の担当者含め、園全体で研修等も行う機会も作っている。

6. 0～2歳児の保育・子育ての支援の手応えと課題

- ・ B 教室については、親子で参加することによって、遊びから学ぶことの意味などを保護者にも感じてもらえる意義が大きいと感じてきた。しかし、最近の流れとしては、幼稚園就園前の子どもであっても、子どもだけでの活動を望む地域の保護者のニーズも感じており、この「遊びが学び」を保護者と共有していくことの難しさを感じている。

関東地方：私立認定こども園（定員 335 名）、園庭開放あり

【保育担当者：認定こども園 2 歳児担当】

1. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

- ・ 保育者として 10 年目。幼児の担任をずっとしてきており、昨年からこども園 2 歳児担当に。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ こども園で 3 歳未満児とかかわるようになり見えてきた視点
- ・ 乳児の方が、幼児に比べて生活に根付いていることを感じている。長い時間過ごすこと、着替えのような生活に関わるところで丁寧に関わっていること。乳児それぞれの個々のペースを大切にしていること。
- ・ 部屋の環境も、お着替えして眠る場所、食べる場所、遊ぶ場所を、区切り、布を使って、おうちのような落ち着ける空間にしていること。
- ・ ただし、保育の内容として、本当に大切にしていることの根底は変わらないとの思いは強くある。おもしろいことに会っていると、2 歳児もみんなで楽しむことも生じてくる。また、幼稚園でも 3 歳児クラスは、秋くらいになって仲間関係が深まるように感じていたが、こども園の 2 歳児クラスは、より小さい時から一緒に過ごしてきていて、すでにお互いのことを知っており、やりとりやイメージの共有を楽しんでいると感じている。

(3) 保育の計画と振り返り（こども園）

- ・ 年間指導計画は養護と教育、食育、安全・健康、環境設定、保護者支援・連帯、期の反省評価を 5 期（4 月、5 月から 6 月、7 月から 8 月、9 月から 12 月、1 月から 3 月）にわけて記載している
- ・ 月間指導計画は、写真も入れた先月の子どもの姿、予想される子どもの姿に対する保育者の関わりと配慮点、事後的に入れる子どもの姿、評価・反省で構成されている。
- ・ また、さらに具体的な計画は 1 週間単位で作成をしており、写真も入れた先週の子どもの姿、予想される子どもの姿に対する保育者の関わりと配慮点、そこから見られた子どもの姿、評価・反省の欄等がある。いわば計画と記録一体となっており、パソコン入力で作成している。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 幼稚園と比べて、複数で一緒に保育を行う保育者との連携はより強い日常である。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児保育に携わる手応えと困難さ

- ・ 乳児の担任をすることに対して、生活を全く知らなかったのが不安があったが、実際に保育に取り組んでみると、日々の保育に対する姿勢としては、子どもと過ごすことにわくわくする感じは変わらない。子ども達の興味のあることから、それが広げられそうだと感じたことを一緒に楽しんでいる。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・ 普段の生活が遊びに変換されていることが多い。最近しているお医者さんごっこの様子も、お医者さんに行った経験から「お口あけてくださいね」「これは目薬ですよ」「ちゅくんしますよ」など言葉も豊富であったり、お母さんが妊娠している男の子が、赤ちゃんのぬいぐるみをお腹に入れていたり、出会ったことが遊びに変換されていく様子がおもしろい。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・ 幼稚園で担任していた時の方が、保護者から「うちの子、ちゃんと遊んでいますか」「友達いますか」と心配な声を聞く機会が多かったように思う。ちょうど、今は2歳児担任で、こども園には0歳児から通っている子どもも多く、子ども達も慣れているので、親子の分離が難しいということは経験していない。
- ・ こども園の方が、ある程度担任に任せてくださることも多いように感じている。幼稚園の方が「来年度の担任が誰だか、すごく気になる」という話も耳にしていたが、こども園の方が「誰でも大丈夫です」というスタンスの方が多いように感じる。そこが伝わるまでの年月、関係性が、こども園の方が子どもが小さい時から始まっているという実感がある。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・ 保護者にとっても、子ども達がわくわくしている様子を知ることは嬉しい様子である。
- ・ 幼稚園と異なり、朝、お迎えのときに一度はお顔を合わせる機会があること、保護者と共有していくことに関しては大きい。連絡帳、ドキュメンテーションなどを通しての共有も大きい。
- ・ 保護者同士は、サークル活動などがある幼稚園と比べて、忙しいこともあり、干渉し合わない感じもしている。ただ、保護者会などがあると、とても和気藹々と話をしていたり、お休みの日に行き来があったりする様子を耳にすることもあるので、0歳から一緒である保護者同士の関係性を感じることがある。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・ 園全体として、保育者との連携を密にすること、園と家庭との理解、協力、協調を目指しており、子どもの育ちと学びを共に考えていく関係を大切にしている。

近畿地方：私立幼稚園（定員 260 名）、園庭開放なし

【園長】

1. 基本情報

A クラス

本園は幼稚園型認定こども園と小規模保育園および事業所内保育所を開設している。3 歳児未満の受け入れは園概要 9 ページ掲載のように多くのコースを有している。

認定こども園としての 2 歳児クラス：週 5 日登園、人数指定で預かり保育有（2 クラス、19 人ずつ、担任は保育教諭を 3 名配置）、8:30～14:45。3 号認定児はこども園 1・2 歳児定員内で預かる。

B 教室

子育て支援（未就園 2 歳児）週 2 回 2 クラス（火・木クラス、水・金クラス）、12 人ずつ 2 クラス、9:00～14:00 17,000 円／入会時 登録料 10,000 円 親子分離 クラスに保育教諭を 2 名配置 専用保育室あり 園庭使用あり 昼食あり（弁当持参）

C 教室

未就園児活動（3 歳未満・親子）毎日日代わりプログラムを設定（Am）、保護者は自由選択で来園。申し込みは line で登録 一回の定員は 10 組程度 1 回 0 円～500 円 親子登園 保育教諭 1 名・パート 1 名配置 専用保育室あり 園庭使用あり 昼食なし（弁当持参やおやつを食べて交流するプログラムの企画あり）

2. 指導資料（全体的な計画、教育課程、指導計画等）と保護者向け広報資料

- ・指導資料 … 全体計画・月案（教育課程）／週単位の記録例／母子登園プログラム
- ・広報資料 … 園紹介冊子）／入園募集案内資料

3. 0～2 歳児の受け入れが現在の形になるまでの経緯

- ・子育て支援の 2 歳児登園や母子登園は、40 年前から園独自の取り組みとして開始（下のきょうだいへのニーズから、無制度下で始めた）。
- ・週 5 日登園クラスを始めたのが 10 年前（特区）。2 歳児を集団で保育することの発達の意味を考えて取り組み始めた。その後は国の制度の開始に従ってクラス整備をしてきた。
- ・満 3 歳児以前の就労していない場合の行政支援はなかったが、県がその部分の支援を始めた。所在市から、未就園児活動に対しての支援も受ける。
- ・就労家庭とそうでない場合とでは、支援の格差が大きすぎる。

4. 遊びと生活で 0～2 歳児において大切にしていること

- ・自然の中で、園周辺の自然環境や立地を生かしながら、自然とふれあいながらのびのびと生活させることをまず大事にしている。
- ・自然とふれあうことでの成長の意味を保護者に理解していただく。
- ・自然との関わり体験に伴う安全管理を重視している。
- ・3 歳未満の場合には、子どもから発信することに、子どもに応じて寄り添いながら関わり、成長を支援している（園内研修で低年齢児に関する研修を重視）。

- ・保護者との会話が幼児クラスより断然多いので、保護者の話をよく聞く。

5. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援運営へのニーズ（園・保護者・地域）、運営体制、組織マネジメントの工夫

- ・担当者は募集で任用。幼児クラスと3歳未満のクラスの担任交流はあまり行っていない。
- ・幼児クラスとの担任交流は全体研修を通じて意識的に行っている。能力を評価し、専任として配置している。
- ・この地域はまだ子どもの多い地域である。教育へのニーズも高く、園が行う教育方針に共感いただける方も多い（子どもの発達全体を考えた教育の意義への共感）地域。
- ・2歳児クラスは、翌年度はほとんど同園の年少児クラスに進級する。
- ・保育環境に関してや、3歳児未満の保育に関しては園全体での研修として取り組んでいる。このことで全全体への3歳未満の保育に関する理解が広まってきている。
- ・年齢・月齢に応じた遊びが違うので、保育室の中でもいくつかの遊びコーナーを設定して個別で対応できる環境にしている。
- ・一方、年少児以上との活動空間の区分は基本的には設けていない。あるいは、幼稚園部分の敷地と、小規模保育の敷地が異なるので、自動的に活動区分が分割できている環境になっている。
- ・2歳児定期通園クラスの保育記録は、基本的には年少児以上の者と同一の様式を取っている。そ例外のクラスの場合にも個別の記録は作成している。
- ・多様な受け入れシステムを有する本園の活動は、地域の「子育て支援センター」として機能していると自負している。
- ・3歳未満の受け入れに対する地域・保護者のニーズは昔から高く、それと相まって、30年以上前からの取り組みを開始している。いろいろなコースを設定しているからこそ、当園を選んでいただけていると思う。

6. 0～2歳児の受入れ・子育ての支援の手応えと課題

- ・いろんな部門があり、ニーズに応じて期待を持って選んでいただけていると思う（30年以上続く取り組みの中で感じること）。
- ・2歳児クラスで1年間生活すると、3歳児クラスになった時の手応えが全く違う（激変するといってもいいぐらいに…）。
- ・2歳児から通っている園なので、子どもの中で「安心感」のようなものが形成されてきていると思う。
- ・保護者にとっては、家庭でできてないことが、園ではできたという経験をされる。そのことを経ることで、親としての育ちにもつながる。
- ・園児の保護者同士の絆も強くなり、保護者同士が仲良くなる。
- ・園の広報（配布物・写真）や、保護者参観などで保護者の理解が広がり、地域での信頼感につながる。
- ・難しいことや課題は、在宅保護者と勤務保護者への支援制度の落差であろう。また、3歳児未満の理解や保育には、そのための専門知識や技術が必要なので、園全体で園内研修を通して理解を深めている。人材確保が課題であろう。

近畿地方：私立幼稚園（定員 260 名）、園庭開放なし

【保育担当者：A クラス】

I. 保育者視点

(1) 保育担当者の保育歴

保育歴は 23 年。最初は別の保育園で様々な年齢を経験する。現職勤務が 8 年目。最初から 3 歳児未満の専任となり、現在では低年齢児部門の主任。保育教諭（保育所時代に幼稚園教員免許を取得した）。

(2) 保育内容や環境の工夫・活動の概要

- ・ いろいろな種類の玩具などを配置する。子どもが自由に選べる様々な遊びコーナーを配置する。保育者が 1 人ひとりの子どもの思いによりそう。安全だけを優先させるのではなく、安全に気を配りながらも、園内にいろんな起伏を設定し、こどもが体全体を通して活動できる環境を設定（そんな園庭に）。
- ・ 年少以上の子どものとの園庭共有などは制限せず、日常的に行わせる。年上の子が何をしているのか見ることを通して育っていく。
- ・ 3 歳未満児をバリアのように完全に仕切ったりはしていない（専用の保育室はもちろんあるが、隣接している幼児クラスとの仕切りはない）。入園当初の数ヶ月だけは、簡易な境界を設定し、その中での安定感を確保しているが。
- ・ 設定保育などの固めたカリキュラムは設定せず、四季の移り変わりに触れることや自然の変化がカリキュラムになっている。園環境では、特に植物を中心とする非常に豊かな環境設定がなされている。
- ・ バスのドライバーが農家の方なので、農作物を含めた園庭の植物の飼育をになってくれている。

(3) 保育の計画と振り返り

年間計画・月案などを作成し、週単位の記録を作成して共有したり、午睡時や放課後に雑談で振り返ったりしている。担任保育者から主任への相談は随時あり、その都度対応している（SV の位置づけになっている）。

(4) 園の中での自分の役割：3 歳以上の年齢の保育者との関係性、計画の共有の有無

- ・ 保育者の担当は基本的に固定されており、3 歳児以上の保育者との配置転換はほとんど行われていない。
- ・ 各年齢クラスの保育の内容や保育活動内容を園全体で伝え合って共有する機会を、今年になって初めてもった。また、3 歳未満の発達や保育に関する園内全体研修を今年になり始めて開催できた。これによって、園内での 3 歳未満の子どもや保育に関する認識・理解や関心が拡がり始めている。

(5) 園の中で 0 ～ 2 歳児の受入に携わる手応えと困難さ

- ・ 手応えは、毎日「明日も来るね」と言ってくれること。年長児の場合も保育者の喜びではあるが、未熟な中からの育ちの手応えという点からは格別である。
- ・ 困難なところは、丁寧に環境を整えても、発達途上のためけがトラブルを完全回避できないこと。

2. 子ども視点

(1) 子どもにとって楽しい経験（学び）になっている事例

- ・野菜の収穫体験をすると、その後に子ども達は園庭の草を「よいしょ、よいしょ」とかけ声を出して引き抜く「収穫体験ごっこ」に発展する。自然体験と遊びの展開がトータルに連続している。
- ・子どもが発する声を丁寧にひろいあげると、子ども毎にそれぞれ異なった興味に展開していく。それを個別に支えていく。その所を丁寧に関わることが、次の段階への接続に大きな力となる。

(2) 移行期：通い始めからのプロセス（親子の分離が難しいときの対応、工夫等も含めて）、3歳児クラスへの移行

- ・2歳児クラスの子どもは、翌年には基本的に年少組に移行する。そのための条件として、トイレ、着脱、食事動作などの基本的な生活習慣を2歳児終了までにほぼ身に付けさせることが、移行に向けた大きな教育目標となっている。
- ・年間を通して、緩やかに年上の子どもと一緒に歌を歌ったり、食事会をしたりするなどの機会を設けている。園庭では基本的に一緒に遊んでいる。
- ・意図的な取り組みとしては、3学期になると、上のクラスの見学を行っている。
- ・分離不安を示す子どもには、ゆっくり取り組んでいる。必要ならば、子どもが安定する特定のタオルを持ったままの保育にも取り組む。

3. 保護者視点

(1) 保護者の姿、保護者の学び・育ち、保護者同士の関わり

- ・保護者には、その時々での園での様子を伝えることで、少しずつ安心感を持っていただいている。（情報発信のツールをいくつか持つ）
- ・よく経験するのは、家での様子と園での様子の違いを聞くことであるが、その違いをお話や連絡帳で伝え続けることによって、保護者自身の子どもへの受け止めが広がっていくのを感じる（これらの経過が、保護者の成長につながるのだろう）。

(2) 保護者を意識して行っていること

- ・園から保護者への「お願いの手紙」などをきちんと読んでいただけるように心がけている。小学校へ入学すると、更に学校からの連絡を保護者として受け止めていかなければならないので、そのための準備教育の時期と位置づけている。
- ・いろんなタイプの保護者がおられるので、それぞれの保護者に伝わるような話し方、伝え方を意識している。
- ・発達に気がかりのある子どもの場合は、よく話を聞いて受け止め、専門機関を紹介するようなこと（あるいは連携）も行っている。
- ・バス登園の場合は保護者とつながりにくいので、適時の手紙などで丁寧に対応。
- ・子どもの日常の様子が分かるように、保育者が丁寧にスナップ写真を撮っている。

Ⅳ. インタビュー調査実施園において収集した資料について

1. 収集の目的・方法

インタビュー調査を実施した園に対し、好事例として参考にするため、0～2 歳児の保育活動の実施体制や活動内容に関する計画・記録、保護者に向けて発信・配布している広報等ための資料について、可能な範囲でコピーを提供していただきたい旨をあらかじめ文書にて依頼し、訪問時に調査者が受け取った。

そのため、今回収集した資料は園によって異なり、また各園で作成・使用されている資料の全てではない。

2. 資料の種類

今回収集した主な資料は、大きく以下の種類に分けられた。

(1) 指導計画等

- ・全体的な計画
- ・教育課程
- ・指導計画：年間、月間、週日案等
- ・1日のタイムスケジュール表、デイリープログラム等
- ・活動予定表、行事予定表：年間、月間等
- ・記録：日誌、個別記録等

※指導計画、記録については、実際に内容が記入されているものと、内容は記入されておらず書式のみのものであった。

(2) 保護者向け資料

- ・法人、園紹介のパンフレット、リーフレット
- ・事業概要、入園（会）案内、募集要項、広報（チラシ、リーフレット）
- ・通信、クラスだより等
- ・その他（申し込み票、入園（会）時の生活調査票等の書式）

※事業概要、募集要項については、自治体が作成し事業実施園共通で使用するものと、園独自のものがあった。

3. 内容・特徴

収集した主な資料の内容とインタビュー調査の結果から、指導計画等と保護者向け資料について、

それぞれ以下のような特徴がうかがわれた。

(1) 指導計画等

【全体的な計画・教育課程】

0～2歳児を受け入れて行う保育活動は、通常の保育とは別に子育て支援活動の一環として実施されているが、園の全体的な計画には位置づいているとする事例が複数あった。また、幼稚園の教育課程に2歳児の保育を含めて記載している例もあった。3歳以上児の保育への接続を意識しつつ、「3歳児クラスへの準備という意図で保育を計画していない。あくまでも、2歳児としての時間が充実するように、ということの主眼に置いている。」といった語りに見られるように、この時期の子供の発達を踏まえた活動を重視していることがうかがわれた。

【指導計画の作成状況】

指導計画の作成に関しては、①0～2歳児を受け入れて行う活動のための専用の計画を作成、②認定こども園や同じ法人で運営している保育施設に就園している3歳未満児（在園児）がおり、0～2歳児を受け入れて行う活動専用の計画は作成していないが、同年齢の在園児の計画を利用、③特に作成していない、と状況は園によって様々であった。計画の作成は、担当保育者がこれまでの振り返りなどをもとに話し合っている事例が多く見られた。

③について、計画を作成しない理由としては、特に一時的・スポット的な形態の活動において、当日近くになるまで利用する子供の人数や年齢・月齢、利用頻度等の構成が分からない、子供の月齢・年齢に幅があり発達差や個人差が大きく個別対応が中心となっている、といったことが挙げられた。また、本調査の実施時点で活動自体が始まったばかりのため、計画は未着手・作成中という事例もあった。また、集団としての計画は作成していないが、受入れの前日などに前回利用時の日誌等の記録をもとに個別の見通しをたて、対応しているという例もあった。

指導計画という位置づけの資料以外の計画に関する資料としては、当日メインとなる活動や行事等を記載した月間または年間の活動予定表、子供の活動内容や保育者の援助等に関する一日の流れを時系列で示したタイムスケジュールなどがあった。

【指導計画の種類・構成】

指導計画の種類は、園によって多様であるが、主に年間、月間、週日案が作成されていた。年間指導計画は、おおむね3～4か月ごとに一つの区として区切って、各期のねらい及び内容等を示す例が複数見られた。期の区切り方も園により様々であるが、3歳以上の在園児とは異なる区切り方をしており、比較的より幅をもたせゆとりのある区切り方をする傾向がうかがわれた。

指導計画を構成する主な項目としては、保育の目標、予想される子供の姿、ねらい及び内容、環境構成、配慮事項等が挙げられる。この他、歌や手遊び、絵本など、季節や活動に応じて楽しめるものを具体的に示すものもあった。

指導計画の中に、現在の子供の姿などの記録や、前の期間を振り返っての省察、反省、評価の欄を設けている例も複数あった。特に週日案は、週のねらいや主な内容、予定を示したうえで、その日

の実際の活動の様子等を書き込んでいく形式のように、計画と記録を一体的に作成している事例が多く見られた。定期的・継続的な利用形態でない場合や月・週あたりの回数が少ない場合など、保育に連続性をもたせることが難しい実施状況においても、次の保育を構想する際に担当者間で振り返りながら考えるために記録を活用しており、一人一人の状態に応じた保育を意識していることがうかがわれた。

【計画に基づく保育の展開】

指導計画等を作成していない場合はもとより、作成している場合においても、実際の保育では当日の子供の様子やメンバー構成等の状況に応じて、予定していた活動の内容や時間を変更するなど、柔軟に対応しているとする事例が多く見られた。ただし、「計画があるとどうしてもその通りにしてしまおうとするので、緩やかに毎月毎月入ってくる園児にどのように関われば良いか、担当者をあまり変えずに迷いながらやっている」という語りからうかがわれるように、臨機応変に柔軟な対応が求められることに難しさを感じている様子も見受けられた。

在園児の保育との関係については、合同で行う場合のほかにも、外遊びなど活動のタイミングによって一緒に遊ぶことがあるという事例もあった。このように、園庭等使用する場所の調整が必要となることなどから、職員間で在園児の各クラスと0～2歳児を受け入れて行う活動の計画を互いに共有している例が複数見られた。共有の方法としては、職員会議で報告しあう、職員共用のPCやシステム等により担任以外の保育者も随時他のクラスの計画を閲覧することを可能とする、といった事例が挙げられた。

(2) 保護者向け資料

保護者向けの資料としては、0～2歳児を受け入れて行う活動の利用（入会（園））に関心のある保護者や希望する保護者を対象とするもの、こうした活動に現在通っている子供の保護者を対象とするものがあつた。

【0～2歳児を受け入れて行う活動の紹介、募集に関する資料の内容・特徴】

基本情報として、活動の主旨・目的や園としての理念・方針、期間、曜日・時間、活動の内容と1日の流れなどの紹介とともに、対象、申し込みの受付期間や方法、面接等の日時、料金、問い合わせ先が示されている。活動の主旨や園の方針としては、この時期の子供の遊びや多様な経験の重要性を主に掲げているものが多い。また、園独自の活動だけでなく、自治体による補助事業を活用している場合や、幼保連携型認定こども園の3歳未満の在園児や幼稚園の満3歳児もいる場合など、制度によって利用の可否や料金の負担が異なるために初めて利用しようとする保護者にはわかりづらい情報があることを考慮し、対象児について「〇年〇月〇日～〇年〇月〇日の間に生まれた方」のように該当する生年月日の期間を明記したり、条件ごとに「あてはまる」「あてはまらない」を選択する形のチャートで示したりするなど、複雑な仕組みをできるだけわかりやすく伝えるための工夫がなされている事例が多い。さらに、昼食（給食または弁当）、預かり保育、園の送迎バス利用に関しては、園によって対応の可否は様々であるが、留意事項として明記されている事例が複数見られた。

保護者から質問を寄せられることも多い内容と考えられる。なお、3歳児クラスへの入園の優先枠を設けていることを明記している事例も複数あった。

こうした基本情報に加えて、より具体的に活動の内容や1日の流れ、園の環境、子供たちの実際の様子などが、写真や園内のマップ等を用いてわかりやすく紹介されている。さらに、持ち物や登降園、欠席連絡等のルール、その他詳細な注意事項を記載しているものもあり、掲載されている情報量は園によって様々であった。

なお、申し込み関係の書類を一部収集できた園についてその記載内容を確認したところ、基礎情報のほか、子供の健康や生活状況に関する情報を求めるものが複数見られた。食事や排泄の状況（子供が自分でできるかなど）、その他衣服の着脱や午睡などの生活習慣、アレルギー疾患など既往症についてたずねるものが多かった。

インタビュー調査の結果からは、保護者に向けた広報的な側面もある資料については、紙媒体によるものだけでなく、園や自治体のHPなど、インターネットも積極的に活用されていることがうかがわれた。

【0～2歳児を受け入れて行う活動に参加している子供の保護者に向けた資料】

毎回の活動のねらい及び内容、そこでの子供の様子については、在園児と同様に、ドキュメンテーションを作成して送り迎えの際に見えやすい場所に掲示する、アプリで配信する、定期的に園やクラスの通信・おたよりを配布するといった様々な方法で保護者に伝えている。写真や吹き出しを活用して子供の表情、声やつぶやきを紹介している事例も複数見られた。多くの場合、こうした実際の姿をわかりやすく示すとともに、この時期の発達やそれを支えたり促したりする人や物との関わりについて、園として大切にしていることなども、メッセージとして加えられている。こうした取組が、保護者の子供の理解や園への理解、信頼を深めることにつながるものと考えられる。この他、おたよりを通じてトイレトレーニングなど基本的な生活習慣に関する園での指導の工夫を紹介している事例も見受けられた。

V. 本研究のまとめ

本研究で得られた結果についてわかりやすくまとめ、幼稚園等における0～2歳児の受入れ普及啓発資料としてリーフレットを作成し、文部科学省のホームページにて公開している。



『幼稚園等における0～2歳児の受入れ』リーフレット

おわりに

本研究は、長く3歳以上を対象としてきた幼稚園等において実践されるようになってきました、0～2歳児を受け入れて行う保育や子育ての支援の具体的なありようについて、広く調査したものです。調査の過程において、地域による取り組みの差が大きいことがまず浮かび上がってきました。そういった地域の実情に応じて必要な子育ての支援をするということがまず園に求められているのですが、実際の幼稚園等においては、各園がもつリソースを活かして0～2歳児の遊びを充実させる保育内容の工夫や、必ずしもフルタイム勤務ではない多様な保護者が子育てを楽しめるように支える工夫といった、幼稚園等だからこそできる柔軟な対応がなされているグッドプラクティスも浮かび上がってきました。例えば、一人ひとりの子供の今の気持ちを丁寧に受け止めることで、毎日通ってくるわけではない子供たちの気持ちの安定や保育者への信頼関係を育もうとしている園、保護者と共に過ごす園庭開放から親子登園クラス、そして、保護者と離れて過ごすクラスへと徐々に移行できるようにしている園等、幼稚園等だからこそできる柔軟な対応がなされていました。また、保育内容について、どろんこ遊びや自然との関わりといった、家庭では取り組みにくい遊びを大切にしている園が見られ、そういった園での遊びに見られる子どもの学びをわかりやすく保護者に伝える工夫も多くなされていました。多くの園の工夫のエッセンスはリーフレットにまとめられていますので、ぜひご覧ください。

今後ますます幼稚園等における0～2歳児の受入れが広がることが予想されます。それは、決して保護者が子育てを家庭外に委託する動きとしてはならないと考えます。そうではなく、子どもの育ちも、保護者の育ちも、両方が具体的な姿に応じて支えられることが大切です。全国のどの地域であっても、子どもが何歳であっても、その発達の姿にふさわしい、そしてよりその発達が促される保育環境と援助に出会えること、そのことにより、毎日を安定して、そして充実して過ごせるようになることが実現されなくてはならないでしょう。そして、保護者が子育てを支えられ、楽しみ、子どものおもしろさ、すばらしさを保育者と共に味わうことにつながるようにしてほしいと願います。そのために、本研究の成果を、広くさまざまな地域の実践へとつなげ、広げていただきたいと思います。

なお、本研究は、多忙な保育現場の先生方に多くのご協力を賜り、出来上がったものです。心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

古賀松香（研究プロジェクト代表）

研究組織

本研究は以下のメンバーで行った。各部会は相互関連的に研究内容を発展させるようにした。なお、以下に記載の所属や職名は令和 6 年度当初のもので、○印は各部会リーダーを記す。

研究組織代表			
	白梅学園大学大学院	名誉教授	無藤 隆
研究統括			
	京都教育大学	教授	古賀 松香
アンケート部会			
○	神戸大学	教授	北野 幸子
	白梅学園大学	准教授	川島 亜紀子
インタビュー部会			
○	玉川大学	教授	岩田 恵子
	東京家政大学	准教授	武田 洋子
	東京家政大学	准教授	堀 科
	月島第一幼稚園	園長	嶺村 法子
	山梨大学	准教授	大野 歩
	桜花学園大学	教授	上村 晶
	新潟大学	教授	中島 伸子
	福井大学	准教授	宮本 雄太
	富山短期大学	教授	嶋野 珠生
	三重大学	講師	水津 幸恵
	京都文教大学	元教授	柴田 長生
	学校法人ひじり学園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園	園長	安達 譲
	甲南女子大学	元教授	上田 淑子
	甲南女子大学	教授	松井 愛奈
	岡山県立大学	講師	樟本 千里
	高松短期大学	教授	田中 弓子
	鳴門教育大学	教授	塩路 晶子
	学校法人若草幼稚園認定こども園若草幼稚園	園長	堂本 真実子
	大分大学	教授	麻生 良太
	沖縄女子短期大学	教授	平田 美紀
資料分析			
○	大妻女子大学	准教授	高辻 千恵

リーフレット作成			
○	甲南女子大学	教授	松井 愛奈
事務局			
○	高知学園大学	教授	山下 文一
	育英大学	准教授	望月 文代
	十文字学園女子大学	非常勤講師	桶田 ゆかり
	東京成徳短期大学	教授	大澤 洋美
	國學院大學	教授	島田 由紀子
オブザーバー			
	國學院大學	教授	鈴木みゆき